

寺町旧域・御土居跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

寺町旧域・御土居跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1区第2面全景（北東から）



1 堀1 (東から)



2 堀1 木舞出土状況 (東から)



3 かまど群470 (北東から)



1 池276 (北西から)



2 池180・187 (北から)

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、新校舎整備事業に伴う寺町旧域・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成28年11月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

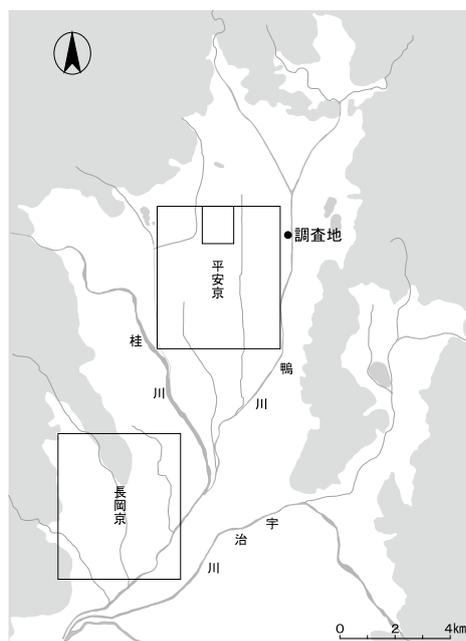
例 言

- 1 遺 跡 名 寺町旧域・御土居跡（文化財保護課番号 14 S 318）
- 2 調査所在地 京都市上京区丸太町通河原町西入高島町335番地他
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2015年8月3日～2016年3月31日
- 5 調査面積 1,880㎡
- 6 調査担当者 モンペティ恭代・李 銀眞・木下保明・市川 創
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「御所」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし建物・土蔵・塀・柵・方形土坑群・畑・畑状遺構は種類ごとに別に番号を付した。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付した。土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、土製品は「土」、石製品は「石」、金属製品は「金」、銭貨は「銭」、ガラス製品は「ガ」、骨・貝製品は「骨貝」をそれぞれ頭に付した。番号は本文・写真・表・図版に共通である。
- 13 本書作成 モンペティ恭代・李 銀眞・木下保明・市川 創・松本啓子
- 14 執筆分担 モンペティ恭代：第1章、第2章（1）・（4）～（10）、第3章（1）・（7）、
第4章
市川 創：第2章（2）、第3章（2）
李 銀眞：第2章（3）、第3章（3）
木下保明：第3章（2）・（4）～（6）・（8）・（9）
付章1・4：パリノ・サーヴェイ株式会社
付章2：丸山真史（東海大学）
付章3：池田 研（土佐市教育委員会）
付章5：北野信彦（龍谷大学）
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

16 協力者

調査にあたって、下記の方々からご教示を得ました。記して感謝いたします（敬称略）。

安芸毬子、綾部侑真、池田 研、石井慎二、出雲路敬直、今江秀史、岡崎研一、小倉徹也、小田木富慈美、加藤雄太、川村紀子、北野信彦、朽木智信、高 正龍、小林照子、鈴木佐智代、鈴木昌也、竹本 晃、張 祐榮、續木泰子、能芝 勉、橋本清一、馬部隆弘、浜中邦弘、Mari Hirose、広瀬満敬、藤原 卓、松本修一、丸山真史、南秀雄、宮本由子、山極海嗣、和崎光太郎、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所



(調査地点図)

目 次

第1章 調査経過	1
(1) 調査の経過	1
(2) 遺跡の位置と環境	3
(3) 周辺の調査	5
第2章 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 第5層（氾濫堆積層）について	8
(3) I期（室町時代後期から安土桃山時代）の遺構	9
(4) II a期（安土桃山時代から江戸時代前期前半）の遺構	9
(5) II b期（江戸時代前期後半）の遺構	10
(6) II c期（江戸時代中期前半）の遺構	14
(7) III a期（江戸時代中期後半）の遺構	16
(8) III b期（江戸時代後期前半）の遺構	23
(9) III c期（江戸時代後期後半）の遺構	24
(10) III d期（幕末から明治時代初頭）の遺構	27
第3章 遺 物	33
(1) 遺物の概要	33
(2) 土器類	34
(3) 瓦類	48
(4) 土製品	49
(5) 石製品	50
(6) 金属製品	51
(7) 銭貨	55
(8) ガラス製品	56
(9) 骨・貝製品	56
第4章 ま と め	57
(1) はじめに	57
(2) 遺構の変遷	57
(3) おわりに	63
付章1 自然科学分析	65
付章2 出土した脊椎動物遺存体	73
付章3 出土した貝類	78

付章4	出土した人骨の鑑定	81
付章5	出土したガラス製品の分析	93

図 版 目 次

巻頭図版1	遺構	1区第2面全景（北東から）
巻頭図版2	遺構	1 塀1（東から）
		2 塀1 木舞出土状況（東から）
		3 かまど群470（北東から）
巻頭図版3	遺構	1 池276（北西から）
		2 池180・187（北から）
巻頭図版4	遺物	1 井戸270出土遺物
		2 ガラス製品
図版1	遺構	1・2区第4面遺構平面図（1：400）
図版2	遺構	1区第3面遺構平面図（1：250）
図版3	遺構	2区第3面遺構平面図（1：250）
図版4	遺構	1区第2面遺構平面図（1：250）
図版5	遺構	2区第2面遺構平面図（1：250）
図版6	遺構	1区第1面遺構平面図（1：250）
図版7	遺構	2区第1面遺構平面図（1：250）
図版8	遺構	1区東壁断面図（1：100、深さ1：50）
図版9	遺構	1区東壁土層名
図版10	遺構	2区東壁断面図（1：100、深さ1：50）
図版11	遺構	2区南壁断面図（1：100、深さ1：50）
図版12	遺構	1区北壁深掘地点断面図、畑状遺構1～3実測図（1：100）
図版13	遺構	墓域A、井戸540・141実測図（1：40）
図版14	遺構	墓域B実測図（1：40）
図版15	遺構	墓910B・932（墓域C）遺物出土状況図、埋甕527・集石510実測図（1：20）
図版16	遺構	墓域C、土坑802平面図（1：40）
図版17	遺構	墓域C断面図・立面図（1：40）
図版18	遺構	塀1・2、かまど群470実測図（塀は1：80、かまど群は1：40）
図版19	遺構	建物3・4、木戸923、石列906・921・938、集石784、埋甕860・861、土坑846 実測図（1：50）

- 図版20 遺構 建物2、集石524実測図（1：50）
- 図版21 遺構 石室20、石組340、土坑344実測図（1：40）
- 図版22 遺構 池276と飛石実測図（1：50）
- 図版23 遺構 溝392、集石393実測図（1：40）
- 図版24 遺構 埋甕282、集石318、炉362、土坑381・472実測図（埋甕は1：20、他は1：40）
- 図版25 遺構 井戸93・200・241・294、水溜908実測図（1：40）
- 図版26 遺構 井戸346・447・490・754実測図（1：40）
- 図版27 遺構 方形土坑群1実測図（1：40）
- 図版28 遺構 井戸7・98、石室300実測図（1：40）
- 図版29 遺構 井戸270実測図（1：40）
- 図版30 遺構 建物5実測図（1：50）
- 図版31 遺構 土蔵1実測図（1：50）
- 図版32 遺構 池180・187平面図（1：40）
- 図版33 遺構 池180・187断面図（1：40）
- 図版34 遺構 溝686・695実測図（1：50）
- 図版35 遺物 井戸141・540、墓域A・B・C、埋甕527、土坑802・960出土土器類実測図
（1：4、25のみ1：8）
- 図版36 遺物 土坑888、井戸200・241出土土器類実測図（1：4）
- 図版37 遺物 井戸93出土土器類実測図1（1：4）
- 図版38 遺物 井戸93出土土器類実測図2、土坑472出土土器類実測図1（1：4）
- 図版39 遺物 土坑472出土土器類実測図2（1：4）
- 図版40 遺物 土坑472出土土器類実測図3（1：4）
- 図版41 遺物 土坑279出土土器類実測図1（1：4）
- 図版42 遺物 土坑279出土土器類実測図2（1：4）
- 図版43 遺物 土坑279出土土器類実測図3（1：4）
- 図版44 遺物 土坑279出土土器類実測図4、土坑255・381・400、埋納土坑741、水溜908出土
土器類実測図（1：4）
- 図版45 遺物 土坑266・652出土土器類実測図（1：4）
- 図版46 遺物 土坑749出土土器類実測図1（1：4）
- 図版47 遺物 土坑749出土土器類実測図2（1：4）
- 図版48 遺物 土坑749出土土器類実測図3（1：4）
- 図版49 遺物 井戸270出土土器類実測図1（1：4、360・361のみ1：8）
- 図版50 遺物 井戸270出土土器類実測図2（1：4）
- 図版51 遺物 井戸270出土土器類実測図3（1：4）
- 図版52 遺物 石室300、井戸7、池180、土坑240出土土器類実測図（1：4）

- 図版53 遺物 瓦類拓影及び実測図1 (1 : 4)
- 図版54 遺物 瓦類拓影及び実測図2 (1 : 4)
- 図版55 遺物 瓦類拓影及び実測図3 (1 : 4)
- 図版56 遺物 瓦類拓影及び実測図4 (1 : 4)
- 図版57 遺物 瓦類拓影及び実測図5 (1 : 4)
- 図版58 遺物 瓦類拓影及び実測図6 (1 : 4)
- 図版59 遺物 瓦類拓影及び実測図7 (1 : 6)
- 図版60 遺物 瓦類実測図8 (1 : 6)
- 図版61 遺物 瓦類拓影及び実測図9 (1 : 4)
- 図版62 遺物 瓦類拓影及び実測図10 (1 : 6)
- 図版63 遺物 瓦類拓影及び実測図11 (瓦87～90は1 : 6、瓦91～94は1 : 4)
- 図版64 遺物 瓦類拓影及び実測図12 (1 : 4)
- 図版65 遺物 土人形実測図1 (1 : 3)
- 図版66 遺物 土人形実測図2 (1 : 3)
- 図版67 遺物 土人形実測図3 (1 : 3)
- 図版68 遺物 土人形実測図4 (1 : 8)
- 図版69 遺物 土人形実測図5 (1 : 8)
- 図版70 遺物 土人形実測図6 (1 : 8)
- 図版71 遺物 土製品実測図1 (1 : 3)
- 図版72 遺物 土製品実測図2、石製品実測図 (1 : 4、石10～14のみ1 : 1)
- 図版73 遺物 墓石拓影及び実測図1 (1 : 8)
- 図版74 遺物 墓石拓影及び実測図2 (1 : 8)
- 図版75 遺物 墓石拓影及び実測図3 (1 : 8)
- 図版76 遺物 墓石拓影及び実測図4 (1 : 8)
- 図版77 遺物 墓石実測図5 (1 : 10)
- 図版78 遺物 金属製品実測図 (1 : 3、金20～22のみ1 : 2)
- 図版79 遺物 銭貨拓影 (1 : 1)
- 図版80 遺物 ガラス製品実測図 (1 : 2)、骨・貝製品実測図 (1 : 3)
- 図版81 遺構 1 1区第3面全景 (北東から)
2 1区第1面全景 (北東から)
- 図版82 遺構 1 2区第4面全景 (西から)
2 2区第3面墓域C (南東から)
- 図版83 遺構 1 2区第2面全景 (西から)
2 2区第1面全景 (西から)
- 図版84 遺構 1 墓域A 墓567 人骨出土状況 (東から)

- 2 墓域C 墓876 人骨出土状況（西から）
 3 墓域C 墓878 人骨出土状況（西から）
 4 墓域C 墓910A 人骨出土状況（西から）
 5 墓域C 墓910B 六道銭出土状況（東から）
- 図版85 遺構 1 建物3・4、木戸923、石列906・921・938、集石784、埋甕860・861、土坑846（南から）
 2 池276と飛石（北西から）
- 図版86 遺構 1 集石393と溝392（北西から）
 2 建物5、集石150、三和土135、かまど132、漆喰槽142（北から）
- 図版87 遺構 1 石室20（南東から）
 2 石室300（北から）
 3 集石126（南から）
 4 集石179（南から）
 5 井戸540（東から）
 6 井戸346（北から）
 7 井戸200（南東から）
 8 井戸93（南から）
- 図版88 遺構 1 井戸270（北から）
 2 1区南東部井戸群（東から）
- 図版89 遺物 井戸93出土土器
- 図版90 遺物 井戸93出土土器、井戸270・土坑240出土ヨーロッパ陶器
- 図版91 遺物 瓦類1
- 図版92 遺物 瓦類2
- 図版93 遺物 瓦類3
- 図版94 遺物 瓦類4
- 図版95 遺物 瓦類5
- 図版96 遺物 土人形、石製品、金属製品

挿 図 目 次

図1	調査前全景（北東から）	1
図2	作業風景	1
図3	調査地位置図（1：2,500）	2

図4	調査区配置図（1：1,000）	3
図5	「寛永十四年洛中絵図」	4
図6	土層模式図	7
図7	土坑802（南から）	14
図8	畑1実測図（1：100）	15
図9	井戸303・820実測図（1：40）	15
図10	池276の2時期ある漆喰（北から）	17
図11	集石393断面（北から）	18
図12	集石393と溝392接続部（南西から）	18
図13	埋納土坑741実測図（1：10）	21
図14	埋納土坑741（西から）	21
図15	土坑255実測図（1：80）	22
図16	土坑266・715・749断面図（1：80）	23
図17	集石179実測図（1：40）	24
図18	井戸270周辺風景（南西から）	26
図19	土坑240断面図（1：40）	26
図20	柵1・2、堀6実測図（1：100）	28
図21	かまど24、溝69実測図（1：40）	29
図22	池180池底の鉢434と池端に据えられた甕435（北東から）	30
図23	溝181・182実測図（1：50）	31
図24	土師質土器火鉢（357）の梅文スカシ孔	46
図25	墓595（墓域A）出土の薄板に乗った布包み銭貨（銭1～6）	55
図26	墓595（墓域A）出土の銭貨（銭1～6）のX線透過写真	55
図27	I・II期の遺構変遷図（1：800）	58
図28	III期の遺構変遷図（1：800）	59
図29	「寺院明細帳」明治18年（1885）	60
図30	「増補再板京大絵図」乾（部分）寛保元年（1741）	61
図31	「京町御絵図」（部分）明治2年（1869）	62
図32	調査地点の位置及び堆積物試料写真	66
図33	花粉化石の層位分布	68
図34	花粉化石	70
図35	珪藻化石・植物珪酸体	71
図36	脊椎動物遺存体の組成（N=284）	76
図37	土坑255出土の魚類組成（N=127）	76
図38	出土した動物遺存体	76

図39	井戸270から出土した貝類	80
図40	人体骨格各部の名称	81
図41	墓567出土骨	89
図42	墓876・墓878出土骨	90
図43	墓910A出土骨	91
図44	墓910A・910B出土骨	92
図45	虹色を呈する淡褐色～透明系ガラス（ガ10）	95
図46	濃青色ガラス焼付による模様（ガ10）	95
図47	薄紅色系ガラスの加飾（ガ6）	95
図48	緑色系ガラスの加飾（ガ6）	95
図49	鉛ガラスの蛍光X線分析結果	96
図50	カリガラスの蛍光X線分析結果	96
図51	砒素（As）を含む試料の蛍光X線分析結果	96
図52	緑色系ガラスの蛍光X線分析結果	96
図53	エメラルドグリーン系ガラスの蛍光X線分析結果	96
図54	黄色系ガラスの蛍光X線分析結果	96
図55	コバルト（Co）を含む試料の蛍光X線分析結果	96
図56	マンガン（Mn）を含む試料の蛍光X線分析結果	96
図57	濃青色の模様を焼き付けた箇所 <small>の</small> 蛍光X線分析結果（ガ10）	97
図58	薄紅色系色ガラスの蛍光X線分析結果（ガ6）	97
図59	玉3（石14）	97
図60	玉3（石14）の蛍光X線分析結果	97
図61	玉11	97
図62	玉11の蛍光X線分析結果	97

積 文 目 次

墓石積文1	52
墓石積文2	53

表 目 次

表1	遺構概要表	8
表2	遺物概要表	33
表3	井戸93・土坑472出土の土器・陶器類組成	38
表4	土坑652・井戸270出土の土器・陶器類組成	44
表5	花粉分析結果	68
表6	植物珪酸体分析結果	69
表7	動物遺存体種名表	74
表8	脊椎動物遺存体集計表	75
表9	種名一覧	78
表10	出土貝類一覧	79
表11	骨同定結果	83
表12	歯牙計測値	85
表13	出土人骨の歯式	86
表14	出土人骨の年齢・性別	88
表15	ガラス分析結果	94

付 表 目 次

付表1	土器類観察表	98
付表2	瓦類観察表	111
付表3	土製品観察表	115
付表4	石製品観察表	119
付表5	墓石観察表	120
付表6	金属製品観察表	121
付表7	銭貨観察表	122
付表8	ガラス製品観察表	123
付表9	骨・貝製品観察表	123

寺町旧域・御土居跡

第1章 調査経過

(1) 調査の経過

この調査は、京都市上京区丸太町通河原町西入高島町335番地他で実施した元春日小学校跡地新校舎整備事業に伴う発掘調査である。調査地は「寺町旧域」・「御土居」にあたる。寺町は、豊臣秀吉により天正19年（1591）ごろ、御土居の構築とともに造営された。江戸時代初期に刊行された¹⁾ 絵図によると、当地は「教安寺」「生蓮寺」「専稱寺」に該当する。当地は、宝永の大火（1708）の後、大きく改変され、一時期町屋が形成された後、公家である高辻家が屋敷を構え、明治10年（1877）に番組小学校が設置されるまで存続したことがわかっている²⁾。このため、工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）から、発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施することとなった。調査は、寺町の状況を確認すること、及び、周辺の調査と合わせて当地の変遷を考古学的に解明することを目的とした。また、調査地の北には平安時代に藤原道長によって建立された法成寺があったことから、関連遺構が存在する可能性があるため、この確認も目的とした。

発掘調査区は、文化財保護課の指導により、図4のように設定した。排土置場確保のため調査区を東西に2分し、西半を1区、東半を2区とした。調査面積は計1,880㎡である。2015年8月3日に1区の調査を開始し、12月28日に終了した。翌2016年1月5日から2区の調査を開始し、3月31日に全ての調査を終了した。1区、2区ともに第1面（幕末から明治初頭）、第2面（江戸時代中期から後期）、第3面（安土桃山時代から江戸時代前期）、第4面（室町時代）の計4面の調査を行った。それぞれの遺構面において記録作業を行った。調査では、第1面と第2面で、江戸時代の公家屋敷と町屋に関する遺構を多数検出した。調査区南部では、旧丸太町通に面した町屋に関わる井戸を多数検出した。第3面では、寺町の寺院に伴う墓域・建物・塀・礎敷き・井戸・かまど・基



図1 調査前全景（北東から）



図2 作業風景



図4 調査区配置図（1：1,000）

壇などを検出した。第4面では、中世の畑状遺構を検出した。

各面の遺構の掘削は、人力によって行った。図面は、手測りにより平面図・断面図・立面図などを作成した他、適宜オルソ測量を行った。写真撮影は各遺構面で行った。

調査の成果を公表するため、2015年11月25日に広報発表、同月28日に現地説明会を開催した。現地説明会には約400名の来場があった。他にも10月31日には、京都市考古資料館主催の文化財現地講座の会場となった。2016年1月22日には、カンボジア王国政府アプサラ機構（アンコール地域遺跡整備機構）と上智大学による文化財保護行政ヒアリング調査団一行12名の発掘現場見学を受け入れた。また適宜、文化財保護課の臨検、当事業における検証委員若林邦彦（同志社大学）、國下多美樹（龍谷大学）の各氏による指導・検証を受けた。

（2）遺跡の位置と環境（図3・5）

調査地は現在の丸太町通と河原町通の交差点の北西角に位置する。丸太町通は平安京の春日小路の東への延長線上にのる。丸太町通は「寛永十四年洛中絵図」や「洛中絵図寛永後万治前³⁾」では京内を通る寺町通（平安京東京極大路に該当）で止まるが、宝永6年（1709）の絵図では北へクラ⁴⁾ンクして東進する。丸太町通が直線的に繋がるのは大正2年（1913）の市電敷設時のことである⁵⁾。

豊臣秀吉は天下統一後、京都市街の大改造に取りかかり、天正19年（1591）に京都の周囲に堀と土塁からなる「御土居」を巡らせた。これとほぼ同時期に、鴨川沿いに造られた御土居の内側に京内にあった寺院を集め、寺町が造成された。調査地は、この寺町に位置する。寺町は江戸時代に入っても存続している。元禄14年（1701）刊行の絵図⁶⁾などでは、当地に北から「教安寺」「生蓮寺」「専稱寺」（いずれも浄土宗）が描かれる。調査地のほとんどは「生蓮寺」に該当する。「寛永十四年洛中絵図」（図5）などには規模も記されており、生蓮寺は間口（南北）「貳拾間」、奥行（東西）「参拾壹間半」とある。

寺町は宝永5年（1708）の大火に遭い、これをきっかけに大きく改変されることとなる。すなわち、公家町を南へ拡幅するため、寺院を鴨川の東側、二条通と仁王門通の間に移し、寺院跡地に、烏丸通以東、寺町通以西、中御門通以南、丸太町通以北の民家を移転させた⁷⁾。宝永6年（1709）刊行の絵図⁸⁾には、当地は「町屋」と記され、鴨東に生蓮寺などがある。

その後、寛保元年（1741）刊行の絵図⁹⁾には、当地には「高辻」の名が記される。高辻家は、菅原道真を祖とする公家で代々文章博士を務めている。天明8年（1788）の大火及び元治元年（1864）の禁門の変の後の絵図¹⁰⁾にも「高辻」は描かれる。天明6年（1786）以降の絵図には「高辻」の傍らに「天神」の文字や鳥居の絵がある。高辻邸内には天満宮の祠があったと記す文献もある¹¹⁾。

ところがこの高辻家も、明治維新をきっかけに東京へ転出する。転出の年は明確ではないが、明治10年（1877）には、高辻家旧邸に番組小学校が伊勢屋町から移転してきている¹²⁾。この番組小学校がのち京都市立春日小学校となった。



図5 「寛永十四年洛中絵図」（部分、中井家旧蔵 宮内庁書陵部蔵、左が北）
『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』 柏書房 1994年より加筆し転載した。

なお、平安時代中期には、調査地の北に、藤原道長の法成寺があり、その南には東朱雀大路と呼ばれた大路が南伸していたといわれており、調査地の西側にある新烏丸通がその大路に該当する。

(3) 周辺の調査 (図3)

調査地周辺では、過去に数件の発掘調査と十数件の試掘・立会調査が実施されている。寺町旧域内の調査1では、天明の大火と宝永の大火の焼土層を確認、近世の土蔵や井戸などを検出している¹³⁾。調査2では、宝永の大火前の寺院関連の遺構群と大火後に造営された屋敷関連の遺構群を検出、墓石・銭貨、近世陶磁器類・土製品などが多く出土している¹⁴⁾。調査3では16世紀末から18世紀初頭の寺院に伴う礎石建物・柱穴列・墓地・井戸・溝などを検出、寺町通に面する西側には寺院の本堂や生活空間、本堂の裏手には、墓地が広がる様子を明らかにした。墓石が多量に出土し、これは宝永の大火後、寺院の移転に伴い投棄されたものと考えられている¹⁵⁾。調査4は、試掘調査であるが、中世から江戸時代の石組井戸・石室・土坑を検出している¹⁶⁾。調査5～11は立会調査で、調査5のY6地点では墓を検出、墓石が出土している¹⁷⁾。調査6・7及び調査8No.16地点では江戸時代の遺物包含層¹⁸⁾、調査9No.4地点では、時期不明の路面及び整地層¹⁹⁾、調査10では氾濫堆積を検出している²⁰⁾。調査11は春日小学校内での立会調査であるが、工事掘削深0.3mまで現代盛土であった²¹⁾。

寺町通以西の平安京内では、調査12は発掘調査で、平安時代前期から室町時代まで東京極大路の変遷を明らかにした他、平安時代の埋納遺構・溝・柱穴列や安土桃山時代から江戸時代の石室・井戸・水溜などを検出、金銅製錠などが出土している²²⁾。調査13～22は立会調査である。調査13では、平安時代後期の土坑、中世の土坑・流路、近世以降の土坑・井戸、調査14では鎌倉時代から江戸時代までの4時期の遺物包含層²⁴⁾、調査15では江戸時代の遺物包含層²⁵⁾、調査16では平安時代前期・中期、鎌倉時代、安土桃山時代の各時期の土坑が見つかった²⁶⁾。調査17・18では東京極大路と考えられる路面²⁷⁾、調査19では平安時代後期から鎌倉時代の落込みと鎌倉時代の遺物包含層を検出している²⁸⁾。調査20A地区では、輸入陶磁器類が多数出土した²⁹⁾。調査21では鎌倉時代の遺物包含層³⁰⁾、調査22No.12・13地点では江戸時代末期の遺物包含層を検出している³¹⁾。

註

- 1) 「寛永十四年洛中絵図」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年
『洛中絵図寛永後万治前』 臨川書店 1979年
- 2) 「春日学区」『史料京都の歴史 第7巻上京区』 平凡社 1980年
『春日百年史』 春日校創立100周年記念事業実行委員会 1969年
『閉校記念誌 春日－輝ける126年のあゆみ－』 京都市教育委員会 1997年
- 3) 前掲1)
- 4) 「新板増補京絵図 新地入」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年
- 5) 「京都坊目誌首巻之五」『新修京都叢書第17巻』 臨川書店 1967年
- 6) 「元禄十四年実測大絵図(後補書題)」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年

- 7) 前掲2)
- 8) 前掲4)
- 9) 「増補再板京大絵図 乾坤二舗」『慶長昭和京都地図集成 1611 (慶長16) ～1940 (昭和15)』 柏書房 1994年
- 10) 伊東宗裕『京都古地図めぐり』 京都創文社 2011年
- 11) 「京都坊目誌上京第十七學區之部」『新修京都叢書第19巻』 臨川書店 1968年
- 12) 前掲2)
- 13) 『同志社大学 徳照館地点・新島会館地点の発掘調査－同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No.22－』 同志社大学校地学術調査委員会 1990年
- 14) 『京の公家屋敷と武家屋敷－同志社女子中・高校静和館地点、校友会新島会館別館地点の発掘調査－同志社埋蔵文化財委員会調査報告Ⅰ』 学校法人同志社 1994年
- 15) 綾部侑真「寺町旧域・法成寺跡」『京都府埋蔵文化財情報 第128号』 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2015年
- 16) 『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 17) 堀内明博「左京二条三・四坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要 (試掘・立会調査編)』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 18) 調査6 「KS14」『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』 京都市文化市民局 2005年
調査7 「KS28」『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』 京都市文化市民局 2005年
調査8 「HL84」『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』 京都市文化市民局 2007年
- 19) 「KS55」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』 京都市文化市民局 2010年
- 20) 「KS13」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』 京都市文化市民局 2014年
- 21) 「KS309」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』 京都市文化市民局 2015年
- 22) 『平安京左京二条四坊十五町跡・東京極大路跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-5 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 23) 中村 敦「平安京左京一条四坊隣接地」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 24) 「HL212」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』 京都市文化観光局 1984年
- 25) 「HL364」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
- 26) 「HL105」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年
- 27) 調査17 「HL113」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年
調査18 「HL449」『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』 京都市文化市民局 1996年
- 28) 「HL85」『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』 京都市文化市民局 1996年
- 29) 能芝 勉・丸川義広「平安京左京一条四坊・二条四坊 (97HL404・460)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』 京都市文化市民局 1999年
- 30) 「HL23」『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』 京都市文化市民局 2000年
- 31) 「HL369」『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』 京都市文化市民局 2008年

第2章 遺 構

(1) 基本層序 (図6、図版8~12)

調査地は江戸時代に少なくとも3度の大火(1708年宝永の大火、1788年天明の大火、1864年禁門の変による元治の大火)に被災しており、その大火を画期として土地が大きく改変されたことが文献から窺える。このため、調査では各大火の焼土を鍵層として遺構の時期を区切った。

調査地の地表面の標高は北部で45.5m、南部で44.8mである。基本層序は、1箇所連続した層序が残っている断面が少なかったため、1区東壁①・②地点(図版8)と、2区東壁③・④地点(図版10)をもとに土層模式図(図6)を作成した。

①地点では、現地表面から0.3mまでが現代盛土、その下層は上から順に0.1mの厚さで元治の大火から高辻家転出までの層(第1a層)、0.1mの厚さで天明の大火整理後から元治の大火までの層(第1b層)、0.1mの厚さで天明の大火整地層(第2a層)、0.2mの厚さで高辻家転入から天明の大火までの層(第2b層)、0.2mの厚さで寺町形成期から宝永の大火までの層(第3b層)、0.1~0.15mの厚さで室町時代後期から安土桃山時代の耕作土層(第4層)、耕作土層の下層は河川氾濫による堆積層(第5層)となる。③地点では、現地表面から0.6mまでが現代盛土、その下層は0.4mの厚さで天明の大火の整地層(第2a層)、その下層には、1.0mの深さで宝永の大火から高辻家が転入してくるまでの間に掘り込まれた土坑(第3a層)がある。

第5層には古墳時代の土師器・須恵器小片や平安時代の瓦が含まれる。1区北壁際で、現地表面から3mの深さ(標高42.5m)まで掘り下げたが(北壁深掘地点、図版1・12)、第5層が連続し遺構面は確認されなかった。

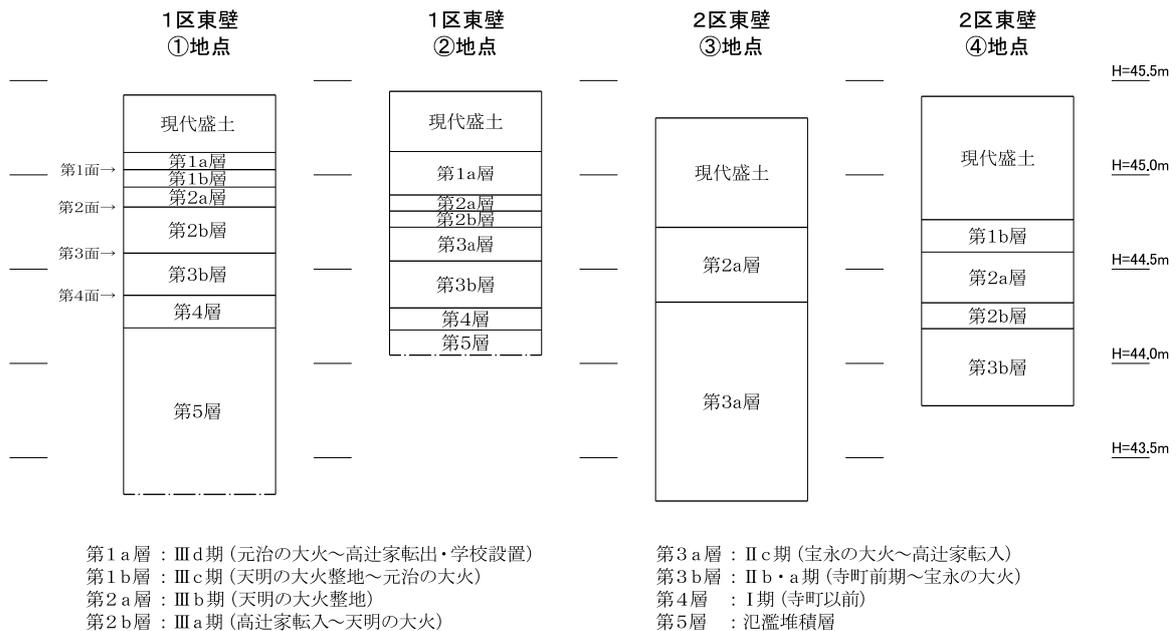


図6 土層模式図

表1 遺構概要表

時代	時期		主な遺構	備考
室町時代後期～ 安土桃山時代	I期	寺町以前	畑状遺構1～3、井戸575	第4面
安土桃山時代～ 江戸時代前期前半	IIa期	寺町前期	墓域A、井戸540	第3面
江戸時代前期後半	IIb期	寺町後期 ～宝永の大火	墓域B・C、建物1、かまど群470、塀1～4、埋甕527、 集石510、井戸141・448、土坑802・960	第3面
江戸時代中期前半	IIc期	宝永の大火 ～高辻家転入	畑1、井戸303・305・758・820、土坑888	第3面
江戸時代中期後半	IIIa期	高辻家転入 ～天明の大火	建物2～4、木戸923、石列906・921・938、塀5、石室20、池 276、集石318・393・524・784、石組340、溝392・845、炉362、 埋甕282・860・861、水溜263・908、井戸89・93・102・200・ 241・256・294・346・377・380・447・490・491・754・765、 方形土坑群1、埋納土坑741、土坑238・255・279・344・381・ 400・472・501・739・846	第2面
江戸時代後期前半	IIIb期	天明の大火整地	土坑266・652・712～715・749	第2面
江戸時代後期後半	IIIc期	天明の大火整地 ～元治の大火	集石126・179・260、石室300、水溜5・6、 井戸7・77・85・87・91・98・101・148・270・684、土坑240	第1面
幕末～ 明治時代初頭	III d期	元治の大火 ～高辻家転出・ 学校設置	建物5、土蔵1、塀6、柵1・2、かまど24・132、池180・187、 集石150、溝69・181・182・686・695、井戸186	第1面

調査は、第1b層上面を第1面、第2b層上面を第2面、第3b層上面を第3面、第4層上面を第4面として調査を行った。しかしながら、調査時には同時期の遺構面の広がりすべてを捉えきることができていなかった。そこで、整理作業で遺構の重複関係や出土遺物の時期を検討し、検出面と各遺構の時期の再整理を行った。その結果、検出した遺構を大きくI期（寺町以前）、II期（寺院期）、III期（高辻家屋敷）の3期に分けた。さらに、II期はa～cの3時期に、III期はa～dの4時期に細分した。すなわち、IIa期は寺町前期、IIb期は寺町後期から宝永の大火まで、IIc期は宝永の大火から高辻家転入まで、IIIa期は高辻家転入から天明の大火まで、IIIb期は天明の大火整地層、IIIc期は天明の大火整地から元治の大火まで、III d期は元治の大火から高辻家転出・学校設置までとなる。

以下に、各時期の主要な遺構について述べる。なお、土師器皿の編年については、『平安京左京四條三坊十二町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26）の時期編年におおよその西暦を加えた¹⁾。

(2) 第5層（氾濫堆積層）について（図版12）

第5層の上面の標高は北で44.3m、南で44.2mと北から南に緩やかに低くなる。当地における生活面形成の過程を把握するため、1区北壁際に地層観察用のトレンチ（1区北壁深掘地点）を設定し、標高42.5mまでの堆積状況について観察を行った²⁾。

第5層の層厚は1.3m以上あり、灰黄褐色～黒褐色の砂礫（直径16cm以下）からなる。第5層ではトラフ型斜交ラミナが観察でき、北方が高い周辺地形を考慮すれば、おおむね北から南への流れが復元できる。したがって本層は、調査地の東側を南流する鴨川の氾濫に伴う堆積層と考えてよいだろう。もっとも顕著にラミナが観察できた図版12の3層では、灰黄褐色砂礫に黒色の砂礫（表面に鉄分が沈着したものか）がラミナに沿うように観察された。また本層には泥質の偽礫（図版12の5・6層）が含まれ、本調査地より上流の土地利用を把握するために有意な資料と考えられたので、自然科学的分析を実施した（付章1）。

（3）Ⅰ期（室町時代後期から安土桃山時代）の遺構（図版1）

寺町形成以前の遺構である。この時期の遺構は少ないが、畑状遺構や井戸を検出した。

畑状遺構1・2（図版12） 1区南西部で検出した。現代攪乱の底部でシルトブロックを含むにぶい黄褐色砂の耕作土がわずかに残存していた。南北に畝が作られる。畝は北西から南東にわずかに振れる。畝の上面の標高はいずれも44.10～44.20mであった。畝の高さは0.04～0.11mであった。室町時代後期の瓦器が出土した。

畑状遺構3（図版12） 2区西部で検出した。この畑も南北に畝が作られる。畝の上面の標高は44.40m、畝の高さは0.1mであった。氾濫堆積層の上面に造られる。

井戸575 畑状遺構1の東側で検出した円形の石組井戸である。掘形の直径は約1.0mで石組部分は外法径が約0.7m、内法径が約0.4mある。深さは検出面から1.3mで、底部の標高は42.54mである。石組は自然石で、石の大きさは径0.08～0.12mと小ぶりである。埋土から11期（1590～1680）に属する土師器皿などが出土した。

（4）Ⅱa期（安土桃山時代から江戸時代前期前半）の遺構（図版2・3）

寺町前期の遺構である。遺構の重複関係と、出土する遺物がⅡ期（寺院期）の中でも1時期古いため、Ⅱa期とした。1区拡張区で検出した墓域や井戸がある。

墓域A（図版13・84） 1区東壁際の土坑より頭蓋骨の一部が出土、東壁へ入り込むことがわかった。このため、調査区を東へ2m広げ、拡張区として検出作業を行った。この拡張区で3基の墓を検出、墓域Aとした。

墓567は、平面楕円形で、長径約1.7m、短径約1.2m、深さは0.4mある。底部は平坦で断面形は逆台形を呈する。右手を右耳あたりに当てて横臥する人骨の上半身が良好な状態で出土した。鉄釘が出土したことから、木棺を使用したとみられる。鉄釘には木片が付着しており、樹種鑑定の結果、針葉樹製であることがわかった。釘に付着した木目の状況から、棺の板の厚さは1.3cmと推測できる。なお、大腿骨より下半の出土はなかった。出土した人骨についての情報を得るため、同定を実施した。この同定の結果は付章4において詳述するが、被葬者は少なくとも2体あり、歯牙の特徴から、2体とも成年後半～壮年前半程度の男性とみられることがわかった。出土した土師器皿は11期B（1620～1650）に属する。

墓595は、拡張区東端で西半を検出。東半は調査区外に広がるため全体の平面形は不明である。検出面での径1.1m、深さ0.35m、底部は平坦で断面形は逆台形。大腿骨と脛骨が並んで出土。墓内北西で、径3.0cm、厚さ1.0cmの布包みが、厚さ0.6cm、短径3.3cm、長径4.0cmの楕円形の薄板上に乗せた状態で出土した。薄板の材質はスギで、布包みの乗っていた部分のみ遺存し、元の形状は不明である。布は麻製であった。布包みの内容は第3章(7)で詳述するが、輸入銭(宋銭)を6枚重ねたもの(いわゆる六道銭)であった。

墓597は、拡張区北端で南肩を検出。北半は調査区外に延びるため全体の平面形は不明である。検出面での径1.3m、深さ0.05mである。人骨が出土したが、極小片のため同定は不可能であった。

井戸540(図版13・87) 1区中央部で検出した円形石組井戸である。石材を底部から上部に広げ、播鉢状とする。掘形の直径は1.3m、石組部分は上部が内法で径約0.7m、下部が内法で約0.4m、深さは検出面から1.15mある。底部の標高は43.22mである。石材には自然石を用い、石の大きさは径0.12~0.24mある。埋土から瀬戸・美濃大窯4期の志野椀や折縁ソギ皿などが出土、寺町造成時にはまだ機能していたものの、江戸時代初期には、廃絶したとみられる。

(5) II b期(江戸時代前期後半)の遺構(図版2・3)

寺町後期から宝永の大火までの遺構である。墓域、建物、かまど群、塀、埋甕、集石、井戸、土坑などを検出した。また、1区中央西側には、部分的に小礫を敷き堅く締めた舗装面があった。なお、墓域は2箇所を検出したため、墓域B、墓域Cと呼び分ける。ほとんどの墓で人骨が出土、そのうち遺存状況が良いもの(墓876・878・910A・910B出土)について同定を行った。その成果は付章4で詳述している。

墓域B(図版14) 1区南東部で11基の墓を検出した。上部を現代攪乱で削平されるため、全体像は不明であるが、検出面では平面形は隅丸方形または円形である。一定間隔で東西に並ぶことや、底部に人骨・鉄釘・銭の出土する遺構があるため、この一群を墓域Bとした。

各墓の径は0.4~1.0m、深さは検出面から0.1~0.45mである。底面は平坦で、断面は逆台形である。墓428から出土した土師器皿は11期C(1650~1680)に属する。墓391からは左右大腿骨・脛骨が鉛直方向で出土した。他にも墓406・413から人骨の極小片が出土した。墓391・406・407・412から鉄釘、墓412から寛永通寶2枚が出土した。

墓域C(図版15~17・82・84) 2区北東部で28基の墓を検出した。この一群を墓域Cとした。上部を現代攪乱により削平され底部のみの検出であるため、平面形及び各遺構の切り合いが不明なものが多い。各墓の規模は、径0.5~1.7mで、深さは検出面から0.1~0.8mである。底部の標高は42.80~43.57mである。底部は平坦で断面は逆台形のものが多い。次に主な墓について述べる。

墓824は、平面円形で、径約1.0m、深さは0.8mある。断面形はU字状。上部では一石五輪塔・別石五輪塔地輪部・舟形墓標などが投棄された状態で出土、下層で寛永通寶が6枚重なった状態で出土した。舟形墓標の銘には「元和六年」とある。出土した鉄釘には、木片が付着しており、樹種鑑定した結果、スギ材であることがわかった。

墓826は、平面歪な隅丸長方形で、長径約1.2m、短径0.8m、深さは検出面から0.25mある。断面形はU字状。鉄釘、6枚錆着した銭、人骨、歯牙などが出土した。鉄釘には微量の木片が付着、樹種鑑定では針葉樹であることがわかった。釘に付着した木目の状況から、板の厚さは1.0～1.2cmと推測できる。

墓827は、平面歪な隅丸長方形で、東西1.3m、南北0.8m、深さは検出面から0.2mである。断面形はU字状。11期Cから12期A（1650～1710）に属する土師器皿・肥前磁器染付仏飯器・天目碗の小片、鉄釘、人骨、歯牙などが出土した。

墓828は、平面円形で、径約0.6m、検出面からの深さ0.18m、断面はU字状。6枚の銭が錆着した状態で出土した。銭には、漆の被膜が貼り付く。ガラス製数珠玉2個体、人骨・歯牙などが出土した。

墓829は、平面楕円形、東西0.75m、南北0.45m、深さは検出面から0.35mである。断面形は逆台形。出土した土師器皿は12期（1680～1740）を示し、染付碗の他に6枚の銭が錆着した状態で漆の被膜と共に出土した。漆の残存状況から碗と見られ、内面は赤褐色、外面は黒色で隅切角に三つ巴の紋が金で配される。高台内に銭の痕跡があった。

墓831は、北は調査区外に延びるため全体の平面形は不明であるが、検出面では歪な隅丸長方形を呈する。東西1.6m、南北1.7m以上、深さは検出面から0.15mである。断面形はU字状。出土した鉄釘には、木片が付着しており、樹種鑑定した結果、スギ材であることがわかった。

墓876は、東は調査区外に延びるため全体の平面形は不明であるが、検出面では不定形で、東西1.1m以上、南北1.2m、深さは検出面から0.42mである。断面形は逆台形。土器類の他に、人骨が比較的良好な状態で出土し、同定を行った結果、歯牙の特徴から被葬者は壮年程度の男性とみられる（付章4）。

墓878は、平面隅丸長方形、東西1.25m、南北0.75m、深さは検出面から0.45mである。断面形は逆台形である。12期（1680～1740）の土師器皿の他、焙烙・つぼつぼ・施釉陶器碗・ガラス製数珠玉2個体、鉄釘、6枚が錆着した銭2組などが出土。また、人骨が比較的良好な状態で出土。四肢骨は概ね鉛直方向に出土、頭蓋骨はその上部に乗る状況で出土した。人骨の同定の結果、少なくとも2体の被葬者が埋葬され、歯牙の特徴から、成年後半～壮年前半程度の男性とみられる1体と成年後半～壮年前半程度の女性であることがわかった（付章4）。

墓880は、平面一辺が約0.7mの隅丸方形、深さは検出面から0.2mである。出土した土師器皿は12期A（1680～1710）を示す。

墓909は、平面歪な楕円形、長径1.1m、短径0.55m、深さは検出面から0.5mである。南半は攪乱を受ける。12期B（1710～1740）の土師器皿の上に銭が6枚重ねて乗せられた状態で出土した。出土した鉄釘には、木片が付着しており、樹種鑑定した結果、スギ材であることがわかった。

墓910Aは、北半は調査区外に延びるため全体の平面形は不明であるが、隅丸方形に近い。検出面では南北1.4m以上、東西1.0m、深さ約0.4mである。頭蓋骨など人骨が比較的良好な状態で出土した。四肢骨は鉛直方向に出土、座棺であることがわかる。人骨同定では、少なくとも4体が埋

葬されているとみられ、中には小児後半～成年程度の遺体もある（付章4）。他に銭が2箇所出土、銭7は1枚の寛永通寶が径2cmの針葉樹の薄板の上に乗った状態で出土した。板は銭に密着していた部分だけ残存しており、全体の形状は不明である。銭8～13は赤褐色の漆の被膜とともに出土した。

墓910Bは、墓831と墓910A下層で検出した。北半は調査区外に延びるため全体の平面形は不明である。検出面では南北約1.1m、東西0.8m、深さ0.5mである。底部及び北壁で鉄釘が5～10cm間隔に並んで出土した。その範囲は、南北0.9m、東西0.53m、高さ0.45mである。北壁面では、木質痕跡を確認した。人骨・歯牙の他に銭が2箇所出土した。銭14～19は錆着していた。銭20～25は12期A（1680～1710）の土師器皿19の上に6枚の銭が分散して乗った状態で出土した。土師器皿周辺で歯牙が列状に26個体（付章4整理番号69）出土、成年後半～壮年前半程度の女性であると同定された。鉄釘が出土、木質を確認しているため、木棺を使用したとわかる。鉄釘には、木片が付着しており、樹種鑑定した結果、スギ材であることがわかった。釘に付着した木目の状況から、棺の板の厚さは1.0cmと推測できる。

墓928は、調査区北端で南肩を検出。北半は調査区外に延びるため全体の平面形は不明であるが隅丸方形に近い。検出面では南北約1.1m、東西1.0m、深さ0.4mである。11期B（1620～1650）の土師器皿のほか、施釉陶器椀、6枚錆着した銭2組などが出土した。

墓932は、平面隅丸長方形、東西1.05m、南北0.8m、深さは検出面から0.65mである。断面形はU字状である。底部の2箇所鉄釘が5～12cm間隔で並んで出土した。その範囲は、南北0.85m、東西0.55mであった。11期B（1620～1650）を示す土師器皿、陶器椀・播鉢、磁器椀の他、緑色を呈する石英質の数珠玉1個体などが出土した。また、2箇所銭が出土、1箇所では、頭蓋骨を取り上げた下層で、6枚錆着した銭が赤褐色の漆の被膜の上に乗った状態で出土した。出土した鉄釘には、木片が付着しており、樹種鑑定した結果、スギ材であることがわかった。釘に付着した木目の状況から、棺の板の厚さは1.2cmと推測できる。

墓域Cでは、検出した墓28基のうちの20基に鉄釘が出土する。このうち、鉄釘に残存した木目の付着状況のわかるもの4点について観察してみると、棺の板の厚さは1.0～1.2cmであったことがわかった。木質の残存する鉄釘9点について樹種鑑定したところ、材質はスギであることがわかった。また、28基のうちの23基で銭が出土、このうち21基で6枚一組になった銭（いわゆる六道銭）が出土、そのうち、10基で複数組の六道銭が出土した。六道銭の出土状態は、2基（墓909・910B）で土師器皿の上に置かれた状況、3基（墓910A・934・973）で薄板の上に置かれた状況、7基（墓828・829・910A・928・932・975・980）で漆椀または漆の被膜と共に出土した。ほとんどが6枚の銭が錆着した状態であったが、土師器皿に乗った墓910B、薄板に乗った墓973では、分散していた。

建物1 1区中央東側で検出した。東は調査区外に延びる。東西6.0m以上、南北12.0mの規模で、固く締まった暗オリーブ褐色シルト質砂が約0.3mの厚さで盛り上がる。法面は約45度の傾斜がある。建物の基壇と考えるが、この内側では礎石据付痕跡などは見つからなかった。

かまど群470（巻頭図版2、図版18） 1区北東部で検出した。馬蹄形のかまど基底部を4基確認した。西側が攪乱され、本来の規模は不明であるが、東西列の4連以上のかまどである。東から順にかまど470-1～4とした。かまど内径はそれぞれ0.55m、0.50m、0.55m、0.40mであった。北側に開口するそれぞれのかまど内壁は、非常に焼き締まっている。かまど470-1・2は特によく焼き締まっていた。かまど470-3・4の底部には貼り土が残り、上部には炭の多く入る暗褐色から黒褐色シルト質砂が堆積する。土師器皿、焼締陶器播鉢・甕、施釉陶器碗などが出土した。

堀1（巻頭図版2、図版18） 1区中央南寄りで検出した東西方向の堀である。東西14間分を検出した。方位は西に対して北に約6度振れる。柱掘形の平面形は円形で、径0.24～0.50m、深さは0.12～0.45mある。数箇所柱当たりを検出、径は約0.1mである。柱間は西から東にY=-21.133あたりまでは1.0～1.3mとほぼ等間であるが、そこから東の柱穴546と柱穴550の間隔は2.7mである。この地点では本来の柱列から北西へわずかにずれて、直径0.3mの柱穴が2基（柱穴446・502）、2.7mの間隔で並ぶ。門か開口部とみられる。この堀1の東半では、一帯の平面に赤褐色の焼土が広がり、南側では、木舞が出土した（巻頭図版2）。木舞の材質は、幅1～2cm、厚さ0.3～0.4cmの割り竹で、蒸し焼き状態にされ黒色炭状となっていた。約4.5cm間隔で並ぶ。割竹を結束していた縄は焼失していた。木舞より2.5cm下には火を受けた壁の表面が残存していた。北から南に倒れた土壁の一部と考えられる。なお、焼け焦げた竹製の木舞は2区北西部でも検出している。堀1は堂舎と墓域を限る堀であると考えられる³⁾。

堀2（図版18） 1区北西部西端で検出した南北方向の堀である。南北4間分を検出した。方位は北に対して東に約6度振れる。柱間は1.2～1.7mである。柱掘形の平面形は円形で、径0.25～0.3m、深さは0.16～0.2mある。

堀3 1区北端、2区中央で検出した東西方向の堀である。すべての柱穴が揃っているわけではないが、同一直線上に複数の柱穴が並ぶので堀として復元した。方位は西に対して北に約6度振れる。柱間は1.4～2.8mである。柱掘形は円形である。

堀4 1区南部で検出した東西方向の堀である。すべての柱穴が揃っているわけではないが、同一線上に複数の柱穴が並ぶので堀として復元した。方位は西に対して北に約6度振れる。堀4は生蓮寺と専稱寺との境に設置された堀と考えられる。堀2は通りに面した西限の堀、堀3は北限の堀と考えられる。このことから、生蓮寺の敷地の南北幅（間口）は36.0mとなる。

埋甕527（図版15） 1区東端で検出した。直径0.7mの掘形に底径0.25mの瓦質陶器の甕を正位に据えている。検出面から甕の底面までの深さは0.5mを測る。底部には径7cmの穴が開けられていた。甕内の埋土からは遺物の出土はなかった。甕は1600年代前半の大和産である。

集石510（図版15） 1区中央北寄りで検出した円形の遺構である。掘形の径は0.9m、深さは0.35mある。底部の標高は43.86mである。径0.15m前後の大きさの自然石を詰め込む。埋土から瓦の極小片が出土した。浸透枘と考えられる。

井戸141（図版13） 1区南西部で検出した。上部は円形の石組井戸、下部に方形木枠の痕跡がある。掘形の直径は約1.9mで、石組部分は外法径が約1.0m、内法径が約0.5mある。深さは検出



図7 土坑802 (南から)

面から1.2mで、底部の標高は42.64mである。石組には花崗岩と自然石を用い、石の大きさは径0.3～0.45mと比較的大振りである。井戸廃絶時に0.3mの花崗岩の割石を埋める。枠内からは土師質土器焼塩壺・火鉢、肥前染付などが出土、掘形には、平安時代の瓦が混入していた。

井戸448 井戸141の東で検出した円形の縦板組井戸である。掘形の直径は1.7m、深さは検出面から1.9mで、底部の標高は41.85mである。

埋土上層からは土師器皿、施釉陶器鉢、焼締陶器甕、下層からは染付椀、青磁壺、施釉陶器などが出土した。

土坑802 (図版16、図7) 2区墓域C北東で検出した。北は調査区外に延びるため、平面形は不明。検出面では、1.2mの半円形。深さは0.8mある。断面形は播鉢状。底面の標高は43.30m。12期(1680～1740)に属する土師器皿、磁器椀、陶器椀などが出土した他、一石五輪塔・五輪塔地輪部・舟形墓標・石柱形墓標・石仏などが投棄された状態で出土した。一石五輪塔などに刻まれる最も古い年号は石16・17「慶長九年」(1604)、最も新しい年号は石30「延宝四年」(1676)である。

土坑960 2区南東部で検出した。南北12m以上、東西8m以上ある。底面は南で平坦、北で深くなる(図版10-23～31層)。検出面からの深さは南で0.4m、北の深いところで1.4mである。タイ製四耳壺(26)の他、肥前系磁器の皿・椀、鬼瓦(瓦80)などが出土した。

(6) II c期(江戸時代中期前半)の遺構(図版2・3)

宝永の大火から高辻家転入までの遺構である。畑、井戸、土坑を検出した。

畑1 (図8) 2区中央部で南北に作られる畝を9条検出した。畝の上面の標高は東で44.40m、西で44.60mであった。畝の高さは0.08～0.15mであった。

井戸303 (図9) 1区南部で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は1.7m、石組部分は外法径が1.2～1.3m、内法径が0.75～0.8mある。深さは検出面から0.9mで、底部の標高は43.55mである。石組には主に花崗岩の割石を使用、一部に自然石・墓石・一石五輪塔・五輪塔の空輪部と風輪部を併用する。石の大きさは径0.3～0.35m。掘形上面には径約0.1mの小礫を入れる。一石五輪塔(石15)には「慶長七年/壽幻童子/六月十二日」の銘を、五輪塔(石25)には四方に梵字を刻む。

井戸305 井戸303の北で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は1.25～1.45m、石組部分は外法径が1.1～1.2m、内法径が0.6～0.75mある。検出面から1.95mの深さまで掘削したが、安全面を考慮して掘り止めた。石組には自然石と花崗岩の割石を併用する。石の大きさは径0.2～0.35m。廃絶時に径0.7mの大石を埋める。

井戸758 2区南西部で検出した円形の石組井戸である。掘形の直径は約1.0m、石組部分は外法径が0.95m、内法径が0.65mある。深さは検出面から0.65mで、底部の標高は43.82mである。石

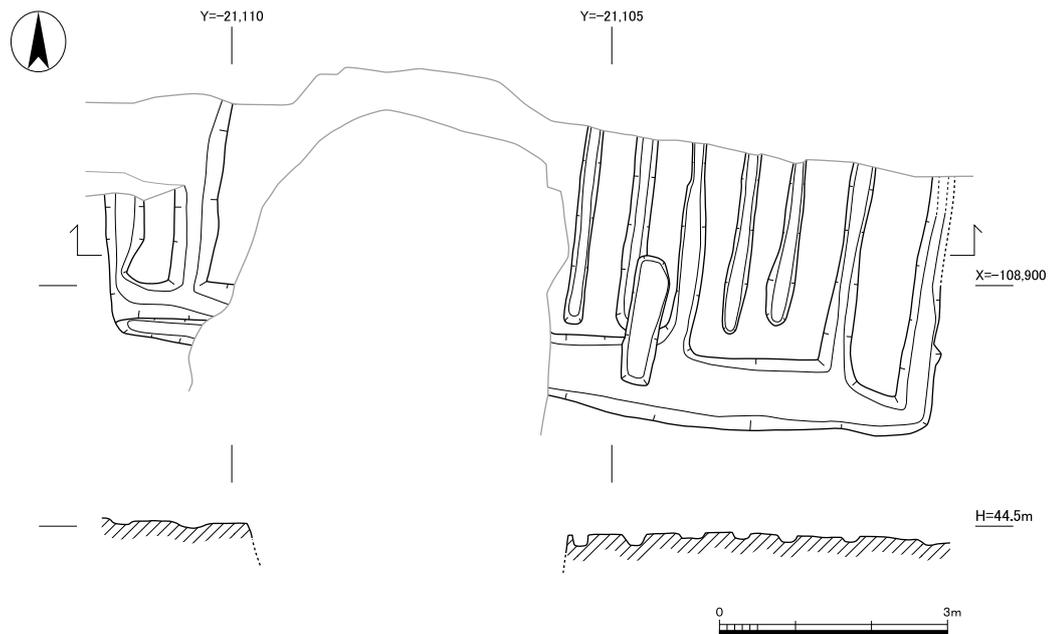
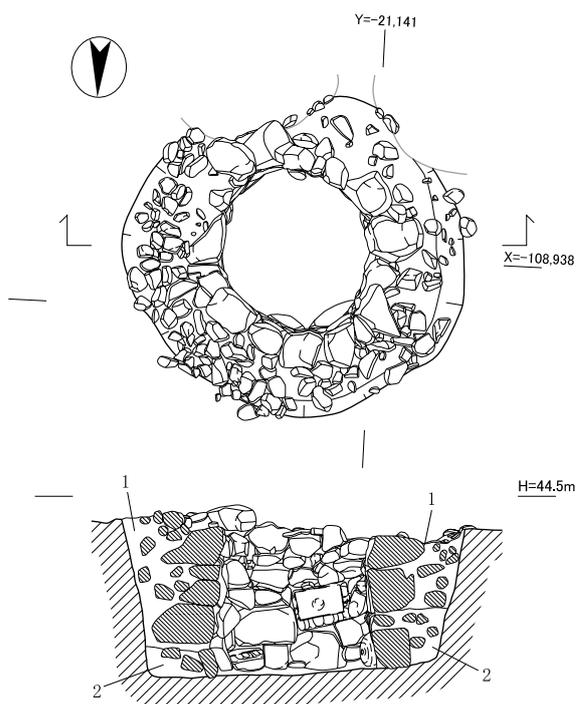


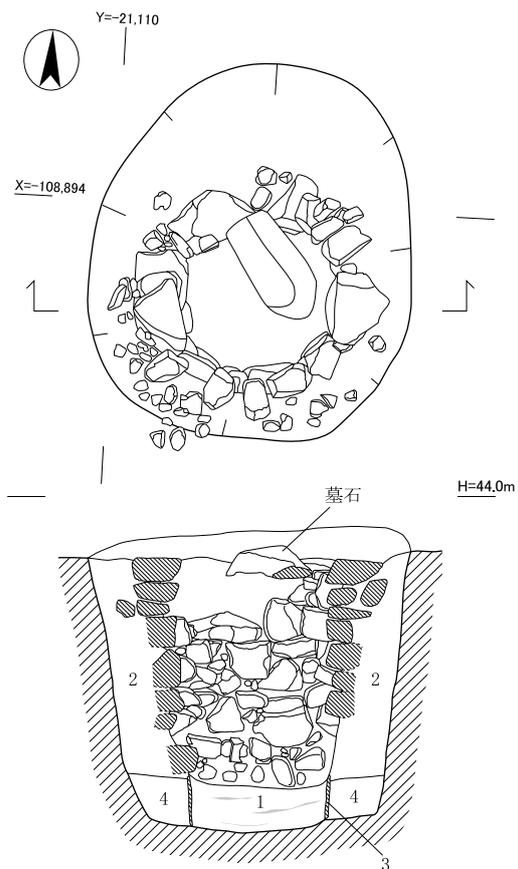
図8 畑1実測図 (1 : 100)

井戸303



- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土ブロック含む
- 2 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 φ1~5cmの礫を含む

井戸820



- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルトの薄層を挟する 細砂~細礫 (機能時層)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂礫 φ4cm以下 鉄分沈着
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト質砂 (木杵痕)
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト質砂

図9 井戸303・820実測図 (1 : 40)

組には自然石を用いる。石の大きさは径0.1～0.15mと小ぶりの石を使用する。

井戸820 (図9) 2区中央北寄りで検出した円形の石組井戸である。掘形は楕円形で径は長径2.0m、短径1.7m、石組部分は外法径が約1.3m、内法径が0.75～0.8mある。深さは検出面から1.45mで、底部の標高は42.22mである。上部には、舟形墓標(石31)が前面を下にして、投棄されていた。石組には主に自然石を用い、一部に一石五輪塔を利用する。石の大きさは径0.25～0.3mである。

土坑888 2区北東部で検出した。東は調査区外に延びる。検出長は東西2.2m、南北約1.2m、断面形はV字形(図版10-16～19層)、検出面からの深さは1.2mあり、底面の標高は43.20mである。埋土から土師器皿、施釉陶器椀、磁器皿などが出土した。

(7) III a期(江戸時代中期後半)の遺構(図版4・5)

高辻家転入以降、天明の大火までの遺構である。この遺構面は天明の大火の整地層で覆われる。建物、木戸、石列、塀、石室、池、集石、石組、溝、炉、埋甕、水溜、井戸、土坑などを検出した。

建物2 (図版20) 1区中央東寄りで東西1間、南北2間分を検出した礎石建物である。方位は北に対して東に約5度振れる。柱間は、東西が3.2m、南北は東柱列で3.4mと3.0m、西柱列は中間の柱跡が攪乱されており不明であるが、柱穴317と柱穴336の距離は6.4mある。礎石は東柱列に2石残り、いずれも東西0.4m、南北0.55mの大きさで平坦面を上にして据わる。西側には径0.6～0.9m、深さ0.22～0.35mの円形の掘形があり、この中に礎石が据えられていたとみられる。この建物は西へ延びる可能性もあるが、西側に大きな攪乱を受けており、確認することはできなかった。

建物3 (図版19・85) 2区南東部で検出した。南北6.4m、東西1.8m以上の南北棟建物。礎石建物と思われるが、礎石はほとんど残っていない。北を石列898、西を土坑926、南は木戸923延長ラインを南端として復元した。南北6.5mで東は調査区外へ広がる。石列898は長径0.1～0.15mの自然石を東西に直線的に並べる。検出長1.7m。東は調査区外に延び、西は集石784に繋がる。この石列の北側は漆喰で固められる。漆喰は一部が赤く焼ける。土坑926は幅0.5m、長さ3.2m、深さ0.2mで、南北に細長い。建物の布掘り基礎と考える。建物北西角には集石784があり、浸透枘として機能していたとみられる。建物北側の石列898の北には漆喰が敷かれるが、上面は赤く焼ける。建物西側には後述する溝845があり、その西に礫敷が広がる。この礫敷は約1.5mの幅を持ち、木戸923から建物北端まで延びる。この礫敷は3層に分けられ、礫を何度か突き固めて路面としている。この礫敷の上面で「寛永九年」銘のある供養塔(石34)、台石(石40)が出土した。この2石は埋甕860上面で出土した笠部(石39)と組み合わせる。また、礫敷直下では埋甕861をみついている。建物南側では、建物4との間約1.0mに平坦に均された三和土面を検出しており、ここは小径となっていたとみられる。この上面は赤く焼ける。

建物4 (図版19・85) 2区南東隅部で検出した。建物3の南で礎石のある柱穴を3基検出した。礎石は一辺0.2～0.3mの方形の石を平坦な面を上にして据える。このラインを北端として建物4を復元した。

木戸923 (図版19・85) 2区建物3の南西で検出した。一辺約0.3mの平らな石が2石、1m間隔で並べ、2石間に長径0.08～0.4mの石を平坦な面を上にして並べる。南に平坦面、北に礫敷路面がある。この施設は木戸と考えられる。

石列906 (図版19・85) 2区東端で検出した。南北列が0.4m離れて2列並ぶ。北と南は攪乱を受ける。径0.05～0.1mの自然石を西列は直線に南北0.65m、東列は逆L字型に東西0.3m、南北1.7m並べる。方位は正方位である。この石列の間0.4mは褐色シルト質砂の上面に小礫を埋め込み敲き締めて舗装する。

石列921 (図版19・85) 2区南東部、建物3から礫敷路面を挟んで西側で検出した。幅0.1～0.15mの自然石を逆L字形に並べる。検出長は東西0.3m、南北0.7mで、方位は北に対して東に約15度振れる。西側には0.05～0.15mの礫を敷いている。南西側に後述する埋甕860がある。

石列938 (図版19・85) 2区南東部で検出した。平瓦3枚を立てて東西に並べ、その北に0.08～0.1mの自然石を4石南北に並べL字形とする。検出長は東西0.6m、南北0.45m。方位は正方位である。瓦の北には長辺0.3m、短辺0.2mの平坦な石を据える。この遺構の東には埋甕860、南には土坑846がある。

堀5 1区北端、2区中央で検出した東西方向の堀である。すべての柱穴が揃っているわけではないが、同一直線上に幾つかの柱穴が並ぶので堀として復元した。方位は西に対して北に約6度振れる。柱間は1.8～2.3mである。高辻邸の北限の堀と考えられ、生蓮寺と教安寺の敷地境を踏襲している。

石室20 (図版21・87) 1区南西部で検出した楕円形の石室である。掘形は長径2.6m、短径2.0m、深さは検出面から0.82mで、底部の標高は42.94m。石組の内法は長径1.45m、短径1.0m。石組には自然石を使用する。最下段は長径0.2～0.25mの石を規則的に並べて使用する。二段目以降は、径0.15～0.2mの石を使用する。

池276 (巻頭図版3、図版22・85、図10) 1区中央部東端で検出した漆喰貼りの池である。東西は3.0m以上、南北は3.5mある。池の底部は平坦で水深は約0.2m。底部の標高は浅いところで44.56m、深いところで44.50mである。漆喰は2層あり、2度に分けて造られたか、もしくは一度修理が行われたと考えられる。岸辺では漆喰がリング状に盛り上がり、その底部には礫が積まれた箇所もある。これは庭石を据えた痕跡とみられる。埋土には焼土が含まれる。池の中央分には長径0.4m、深さ2.2cmの不定形の凹みがあり、径0.08～0.1mの礫が入る。この上に踏石もしくは景石が据えられていたと考えられる。この池の北には飛石が取り付く。飛石は北に調査区外に延びる。南には抜き取り痕とみられる土坑(土坑324～327)が並ぶ。飛石の上面の標高は44.80mである。池埋土からはメカイアワビが出土した。



図10 池276の2時期ある漆喰(北から)



図11 集石393断面（北から）



図12 集石393と溝392接続部（南西から）

集石318（図版24） 1区中央部東端で検出した。平面円形で掘形の径は0.9m、深さは検出面から1.0mある。底部の標高は43.76mである。0.10～0.40mと、大きめの自然石を詰め込む。浸透枘と考えられる。

集石393（図版23・86、図11・12） 1区北西部で検出した。北側に接続する溝392とともに、敷地の排水に関わる遺構と考えられる。平面形は隅丸長方形。掘形は東西2.6m、南北2.1m、深さ1.6mある。断面形はU字状。上部には長径0.15～0.3mの石材を用いて、上面と外面に平坦面を揃え、東西2.0m、南北1.4mの長方形の区画を作る。掘形内には径0.05～0.1mの小礫を密に充填する。検出面から1.3m下層で、東西約1.6m、南北約0.9mの範囲に平坦に置かれた戸板状の木質を検出した。板の材質は広葉樹である。その下層には、中央に0.2m×0.45m×0.4mの墓石台石（反花付き）が横向けに、四隅と中央南北

に径0.3mの石材が置かれていた。東西の石材の外側には縦板が残る。これらの石材や縦板は、板を水平に支持する束柱のように配しているとみられる。板の下位の堆積地層については、花粉分析を行った（付章1）。

集石524（図版20） 建物2の北東で検出した。平面隅丸方形で掘形の径は約0.8m、深さは0.35mある。底部の標高は44.22mである。径0.05～0.35mの大きさの自然石を詰め込む。浸透枘と考えられる。

集石784（図版19・85） 2区北東隅部で検出した。東西1.15m、南北0.8mの平面隅丸方形の土坑に径0.05～0.18mの礫を密に入れる。断面形は逆台形、深さは0.3m。浸透枘とみられ、この遺構の下部には石組の水溜908がある。

石組340（図版21） 1区北東部で検出した。平面隅丸長方形の石組である。検出長は東西3.0m、南北1.3m。断面形は逆台形。検出面からの深さは0.5mあり、底面の標高は43.30mである。埋土は暗褐色砂質土で焼土・炭を含む。また、中央部も径0.5m、深さ約0.2mの窪みがある。南側は一辺0.1～0.2mの石材を使用し、北に平面を揃えて4段積み上げ、石垣状に造る。東側には、径0.1～0.2mの自然石を詰める。西側の土坑344を甕の抜き取り穴とみれば、便所遺構の可能性が考えられる。

溝392（図版23・86、図12） 集石393の北に取り付く溝である。北で東へ直角に折れる。東は攪乱により途切れる。幅は南北方向が0.4m、東西方向が0.5m、深さは約0.25m。底部の標高は東端で44.30m、南端の集石393に接続する箇所では44.28mである。集石393との接続箇所にも、底

面に1枚の平瓦を凹面を上にして敷く。溝内部には集石393と同様に径0.05～0.1mの小礫を密に詰め込む。上部両肩には、径0.1～0.4mの石材を並べ、区画する。

溝845 (図版19・85) 2区建物3の西側にある南北石組溝。底部に長径0.1～0.15mの自然石を平坦な面を上にして敷き詰め、その東には0.15mの高さのある長径0.1～0.2mの自然石を平坦な面を西にして並べる。検出幅0.35m、内法は約0.2m、検出長2.7m。底部の標高は北が低く、集石784に繋がる。この石列は北に対して東に約5度振れる。

炉362 (図版24) 1区南部で検出した。北側・西側が攪乱されるが、東西1.7m以上、南北1.4mの楕円形の炉の基底部である。炉内径は1.1mであった。東側に開口する炉内壁は、非常に焼き締まっていた。炭の多く入る褐色焼土が堆積する。

埋甕282 (図版24) 1区南部で検出した。直径0.5mの掘形に底径0.15mの信楽産の甕を正位に据えている。検出面から甕の底面までの深さは0.18mを測る。

埋甕860 (図版19・85) 2区南東部、石列921南西側で検出した。直径0.9mの掘形に底径0.18mの信楽産の甕を正位に据えている。検出面から甕の底面までの深さは0.57mを測る。甕内の埋土は焼土を多く含む。掘形の四隅(北東・北西・南東・南西隅)に、礎石と考えられる幅0.3～0.35mの上端が平らな石を据えている。石間の距離は均等で1.0mである。東側が石列921となる。この遺構の上層で供養塔の笠部(石39)が出土、これは南側で出土した台石(石40)や供養塔(石34)と組み合う。この周辺は、焼土で覆われていた。

埋甕861 (図版19・85) 2区南東部、建物3の西に広がる礫敷路面の下層で検出した。直径0.45mの掘形に底径0.28m、口径0.32mの京・信楽系施釉陶器の円筒形の鉢を正位に据えている。鉢には2箇所に把手が付き、底部は全面抜かれていた。検出面から掘形の底面までの深さは0.25m。鉢内の埋土は焼土・炭を多く含む。地鎮遺構と考えられる。

水溜263 1区の北部で検出した円形の石組遺構である。掘形の径は約1.1m、石組部分は上部で外法径が0.95～1.0m、内法径が0.75～0.8m、下部で内法径が0.35～0.45mとなり、底部より上部が広がる播鉢状となる。深さは検出面から0.6mで、底部の標高は43.74mである。石組には自然石を用いる。石の大きさは径約0.1mと小ぶりである。

水溜908 (図版25) 2区中央東端で検出した円形の石組である。掘形の径は1.55m、石組部分は外法径が約0.8m、内法径が約0.6mある。深さは検出面から0.75mで、底部の標高は43.42mである。石組には自然石を使用する。石の大きさは径0.1～0.15mである。上部には集石784があり、浸透枡として利用していたとみられる。埋土からは土師器皿、磁器碗・皿などが出土した。

井戸89 1区南東隅部で検出した円形の石組井戸である。掘形は径約1.4m、石組部分は外法径が1.0～1.1m、内法径が0.7～0.75mある。深さは検出面から0.35mで、底部の標高は43.41mである。石組には自然石を用い、石の大きさは径0.1～0.15mと小ぶりである。

井戸93 (図版25・87) 1区南東部で検出した円形の石組井戸である。掘形の直径は約1.5m、石組部分は外法径が1.05m、内法径が0.7mある。深さは検出面から0.65mで、底部の標高は43.33mである。石組には花崗岩の割石と自然石を用いる。石の大きさは径0.1～0.3mと不揃いである。

埋土からは13期B（1770～1800）に属する土師器皿の他、土師質土器焜炉・焼塩壺、陶器椀、肥前系磁器椀、土人形など多彩な遺物が出土した。なお、この遺構から出土した土器類については、種類・産地別に組成を集計し、表とグラフに示した（表3）。

井戸102 1区南部で検出した円形の素掘り井戸である。掘形の径約1.25m、深さは検出面から0.42mで、底部の標高は43.29mである。

井戸200（図版25・87） 1区北西部で検出した歪な円形の石組井戸である。掘形の径は1.15～1.45m、石組部分は外法径が0.95～1.1m、内法径が0.55～0.7mある。深さは検出面から0.45mで、底部の標高は43.80mである。石組には自然石と花崗岩の割石を併用する。石の大きさは径0.1～0.2m。埋土からは土師器皿の他、土師質土器のでんぼ、陶器椀、肥前系磁器椀などが出土した。

井戸241（図版25） 井戸200の東で検出した楕円形の石組井戸である。掘形の径は約1.5m、石組部分は外法径が短径1.1m、長径1.25m、内法径が短径0.7m、長径0.95mある。深さは検出面から1.35mで、底部の標高は43.26mである。石組には自然石を用いる。石の大きさは径0.1～0.15m。埋土からは土師器皿の他、土師質土器のでんぼ、陶器椀、肥前系磁器椀・壺、土人形などが出土した。

井戸256 井戸241の南で検出した円形素掘り井戸である。掘形の径は1.7m、深さは検出面から1.15mで、底部の標高は43.55mである。縦板組井戸の可能性はある。

井戸294（図版25） 1区南東部で検出した円形の石組井戸である。下部は木枠井戸となる。掘形の径は1.0m、石組部分は外法径が0.8～0.9m、内法径が0.55mある。深さは検出面から0.95mで、底部の標高は43.66mである。石組には花崗岩の割石と自然石を併用、一部で漆喰を用いる。石の大きさは径約0.15m。埋土からはヤマトシジミ・ハマグリ・アカガイなどの貝類の他、マダイ・ニワトリの骨が出土した。

井戸346（図版26・87） 1区北東部で検出した円形の瓦積み井戸である。掘形の径は1.2m。平瓦を平積みするが、上部は自然石を積む。石組部分の外法径は約0.9m、内法径が0.6mである。深さは検出面から0.95mで、底部の標高は43.60mである。

井戸377 1区南西部で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は1.35m、石組部分は外法径が0.85～1.0m、内法径が0.55mある。深さは検出面から0.35mで、底部の標高は43.95mである。石組には自然石と花崗岩の割石と漆喰を併用する。石の大きさは径0.15～0.3m。

井戸380 1区中央西寄りで検出した円形の素掘り井戸である。掘形の径は1.3m、深さは検出面から1.3mで、底部の標高は43.00mである。枠内相当部分に茶褐色シルトが堆積する。

井戸447（図版26） 1区南西部で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は約1.3m、石組部分は外法径が約0.9m、内法径が約0.6mある。深さは検出面から0.7mで、底部の標高は42.96mである。石組には自然石を用いる。石の大きさは径0.1～0.15m、最下段は径0.2～0.3mの石を使用する。

井戸490（図版26） 1区中央部で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は約1.0m、石組部分は外法径が0.8～0.9m、内法径が0.55mある。深さは検出面から1.0mで、底部の標高は43.38mである。石組には自然石を使用する。石の大きさは径約0.1mと小ぶりである。

井戸491 1区中央部で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は1.5m、石組部分は外法径

が1.0m、内法径が0.6～0.65mある。深さは検出面から0.75mで、底部の標高は43.22mである。石組には自然石を用いるが一部で焼けた瓦も用いる。石の大きさは径0.08～0.1mである。

井戸754 (図版26) 2区南東隅部で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は2.0m、石組部分は外法径が1.3～1.5m、内法径が0.7～0.85mある。底面の深さは検出面から1.9mで、底部の標高は43.00mである。石組には自然石と花崗岩割石と漆喰を併用する。一部の石材には漆喰が巻かれる。石の大きさは径0.15～0.2mである。埋土からはヤマトシジミが出土した。

井戸765 2区南西隅部で検出した円形の石組井戸である。南半は調査区外となる。掘形の径は1.4m、石組部分は外法径が1.2m、内法径が0.75mある。底面の深さは検出面から1.0mで、底部の標高は43.64mである(図版11-49～52層)。石組には自然石を用い、石の大きさは径0.1～0.25mである。

方形土坑群1 (図版27) 1区中央南寄りで検出した。底部が平坦な方形の土坑が東西4基、南北3～4基、規則的に並ぶ区域があった。土坑は小さいもので一辺0.9m、大きいもので一辺1.4mある。検出面からの深さ0.15～0.3m。断面形は逆台形。底面の標高は44.35～44.50m。

埋納土坑741 (図13・14) 2区中央西寄りで検出した土器を納めた遺構である。平面形は円形、径0.35m、検出面からの深さは0.12mある。底面の標高は44.50m。埋土はにぶい黄褐色を呈する精良な細砂で、下層には土師器皿を合わせ口にした状態のものを5組納める。皿の内容物は肉眼では暗灰色のパウダー状のものが見えた。分析したところ、表面に細かい粒子の付着する植物質繊維が絡み合ったものであった。

土坑238 1区北西部で検出した、平面不定形の土坑である。検出長は東西約3.0m、南北約2.6m、断面形は逆台形。検出面からの深さは約0.7mあり、底面の標高は44.10mである。埋土には焼土を多く含む。ヤマトシジミ・ハマグリ・アワビ類・サザエの殻や蓋が出土した。

土坑255 (図15) 1区北西部で検出した、平面不定形の土坑である。検出長は東西約3.0m、南北約2.0m、断面形は緩いU字形。検出面からの深さは0.8mあり、底面の標高は43.75mであ

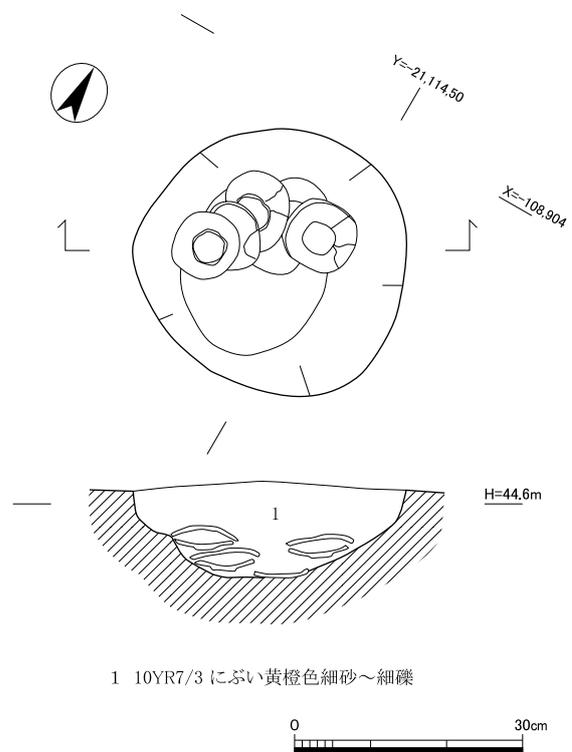


図13 埋納土坑741実測図(1:10)



図14 埋納土坑741(西から)

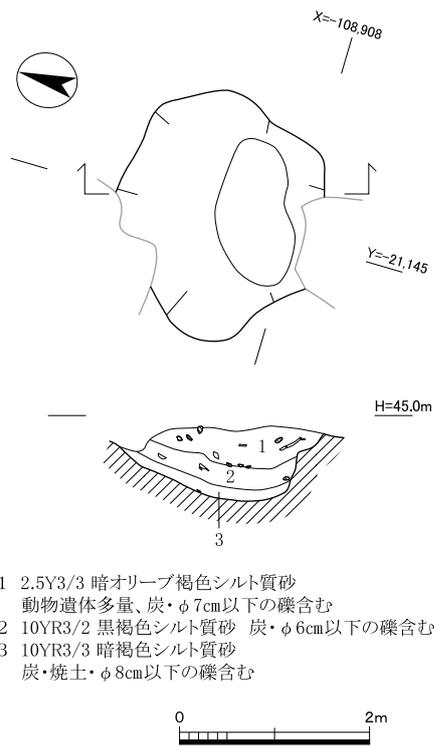


図15 土坑255実測図（1：80）

師質土器焙烙・火入れ・焼塩壺、陶器壺・瓶、磁器皿・椀、ガラス製髪飾り、貝類では、アカガイ・ハマグリ・ヤマトシジミなど多様な遺物が出土した。

土坑344（図版21） 1区の石組340の西半にある平面円形の土坑である。径0.9～1.0m、検出面からの深さは0.86m、断面形は掘鉢状。底面の標高は44.16m。埋土には厚さ4cm程度の黄褐色漆喰板が層状に堆積する。

土坑381（図版24） 1区中央西寄りで見出した。平面形は隅丸長方形、東西0.45m、南北1.25m、検出面からの深さ0.25mある。断面はU字状で、底面は船底状となる。埋土は暗オリーブ褐色シルト質砂と褐色シルト質砂で間に薄く炭層を挟む。底面にも炭層が広がる。埋土から13期（1740～1800）に属する土師器皿、長さ31.0cm×幅5.5cm×厚さ0.6cmと長さ28.5cm×幅5.0cm×厚さ28.5cmの2枚の鉄板が出土した。後者の鉄板は長さ9.5cmの箇所歪曲する。クリーニングを行ったが、文様・象嵌などはなかった。

土坑400 1区中央北寄りで見出した。平面形は隅丸方形、一辺1.3m、検出面からの深さは0.1mある。断面は逆台形で、底面は平坦となる。埋土はオリーブ褐色砂質土。埋土から12期（1680～1740）に属する土師器皿、土師質土器焙烙・火鉢、磁器椀・木葉形小皿、人骨小片などが出土した。墓である可能性もある。

土坑472（図版24） 1区北東部で見出した。平面楕円形の土坑で、長径は2.6m、短径は2.3m、断面形は逆台形、検出面からの深さは1.4mあり、底面の標高は42.90mである。埋土はシルト質砂礫である。13期B（1770～1800）に属する土師器皿、土師質土器焙烙、瓦質土器焜炉、磁器椀・皿の他「乾山」銘の一部とみられる京・信楽系の陶器小片、土人形、土鈴、多量のヤマトシジミ・

る。埋土上層には炭や礫を含む他、ハマグリ・ヤマトシジミ・アワビ類・テングニシの貝類の他にも動物遺存体を多く含んでいた。動物遺存体の内容を同定するため、埋土を採取し5mmメッシュ篩を用いて水洗選別を行った。付章2において詳述するが、マダイ・ニシン・サバ属・コイ・スッポン・カモ科などの骨が見つかった。

土坑279 1区南東部で見出した、平面不定形の大規模土坑である。東半は調査区外に延びる。検出長は東西5.0m、南北6.0m（図版8-44～59層）。検出面からの深さは約1.8mあり、底面の標高は43.02mである。埋土上層は瓦溜りの様相を示し、多量の焼け瓦が廃棄される。下層からは、「慶長十年」（1605）の銘のある一石五輪塔（石18）や「寛永九年」（1632）などの銘のある供養塔（石35）、「寛永十七年」（1640）の銘のある供養塔（石36）などが出土した。他にも土師器皿、土

ハマグリ・アカガイ・バイ・アワビ類・サザエ類の貝類の他、マダイ・ヒラメの骨など多様な遺物が出土した。なお、この遺構から出土した土器類については、種類・産地別に組成を集計し、表とグラフに示した（表3）。

土坑501 1区北西部で検出した。平面形は円形で径0.65m、検出面からの深さは0.2mある。底部は平坦で断面形は逆台形。埋土からは13期A（1740～1770）に属する土師器皿、土師質土器焙烙、陶器水差しや金属製の髪飾りなどが出土した。

土坑739 2区南西隅部で検出した。北に攪乱を受け、南は調査区外に延びる。検出長は東西1.8m、南北1.3m、断面形は逆台形（図版11-46層）、検出面からの深さは0.3mあり、底面の標高は44.50mである。

土坑846（図版19・85） 2区南東部、石列938の南側で検出した。径0.7mの円形の土坑で、検出面からの深さは0.26mである。西側と北側に石列が残る。西側石列の南・北端には、礎石と考えられる幅0.12～0.2mの大きめの石を据えている。石間の距離は1.0mである。

（8）Ⅲb期（江戸時代後期前半）の遺構（図版4・5）

1788年に起こった天明の大火後に、火災の後始末を行った整理土坑及び整地層がある。土坑は規模が大きく、夥しい量の焼け瓦・焼けた壁・焼土を含む。整地層は各所で検出、焼土が多量に混じる。

土坑266（図16） 1区中央西端で検出した平面不定形の土坑である。西は調査区外に延びる。検出長は東西5.0m、南北約3.0m、断面形は攪乱を受けているため不明瞭、検出面からの深さは0.5

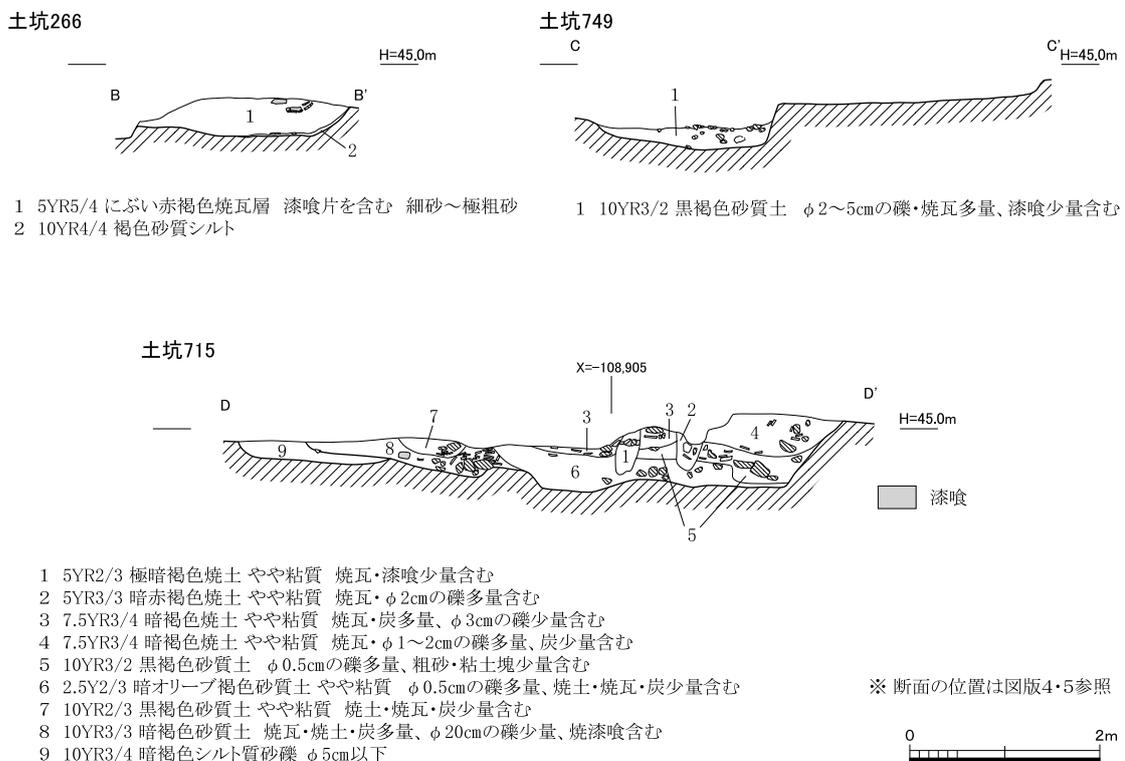


図16 土坑266・715・749断面図（1：80）

mあり、底面の標高は44.20mである。埋土には焼け瓦・漆喰を含み、多くが二次的被熱を受けている。他にもハマグリ・ヤマトシジミ・アカガイ・アワビ類・テングニシ・サザエ蓋が出土した。

土坑652 2区中央東端で検出した平面不定形の土坑である。東は調査区外に延びる。検出長は東西3.5m、南北約5.0m、断面形は逆台形（図版10-8層）、検出面からの深さは0.7mあり、底面の標高は44.16mである。鳥衾（瓦75・76）・鬼瓦（瓦81・83）を含め、焼け瓦が大量に廃棄されていた。ほとんどの遺物が二次的に被熱していた。天明の大火後の整理土坑である。埋土をすべて取り除いた後にⅢa期の遺構面を検出した。土器類には国産陶器や東南アジア産陶器など多彩なものがあり、中でもロクロ成形された土師質土器316「内ぐもりの土器」の出土は特筆できる。なお、この遺構から出土した土器類については、種類・産地別に組成を集計し、表とグラフに示した（表4）。

土坑712～714 2区中央西寄りです3基並んで検出した。検出長東西1.5m、南北約1.9m、断面形は攪乱を受けているため不明瞭、検出面からの深さは0.5mある。土坑714は東に攪乱を受ける。検出長東西1.1m、南北約2.6m、断面形は逆台形、検出面からの深さは0.45mある。3遺構とも、底面の標高は44.55mである。埋土には焼け瓦・炭・焼土を多く含む。

土坑715（図16） 2区中央部で検出した不定形の土坑である。一辺約6.0m、検出面からの深さは0.75mあり、底面の標高は44.35mである。埋土には、焼け瓦・炭・焼土を多く含む。

土坑749（図16） 2区南西部で検出した不定形の土坑である。東西約5.0m、南北約6.0m、検出面からの深さは0.7mあり、底面の標高は44.10mである。陶器椀、磁器椀、輸入磁器大皿や鶏目金具（金20）、ハマグリ・アワビ類が出土した他、梅鉢文を入れた鬼瓦（瓦84）が出土した。

（9）Ⅲc期（江戸時代後期後半）の遺構（図版6・7）

天明の大火の整地から元治の大火までの遺構である。この時期の遺構は集石、石室、水溜、井戸、土坑など深く穿たれた遺構は残るが、その他の遺構は元治の大火後の火災処理土坑があるにすぎない。しかしながら、元治の大火で廃絶した石室300や大型の井戸270からは、良好な資料を得ることができた。

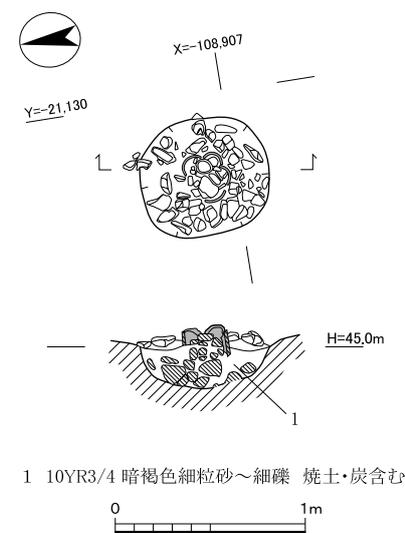


図17 集石179実測図（1：40）

集石126（図版87） 1区中央東端で検出した。平面形円形の石組の遺構である。掘形は径約1.2m、深さは検出面から0.6m、底部の標高は44.40m。石組の内法は約0.7m。石組は1段分残る。石の径は約0.2mある。石組内に径0.05～0.2mの河原石を詰め込む。浸透枘としていたと考えられる。

集石179（図版87、図17） 1区北東部で検出した。平面形円形の遺構である。掘形は径0.6～0.7m、深さは検出面から0.22m、底部の標高は44.78m。断面形は播鉢状。掘形内に径約0.05mの石を詰め込み、中央には丸瓦5枚を、凹面を内側に立てて組み、平面形を梅花状に造る。浸透枘としていたと考えられる。

集石260 1区中央西寄りで見出した。平面円形で掘形の径は約1.8m、深さは1.3mある。底部の標高は43.22mである。上部中央で複数枚の平瓦を立てる。石組井戸を埋めた後、浸透枘として再利用した可能性がある。

石室300 (図版28・87) 1区中央東寄りで見出した。掘形は東西1.45m、南北2.05m、深さは検出面から0.8mで、底部の標高は44.04m。石組は1段分残る。石組の内法は東西0.85m、南北1.55m。石の大きさは径0.1～0.4mである。土師器皿、施釉陶器、磁器椀・紅皿、ガラス製髪飾り、アカガイ・ハマグリ・ヤマトシジミ・アカニシの貝類やタイ科の魚骨などが出土した。

水溜5 (図版88) 1区南部で見出した円形の石組遺構である。掘形の直径は約1.1m、深さは検出面から1.35m、底部の標高は43.14mである。石組には自然石を使用、一部、特に石組の中段で花崗岩の割石を用いる。石の大きさは径0.05～0.1mである。

水溜6 (図版88) 水溜5に東接して見出した円形の瓦積遺構である。掘形の直径は約1.1m、深さは検出面から0.9m、底部の標高は43.47mである。上部は平瓦を8～12段に平積みにし、下部は円形の石組となる。石組には自然石を使用、石の大きさは径0.05～0.1mである。

井戸7 (図版28・88) 水溜6の東隣で見出した円形の石組井戸である。南側を現代攪乱により大きく削平される。掘形の直径は約1.7m、石組部分は外法径が約1.3m、内法径が約0.9m、深さは検出面から1.55m、底部の標高は43.02mである。石組には自然石を使用、石の大きさは径0.1～0.2mである。埋土からは軟質施釉陶器鉢、施釉陶器壺、磁器小椀などが出土した。

井戸77 (図版88) 1区南西部で見出した円形の石組井戸である。掘形は円形で径は約1.5m、石組部分は外法径が約1.3m、内法径が0.95mある。深さは検出面から0.85mで、底部の標高は42.93mである。石組には自然石を用い、石の大きさは径0.1～0.15mである。

井戸85 (図版88) 1区南部で見出した円形の素掘り井戸である。掘形は径約1.3m。深さは検出面から1.95mで、底部の標高は41.70m。

井戸87 (図版88) 1区南部で井戸101に東接して見出した楕円形の石組井戸である。掘形の径は長径1.73m、短径1.6m、石組部分は外法径が1.15～1.45m、内法径が0.85～1.05mある。深さは検出面から0.55mで、底部の標高は43.05mである。石組には自然石を用い、石の大きさは径0.15～0.2mである。

井戸91 (図版88) 1区南東隅部で見出した円形の石組井戸である。掘形は径約1.6m、石組部分は外法径が約1.2m、内法径が0.95mある。深さ2.2m(標高41.90m)まで掘り下げたが底面に達せず、安全面を考慮して掘り止めた。石組には大きさ0.15～0.2mの花崗岩の割石と一部で自然石を用いる。石組は6段分検出、最下段は短辺0.12～0.15m、長辺0.25～0.3mの花崗岩の割石を縦積みにする。埋土からはヤマトシジミ・ハマグリ・アワビ類などが出土した。

井戸98 (図版28・88) 1区南端東寄りで見出した円形の石組井戸である。掘形は径約1.5m、石組部分は外法径が1.1～1.2m、内法径が0.8mある。深さは検出面から0.7mで、底部の標高は43.26mである。石組には自然石と花崗岩の割石を用いる。石の大きさは径0.2～0.3mである。最下段は割石(短辺0.15～0.23m、長辺0.22～0.3m)を縦積みになっている。



図18 井戸270周辺風景（南西から）

井戸101（図版88） 1区南部、井戸87に西接して検出した円形の石組井戸である。掘形は径約1.4m、石組部分は外法径が1.15～1.2m、内法径が0.75～0.8mある。深さは検出面から0.55mで、底部の標高は43.12mである。石組には自然石を用い、石の大きさは径0.1～0.15mである。

井戸148 1区南東隅部で検出した円形の石組井戸である。掘形は径約1.4m、石組部分は外法径が1.0～1.1m、内法径が0.75～0.8mある。深さは検出面から0.8mで、底部の標高は43.36mである。石組には自然石を用い、大きさ径0.1～0.15mである。最下段は大きさ短辺0.25m、長辺0.45mの自然石を縦積みにする。

井戸270（図版29・88、図18） 1区北東部で検出した半地下式の大型石組井戸である。下部は円形縦板組となる。掘形は径約3.5m、石組部分は外法径が2.0～2.7m、内法径が1.3～1.45mある。深さは検出面から3.0mで、底部の標高は41.62mである。北東側には花崗岩を用いて階段が設けられていた。石組には大型の花崗岩を用い、最下段は花崗岩の割石（短辺0.15～0.2m、長辺0.3～0.35m）を縦積みにする。底部には径1.0mの円形の木枠の痕跡があった。埋土には投棄された漆喰の他、多量の遺物が混じる。遺物のほとんどは二次的に被熱している。陶磁器類は京・信楽系陶器の割合が高いが、中国やヨーロッパの各産地から輸入された陶磁器類（406～410）も出土している。また、大型の土人形として、臥牛3個体（土70～72）、向かい合う1対の狐（土73・74）が出土した。他にも、ガラス製髪飾り（ガ8）、ヤマトシジミ・ハマグリ・アワビ類・アカガイ・サザエ・バイの貝類やマダイ・ハモ属・ブリ属・カエル類・ニワトリ・カモ科・ネズミなどの動物遺存体など多様な遺物が出土した。なお、この遺構から出土した土器類に

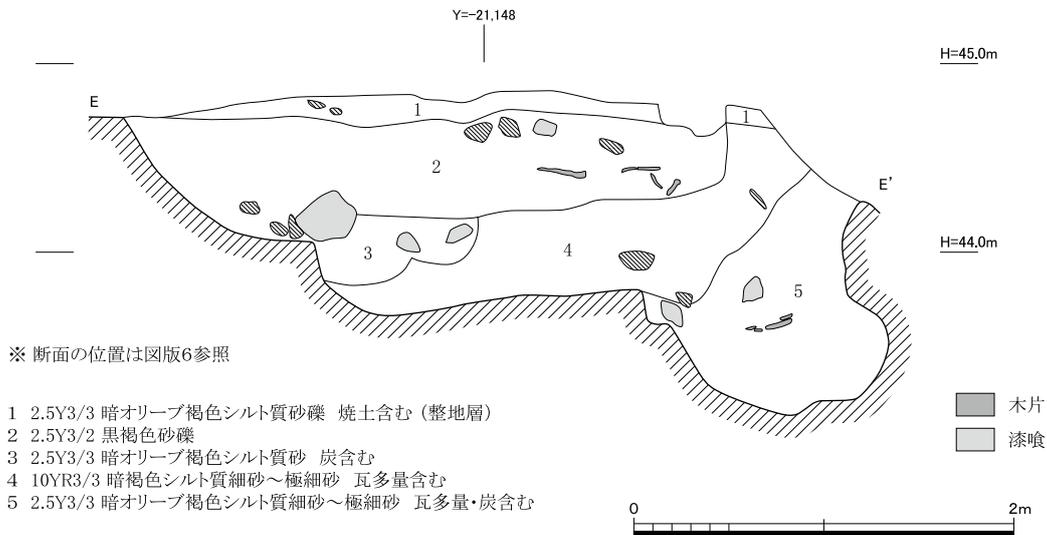


図19 土坑240断面図（1：40）

については、種類・産地別に組成を集計し、表とグラフに示した（表4）。

井戸684 2区南東隅部で検出した円形の石組井戸である。掘形の径は1.0m、石組部分は外法径が0.7m、内法径が0.45mある。深さは検出面から0.8mで、底部の標高は44.20mである。石組には自然石を使用、石の大きさは径0.1～0.15mと小ぶりである。

土坑240（図19） 1区中央西端部で検出した不定形の土坑である。東西約4.2m、南北5.35m。底面は凹凸があり、検出面からの深さは0.70～1.65mあり、標高は深いところで43.14mである。埋土には、焼け瓦・焼土を多く含み、禁裏注文品の肥前系磁器椀（432）やヨーロッパ陶器小杯（433）の他、ハマグリ・ヤマトシジミ・アカガイ・クロアワビ・アワビ類・アカニシ・バイなどの貝類、マダイの骨など多様な遺物が出土した。

（10）Ⅲd期（幕末から明治時代初頭）の遺構（図版6・7）

元治の大火後から、高辻家転出・学校設置までの時期の遺構である。この時期の遺構は建物、土蔵、塀、柵、かまど、池、集石、溝、井戸などがある。

建物5（図版30・86） 1区中央東寄りで検出した。東西3間（3.0m）、南北4間（4.0m）の礎石建物である。方位は北に対して東に約5度振れる。柱間は、東西・南北とも約1.0mで等間であったとみられる。一帯は砂礫とシルト質砂を交互に入れる版築工法で整地されていた。礎石は0.3～0.6mの大きさで平坦面を上にして据える。この建物の北には集石150、東には漆喰槽142が取り付け、内部には北西隅に三和土135、南西隅に後述するかまど132がある。三和土135は東西1.2m、南北0.5mの大きさに平瓦を立てて囲み、その内側を固く締めて築造されていた。東側の2礎石は漆喰槽142の西端に食い込んで据えられていた。漆喰槽142はほとんどが攪乱を受けていたが、掘形などから、東西約1.5m、南北約3.5m以上の大きさの隅丸長方形に復元できる。槽の上端は現代攪乱により削平されているが、検出面からの深さは0.1mあった。

各遺構の状況から、この建物は湯殿として建築・利用されたと考えられる。すなわち、建物の中央で南北に仕切られ、北半部は脱衣場、南半部は風呂釜を設置した浴室で、三和土135と集石150の間が入口になり、三和土135で履物を脱ぎ板敷の脱衣場にかかる。浴室も板敷きで、排水は漆喰槽142を通して処理されたとみる。かまど132の上に風呂釜が設置され、焚口は建物の外側となる。

土蔵1（図版31） 1区から2区に跨って、口の字形に掘られた土蔵の基礎となる溝を検出した。溝芯々で東西6.0m、南北4.2mの規模をもつ。方位は西に対して北に約8度振れる。溝は幅0.6～0.9m、深さ約0.3mあり、内部は砂質土と礫を互層に入れる版築工法で突き固める。最上面には、一辺0.3～0.4mの自然石を平坦な面を上にして1.0～1.5mごとに据える。

塀6（図20） 1区北端、2区中央で検出した、礎石をもった東西方向の塀である。すべての柱穴が揃っているわけではないが、同一直線上に幾つかの柱穴が並ぶので塀として復元した。礎石は0.2～0.4mの自然石を平らな面を上にして据える。方位は西に対して北に約8度振れる。柱間は1.0m、3.0m、4.0m、9.0mであり、1の整数倍となるので、もとは1.0m間隔に礎石が並べられていた可能性が考えられる。高辻邸の北限の塀と考えらる。

柵 1 (図20) 2区南西部で検出した、礎石703を南東隅とした礎石をもった逆L字形の柵で、塀6に取り付く。方位は西に対して北に約8度振れる。東側の列は4石の礎石を並べ、柱間は北から3.0m、0.9m、3.0mである。南側では礎石が抜き取られたとみられる柱穴を2箇所検出した。柱間は1.2~1.8mと不規則である。一辺0.3~0.4mの自然石を平らな面を上にして据える。掘形は径0.4~0.5mの円形で、検出面からの深さは0.15~0.2mである。

柵 2 (図20) 2区中央南東寄りで検出した、礎石をもった南北方向の柵で、塀6に取り付く。方位は北に対して東に約8度振れる。柱間は0.9~1.2mである。一辺0.2~0.4mの自然石を平らな面を上にして据える。掘形は径0.2~0.5mの円形で、検出面からの深さは0.1~0.2mである。南側の3石の礎石は直接地面に置かれ、掘形はない。

かまど 24 (図21) 1区南東部で検出した。平面円形の燃焼部に長方形の焼成部が付くかまどの基底部を検出した。南側に焚口を設ける。燃焼部の内径は0.54m。底部には平瓦を南北に2枚、両脇に1枚敷く。垂直に立ち上がる擁壁は赤褐色に焼き締まっている。焼成部との境目には豊島石の

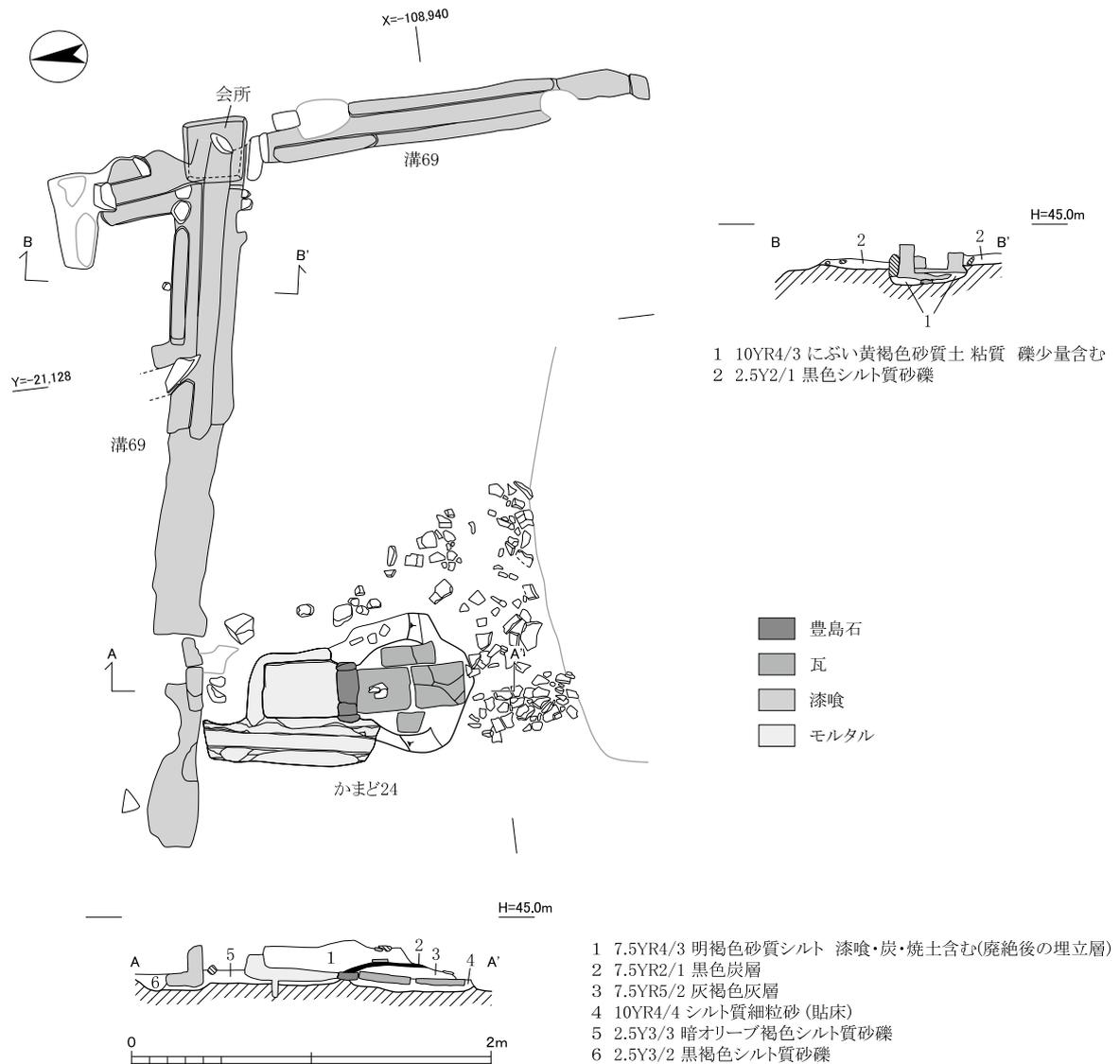


図21 かまど24、溝69実測図 (1 : 40)

切石（長辺約20cm、短辺約11cm、厚さ4cm）を底部と両脇に配する。焼成部はモルタル製で厚さ6～10cmの擁壁が高さ8cmまで残る。内法は東西0.3m、南北0.4m。底部にも厚さ6cmの床を貼る。燃焼部の埋土は下層に灰、上層に炭が堆積する。焼成部に西接してモルタル製の南北方向の溝が取り付く。またこのかまどの北0.2mの位置には黄褐色の漆喰製の溝69があり、このかまどの付属施設と考えられる。この構造から、いわゆる五右衛門風呂遺構と考えられる。

かまど132（図版30・86） 建物3に伴う風呂のかまどと考えられる。南側が攪乱され、本来の規模は不明であるが、掘形の南北残存長1.2m、東西0.5mである。かまど内の焼土は南北1.0m以上、焼土は南へ続く可能性もある。埋土には炭・焼土塊を多く含む。

池180（巻頭図版3、図版32・33、図22） 1区中央東寄りで検出した漆喰貼りの池である。黄褐色系の漆喰を用いる。北西部及び東部は現代に攪乱を受ける。平面形は不定形で、東西は3.0m以上、南北は3.7m以上ある。池の底部はほぼ平坦に作るが西端と北端に緩やかに深みがあり、水深は浅いところで約0.2m（標高44.92m）、深いところで約0.42m（標高44.74m）である。西端と北端2箇所には、口径25.1cm、深さ7.4cmの京・信楽系の鉢が埋め込まれ、魚溜りとする。西端の鉢（434）を図示する。所々に漆喰の色の違う箇所があり、水漏れを修理したとみられる。池の中央部には踏石が残る。踏石の南北には漆喰がリング状に盛り上がり、その底部には径0.05～0.1mの石材が据えられる箇所が4箇所ある。これは踏石を据えた痕跡とみられ、池の中には踏石が千鳥に配されたと考えられる。残存する踏石の上面の標高は45.13mである。漆喰は底部で厚さ5cm、外枠で厚さ5～10cmある。外枠には後世の削平を受けていない箇所が南西部にあり、その上面の標高は45.14mであった。西端には、底を抜いた口径31.0cmの円筒形の信楽の鉄釉甕（435）が口縁部を斜め下に向けて据え付けてあった。水の取入れ口であった可能性もあるが、周辺では導水路となるような遺構は見つからなかった。

池187（巻頭図版3、図版32・33） 池180の南で検出した漆喰貼りの池である。北西部及び中央部は現代に攪乱を受けるが一部に灰白色系の漆喰が残存する。平面形は不定形で、東西は約2.5m、南北は約3.0mある。池の底部はほぼ平坦に作り、浅いところで標高45.04m、深いところで標高44.89mである。池180のように外枠を作るのではなく、岸辺に径0.15mの縁石を並べ漆喰で固める。池の中央東寄りには長辺0.7m、短辺0.5m、高さ0.4mの石材の平坦面を上に据え付ける。上面には一辺0.28mの柱据え付け痕が付く。礎石を転用したものとみる。池の南では石列を2列検出した（E-E'、F-F'）。池に張り出した釣殿状の建物に復元できる可能性もある。池180とつながるようにも見えるが、検出面では明確にすることはできなかった。



図22 池180池底の鉢434と池端に据えられた甕435（北東から）

池の中央東寄りには長辺0.7m、短辺0.5m、高さ0.4mの石材の平坦面を上に据え付ける。上面には一辺0.28mの柱据え付け痕が付く。礎石を転用したものとみる。池の南では石列を2列検出した（E-E'、F-F'）。池に張り出した釣殿状の建物に復元できる可能性もある。池180とつながるようにも見えるが、検出面では明確にすることはできなかった。

集石150（図版30・86） 建物3に北接して検出した。平面形は長方形で東西2.1m、南北

溝181・182

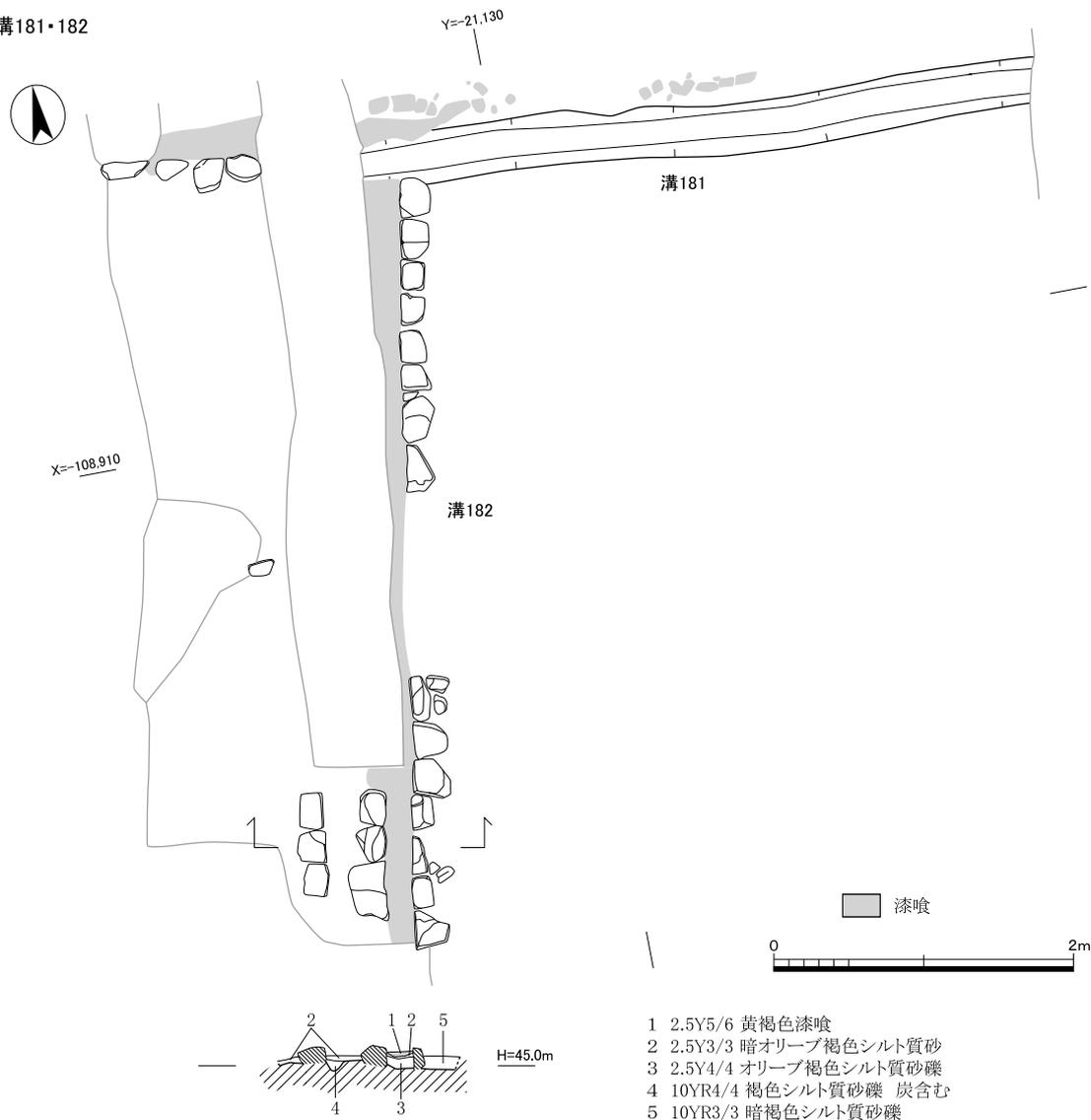


図23 溝181・182実測図 (1:50)

1.2m、深さは0.25mある。埋土には径2～3cmの礫が詰まる。

溝69 (図21) かまど24の北で検出した漆喰製の溝である。東西方向の溝が東端で南北方向の溝と接続する。東西方向の溝の西端、南北方向の溝の両端は現代攪乱によって削平される。東西方向の溝の検出長は4.0m、幅0.35m、検出面からの深さは約0.1m。底の標高は西端で44.69m、東端で44.63mあり、西から東へ低くなる。南北方向の溝の検出長は3.5m、幅0.26m、検出面からの深さは約0.1m。底の標高は北端で44.79m、南端で44.70mあり、北から南に低くなる。接続部の下層には、0.4m四方の枅を設置し、会所としていた。会所底部の標高は44.5mである。

溝181 (図23) 1区北東部で検出した東西方向の石組溝である。多くの部分を現代攪乱により削平されるが、漆喰で固めた石組や、掘形を検出した。一辺が0.25～0.3mの石材を使用して漆喰で固め石組を構成する。検出長は6.2m、深さは0.1～0.3m。東半は掘形のみが残存し、その幅は0.4mである。残存状況の良い西端の漆喰の上面の標高は45.03m、底部の標高は44.94mである。南接する溝182と接続する。方位は西に対して北に10度振れる。

溝182 (図23) 1区北東部で検出した南北方向の石組溝である。北は溝181と接続、南は現代攪乱により削平される。漆喰で固めた石組や漆喰底部を検出した。一辺が0.2～0.3mの石材を使用して漆喰で固め石組を構成する。検出長は5.2m、深さは0.1m。漆喰底部の標高は北端で45.04m、南端で45.08mである。最南部では幅0.6mの溝の中央に南北石列がもう一列増やされ、その東側の底部には漆喰を貼り、西側には貼らない。給水と排水に分けていた可能性がある。方位は北に対して東に10度振れる。

溝686 (図版34) 2区南東隅部で検出した逆L字形の溝である。0.2～0.3mの石材を使用して漆喰で固め石組を構成する。両端は現代攪乱により削平される。検出長は東西約4.0m、南北約1.9mである。石組上面から溝底部の漆喰までの深さは約0.07m。内法幅は0.25～0.27mである。底部の標高は南端で45.05m、東端で45.08mである。方位は西に対して北に8度振れる。この溝のコーナー部では、棧瓦4枚を縦にして囲み、底部を漆喰で固め水溜めを作っていた。この漆喰の標高は44.83mである。

溝695 (図版34) 2区南部で検出した東西方向の石組溝である。0.3～0.4mの石材を使用して石組を構成する。東端と西端及び中央部は現代攪乱により削平される。検出長は東西7.1mである。深さは0.2～0.25m。内法幅は0.2～0.25mである。底部の標高は東端で44.91m、西端で44.89mとほぼ同じである。方位は西に対して北に10度振れる。この溝は溝181と方位の振れが同じことから、繋がっていた可能性も考えられる。

井戸186 1区中央西寄りで検出した円形の素掘り井戸である。掘形は径約2.0m、深さは検出面から1.16m。底部には、検出面からの深さ約0.95mで平瓦を円形に立てて、径0.85mの水溜めを設ける。水溜底部の標高は42.54mである。

註

- 1) 『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 2) 地層の観察は、小倉徹也(公益財団法人大阪市博物館協会)、張祐榮(京都大学大学院文学研究科)の両氏とともに実施し、助言を受けた。
- 3) 公報発表では、この堀1を生蓮寺の南限としたが、整理作業で検討の結果、南限ではなく、堂舎と墓域を限る堀と判断した。

第3章 遺物

(1) 遺物の概要 (表2)

調査では、整理コンテナにして723箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、ガラス製品、骨・貝製品、自然遺物などがある。全体の約7割を土器類が占める。遺物の帰属時期は、古墳時代・平安時代・室町時代・安土桃山時代から江戸時代である。江戸時代の遺物が最も多く、安土桃山時代の遺物がそれに次ぐ。

土器類には、古墳時代の土師器甕・高杯、須恵器甕、平安時代の土師器皿、須恵器杯・甕、緑釉陶器椀、室町時代の土師器皿、瓦器椀などがある。室町時代以前の土器類は、河川の氾濫による二次堆積層からの出土で、小片で磨滅しているものが多い。江戸時代の土器類には土師器皿、土師質土器羽釜・焜炉・でんぼ・焙烙、瓦質土器香炉、瓦質陶器甕、軟質施釉陶器椀・鉢、国産陶器椀、国産磁器皿・椀、輸入陶磁器などがある。

瓦類には、平安時代の緑釉瓦・軒瓦、江戸時代の棧瓦・鬼瓦などがある。土製品には、江戸時代の土人形・泥面子などの玩具や青磁印章・蠟燭立などの実用品がある。石製品には、安土桃山時代末期から江戸時代の墓石、江戸時代の文鎮・硯・印章などがある。金属製品には、江戸時代の金銅・銅・鉄製品の他、金と銀の合金製品がある。銭貨には、輸入銭や寛永通寶がある。ガラス製品には江戸時代の髪飾りなどがある。骨・貝製品には、バイ貝製の独楽や獣骨製の角筆などがある。また、人骨、魚・鳥獣の骨、貝類などの動物遺存体が多く出土している。

今回の調査で出土した遺物の特徴としては、水滴・硯・文鎮・印章・角筆などの文房具が多いこと、墓石・五輪塔、人骨、銭貨が多く出土することが特徴として挙げられる。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器				
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類		瓦12点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、瓦		瓦2点		
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦質陶器、軟質施釉陶器、国産陶器、国産磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、ガラス製品、骨・貝製品、脊椎動物遺存体、貝類、人骨、壁土、木舞		土師器76点、土師質土器46点、瓦質土器2点、瓦質陶器1点、軟質施釉陶器9点、国産陶器134点、国産磁器136点、輸入陶磁器31点、瓦108点、土製品128点、石製品42点、金属製品27点、銭貨34点、ガラス製品17点、骨・貝製品4点、脊椎動物遺存体一括、貝類一括、人骨一括、ガラス一括		
合計		804箱	795点 (91箱)	47箱	666箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より81箱多くなっている。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種類別に概要を述べる。なお、土器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、ガラス製品、骨・貝製品の詳細については、付表1～9にまとめた。主な遺構から出土した動物遺存体、貝類、人骨、ガラス製品については内容を分析し、付章で詳細を述べた。

(2) 土器類（巻頭図版4、図版35～52・89・90、付表1）

1) 土器類の記載について

当調査で出土した遺物は整理箱で総数804箱であり、そのうち近世の遺物が約9割を占めている。以下では各遺構から出土した土器を遺構面ごとに記載するが、土器・陶磁器類の材質・器形・生産地などは多様であることから、種類と器形の分類基準と記載方法などを示しておく¹⁾。

種類と器形、産地 種類は土師器・土師質土器・瓦質土器・瓦質陶器・軟質施釉陶器・国産陶器・国産磁器・輸入陶磁器に分類した。土師器・土師質土器・土製品の焼成方法は同様であるが、土師器皿など中世以前からの製作技術を踏襲するものを土師器とし、安土桃山時代もしくは江戸時代に出現する器形を土師質土器、土人形・ミニチュア製品などは土製品とした。軟質施釉陶器は、胎土が低火度で焼成され鉛釉を施す製品を総称するが、施釉された水滴・ミニチュア製品などは土製品に含めた。肥前系や瀬戸・美濃系の陶胎染付は陶器として分類した。

実測図 実測図の提示方法について、縮尺は1/4を基本とするが、大型の資料については1/8などとし、その都度表記した。刻印などの拓影は1/1もしくは1/2で示したが、いわゆる京焼風肥前系陶器の刻印のうち周知されているものについては、拓影を掲載せず観察表や本文中に記載した。青花・染付・上絵・二彩などの陶器類・磁器類などについては写真貼込の図版としている。

観察表 付表1に掲載した観察表については、以下の要領で作成した。

①表の遺物No.は図版の番号に対応している。

②法量は原則として口径・器高・底径を示した。また遺物の残存率が50%以下のものについては、復元した値を（推定）として記載した。なお計測部位については註1文献を参照されたい。

③胎土の色調は『新版標準土色帖』²⁾を用いて記載した。

産地組成表とグラフ 当調査地の特徴を示すと考えられる資料（井戸93・270、土坑472・652）については、種類・産地別に破片数を集計し、その結果を組成表とグラフで示した（表3・4）。産地組成表に記載した破片数は、すべて接合後の総破片数である。なお、土師器が75%以上を占める土坑472のみ、土師器を含めた場合と含めない場合の2種類の表・グラフを示している。

以下、時期ごとに主な土器類を記載するが、I期については、瓦器などの中世以前の遺物が出土したが、細片のため図化が困難であるので、II a期の土器類から記載する。

2) II a期の土器類

井戸540出土土器類（1～8）（図版35） 1～3は土師器の皿である。1は肘作りの小型の皿で、内面に肘の圧痕・外面に掌の圧痕が残る。内面はナデを施す。2は平底気味、3は丸底気味の

底部から口縁部が外上方にのびる。口縁部・内面はヨコナデ、口縁部下半はオサエ、底部内面はナデを施す。底部は無調整である。2は内面の底部と体部の境が若干窪み、口縁に煤が付着する。

4は土師質土器の焼塩壺の蓋である。天井部はふくらみ、口縁部はやや外反する。口縁部はヨコナデ、天井部はオサエののちナデ調整を施し、内面には布目が残る。

5は瓦質土器の小型の香炉である。3箇所逆三角形の脚台がつく。胴部に菊花文のスタンプを巡らせている。回転を利用したナデを施し、外面は磨かれている。底部はナデ調整である。

6・7は瀬戸・美濃系の施釉陶器である。6は折縁ソギ皿である。体部が外上方にのび、口縁部が真横に開き、口縁端部を折り返して玉縁としている。体部内面にソギをいれる。底部内面は無釉である。7は美濃の椀で、全体に白色の長石釉がかかる。轆轤成形である。

8は中国産青花磁器の椀である。外面と底部内面に草花を描く。

墓域A出土土器類(9)(図版35) 土師器の皿で、口縁端部は平坦になる。墓567から出土した。

3) II b期の土器類

墓域B出土土器類(10~12)(図版35) 10~12は土師器の皿である。10は肘作りの小型の皿、11・12は内面に圏線をもつ皿である。いずれも墓428から出土した。

土坑802出土土器類(13)(図版35) 内面に圏線をもつ土師器の皿である。

墓域C出土土器類(14~21)(図版35) 14は肥前系磁器の染付仏飯器である。墓827から出土。

15~20は内面に圏線をもつ土師器の皿である。15は墓829、16は墓878、17は墓880、18は墓909、19は墓910B、20は墓928から出土した。

21は瀬戸・美濃系の施釉陶器で、碁笥底の底部をもつ皿である。墓932から出土した。

井戸141出土土器類(22~24)(図版35) 22は体部の下位に鐳がつくとみられる土師質土器の羽釜である。口縁部は外方に折れ曲り端部は内側に肥厚する。口縁部・内面はヨコナデ、体部外面は、板状工具で縦方向のナデを施す。

23・24は中国産青花磁器の皿である。一揃いの皿で、ともに内面に花と蝶、外面に鳥か雲が描かれ、高台内面には「萬福攸同」と書かれている。24には漆による修復接合の痕跡がある。

埋甕527出土土器類(25)(図版35) 瓦質陶器の大型の甕である。大和産である。

土坑960出土土器類(26)(図版35) タイから輸入された素焼きの大型壺で、類例では環状の把手4つが肩部に付く四耳壺が多い。本例は把手が1つしか残存していないが、同様の四耳壺と考えられる。

4) II c期の土器類

土坑888出土土器類(27~34)(図版36) 27~29は土師器の皿である。27は肘作りの小型の皿で、内面に肘の圧痕・外面に掌の圧痕が残る。28・29は丸底気味の底部から口縁部が外上方にのび、内面の体部と底部の境に圏線をもつ。口縁部・内面はヨコナデ、口縁部下半はオサエ、底部内面はナデを施す。底部は無調整である。28の口縁には煤が付着する。

30～32は肥前系の施釉陶器である。30は京焼風肥前系陶器の椀である。体部・口縁部は内湾して上方にのび、口縁端部は内傾する。外面に錆絵で松が描かれる。31は唐津焼の小型筒椀である。口縁端部は若干外方に開くが、体部・口縁部は直線的に上にのびる。32は唐津焼で、いわゆる三鳥手の大型鉢である。口縁端部は水平で内外に突出する。底部内面に6箇所目跡が認められる。

33は肥前系磁器の染付皿である。内面に梅が描かれる。34は中国産磁器の青花皿である。釉が剥がれ落ちて穴あきとなり、胎土が露出している箇所が多くみられる。内外面に草花が描かれる。

5) Ⅲ a期の土器類

井戸200出土土器類(35～48)(図版36) 35～37は土師器の皿である。35は肘作りの小型の皿で、内面に肘の圧痕・外面に掌の圧痕が残る。36・37は内面に圈線をもつ皿である。口縁部・内面はヨコナデ、口縁部下半はオサエ、底部内面はナデを施す。底部は無調整である。37の口縁には煤が付着する。

38は「でんぼ」と呼ばれる土師質土器の鉢である。轆轤成形で、底部に煤が付着する。

39～42は施釉陶器の椀である。39～41は京焼の丸椀で、赤・緑の釉で草花文が絵付けされている。42は体部が丸みをおびる京・信楽系の筒椀で口縁部・内面に鉄釉がかかる。体部下半に櫛描き文を施す。

43～48は肥前系磁器の染付である。43～46は椀である。43は小椀で、外面に菊花のコンニャク印判を押す。44は外面に菖蒲を描く。口縁内面上半と端部が無釉なので、蓋が伴う椀と考えられる。45は外面に網目文と松竹梅を描く。46は外面に草花文、内面の口縁端部に卍文を中央に配した変形四方禰文、見込みには二重圈線の中に五弁花を描く。47は皿で、内面に山水画文を描く。48は蓋で、外面に花卉文、内面の口縁部に四方禰文、天井部に円形羊歯文を描く。

井戸241出土土器類(49～68)(図版36) 49～51は土師器の皿である。49は丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる。50は内面に圈線をもつ皿である。51は手捏ねの皿で、口縁部を内側に折り込んで端部をひだ状に仕上げる。

52～57は土師質土器である。52・53はでんぼで、52は小型で内面に墨痕が認められる。53は大型で、轆轤成形であるが、底部はヘラ切りのまま無調整である。54は小型の焜炉で、半円形の火窓がつく。外面は丁寧に磨かれる。55～57は焼塩壺とその蓋である。55は焼塩壺の蓋で、内面に布目が残る。56は小型の焼塩壺で、口縁部はすぼまる。手捏ね成形で口縁部はヨコナデする。57の焼塩壺は、粘土板で胴部を成形し、最後に底部に粘土を充填して仕上げる。

58～63は京・信楽系の施釉陶器である。58は小型の椀である。59は椀形の合子の身である。60は灰落として、口縁端部には煙管の敲打痕が残りギザギザになっている。61は円形の合子の蓋と身である。身の底部、蓋の天井部ともに平坦である。62は細長い小判形の鬘盤^{びんだらい}である。63は施釉陶器の小型の壺である。頸部の直下が胴部の最大径で、口縁部は短く直立する。口縁部と外面は灰褐色釉に灰オリーブ色釉を上掛けする。暗緑褐色の鉄釉がかかる。底部外縁に、均等に4箇所の胎土目が残る。

64・65は肥前系磁器の青磁染付である。64は皿で、外面に青磁釉、口縁部内面に四方禰文、底部内面に五弁花を描く。65は筒形椀である。外面に青磁釉が施され、内面の口縁部に四方禰文、見込みに五弁花を描く。66～68は肥前系磁器の染付である。66は椀で、全体的に器壁が薄く、高台も低い。外面上部に矢羽文、下部に氷烈文を描く。67は印判手の椀である。口縁外面に鋸歯文をめぐらし、銀杏のコンニャク印判を押す。68は蓋で、天井部に草花文と飛鳥ひちょうを描く。身との合わせ部に離れ砂が認められる。

井戸93出土土器類(69～125)(図版37・38・89・90、表3) 当遺構から出土した遺物のほとんどには、二次的な被熱の痕跡が認められる。遺物の比率は、土師器の割合が42.7%とやや高くなっている。また、後述する土坑472と当遺構に含まれる土器・陶磁器類は、ともに天明の大火で焼け、使用できなくなったために廃棄されたものと考えられる。ただ、井戸93では輸入陶磁器が1点も出土しておらず、この点に関して土坑472とは対照的な様相を示している(表3左)。

69～82は土師器の皿である。このうち78～82は内面に圏線を有する。また、69・75・76・80には灯明皿としての使用痕跡が認められる。

土師質土器には、小型のでんぼ83のほか、焼塩壺85・86、同蓋84、焜炉87がある。87は内面に煤が付着し、底面には扁平な三足を有する。底部中央が焼成後に穿孔されていることから、植木鉢などとして転用されたことが窺える。

陶器のうち、瀬戸・美濃系陶器には、椀89のほかに口縁端部をひだ状とする全面施釉の小皿88及び輪花皿90がある。90の釉薬は貫入を有し、内面には草花文を描く。信楽焼には甕91があり、口縁部は内側に肥厚し、外面には鉄釉を流し掛けする。92～106は京・信楽系陶器である。これらのうち92～94は軟質施釉陶器しるつぎで、汁次の蓋92・汁次93のほかに、94a・94bで一揃えの灯火具(いわゆる「タンコロ」)がある。93は三足を有し、外面口縁上面に菊花、体部に菊水の文様を浮彫状に施す。内部に付着物がある。92は93の蓋で、全面に緑釉を掛け、菊花を象る。このほか京・信楽系の施釉陶器には、腰折椀95、筒形椀96・97、椀98、蓋物身99、蓋100、灯火具(タンコロ)101・102、土瓶103～105、鍋106がある。このうち96の高台内には墨書があり、「丹」・「売」と判読できる。98は内面底部に三又トチン痕跡を有し、外面にはハケで条線を施す。信楽・石塔窯の製品か。99も内面底部に三又トチン痕跡を有する。口縁端部上面を無釉とするため、本来は蓋を伴って香炉などとして使用されたことが窺える。ただし、口縁端部に複数の敲打痕が認められることから、灰落としとして転用されたことが推測できる。灯火具101の内面には、使用時に付着したと考えられる煤が付着する。102の底面には糸切り痕が明瞭に認められる。103の外面はヘラケズリにより成形されているが、下半はタタキ具の痕跡とみられる凹凸が残る。105の外面には刻線で雲かと思われる文様を施す。また、底面には銘「洛東」を有する。106は柿釉を施し、三足を有する。

磁器はすべて肥前系磁器の染付で、くらわんか椀が多く含まれる。椀107～113、蕎麦猪口114、仏飯器115、皿116・117、鉢118、蓋119・120、瓶121がある。118は口縁部を輪花に作り、高台は蛇の目凹形高台である。122～125は青磁染付である。椀122、筒形椀123、皿124・125がある。高台内の字款はいずれも退化が進み、見込みの五弁花はすべてコンニャク印判による施文である。

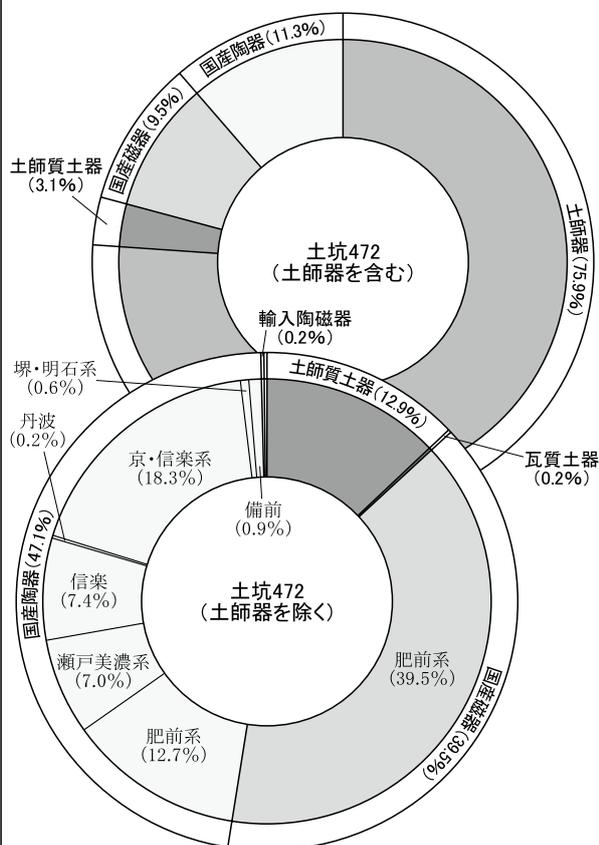
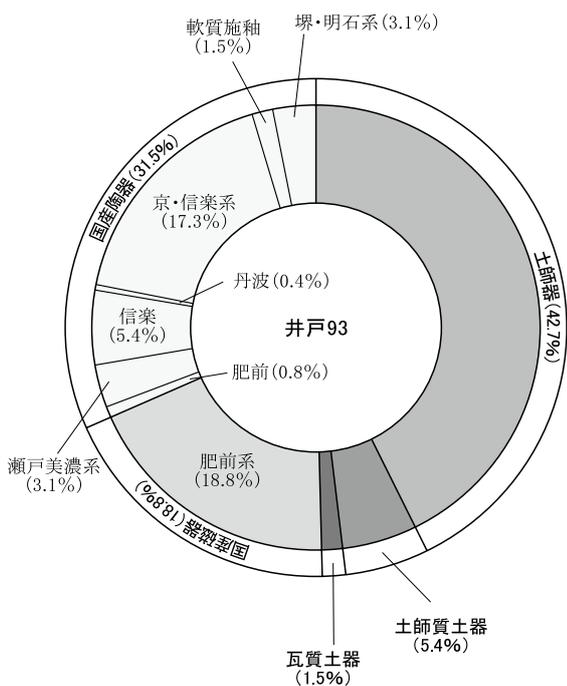
表3 井戸93・土坑472出土の土器・陶器類組成

井戸93の土器・陶器類組成(Ⅲa期)

種類	産地	破片数	割合(%)
土師器		111	42.7
土師質土器		14	5.4
瓦質土器		4	1.5
国産磁器	肥前系	49	18.8
	関西系	0	0
	瀬戸美濃系	0	0
	三田	0	0
	珉平系	0	0
国産陶器	肥前系(陶胎染付を含む)	2	0.8
	瀬戸美濃系	8	3.1
	信楽	14	5.4
	丹波	1	0.4
	京・信楽系	45	17.3
	軟質施釉	4	1.5
	堺・明石系	8	3.1
	常滑	0	0
	備前	0	0
	萩	0	0
輸入陶磁器	中国産	0	0
	東南アジア産	0	0
	ヨーロッパ産	0	0
不明・その他		0	0
合計		260	100

土坑472の土器・陶器類組成(Ⅲa期)

種類	産地	破片数	土師器を含む割合(%)	土師器を除く割合(%)
土師器		1665	75.9	—
土師質土器		68	3.1	12.9
瓦質土器		1	0	0.2
国産磁器	肥前系	209	9.5	39.5
	関西系	0	0	0
	瀬戸美濃系	0	0	0
	三田	0	0	0
	珉平系	0	0	0
国産陶器	肥前系(陶胎染付を含む)	67	3.1	12.7
	瀬戸美濃系	37	1.7	7.0
	信楽	39	1.8	7.4
	丹波	1	0	0.2
	京・信楽系	97	4.4	18.3
	軟質施釉	0	0	0
	堺・明石系	3	0.1	0.6
	常滑	0	0	0
	備前	5	0.2	0.9
	萩	0	0	0
輸入陶磁器	中国産	1	0	0.2
	東南アジア産	0	0	0
	ヨーロッパ産	0	0	0
不明・その他		1	0	0.2
合計		2194	100	100



土坑472出土土器類(126～194)(図版38～40、表3) 土坑472では他の遺構に比べ土師器の比率が75.9%と高い(表3右)。このような状況は、出土遺物に二次的に被熱した資料が少ないこと、及び出土遺物の時間幅が相対的に長いことを考慮する必要があるだろう。すなわち、火災などによる一括廃棄ではなく、日常的な使用と廃棄に伴って継続的に土器・陶磁器類が投棄された結果、使用回数が少なく廃棄頻度が高かったと想定される土師器類の比率が高くなっている可能性がある。土師器を除いた遺物の比率をみると、必ずしも特殊な点は認められない。ただ、後出する時期の遺構と比べ肥前系陶器がまだまだ高い比率を保っていること、輸入陶磁器類の出土が少ないことは注目できる。とくに後者は、土師器の多さと併せて考えると、日常的な使用のなかでは輸入陶磁器がほとんど廃棄されなかったことを示唆するものとみられる。

土師器皿には126～140があり、このうち大型の132～140は内面に圏線を有する。また、127・131・132・137・138には煤が付着し、灯明皿として使用されたことがわかる。

土師質土器には、いわゆるでんぼ141～143がある。このうち141・142には内外面ともに煤が付着し、143は底部に焼成後の穿孔を4箇所施している。144は胞衣壺で、外面には丁寧なナデ調整を施す。145・146は火消し壺の蓋である。146の頂部にはつまみの剥離痕があり、内面にわずかに煤が付着する。147・148は焙烙で、147は内外面ともに煤が付着する。148は外型成形である。

瓦質土器には焜炉149がある。三足を有し、底部はやや上げ底状である。外面には丁寧なヘラミガキを施す。

陶器のうち、肥前系陶器には唐津焼刷毛目碗150・151がある。152はおそらく信楽焼と思われる茶入れの底部である。底面には丸に「楽」と思われる墨書が認められる。153は信楽焼の甕である。口縁部の形態は受け口状で、器表面には融解した長石が噴き出している。

京・信楽系陶器には、筒形碗154、丸碗155、腰折碗156・157、小杉碗158、蓋物身159、鍋160、花入れ162・163、蓋164～167、鬘盥168、蓋付きの土瓶169、器形不明の破片161がある。154は朱泥で「榮」・「福」・「壽」の吉祥句を記し、その上に透明釉を施す。しかし、二次的な被熱によって、釉薬はほとんどの部分で変色し白濁している。腰折碗157は通常のものよりも粗く砂質な胎土を用いており、産地が異なる可能性もある。159は口縁端部上面を無釉としているため、本来は蓋を伴ったことがわかる。鍋160は小型で、三足を有する。器形不明の破片161は外面に「乾」字を記す。尾形乾山の作品、あるいはその模倣品であろう。花入れ162・163はともに外側の底面を除き施釉を行う。162は草花文、163には菊花文を描く。蓋164には桐文を描く。蓋165はいったん円形に成形したのち、口縁を2箇所、弧状に切り欠いている。頂部にはつまみの剥離痕跡が認められる。蓋167は頂部に焼成前の穿孔を有し、口縁端部はやや肥厚する。また、口縁部の内面は釉剥ぎされている。168は口縁部を輪花状とする。被熱によりそのほとんどが失われているが、上絵により草花文が施されていたようである。土瓶169は注口部が屈曲する古相を示す形態で、耳には吊り下げのための銅線が残存している。

備前焼には、体部が直立する円筒形の鉢170がある。体部外面の上半には条線を施し、底面には丸に「三」と思われる刻印を有する。水指としていたと考えられる。

171～194の磁器はすべて肥前系である。171～173は白磁で、171は椀、172は蓋、173は型打ち成型の小皿で、内面に草文が浮彫で表現されている。174は青磁染付の椀で、五弁花はコンニャク印判で押し、口縁端部には口紅を施す。175は色絵で上絵付けで羽子板と羽根を描く小椀である。

176～194は染付である。176～187は椀で、このうち176・177は氷裂文を描く。177は小椀である。染付は相対的に丁寧に製作されたものが多いが、180～183などはくらわんか手のやや粗製の椀である。184～186は同文の椀で、高台内に「大明年製」の字款がある。187は五弁花を手描きで施す。188・189は仏飯器である。190は蓋である。191～193は皿である。このうち191・192はともに薄手の丁寧なつくりのもので、192の底面にはハリ支えの痕跡がある。194は鉢で、口縁端部内面が無釉であるため、蓋を伴うことがわかる。高台内には二重の方形枠内に渦福の銘がある。

土坑279出土土器類 (図版41～44) 195～199は土師器の皿である。195は肘作りの小型の皿で、内面に肘の圧痕・外面に掌の圧痕が残る。平面形は楕円形を呈する。内面はナデを施す。196・197は中型の皿で、丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる。口縁部上半・内面はヨコナデ、口縁部下半は指オサエを施す。198・199は内面の体部と底部の境に圏線をもつ皿である。196と199の口縁部に煤が付着している。

200～212は土師質土器である。200・201は、いわゆるでんぼである。200の底部は回転ヘラ切り調整である。202・203は焙烙である。202の焙烙は丸みを帯びた底部から口縁部が屈曲して外開きする。203は円盤状の底部に内湾気味に直立する口縁部が取り付く焙烙である。どちらも外型成形である。204は小型の火鉢もしくは香炉の蓋で、真ん中に径約2cmの円形の孔がある。全体を丁寧に磨いて仕上げている。205は底部と体部の境に鏝が付く羽釜である。轆轤成形で、体部内面には板状工具でナデを施した痕跡が認められる。206は胞衣壺の蓋、207は胞衣壺である。どちらも轆轤成形である。208は火入れである。轆轤成形で、口縁部と体部の一部を磨いている。209は灯火具(瓦灯)である。轆轤成形で、中央に燈芯台が付く。210・211は焼塩壺である。211には漢字の偏の部分欠けるが、「湊伊織」と刻印されている。212は瓜形の用途不明品で、天井部に径1.1cm、底部に径3.7cmの孔を開けている。沈線によって本体を縦に八分割し、三方にハート型の透かし窓が設けられている。透かしの間には縦に孔を開けた把手が3箇所貼り付けられていて、吊り下げられるようになっている。灯明具か掛け花入れのように、吊り下げて使用された可能性がある。上下を別々に型おこして作って接合した後に、上下の孔・透かしを切り抜いている。

213～241は施釉陶器である。213～216は軟質施釉陶器である。213はいわゆる柿釉の灯明皿で、口縁の一端に長方形の把手がつく。内面に9条1単位の直線櫛描文を2箇所平行に描く。214は香炉で、口縁部・体部外面・高台外面に施釉している。体部外面に銅緑釉で文様を描く。215は鬘盥で、全面に施釉される。216は「タンコロ」と呼ばれる灯火具である。

217～230は肥前系の施釉陶器である。217・218は無文の椀で、217は底部から屈曲しほぼ直線的に外上方にのび、218の体部は内湾し口縁部は垂直に上方にのびる。219は外面に釉を厚く塗って草花文を描く椀である。220は蛇の目釉剥ぎの鉢である。体部から明確な窪みをもって口縁部が受口状に開く。221・222は唐津焼刷毛目文の椀である。223～225は唐津焼の大型の鉢である。223

は片口鉢で、刷毛目文を描く。224は刷毛目文の鉢、225はいわゆる三島手とよばれる鉢である。どちらも底部内面に砂目跡が残る。226は内野山系の平椀で、内面に蛇の目釉剥ぎがある。内面に銅緑釉、外面に透明釉がかかる。

227～230は京焼風肥前系陶器である。227は皿で、口縁端部をつまんで輪花とし、底部内面に鏤絵を描く。229は平椀、228は中型の鉢で口縁が受口状になる、230は大型の鉢で口縁は外反し、体部に5箇所窪みを入れている。228は竹、229・230は山水文を鏤絵で描く。高台内に228は「次」、229は「新」、230は「森」と刻印されている。

231～239は京・信楽系の施釉陶器である。231・232は椀で、231は外面に青彩で桐が、232は白・青彩で木葉を描く。233は六角隅切りの鉢で、見込みに鉄彩と呉須で草花文を描く。234は鬘盤で、鉄彩で菊花・葉を描き、上に灰白色の釉をかけて焼成している。235は双耳壺である。外面に呉須で草花文を描き、内外面に灰白色の釉をかけている。所々釉が剥落した箇所がある。高台は「ハ」の字に開き、無釉である。236は鉄釉の小型の香炉である。237は鉄釉の筒形の椀である。238は香炉で、体部・口縁部は真直ぐ立ち上がり、口縁端部を内に巻き込む。内面は無釉である。高台端部に胎土目跡が残る。239は施釉陶器の壺で、全体に鉄釉がかかっている。頸部に耳たぶ形のつまみが2箇所につく。

240・241は瀬戸・美濃系の施釉陶器である。240は小型の片口鉢で、内面と外面上部に長石釉がかかる。241は錢甕とも呼ばれる瀬戸の半胴甕である。底部は糸切りで、体部上半と内面に鉄釉が施されている。体部下辺に小判形の枠に「長」と刻印されている。

242～244は焼締陶器である。242は備前の灯明受皿である。口縁に煤が付着する。轆轤成形で、底部に粘土が薄く付着する。243・244は信楽の播鉢である。243は1単位7本、244は1単位10本の播り目を放射線に入れる。

245～275は肥前系磁器である。245～249は白磁である。245・246は蛇の目釉剥ぎの皿である。246は短く鉄彩で線が1条描かれる。247は比較的高い高台をもつ小型の椀である。248はいわゆる蕎麦猪口とよばれる小型の筒形の椀である。249は蓋物の身で、底部は碁笥底になる。

小型の蓋250と椀251は上絵付の色絵である。250は天井部に赤・緑彩で草花文を描き、251は雲上に松の梢とたなびく幡を緑・赤・紫彩を用いて描く。幡の一部には金彩が使用されている。

252～260は染付の皿である。252は小型の皿で、外面に2箇所コンニャク印判で模様が施文される。253は小型の輪花皿で、内面はコンニャク印判で菊文を散らし、外面は折れ松葉文を描く。254は薄手の小型の皿で、内面に松と橋が、外面には梅花が描かれる。255はいわゆる「鍋島」の皿で、外面に七宝繋ぎ文が描かれる。256は大型の皿で、内面に牡丹唐草文が描かれる。高台部内面に二重の四角の中に「福」の字款がある。257は内面に草花文を描き、高台内に「大明年製」の銘がある。258は内面の周縁に墨弾きで文様を描き、見込みにコンニャク印判で五弁花を押す。259は内面周縁に草花文を描き、見込みにコンニャク印判で五弁花を押す。260は内面を4区分し、扇と銀杏を交互に描く。見込みにコンニャク印判で五弁花を押し、高台内に「大明年製」の銘が入る。261～268は染付の椀である。261は小型の椀で、外面に梅樹繋ぎ文を描く。262は外面に雨降り文が描

かれる。263は外面に蛸唐草文が描かれる。264は外面に松を描く。265は外面に菊花と雪の輪文が描かれ、高台内には二重方形枠内に渦福の銘が記される。266は底部内面が蛇の目釉剥ぎされ、外面には草花文を描く。267は外面にコンニャク印判で菊と紅葉を散らし、高台内に「大明年製」の銘がはいる。268は内外面に一重網目文、見込みに梅花を描く。269～271は蕎麦猪口である。いずれも外面に草花文を描く。269・271の高台内に「大明年製」の銘が入る。272は仏飯器で、273・274は蓋である。273は頂部に棒状で山形のつまみがつき、外面に花文が描かれている。274は頂部に扁平な紐状のつまみがつき、氷烈文の地に梅花を描く。275は蓋物の身で、外面に帯状に直線文を描く。

276～281は輸入磁器である。清代の製品以外の輸入品は一世紀以上、出土遺構の時期よりも古く生産されたもので、伝世して最終的にこの地で廃棄されたものである。276は朝鮮王朝時代の白磁（李朝白磁）の皿で、底部内面に砂目跡が残る。277は中国産の白磁皿である。278は清代中国の褐釉壺である。279は中国龍泉窯系青磁の鉢である。280は中国景德鎮産青花の芙蓉手の大皿である。281は中国漳州窯系の呉須赤絵の大皿である。

土坑381出土土器類（282）（図版44） 内面に圈線をもつ土師器皿で、圈線から口縁端部までが短い。口縁部に煤が付着する。

土坑400出土土器類（283）（図版44） 肥前系磁器の木葉形の小皿である。型作りで、高台は貼付け、内面にソギを入れる。

水溜908出土土器類（284～288）（図版44） 284は内面に圈線をもつ土師器の皿である。口縁部・内面はヨコナデ、口縁部下半はオサエ、底部内面はナデを施す。底部は無調整である。285は肥前系磁器の椀で、剥離しているが、赤絵か金彩で上絵地付けした文様の痕跡が認められる。口縁端部に鉄釉がかかる。文様は外面に花形の輪郭内に山水楼閣・草花、見込みに桜の花一輪が描かれたものとみられる。286～288は肥前系磁器の染付である。286・287は椀で、286は外面に輪宝繋ぎ文、高台内面に1条の圈線を描く。口縁端部にはいわゆる口紅とよばれる鉄釉がかかる。287は外面に草花、高台内面に1条の圈線を描く。288は小型の皿で、内面に紅葉を描く。

埋納土坑741出土土器類（289～293）（図版44） 289～292は土師器の皿である。底部は平坦で、底部と口縁部の境は明瞭に屈曲し、段がつく。口縁端部は内湾する。293は土師質土器の蓋である。天井部中央につまみがつく。天井・口縁部はヨコナデ調整を施す。

土坑255出土の遺物（294～310）（図版44） 294～297は土師器の皿である。294は肘作りの小型の皿で、内面に肘の圧痕・外面に掌の圧痕が残る。295は丸底気味の底部から口縁部が外上方にのびる。296・297は内面に圈線をもつ皿である。

298～300は土師質土器である。298は小型のでんぼである。299は焙烙で、円盤状の底部に直立する口縁部を貼り付けたものである。外型成形で、口縁部・内面にヨコナデを施す。300は胞衣壺である。轆轤成形で、体部下半はヘラケズリを施す。

301～303は京焼風肥前系陶器である。301は平椀で、内面に鏝絵を描く。302は口縁部を内側に折り返した隅丸方形の鉢である。鉄釉で文様を描く。303は片口鉢で、外面に松を鉄彩で描く。

304～308は京・信楽系の施釉陶器である。304は体部から口縁部にかけて内湾気味に外上方にのびる椀で、高台は外側に開く。305は小型の合子の蓋である。306は鉄釉の鍋で、把手が2箇所につく。307は呉須と鉄彩で椿を描いた土瓶で、銅製の把手がつく。底部に煤が付着する。308は小型の土瓶で、呉須と鉄彩で松が描かれる。

309・310は肥前系磁器の染付である。309は蓋で、外面に獅子・花繋ぎ文、内面に昆虫文を描く。310は椀で309の蓋と同じ文様が描かれ、両者は一揃いのものと考えられる。

6) Ⅲb期の土器類

土坑266出土土器類(311～314)(図版45) 土坑266から出土した遺物は、その多くが二次的に被熱している。311・312は京・信楽系陶器である。311は被熱により釉が発泡しているため明確ではないが、鉄彩で草文と2羽の鷺を描いた皿である。312は木の葉を象った水滴である。

313は肥前系磁器の染付方形皿で、隅入とする。内面には山水文を描く。

314は大型の軟質施釉陶器で、器壁を変形させて作り出した三足を有する。内面は無釉で、風炉などの底部と思われる。外面はタタキのあとにヘラケズリを施す。内面はナデ調整で、足の部分は、ユビオサエで成形したのちヘラケズリを施す。外面底部に刻印を有するが、判読できない。

土坑652出土土器類(315～327)(図版45、表4) 土坑652から出土した遺物は、その多くが二次的に被熱している。遺物の比率は非常に特徴的で、国産陶器及び輸入陶磁器(とりわけ東南アジア産陶器)の割合が高い(表4左)。

土師器には口径2.9cmの小型の皿315がある。

土師質土器には、皿316、焼塩壺317がある。316は轆轤成形されており、内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリののちヘラミガキされている。また内面・外面ともに黒斑が認められる。江戸時代の有職故実書である『貞丈雑記』には「うつくしくはだをみがきたる物」として「内ぐもりの土器」が紹介されており、これに該当する可能性があるだろう。317は型作りで、内面には布目圧痕を有する。判読不明だが、外面には刻印を有する。

318は瀬戸・美濃系陶器の天目椀である。

319～322はすべて肥前系磁器であり、319は白磁椀、320・321は染付皿、322は青磁染付椀である。322の見込みにはコンニャク印判の五弁花、高台内には二重方形枠内に渦福の銘を記す。

323～327は輸入品である。323はベトナム産と考えられる壺の口縁部である。胎土は長石などの鉱物を多く含み、粗い。324・325はいわゆる華南三彩で、緑釉を掛け陰刻文を施している。324は小型の壺で、口縁部は方形に近く成形されている。325は盤で、口縁部を輪花とし、外面には被熱して破片となった口縁部が融着している。326・327はタイ産と考えられる耳付壺である。327は外面肩部に条線を巡らせるほか、口縁端部から外面の肩部にかけてドベ状の物質をハケ塗りしている。

土坑749出土土器類(328～351)(図版46～48) 328～330は京・信楽系の施釉陶器である。328は筒椀で、灰白色の釉の地に鉄釉と長石釉で文様が描かれる。329は蓋、330は椀で、同一の文様が描かれ、両者は一揃いのものと考えられる。文様は内外面に鉄彩で松葉、呉須で花を描く。

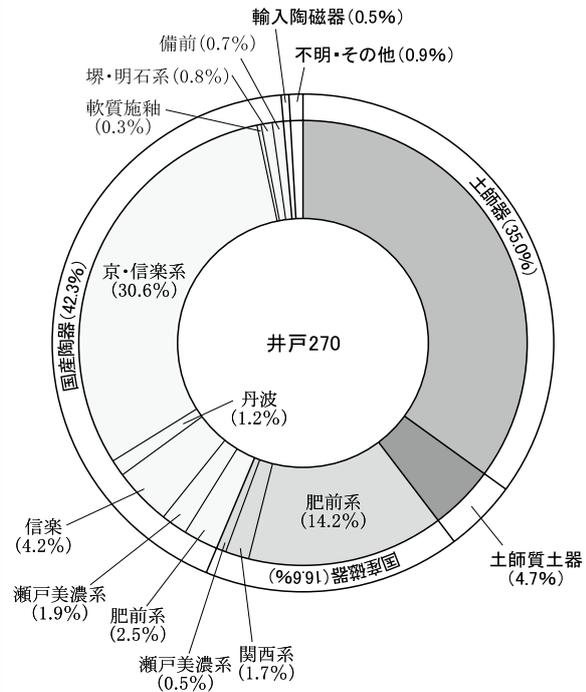
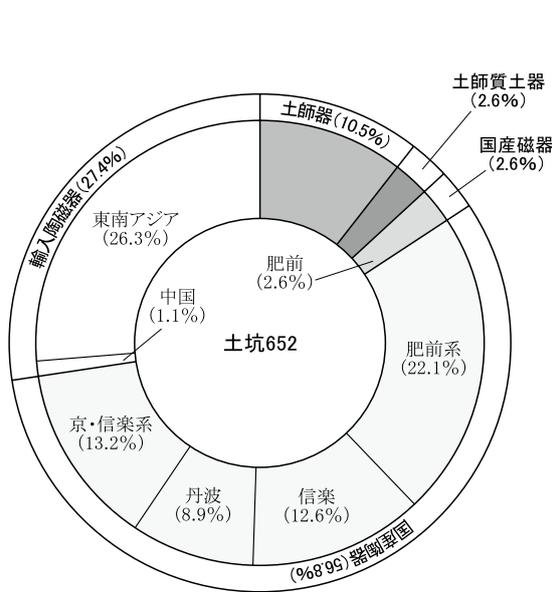
表4 土坑652・井戸270出土の土器・陶器類組成

土坑652の土器・陶器類組成(Ⅲb期)

種類	産地	破片数	割合(%)
土師器		20	10.5
土師質土器		5	2.6
瓦質土器		0	0
国産磁器	肥前系	5	2.6
	関西系	0	0
	瀬戸美濃系	0	0
	三田	0	0
	珉平系	0	0
国産陶器	肥前系(陶胎染付を含む)	42	22.1
	瀬戸美濃系	0	0
	信楽	24	12.6
	丹波	17	8.9
	京・信楽系	25	13.2
	軟質施釉	0	0
	堺・明石系	0	0
	常滑	0	0
	備前	0	0
萩	0	0	
輸入陶磁器	中国産	2	1.1
	東南アジア産	50	26.3
	ヨーロッパ産	0	0
不明・その他		0	0
合計		190	100

井戸270の土器・陶器類組成(Ⅲc期)

種類	産地	破片数	割合(%)
土師器		620	35.0
土師質土器		84	4.7
瓦質土器		1	0.1
国産磁器	肥前系	251	14.2
	関西系	31	1.7
	瀬戸美濃系	9	0.5
	三田	1	0.1
	珉平系	2	0.1
国産陶器	肥前系(陶胎染付を含む)	45	2.5
	瀬戸美濃系	33	1.9
	信楽	75	4.2
	丹波	22	1.2
	京・信楽系	542	30.6
	軟質施釉	5	0.3
	堺・明石系	14	0.8
	常滑	0	0
	備前	12	0.7
	萩	1	0.1
輸入陶磁器	中国産	4	0.2
	東南アジア産	1	0.1
	ヨーロッパ産	3	0.2
不明・その他		16	0.9
合計		1772	100



331～342は肥前系磁器である。331は白磁の鉢で、口縁端部に鉄釉で口紅を施す。332～339は染付である。332は禁裏注文品の椀で、外面に菊文と松枝を描く。333は大型の鉢である。龍に飛雲、剣、宝珠など宝尽文が描かれる。焼継を施す。334～336は禁裏注文品の皿で、334は小型の皿で内面に菊文を、335の皿は内面に菊文と松皮菱文梅花、336の皿は内面に菊文と松を描く。いずれの皿も、外面は梅樹繋ぎ文を描く。337は高台部に櫛歯文を描いた、いわゆる櫛高台の皿である。口縁部は短く直角にのび、端部は外側に若干張り出す。鍋島の模造品とみられる。338・339は壺とその蓋である。339は口縁部が短く直角に立ち上がり、338はドーム状の天井部をもつ。壺・蓋とも外面に蛸唐草文が描かれる。両者は一揃いのものと考えられる。340～342は上絵付を施した染付である。340は大型の鉢で、体部中央で屈曲し、角度を変えて立ち上がる。底部は蛇の目釉凹形高台である。外面は唐草文に花形の窓、底部近くに渦巻文、高台に「○」・「×」を交互に連続して描いた染付の地に、上絵付で唐草の上に柘榴、窓に宝尽文を描く。内面は草文・窓を描いた染付の地に、竹文を金彩で描く。また、草の輪郭に沿って金彩で線描している。窓の中は、緑彩地に魚々子文様、赤彩地に牡丹などの花が絵付されている。見込みは呉須と赤絵で宝尽文が描かれている。高台内は呉須で「富貴長春」と書かれている。341は蓋で、頂部に獅子形のつまみがつく。天井部には赤絵の四方嚮文の上に鉄彩・緑彩などで花文が描かれる。342は台付の壺である。球形の体部から短く口縁部が直角に立ち上がり、口縁端部は受口状になる。蛇の目凹形高台をもつ。口縁部外面は黄彩地に桃彩で桜を描く。体部外面は上から帯状に緑彩唐草文と赤絵の菊、二次焼成を受けて彩色がとぶが、呉須地の上に波状文と梅を描き、頸部には赤絵の四方嚮文、肩部には緑彩地に赤絵で蓮華唐草文を描く。高台外面には赤絵で鋸歯文を描く。

343～351は輸入磁器である。343の小杯は、いわゆる十錦手とよばれる清朝の景德鎮製の磁器で、外面全体に蛸唐草文を線刻し、上に黄彩・緑彩をかける。高台内に呉須で文字が書かれるが、判読不能である。344は中国産の白磁皿で、口縁内面に型押し文様がある。345は中国産青磁の輪花皿である。346～350は中国産の青花磁器で、漳州窯系芙蓉手の大皿である。350は底部内面に花鳥文を描く。351は中国産の青磁または白磁の大皿で、内面全体に草花文が陰刻されている。清代以外の輸入磁器は一世紀以上古いもので、伝世して最終的にこの地で廃棄されたものである。

7) III c 期の土器類

井戸270出土土器類(352～410)(巻頭図版4、図版49～51・90、図24、表4) 当遺構から出土した遺物の多くは、二次的に被熱している。遺物の比率をみると、国産陶器、なかでも関西系陶器の割合が高いことが特徴として挙げられる。また0.5%と少ないながらも、中国・東南アジア・ヨーロッパの各地から輸入された陶磁器類が出土している(表4右)。

土師器には皿352・353がある。352は煤が付着し、灯明皿として使用されたことがわかる。353は口径13.5cmを測る大型品である。

土師質土器には、鉢354、焙烙355、焜炉356、火鉢357がある。354は片口を有する鉢である。355の焙烙は外型造りで、外面の口縁部の下に凸線が巡る。内面・外面とも煤が付着する。356の

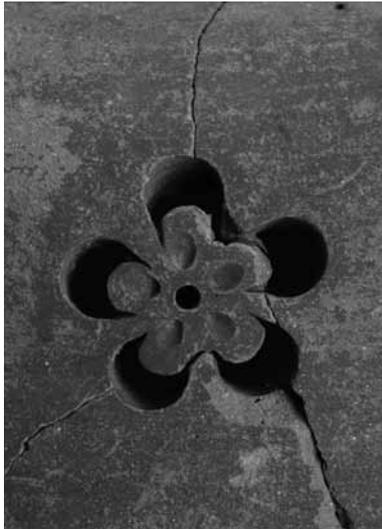


図24 土師質土器火鉢 (357)
の梅文スカシ孔

焜炉は底部に三脚が付き、口縁部3箇所に向きの突起が付く。内面には煤が付着する。火鉢357は台付で、外面には赤色顔料を塗布する。外面の調整は高台部及び底面は回転ナデで、それ以外の部位には丁寧なヘラミガキを施す。内面には刷毛目を残している。上部には梅文のスカシ孔(図24)が6箇所に、円形のスカシ孔が1箇所に施される。そのほか、コンパス状の器具を用いた焼成後の同心円文、釘状工具による葉文などが外面に認められる。また、内面及び口縁部には煤が付着している。外面の体部下半と底面の2箇所に刻印があり、前者の刻印は「陶師宗七」、後者の刻印は「□幸木□」と思われる。

陶器のうち、肥前系陶器には片口鉢358がある。外面上半及び内面の全面に鉄釉を施す。

信楽焼には、鉢359、甕360、大型の甕361がある。359は被熱痕を有さないが、形態からみて陶器焼成に用いる匣鉢の可能性はある。側面にはヘラ描きで山笠に「清」の字が書かれている。360の甕肩部には鉄釉を流掛けする。361の内面底部には窯道具の痕跡が8箇所に残る。

丹波焼には鉢362がある。外面には縦方向の密な刷毛目を残し、内面には全面に黒色の鉄釉を掛ける。口縁端部は内側に肥厚する。外面体部の中位には突帯を巡らせ、ユビオサエで凹凸を付ける。内面の鉄釉などからみて、ベトナム産陶器などを模した丹波焼であると考えられる。

京・信楽焼系では、灯明受皿363、灯明皿364、小杯365、壺366、植木鉢367・368、急須370及びその蓋369、土瓶371、鉢372、香炉374及びその蓋373、蓋375～379・381・382、汁次380、片口鍋383・384などがある。灯明皿364は内面に三又トチンの痕跡を有する。小杯365は内面にのみ釉薬を掛ける。墨書で漢詩らしき文章が記されているが、被熱により判読できない。壺366は板造りであるが、その器壁は約2mmと極めて薄い。外面には無数の刺突を施し、器壁に凹凸をつけている。植木鉢367は外面に黒色の鉄釉を掛ける。蓋369・急須370は一揃えのもので、急須370は極めて薄く作られ、身の上半及び蓋の上面にのみ釉を掛ける。土瓶371の底面には煤が付着し、内面を無釉とする。鉢372の内底には三又トチンの痕跡が認められる。また、高台内に墨書が認められるが、判読不能である。香炉374は蓋373が伴い、374の内面及び高台内は無釉とし、上部の6箇所に円形のスカシ孔を有する。外面には呉須と鉄彩で鶴を描く。また、高台内には銘「帶山」を押す。「帶山」は粟田焼の窯の一つである。373の蓋の上面にも鉄彩と呉須で鶴が描かれる。蓋の376は鉄釉を掛け、379はイッチン、377・381は飛びガンナとイッチンで飾る。汁次380は口縁端部と底面を無釉とする。欠損しているが、剥離痕から把手を伴うことがわかる片口鍋383・384は外面の上半を飛びガンナで飾る。383は外面に煤の付着が著しい。

焼締陶器には堺・明石系の播鉢385がある。底面の播目はいわゆる放射状パターンで、明石産の可能性が高いだろう。よく使いこまれ、播目の摩耗が著しい。

瀬戸・美濃系陶器には、甕386、鉢387、蓋物身389及びその蓋388がある。甕386は内面底部の

3箇所に目跡を有する。外面底部には墨書を有するが、判読できない。鉢387は、外面下半及び高台内を除き、鉄釉を掛ける。蓋物身389の内面底部には三又トチンの痕跡が認められる。

390は珉平焼の皿で、黄色の釉薬を施し、内面には龍文を捺す。外面底部には三又トチンの痕跡が認められる。

磁器のうち、肥前系の白磁に合子の身391がある。この合子は口縁部の形状から蓋を伴うことがわかる。無釉である受け口部及び外面底部に、赤色顔料が付着している。肥前系の染付には、小杯392、蕎麦猪口393、油壺394・395、仏飯器396などがある。395は染付の上に上絵付を施し、396は赤絵を施す。

関西系磁器には、染付の椀397、鉢398、皿399のほか、急須401及びその蓋400がある。鉢398はいわゆる芙蓉手を模したもので、蛇の目凹形高台である。焼継がある。

瀬戸・美濃系磁器には、染付の小杯402・403、椀404・405がある。402は外面に鶴と松を描く。403は口紅を施し、口縁部内面に行書文字、見込みには三階松に「五条家跡」の文字を配した図柄を施す。404は外面に鶴を描く。405は上絵付を施す。

輸入陶磁器のうち、中国産磁器には、白磁小椀406、青花杯407、青花皿408がある。406は高台内を無釉とする。407は高台部の観察から釉薬が生掛けされていることがわかるため中国産と判断したが、国産磁器の可能性もある。408は高台皿付部分を除いて施釉しており、内面には3箇所の目跡が認められる。

ヨーロッパ陶器には、皿409、鉢410がある。このうち410の高台内には「P.R./GLENER」のマークがあり、オランダのペトルス・レグー窯産であることがわかる。³⁾

石室300出土土器類(411～424)(図版52) 411・412・415は、内面に圏線をもつ土師器の皿で、このうち415は大型の扁平な皿である。口縁部・内面はヨコナデ、口縁部下半はオサエ、底部内面はナデを施す。底部は無調整である。413・414は土師器の蓋である。415の同形の皿を裏返しにしてつまみを取り付けたものである。

416は白色の精製粘土を用いた土師質土器の鉢である。轆轤成形で、底部を焼成後穿孔している。

417は京・信楽系の施釉陶器の小型の平椀である。高台内に墨書がある。

418～424は肥前系磁器の染付である。418～423は椀、424は蓋である。418は小型で、外面に注連縄に羽子板と羽根が描かれる。419は小型で、外面に網目文を描く。420は外面に松が描かれるが、後に京都で「京都 ぎをん町 たつ家 小町紅」と上絵付されている。421は小型で、内外面に網目文が描かれた後に、銅緑釉で内面に「□陽□」、外面に「…んし多(た)…」と上絵付されている。420・421は紅皿として使用されたと思われる。422は器壁が薄い椀である。外面に草花と虫を描き、底部内面に「壽」と書かれている。焼継ぎで補修を行っており、底部内面に焼接ぎ屋の屋号と思われる漢字と記号が接着剤で書かれている。423は禁裏注文品の大型の椀である。外面に亀甲文に松と鶴、内面の口縁部に四方禪文、底部内面に二重圏線の中に松竹梅繫文、底部内面に「宣徳年製」と描かれている。424はつまみをもつ小型の蓋である。天井部に宝相華文が描かれる。

井戸7出土土器類(425～427)(図版52) 425は軟質施釉陶器の鉢である。口縁を内側に折り込

み、丸くしている。一部修復した箇所が認められる。

426は信楽の施釉陶器の大型の壺（花瓶）で、全体に鉄釉がかかる。口頸部が大きくラッパ状に開き、口縁端部は上下に突出する。頸部下半の左右対称位置に獅子（鬼面）の飾りがつく。

427は肥前系磁器の染付小椀である。内面に呉須で蜘蛛の巣と蝶を描き、金彩で蜘蛛を描く。

土坑240出土土器類（428～433）（図版52・90） 428は堺・明石系焼締陶器の播鉢である。播目はほとんど摩耗していない。土師器には蓋429がある。土師器皿と同様に、天井部と口縁部の境には圏線を巡らせる。430は京・信楽系陶器の灰落としであり、底面のみ無釉とする。口縁端部には敲打痕が認められる。

磁器には京・信楽系磁器の皿431と肥前系磁器の椀432がある。このうち432は器壁が薄く、調整・施文とも丁寧である。いわゆる禁裏注文品であり、外面には菊花文を描く。

433はヨーロッパ陶器の小椀である（図版90）。外面には、女性と牛を描く。オランダ産と評価されている資料の中に類例がある⁴⁾。

8) Ⅲ d期の土器類

池180出土土器類（434・435）（図版52） 434は京・信楽系陶器の鉢である。平坦な底部から体部・口縁部が内湾して外上方にのび、口縁端部は外下方に折れ曲る。底部内面に目跡が4箇所残る。

435は信楽の鉄釉甕である。屈曲する体部から垂直に立ち上がる口縁部へと続く。口縁端部は内外に突出する。

（3）瓦類（図版53～64・91～95、附表2）

瓦は、土器・陶磁器類に次いで多く出土しているが、とりわけ、天明の火災後に掘削された瓦廃棄土坑及び整地層から大量に出土した。今回の調査では、文様のある軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦を中心に、刻印・文字を有する特殊な瓦、完形あるいは完形に近く残存状態の良好な丸瓦・平瓦・棧瓦を選択的に随時採集し、さらに整理では対象とする資料を絞り込んで作業を行った。

本報告で対象にしたものを瓦の製作時期別に分類すると、平安時代12点、平安時代末期から室町時代2点、江戸時代92点、幕末以降1点、時期不明が1点で、総数108点となる。この中にはヘラ書きのある瓦が3点（瓦59・86・89）、刻印のある瓦が15点（瓦65・95～108）、ヘラ書きと刻印の両方ある瓦が1点（瓦85）がある。個々の瓦については、附表2に掲載した。

以下では、瓦類の出土状況や内容について概略を述べる。

平安時代の瓦は、寺町形成以前の河川の氾濫層（氾濫堆積層）や江戸時代までの遺構に混入して出土した。明確な丹波産のものは、瓦1・4～6であり、平安時代後期に三軒家南窯（京都府亀岡市）で生産され、法成寺創建に供給されたことが知られている⁵⁾。瓦2は栗栖野瓦窯で生産された瓦当文様と酷似していることから山城産と考えられる⁶⁾。また凸面に縄叩き目、凹面に布目痕が残る平安時代の平瓦が数点認められるが、残存状態の良好なもののみ図化した。凸面の全面に布目痕を残す玉縁式丸瓦（瓦8）と、緑釉が付着した熨斗瓦（瓦10）は特徴的で稀例として取り上げた。

平安時代末期から室町時代の瓦は、平瓦（瓦13）・丸瓦（瓦14）が各1点ずつ出土したが、いずれも後世の遺構（Ⅲa・Ⅲc期）に混入したものである。

出土した瓦の大半は江戸時代の瓦である。中でも棧瓦や棟丸瓦が最も多い。珠文をもたない右巻三巴文軒丸部と、中心飾りの両側に唐草文を配置する軒平部を組み合わせる軒棧瓦が主である。軒丸瓦は右巻三巴文の外区に珠文をめぐるもの、軒平瓦は中心飾りに葉形を配し、両側に唐草文の展開するものが主である。鬼瓦は鬼面の顔部・連珠帯・鬼台など、数多くの破片が出土した。角をもっており、円筒状の器具でスタンプ状の連珠をめぐるタイプの鬼瓦が主である。他にも高辻家の屋敷に使われたと思われる梅鉢文の鬼瓦（瓦84）も出土した。銘文を残す鬼瓦片も出土したものの、完形ではないため詳細は不明である。

（4）土製品（図版65～72・96、附表3）

土製品として、土人形・ミニチュア製品・泥面子・印章・土錘・硯などがある。磁器・施釉陶器の人形・ミニチュア製品も含まれるがこの項で述べる。成形手法には型おこし・型あわせ・手捏ね・轆轤成形があり、型あわせで作られたものには体部が中空のものと中実のものがある。型おこし・手捏ねのものは、ほぼ中実である。

土人形（土1～74）（図版65～70・96） 土人形は大半のものがいわゆる伏見人形であるが、磁器や施釉陶器などのものがあり、他の産地のものも含まれている可能性がある。また、人物・動物の形をとる水滴も人形に含めた。時期の古い土人形は小型で、全体に淡黄色の釉がかかり、一部に緑釉・褐釉が塗られている。

土1～40は人物で、体の一部だけのものは詳細が不明であるが、西行法師・天神・饅頭喰い・獅子舞・釣人・朝鮮通信使・猿回しなどがある。土41～74は動物で、獅子・犬・鳥（鳩・雀・梟）・猿・馬・牛・狐・虎・魚・蛙などがある。土70～72は大型の臥牛である。裏面には指頭圧痕が明瞭に残り、型おこしで作られていることがわかる。頭部と胴部を別々に作って、頭部を胴部に挿し込んで成形している。土70と71は同じ型から作られているが、尻尾は手びねりで作ったため形状が異なる。土71は右後足の蹄を切り忘れていた。背中には白い胡粉、耳と鼻には赤色、蹄には青色の顔料が残っている。

ミニチュア製品（土75～106）（図版71） ミニチュア製品には、大きく分けて箱庭道具（土75～78）、器物（土79～90）の2種類があるが、この2種に属さないものはその他のものとした。その他のものには、土鈴（土91～98）・つぼつぼ（土99～106）などがある。

泥面子（土107～121）（図版71） 円盤状のものが多いが、立体的な芥子面子もある。大きさは最小2.2cmで、最大で5.9cmである。図柄には、文字・紋・人物・動物・器物がある。また、泥面子を作るための抜型も出土している。

その他の土製品（土122～128）（図版72） 土122は青磁の印章で、印面を除く全面に釉がかかっている。印面に篆刻文字が陽刻されるが意味は不明である。印面の文字と周縁は暗赤紫色を呈す。上面にある紐の痕跡から、座位の動物形の紐が付いていた可能性がある。土123は土師質の栓である。

土124は瓦質火鉢を打ち欠いて円盤状にしたものである。泥面子の代用品として使用された可能性がある。

土125は手捏ねで円筒状に成形して、中央に孔を開けた土錘である。土126は分銅形の土錘である。蓆などを編むときに使用されたものと考えられる。土127は土師質土器の蠟燭立てで、中央に蠟燭を刺す銅製の針がつけられる。

土128は硯で、陸部の一部を残し他は欠損している。陸部は中央が窪む。墨が一部残る。

(5) 石製品 (図版72～77・96、付表4・5)

石製品として、合子・文鎮・硯・砥石・板状五輪塔・印章・数珠玉・墓石⁷⁾などがある。他にも基石・火打石・石臼などが出土している。

合子(石1)(図版72) 赤色石灰岩製の合子の身である。轆轤挽きで成形し、外面は平滑に仕上げている。側面に花の線刻がある。石材は中国産の可能性はある。

文鎮(石2・3)(図版72) 石2は頁岩製で、全面平滑に仕上げられ、上面には花が線刻されている。石3は頁岩製で、高火度の熱変を受けて大きく変形している。上面は立体的に装飾されているが、実態は不明である。石2の石材は中国産の可能性はある。

硯(石4～6)(図版72) 石4は周縁の一部を欠くがほぼ完形である。石5は海部の一部を残して周縁を欠く。陸部の中央部はやや盛上る。裏面は隅丸方形に窪み、三行の線刻がある。中央の線刻は「江州高嶋石」と読める。石6は円形の硯である。半月形の海部をもち、周縁は低い。約1/4が欠損するが断面に漆喰で接着した痕跡が残っている。石4・5は黒色頁岩製、石6は丹波帯珪質頁岩製である。

砥石(石7・8)(図版72) 石7は4面すべてに使用痕が認められる。一部線状の擦痕があるが、全体的に平滑である。仕上げ用の砥石と思われる。石8も4面すべてに使用痕が認められ、片方が著しく磨滅している。大きい方の小口に、石材採取時の鑿の痕跡が残る。石7は流紋岩製、石8は丹波帯砂岩製である。

板状五輪塔(石9)(図版72) 板状の五輪塔で、風・火・水輪が残る。前後の面には剥離痕があるが、側面は調整痕が認められる。丹波帯砂岩製である。

印章(石10～13)(図版72・96) 石10～12は石英もしくは珪石製の印章である。石10は、印面に「□□福□」と線刻されている。石11の印面は縦に長い長方形で、「文物多師古」と線刻されている。唐の時代の杜甫の漢詩「行次昭陵」からの引用。石12は方形の印面に壺形が陽刻されている。反対側には「上」と線刻されている。印面に朱が残っている。

石13は完形の泥岩もしくは石墨製の印章である。印面は縦長の矩形で、「緑竹猗々」と線刻される。「々」は繰り返し記号であるので「緑竹猗猗」と読む。『詩経』「衛風・淇奥」の篇からの引用。印章の石材は、すべて中国産の可能性が考えられる。

数珠玉(石14)(図版72) 碧玉製の数珠玉で、半透明の緑色を呈する。

墓石(石15～42)(図版73～77) 石15～24は一石五輪塔である。幅に対して高さのある細身

の五輪塔である。空・風・火・水・地輪には、それぞれの種子^{しゅじ}を表す梵字が刻まれている。また、地輪には基本的に右側に年号、中央に戒名、左側に月日が刻まれる。慶長・元和・寛永の年号を持ち、古いものは慶長七年（1602）、新しいものは寛永十九年（1642）である。石材は、年代の古いものは閃緑岩～斑糲岩^{はんれい}で、途中から砂岩（和泉砂岩）も用いられるようになる。石15～17・20・23・24は閃緑岩～斑糲岩、石18・19・21・22は砂岩（和泉砂岩）製である。石19は男女2名の名が刻まれている。男性の戒名には年号・月日が刻まれるが、女性の戒名には年号・月日がなく、戒名の上には生前に戒名を墓石に刻むことを意味する「逆修」と刻まれている。石20は、文字を刻んだ後に金箔が貼り込まれる。

石25・26・37は別石五輪塔である。石25は空・風輪部である。空輪は宝珠形で、頂部が長く尖る。風輪の下部に火輪との接合を安定させるための突起を設けている。四面に梵字が刻まれる。石26は火輪部である。石37は地輪部である。石材は25・37が黒雲母花崗岩製、26は閃緑岩～斑糲岩製である。

石27～31は舟形の墓標である。元和・寛永・正保・寛文・延宝の年号をもつ。石31が反りをもつが、他のものは平坦である。刻まれている内容は、一石五輪塔とほぼ同じである。石27・29は閃緑岩～斑糲岩、石28・30・31は黒雲母花崗岩製である。

石32は板碑形の墓標である。黒雲母花崗岩製である。

石33は位牌形の墓標である。「癸丑」の銘は、延宝元年（1673）の可能性があり。側面には円形の圏線内に「九」の文字が刻まれている。黒雲母花崗岩製である。

石34～36は位牌形の供養塔である。笠及び台石との組み合わせ部に突起を設ける。他の墓標に比べて大型であり、碑面に刻まれる戒名の数も多い。「六親□」、「六親眷属七世父母子」と刻まれたものがあり、供養塔とした。年号の分るものは、すべて寛永年間のもので、石材もすべて黒雲母花崗岩である。石34は埋甕860の南で出土、石35・36は土坑279から出土した。

石39は位牌形供養塔の笠部である。埋甕860の上層で出土した。横長の屋根形をしており、頂部に棒状の突起がつく。底部中央に柄穴を作る。黒雲母花崗岩製である。石34と組み合わせていたとみられる。

石40～42は墓石の台石である。中央に墓石を乗せる柄穴があり、石41以外は、周りに反花を刻む。前に水入れと線香立ての穴がある。すべて石材は、黒雲母花崗岩である。石40は埋甕860南側で出土した。石34と組み合わせていたとみられる。

石34・39・40は、接近して出土していること、突起と柄穴が合うこと、石材が同じことなどから一組のものになると考えられる。

石38は石仏である。石仏を陽刻しているが、磨滅が激しく、詳細は不明である。石材は、黒雲母花崗岩である。

（6）金属製品（図版78・96、付表6）

金属製品には、銅製の吊手・匙・灯心押え・蝶番・釘隠し・紐金具・鏝・髪飾り、金銅製の火

墓石釈文 1

石 15

慶長七年
壽幻童子
六月十二日

石 16

慶長九年
妙□禪定尼
六月十九日

石 17

慶長九年
宗幻禪定門
三月十六日

石 18

慶長十年
花岳淨春信士
九月廿二日

石 19

慶長十七年
宗清禪定門
八月廿三日

逆

妙林禪定尼
修

石 20

元和七年
宗弥信士
二月十七日

石 21

元和七年
妙春信女
八月三日

石 22

寛永七年
妙照信女
八月廿四日

石 23

寛永十九年
見譽妙春信女
八月廿七日

石 24

□□
□□
二月九日

石 27

元和六年
〔浦辺〕
□譽宗泉信士
二月七日

石 28

寛永十三年
□□信女
五月十三日
正保元年

□桂信士

八月九日

石 29

寛文十庚戌年
光屋清心
六月三日
道清妙清六親等
寛文十庚戌年
清圓童子
九月十四日

石 30

延宝四丙辰天
淨正信士
十月廿四日

石 31

□月幻覚
縁室妙回
幻雪童女

墓石釈文2

石 32

寛永二〇
清〇〇〇西信士
〔十カ〕
〇月九日
九月

石 33

(前面)
癸丑正月十二日
梅岩淨春信士
爲六親等

梅山妙雪信女
〇〇十一月晦日
(側面)
⑨

石 34

(前面)
淨泉 淨休 榮林
西雲 妙澄信女 春貞
〇〇妙慶 香運
六親〇譽淨運 寛永九年
八月十日
受徳信士 秀榮
妙慶 道休信士 妙林
妙〇 妙嘉 西入

石 35

譽宗覺信士 寛永〇年
十一月十四日
無妙專信女 寛永十年
九月十四日
寛永九年
六親眷属七世父母子覺應道休信士
〇月〇日
寛永十四年
五月二日
嘉月妙慶信女 寛永九年
三月十二日
〔照カ〕
〇〇童子

石 36

(前面)
映譽道〇信士 寛永十七〇七月
十二月
林譽榮春信女
〔側面〕
〇〇陀佛
静譽休〇信士
譽譽妙薫信女

了宗信士 卯月〇日 宗清
妙祐信女 一雲

石 37

寛永二年八月七日
方室〇 西信士〇永
〇〇高那〇〇〇

箸・釘隠し・髪飾り、鉄製の包丁・引手・鍬・釘、真鍮製の煙管、合金製鷄目金具などがある。

吊手（金1） 花器などの容器を吊るす銅製の吊手である。扁平な細い板状の銅の両側を直角に曲げ、中央に円環を取付け紐で吊るすようになっている。

匙（金2） 棒状の銅の先端を潰して「つぼ」を作り出したものである。

灯心押え（金3） 細長い板状の金具を円形に曲げ、一端をのばす。のばした部分はねじって螺旋状にする。先端は失われている。

火箸（金4） 金銅製の火箸である。縦方向に細かい磨きが施される。上端から約2.5mmの位置に圈線がめぐる。箸を紐で結ぶためのものと思われる。

包丁（金5） 柄・峠・切っ先がほぼ一直線で、刃部も直線的である。

蝶番（金6・7）（図版96） 金6・7は銅製の蝶番である。金6は小型の花形の蝶番で、表面に毛彫りがみられる。一部鍍金の跡が認められる。釘孔は4箇所である。金7は花形の大型の蝶番の裏面である。表の文様が裏移りしている箇所がある。また、罫書き線が2条認められる。釘孔は6箇所認められ、四隅にハート形の透かしをあける

釘隠し（金8～10）（図版96） 金8は平面が円形で、対称2面に楔形のツメがつく。金9は金銅製の六葉形の釘隠しである。鍛造で、ハート形の透かしを6方にあける。中央に小さな孔がある。金10は笠形の鍛造製の銅製品で、中央に孔があく。

紐金具（金11） 銅製の紐金具である。鍛造で円形の環座金具に環台と環が付く。

引手（金12・13） 金12は蕨手形の引手である。両側に本体に固定させるための環状の鋏と円形の座金がつく。金13は丸環の引手で環状の鋏がつく。留金は先が2つに分かれ鉤状になっている。

煙管（金14～17） 金14と金15は長い雁首と吸口の煙管である。雁首の火皿は失われているが、火皿下の補強体は残る。金16と金17は短い雁首と吸口の煙管である。火皿の下に補強体が1条めぐる。すべて真鍮製で、成形時の繋ぎ目がみられる。

鉄鍬（金18） 鍬身は圭頭形で、断面は片鍬である。頸部は棒状で台形関をもつ。

鐔（金19）（図版96） 銅製の刀の鐔である。鑄造製の角形で、透かし模様をもつ。切羽台の責塹の跡が明瞭に残る。

鷄目金具（金20）（図版96） 刀の柄頭・栗形に付属する紐を通すための金具である。金40%・銀60%の合金である。

髪飾り（金21・22）（図版96） どちらも二股の平打簪で、頭部に耳かき意匠をもつ。金21は小型の金銅製で、円形の飾り部に揚羽蝶、全体に毛彫り装飾が施されている。金22は花形の飾りに桜などを毛彫りしている。

鉄釘（金23～27） 木棺に使用された鉄製の釘である。鍛造製で、頭の成形は叩き延ばして一方に折り曲げる。胴部の断面は方形である。完形品はないが、金23～26の長さは1寸5分（約4.5cm）、金27は2寸（約6cm）である。頭頂部から約1cmの所で、木目の方向の違いがみられる。上部は横方向の木目、下部は縦方向の木目がみられる。板の平面から木口面に釘が打たれたことがわかる。板の厚さは1cm前後であったとみられる。

(7) 銭貨 (図版79、図25・26、附表7)

銭貨は合計485枚出土した。このうち、196枚は墓域A～Cからの出土である。墓域出土の銭貨には、6枚が積み重なって銹着した状態のものも多く、墓に副葬されていたいわゆる六道銭と呼ばれる銭貨である。銹着した間に挟まれた銭貨など109枚については銭文の判別はできなかった。銭文が判別できたもの87枚の内訳は、輸入銭が7枚、寛永通寶が80枚である。本報告では、出土地点を図示できる墓595 (図版13)、墓910A (図版16)、墓910B (図版15)、墓932 (図版15) 出土の34枚について掲載した。この34枚のうち、7枚が輸入銭、27枚が寛永通寶で古寛永19枚と新寛永8枚がある。新寛永はすべて裏面に「文」の銘のあるいわゆる文銭である。墓595 (墓域A) 出土の銭貨は、6枚の銭貨が麻布に包まれ、スギ材の薄板に乗っていた (銭1～6)。布地の崩壊を防ぐため布包みは開封せず、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所においてCTスキャンにより内容を分析した。その結果、

6枚とも輸入銭 (淳化元寶・元符通寶・元豊通寶・熙寧元寶・元祐通寶・嘉泰通寶) であった。また、墓910B (墓域C) から輸入銭 (熙寧元寶) が1枚出土している (銭25)。この銭は土師器皿の上に乗る状態での出土であったが、銭には漆の被膜やスギ材の薄板が付着していることが多い。6枚セットとなった六道銭に注目してみると、輸入銭のみからなるグループ、輸入銭と古寛永と新寛永からなるグループ、古寛永と新寛永からなるグループに分けられ、古寛永のみや新寛永のみからなるグループはなかった。

その他の遺構から出土した銭貨289枚のうち107枚は銭文が判別できなかった。判別できたものの内訳は、輸入銭30枚、寛永通寶135枚、その他17枚である。輸入銭には、熙寧元寶・祥符元寶・元豊通寶・皇宋通寶・元祐通寶・天聖元寶・洪武通寶・永樂通寶などがある。寛永通寶には古寛永・文銭・波銭がある。

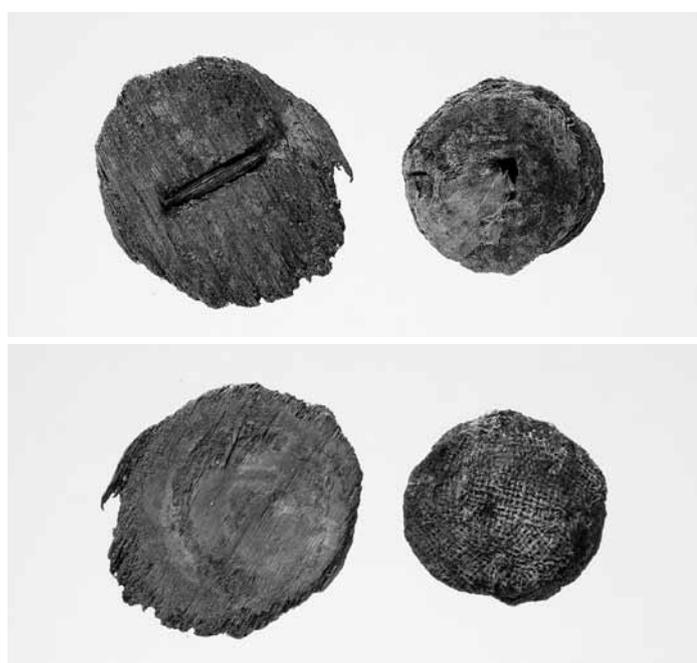


図25 墓595 (墓域A) 出土の薄板に乗った布包み銭貨 (銭1～6)

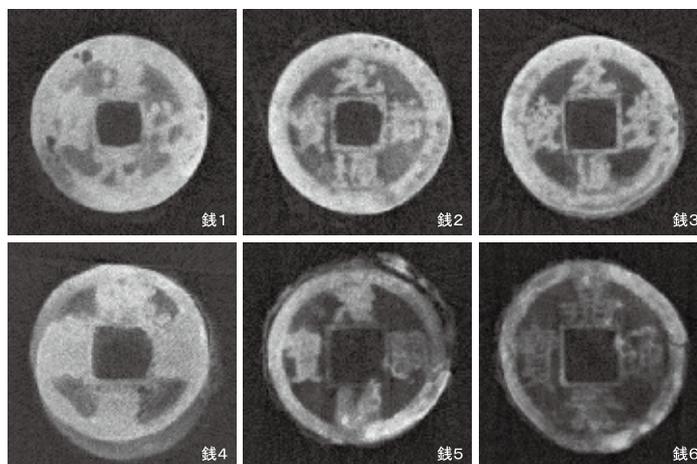


図26 墓595 (墓域A) 出土の銭貨 (銭1～6) のX線透過写真

(8) ガラス製品 (巻頭図版4、図版80、付表8)

ガラス製品には、髪飾り・瓶・壺・数珠玉などがある。他にもポッペンなどが出土している。

髪飾り (ガ1～10) 筭・簪などの髪飾りである。断面円形の棒状のガラスをねじって螺旋状にしたもの (ガ1～5)、断面長方形のもの (ガ6～8)、断面円形のもの (ガ9・10) がある。ガ1・2は頭部を太くして「く」の字にまげる。ガ6は赤色・緑のガラスを溶着させて花文を描く小杯 (ガ11) 脚付小杯の脚部である。

瓶 (ガ12) 細長い頸部をもつ瓶で、口縁部はラッパ状に開く。

壺 (ガ13) 長楕円形の体部をもつ壺であるが全体の形状は不明である。中国産の可能性はある。

数珠玉 (ガ14～17) ガ14・15はT字形に孔が開く親玉になる。ガ17は扁平な珠で、数珠以外の用途も考えられる。

(9) 骨・貝製品 (図版80、付表9)

骨・貝製品には、独楽・匙・角筆・筭などがある。また、鼈甲の筭も出土している。

貝製独楽 (骨貝1・2) バイ貝製で、中に砂・粘土などを詰めて、紐で回して使用する。殻頂部を残して、貝の殻頭部を輪切りにし、平滑にしている。殻頂部を尖らせるための加工痕が認められる。先端部は、使用にともない若干磨耗している。

貝製匙 (骨貝3) イタヤ貝製で、柄を取り付けるための孔が2箇所、中央より左側の殻頂部に開けている。

角筆 (骨貝4) 棒状の獣骨の先端を尖らせている。先端部のすぐ上に2条の沈線を刻む。長さは9.0cmである。角筆とは、墨を用いず紙に窪みをつけて文字を書く筆記具のことである。

註

- 1) 本報告書における遺物の記載方法は、原則として以下の報告書に倣っている。
『平安京左京北辺四坊 第2分冊 (公家町) 本文 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 2) 小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社 1998年
- 3) 『阿蘭陀焼 憧れのプリントウェアー海を渡ったヨーロッパ陶磁』愛知県陶磁資料館 2011年
- 4) 前掲3)
- 5) 福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」『佛教藝術』六八号 毎日新聞社 1968年
安井良三「篠原A号瓦窯址」『亀岡市史』上巻 亀岡市史編纂委員会 1960年
平安博物館『平安京土御門烏丸内裏跡－左京一条三坊九町－』平安京跡研究調査報告第10輯 財団法人古代学協会 1983年
上原真人「撰関・院政期の京都における丹波系軒瓦の動向」『仏教芸術』308号 仏教学術学会 2010年
- 6) 平安博物館『平安京古瓦図録』雄山閣出版 1977年
- 7) なお、石製品については、橋本清一氏 (京都保存科学株式会社) に鑑定をお願いした。印面の文字については、竹本晃 (大阪大谷大学)、馬部隆弘 (大阪大谷大学)、鈴木佐智代 (奈良県立万葉文化館) の各氏に釈読していただいた。記して感謝の意を表します。

第4章 まとめ

(1) はじめに

今回の調査地は、豊臣秀吉によって造られた寺町の一部で、鴨川右岸に築かれた御土居の西側(洛中)に位置する。史料¹⁾では、北から「教安寺」「生蓮寺」「専稱寺」の寺域にあたっている。調査区内は旧校舎によって一部攪乱を受けていたが、遺構の残存状況は良好であった。調査では室町時代後期から幕末まで4面8時期の遺構・遺物を多数検出した。検出した遺構には、当地に寺町が形成される以前の遺構、寺院期の遺構、寺院が移転した跡地に転入してきた公家(高辻家)屋敷と町屋の遺構に大別できる。以下、適宜文献・絵画史料から知られる内容を加えて、各時期の遺構の変遷をまとめる。なお、土層番号は第2章図6に対応する。

(2) 遺構の変遷(図27～31)

河川氾濫堆積層 室町時代以前

今回の調査では、第5層より下層は砂礫層が厚く堆積し、室町時代前期以前の遺構は確認できなかった。この層はラミナの状況などから、おおむね北から南への堆積層であり、鴨川の氾濫に伴う堆積と考えられる。出土した遺物には磨滅した古墳時代の土器小片や平安時代の土器・軒瓦がある。なお、平安時代の緑釉瓦が少量であるが出土している。このうち、平安時代の遺物は当地の北にあった法成寺と関連したものと考えられる。

I 期 室町時代後期から安土桃山時代(図27)

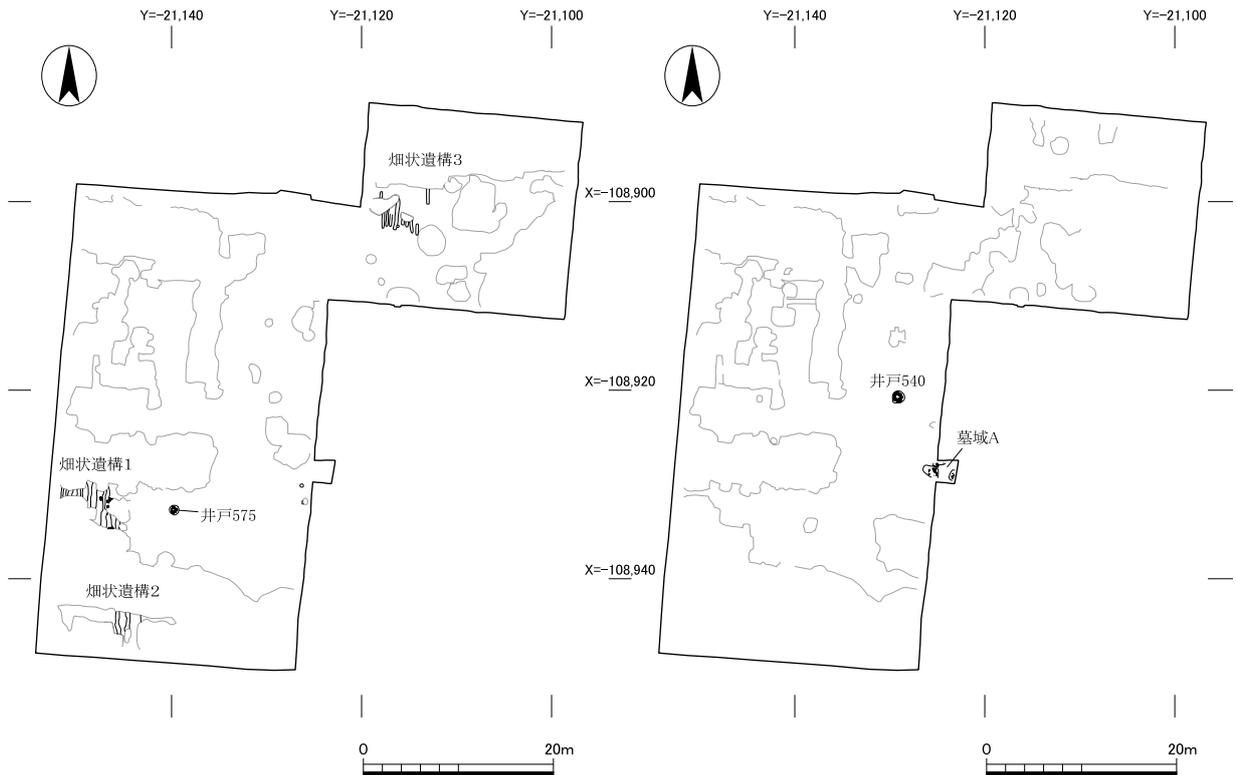
第4層上面で検出した16世紀ごろの遺構群である。室町時代後期から寺町形成までの時期である。この時期の遺構としては、畑状遺構と井戸がある。畑状遺構は3箇所検出し、いずれも南北方向に畝が作られる。鴨川の氾濫が収まり、土地が安定した後に畑が営まれたと想定される。井戸575は出土する遺物から寺町形成に従って埋められたと考えられる。

II a 期 安土桃山時代から江戸時代前期前半(図27)

天下統一を果たした豊臣秀吉は天正19年(1591)、京都改造の一環として御土居を築造、これと同時に洛中に散在する寺院を鴨川右岸の御土居の西側に集め寺町を整備した。前掲の史料などには寺院名や間口・奥行の寸法が詳細に記されており、当地には「教安寺」「生蓮寺」「専稱寺」が造営された。調査では、第3b層上面で16世紀末から17世紀前期前半までの寺町存続期前半の遺構である墓域Aや井戸を検出した。生蓮寺に属する墓域Aの墓から出土する六道銭は、輸入銭のみである。したがって、墓域Aの墓は、寛永通寶流通以前のもと考えられる。墓567からは、少なくとも2体の成年から壮年男性の人骨が出土した。井戸540は出土する遺物の年代から、第IIb期の寺院基壇が造られるまでは存続したと考えられる。

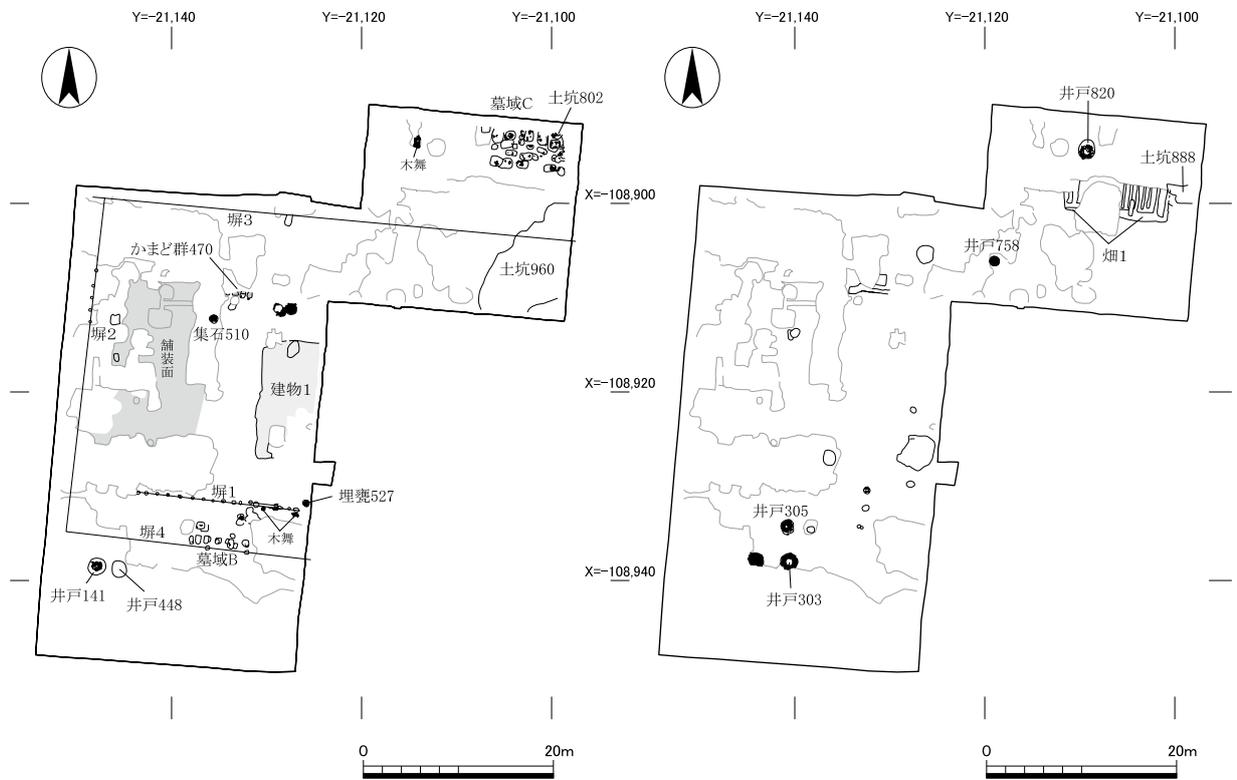
II b 期 江戸時代前期後半(図27)

江戸時代前期から宝永5年(1708)の宝永の大火までの遺構である。第3b層上面で検出した。



I 期(室町時代後期～安土桃山時代)の遺構
寺町以前

II a期(安土桃山時代～江戸時代前期前半)の遺構
寺町前期



II b期(江戸時代前期後半)の遺構
寺町後期～宝永の大火

II c期(江戸時代中期前半)の遺構
宝永の大火～高辻家転入

図27 I・II期の遺構変遷図(1:800)

調査では、生蓮寺の寺域の北限(塀3)・西限(塀2)・南限(塀4)を検出し、寺域を明確にした。塀3と塀4との距離は36.0mであることが明らかとなり、これは、前掲の史料に間口「貳拾間」と記されていることと符合する。また、塀1の柱穴に入る土には宝永の大火の際の焼土が混じり、周囲には焼け焦げた土壁の木舞が残っていた。柱穴は1列であることから、この塀は築地塀のようなものではなく、比較的簡素な土塀で、生蓮寺の堂舎と墓域を区画する塀であったと考えられる。西を限る塀2の東で礫敷の舗装面を検出した。建物1は井戸540を埋めて造営された南北棟の建物である。建物1の北西には東西に4基以上連なるかまど群470があり、周囲に建物の存在を想定できる。建物1を本堂、かまど群周辺を庫裏と想定するならば、通り(現在の新烏丸通)に開かれた門から境内に入ると礫敷の舗装面があり、正面に本堂、その北に庫裏があり、本堂の南から墓に入るという建物配置となる。生蓮寺は宝永の大火後、鴨東に移転し、現代も法灯を繋いでいるが、明治18年(1885)に作成された「寺院明細帳」(図29)に添付された図面はこれとほぼ同じ配置となる。寺は明治時代末期に焼失し再建されるが現在の生蓮寺もその配置をほぼ踏襲している。

この時期の墓域は2箇所を検出した。塀3・4を検出したことから、墓域Bは生蓮寺、墓域Cは教安寺に属することがわかった。生蓮寺の墓域は新旧2時期あり、Ⅱa期の墓域AはⅡb期に墓域Bへと移転している。墓から出土した人骨について鑑定を行ったところ、1箇所の墓坑に複数体の人骨が入るものが多いことがわかった。また、同じ場所で何度も埋葬が繰り返されていることが確認できた。しかし、墓の上部が大きく削平を受けており、新旧関係を確認することはできなかった。土坑802には慶長9年(1604)から延宝4年(1676)年までの年号のある墓石や一石五輪塔が投棄された状態で出土し、延宝の頃に墓域が再整備されたとみられる。A・B・Cの3墓域とも、墓からは、人骨、歯牙、漆器、六道銭、鉄釘などが出土した。人骨は概ね大腿骨・脛骨が鉛直方向で検出すること、墓坑壁にわずかながら木質を確認できるものがあること、等間隔に鉄釘が並ぶものがあることから、この3寺院では主として木製の座棺を用いていたことがわかった。多くの墓から六道銭が出土し、中には漆器椀を伴うものや布に包まれたものがあった。六道銭には裏面に「文」の銘が入るいわゆる文銭のみからなる組み合わせはない。寛文8年(1668)初鑄の文銭の流

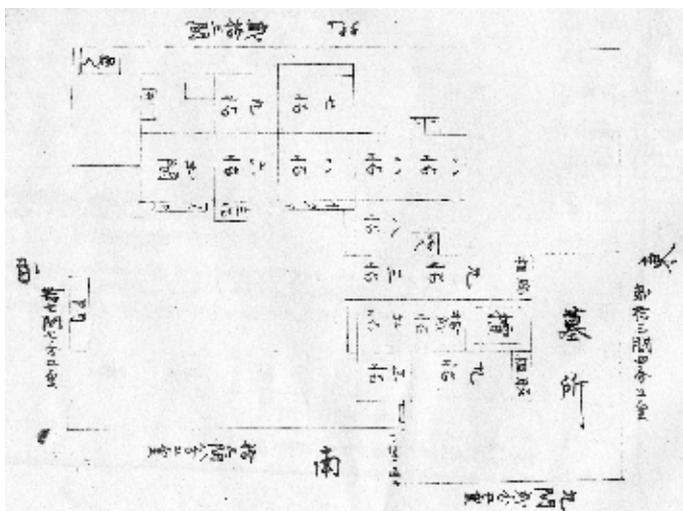


図29 「寺院明細帳」 明治18年(1885)(京都府総合資料館蔵)

通期間を考えると、初鑄から暫時切り替わっていく時期に年代を与えることができると思われる。1708年の宝永の大火で寺院が焼亡してしまうことと照合する。出土する墓石・五輪塔に刻まれた年号も、寺の存続年代と重なる。

Ⅱc期 江戸時代中期前半(図27)

第3a層上面で検出した18世紀初頭から18世紀半ばまでの遺構群である。1708年の宝永の大火以降、高辻家が内裏から転入してくるまでの時期となる。

第1章で述べたように、宝永の大火後、寺院を鴨東に移し、跡地に町ごと民家を移転させている³⁾。宝永の大火直後の絵図⁴⁾では当地は町屋と記される。高辻家は宝永6年(1709)の絵図⁵⁾に「高辻侍従」として内裏北東部に記される。調査では、畑や土坑・井戸などが見つかり、町屋の裏庭で小規模な畑作が行われていたと考えられる。出土する遺物の下限は18世紀半ばまでに限られる。現在確認できる古絵図の中では、享保5年(1720)の絵図⁶⁾に「高辻」は内裏北東部に記され、当地に「高辻」はない。寛保元年(1741)の絵図⁷⁾から当地に「高辻」と記され(図30)、この頃には、高辻家が内裏から移転していることがわかる。これは、18世紀半ばまでに限られる遺構群と合致する。



図30 「増補再板京大絵図」乾(部分) 寛保元年(1741) 『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年より加筆し転載した。

Ⅲ a期 江戸時代中期後半(図28)

第2b層上面で検出した18世紀半ばから18世紀末までの遺構群である。高辻家転入以降、天明8年(1788)の天明の大火までの時期となる。この時期には建物、飛石の配された池や庭、水溜や集水枡があり、当地に営まれた公家屋敷の様相を明らかにすることができた。

2区南東部では、建物・集石・石列などと合わせて礫敷路面や木戸となる遺構などを検出、また、埋甕・供養塔などが出土した。建物3の北には漆喰面、南には固く締まる三和土面、西には幅約1.5mの礫敷路面がある。礫敷路面の西には埋甕860や土坑846がある。埋甕や土坑は周囲を一辺1.0mの正方形に石列で囲む丁寧な造りであった。建物3の南西には木戸923がある。その周辺では寛永九年銘供養塔が笠部と台石と分散した状態で出土したが、この3石(石34・39・40)は組み合わせることができる。供養塔は埋甕860もしくは土坑846上部に設置されていたものとみられる。木戸923を出入口として、礫敷路面を北へ通り、その東に建物3、西に供養塔があるという景観が復元できる。

これらの状況から、18世紀前半の高辻家転入の際、旧地から供養塔を持ち込み設置し、その下には埋甕860、土坑846などに何らかのものを運び込んで埋納したものとみられる。礫敷路面下層で検出した埋甕861はこれらの施設造営の際の地鎮遺構であろう。遺構・遺物の性格からみると、この区域は高辻家屋敷地の北東部を設けられた先祖供養の場とみられ、さらにいえば、建物3は屋敷内持仏堂であった可能性もある。屋敷内からは供養塔は3基出土し、いずれも「寛永」の銘がある。これらを設立しえたのは生没年からみると高辻遂長(1600～1642)、またはそれに関連する人物と考えられる⁸⁾。遂長は天正8年(1580)以来断絶していた高辻家を再興した人物である。

屋敷地南部には景石を配した池やそれに続く飛石、建物などがあつた様子も復元できる。これらの遺構は天明の大火による焼土と火災整理層に覆われる。

出土する土器類には、土師器の比率が高く、江戸時代に入っても土師器を多量に用いる公家らしい特徴がある。埋納土坑741では特徴のある土師器を合わせ口にし、6組を埋納していた。

各遺構から見つかった食物残滓の同定を行ったところ、ヤマトシジミ・ハマグリ・アカガイ・サザエ・アワビ類の貝類やマダイ・ヒラメ・ニシン科・サバ属・ハモ属・タラ科などの魚骨などがあった。高辻家屋敷北部で検出した土坑472では、ヤマトシジミの比率が特に高い特徴がある。同じく土坑255では多種多様な動物遺存体が出土、中でも見栄えのする大型のマダイやスッポン、カモ科などの出土が目できよう。土坑255から出土する淡水魚は魚骨類全体の5.5%に留まり、海水魚の割合が非常に高く、内陸にありながら海水魚の消費が盛んであったこともわかった。これらの資料は、当時の公家の食生活を知る材料となるとともに、この時期には、すでに海産物の保存加工技術や流通網の向上があったといえる。また、集石393の埋土の花粉分析を行い、マツ属が優占することなどがわかり、当時の植栽について基礎資料を得ることができた。

1区南では一定間隔に並ぶ石組井戸跡を検出、出土遺物には日常雑器が多く、旧丸太町通に面して並んだ町屋のものともみている。土坑279は高辻家屋敷の南端にあり、ごみ穴として使用されていたのが天明の大火で最終的に埋め立てられたと考える。この公家屋敷と町屋の境は、ほぼ堀4（宝永の大火前の生蓮寺と専稱寺の境）を踏襲している。

Ⅲ b 期 江戸時代後期前半（図28）

1788年の天明の大火後の整地層で、第2a層となる。多量の遺物が出土した。被熱により赤変した瓦、融着したり釉が発泡した陶磁器が多かった。他にも火災整理土坑652からは「内ぐもりの土器」の可能性のある土師質土器（316）が出土し、屋敷内で儀式に使用されたものとみられる。土坑749からは石製の合子（石1）や文鎮（石3）、円面硯（石6）、印章（石10）が出土、また、整地層からも印章（石12）が出土、文章博士としての高辻家の一面を窺うことができる。

Ⅲ c 期 江戸時代後期後半（図28）

第1b層上面で検出した18世紀末から19世紀中ごろまでの遺構群である。1788年の天明の大火以降、1864年の禁門の変による元治の大火までの時期となる。遺構は火災処理土坑の他、浸透枡・

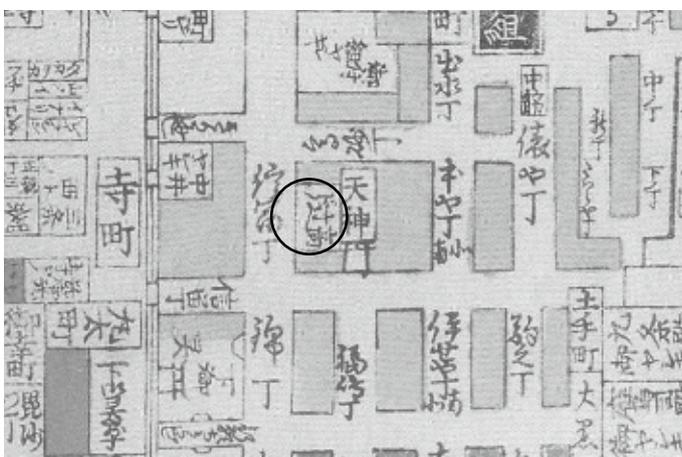


図31 「京町御絵図」（部分） 明治2年（1869）『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』 柏書房 1994年より加筆し転載した。

水溜・井戸など深く穿たれた遺構が残るのみで、元治の大火後の整地によりかなり削平されたと考えられる。石室300からはガラス製の髪飾り・紅皿・禁裏注文品の椀などが出土した。大型の井戸270は石組の一部に大型の石を庭石状に組み、景観も考慮したとみられる。この井戸からは梅花文のスカシ孔が施される火鉢、ヨーロッパ陶器、土人形の大型臥牛2個体、中型臥牛1個体、一対の狐、ハマグリ・ヤマトシ

ジミなどの貝類、マダイ・ハモ属・ブリ属などの魚骨、ニワトリ・カモ科の鳥類の骨が多く出土した。集石179は浸透枡で、丸瓦を利用し平面形を梅花状に造る。火鉢のスカシヤ、浸透枡の造りは高辻家の家紋である梅鉢文を想起させる。これらの遺構・遺物は当時の高辻家の生活を物語る良好な資料となった。臥牛像⁹⁾については、天明6年(1786)の絵図以降、当地は「高辻」の文字の他に「天神」の文字や鳥居のしるしが入る。鳥居は北進してきた新榎木町通が丸太町通に突き当たった正面に描かれる。井戸270出土の臥牛像や狐像は天神社との関連があると考えられる。天神社は明治2年(1869)刊行の絵図¹⁰⁾にまで描かれる(図31)。『京都坊目誌』によると、学校設置寸前まで祠が残っていたようである¹²⁾。

Ⅲ d 期 幕末～明治時代初頭 (図28)

第1a層上面で検出した19世紀中ごろから後半までの遺構群である。1864年元治の大火後から、高辻家転出、1877年に番組小学校が設置されるまでの時期の遺構である。土蔵や建物、園池などが営まれる。1区では北に土蔵1、南に池180・187、建物5が営まれたことがわかった。池180は黄褐色漆喰貼りの池で、池内に踏石が千鳥に配され、魚溜りも2箇所ある。その南には灰褐色漆喰貼りの池187がある。池南には東西に石列があり、池に張り出すように釣殿状の建物があった可能性も考えられる。両池には時期差は認められず、黄褐色の漆喰と灰白色の漆喰で景色の違いを楽しんだのかもしれない。建物5は湯殿と考えられ、南西隅にかまどが付随し、東には漆喰槽が取り付く。2区でも柵や溝を検出した。

また、塀6は高辻家屋敷の北を限る塀とみられるが、宝永の大火前の生蓮寺と教安寺の境界であった塀3を踏襲していることが明確になった。高辻家屋敷の南を限る境界は明確にすることはできなかったが、寺院期の境界であった塀4のラインより北で高辻家のごみ穴土坑279を検出していることと並んで、南で町屋に関連する遺構(1区南東部井戸群など)を検出しており、ちょうどこのラインあたりが、高辻家屋敷と町屋域の境界であるといえよう。検出した土蔵1や建物など全体的に方位が西に対して北に5～8度の振れがあり、これは塀4などの振れとほぼ同じであることなどと合わせると、当地は寺町形成期の土地区画の影響を明治期まで受けていたといえる。

(3) おわりに

今回の調査では、寺町の形成以前の様子、寺町の成立と寺院の境界・建物配置、大火による寺院焼亡、跡地に形成された町屋と公家屋敷の成立と変遷を層位的に把握できた。特に、大火による時期区分と居住者を明確にしたことから、近世京都における、寺院・公家屋敷・町屋の様相を比較・検討していく上で貴重な資料を追加することができた。

註

- 1) 「寛永十四年洛中絵図」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年 『洛中絵図寛永後万治前』 臨川書店 1979年など
- 2) 『寺院明細帳1』 京都府総合資料館蔵 1885年

- 3) 「春日学区」『史料京都の歴史 第7巻上京区』 平凡社 1980年
- 4) 「新板増補京絵図 新地入」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年
- 5) 「内裏之図」京都市歴史資料館蔵『京都古地図めぐり』伊東宗裕 2011年
- 6) 「御所二条廻り并町筋図」『大工頭中井家建築指図集-中井家所蔵本-』 株式会社思文閣出版 2003年
- 7) 「増補再板京大絵図 乾坤二舗」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年
- 8) 『公家事典』吉川弘文館 2010年
『宮廷公家系図集覧』東京堂出版 1994年など
- 9) 「天明六年京都洛中洛外絵図」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年
- 10) 「京町御絵図」『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房 1994年
- 11) 「京都坊目誌 上京第十七學區之部」『新修京都叢書第19巻』 臨川書店 1968年
「元高辻邸内に天満宮の祠ありて管神を祭る。學校となるに及び社殿を下御靈神社境内に移す。其後高辻子爵家より神靈を迎へ東京に還す。」
- 12) 下御靈神社の話では、「高辻家が東京で社殿を整えるまでの間、神靈を預かっていた。」という話である。

付章1 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

今回の調査地（上京区丸太町通河原町西入高島町）は、寺町旧域にあたる。豊臣期の周辺は、土塁（御土居）の内側にあたり、京内から集められてきた寺院で構成されていた。その後、宝永の大火によって焼失したあと大きく改変され、公家屋敷や町屋となることが確認されている。

今回の発掘調査では、近世の寺院期の墓域などが確認されている。今回の分析調査では、当時の古環境や古植生に関する情報を得ることを目的として、近世の集石393遺構埋土について花粉分析を実施する。また、近世の遺構の基盤をなす砂礫からなる河川堆積物中には、流路侵食により再堆積した砂質泥からなるラグ堆積物が確認されている。このラグ堆積物については、層相から、調査時に水田耕作土に由来する可能性が考えられている。そこで、このラグ堆積物について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行い、ラグ堆積物として取り込まれる前の古環境に関する検討を行う。

(2) 試料

調査地点は、集石393遺構と1区北壁深掘地点である。各地点の試料採取位置について以下に示す。

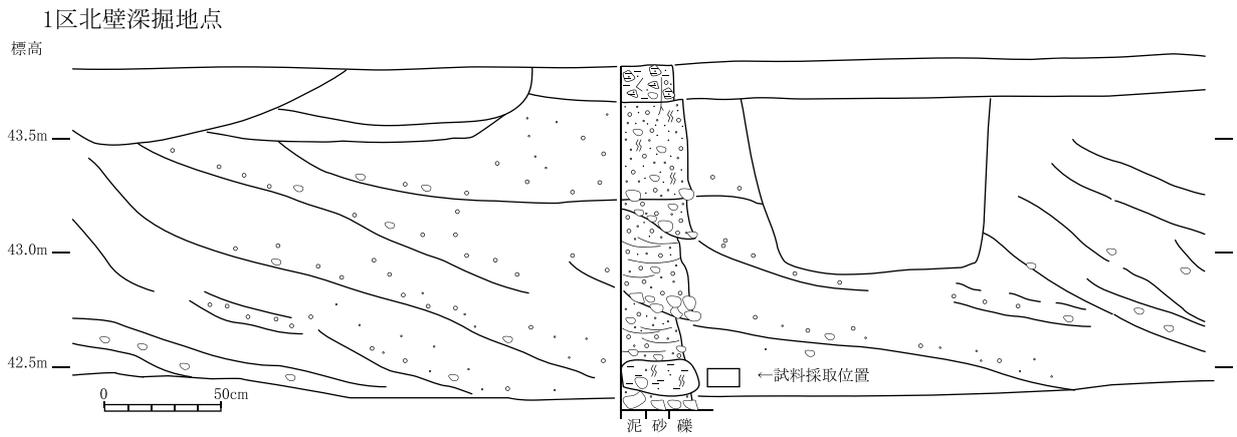
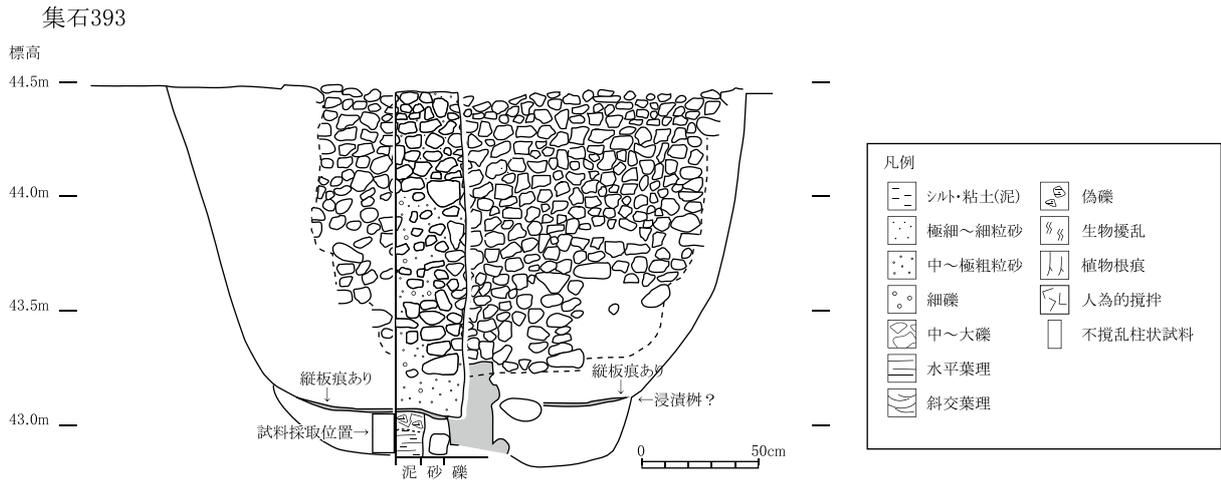
1) 集石393遺構

集石遺構は南北1.4m、東西2.0mの方形を呈する。遺構の断ち割り断面では、深さは1.60mで、上層を砂礫で充填し、下層はシルト層である。上層と下層の間に板材が確認されている。下層堆積物は、上部が人為的な攪乱が及んでいる層、その下部には水平葉理が発達した植物遺体を僅かに含む層からなる。図32に示す3層準について花粉分析を実施する。

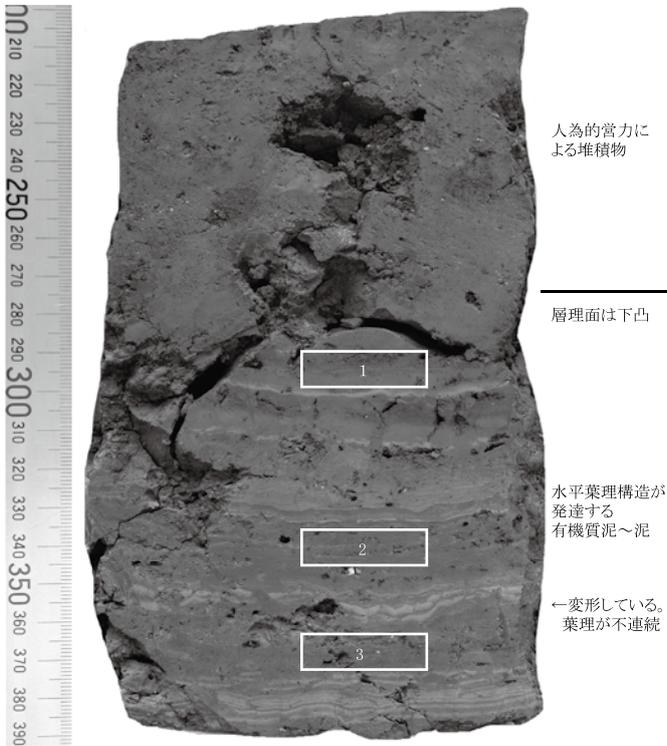
2) 1区北壁深掘地点

近世の遺構の基盤をなす堆積物はトラフ型斜交葉理の発達する砂礫からなる河川堆積物である。断面写真をみると、複数回の侵食・堆積を繰り返しながら、西側から東側に付加している状況が確認される。

深掘北壁断面西側の最下位の流路充填堆積物の基底には大きさ20～30cm程度の未固結のラグ堆積物を伴っている。このラグ堆積物は流路の侵食作用により、流路壁・底の堆積物が削剥され、砂礫層中に取り込まれたものと判断される。ラグ堆積物の層相は礫混じりの細粒砂質泥～泥からなる。不明瞭ながら成層しており、擾乱層準を挟在している。発掘調査時の所見として、水田耕作土に由来する可能性が考えられている。この擾乱層準について珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。



集石393遺構試料写真



四角範囲:花粉分析試料採取位置

1区北壁深掘地点の砂礫層中のラグ堆積物試料写真

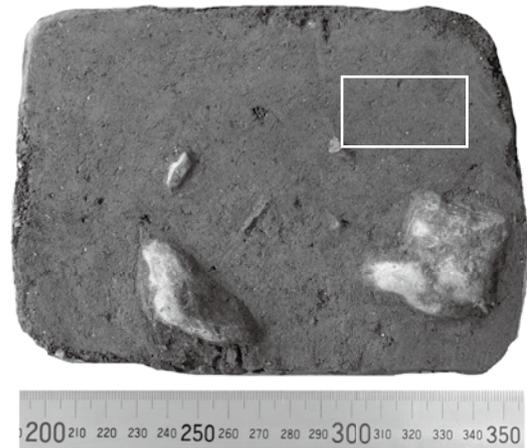


図32 調査地点の位置及び堆積物試料写真

(3) 分析方法

1) 珪藻分析

湿重約3gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で同定・計数する。

2) 花粉分析

花粉分析は、試料約10gを秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989) などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007)、三好ほか (2011) 等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

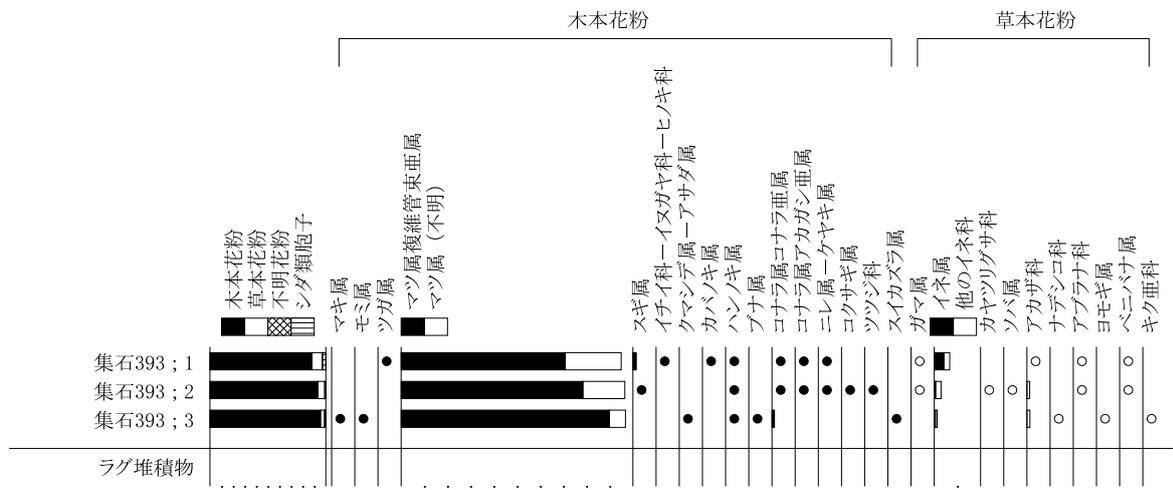
3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量層位的変化を図示する。

表5 花粉分析結果

種 類	上段:地点、下段:試料名			
	集石393			1区北壁深掘 ラグ堆積物
	1	2	3	
木本花粉				
マキ属	-	-	2	-
モミ属	-	-	1	-
ツガ属	2	-	-	-
マツ属複維管束亜属	196	247	335	-
マツ属(不明)	67	57	26	-
スギ属	4	1	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	1	-
カバノキ属	1	-	-	-
ハンノキ属	2	2	1	-
ブナ属	-	-	2	-
コナラ属コナラ亜属	1	2	4	-
コナラ属アカガシ亜属	2	1	-	-
ニレ属-ケヤキ属	1	1	-	-
コクサギ属	-	1	-	-
ツツジ科	-	3	-	-
スイカズラ属	-	-	1	-
草本花粉				
ガマ属	1	1	-	-
イネ属	13	2	2	-
他のイネ科	8	8	3	-
カヤツリグサ科	-	1	-	-
ソバ属	-	1	-	-
アカザ科	2	4	5	-
ナデシコ科	-	-	1	-
アブラナ科	1	1	-	-
ヨモギ属	-	-	1	-
ベニバナ属	3	1	-	-
キク亜科	-	-	1	-
不明花粉				
不明花粉	1	-	1	-
シダ類胞子				
ヒカゲノカズラ属	1	-	-	-
他のシダ類胞子	8	4	4	4
合 計				
木本花粉	277	315	373	0
草本花粉	28	19	13	0
不明花粉	1	0	1	0
シダ類胞子	9	4	4	4
合計(不明を除く)	314	338	390	4



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
○●は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料において検出された種類を示す。

図33 花粉化石の層位分布

(4) 結果

表6 植物珪酸体分析結果

1) 珪藻分析

1区北壁深掘地点のラグ堆積物からは、Fragilaria属の破片が1個体認められたのみである(図35)。ほとんど溶解してシリカの沈着が厚い部分が残っているにすぎないことから、状態としては極々不良である。

2) 花粉分析

結果を表5、図33に示す。1区北壁深掘地点のラグ堆積物からは花粉化石はほとんど検出されない。

集石393埋土最下部の3層準の試料からは花粉化石が検出され、保存状態も比較的良好である(図34)。

花粉化石群集は層位的に大きな変化を示さない。いずれの層準も木本花粉化石がほとんどを占め、各種類ではマツ属(主に複維管束亜属)が木本花粉全体の約90%を占める。その他、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属等がわずかに産出する。草本花粉は少なく、イネ科やアカザ科等がわずかにみられる程度である。栽培種はイネ属、ソバ属、ベニバナ属が検出される。

3) 植物珪酸体分析

結果を表6に示す。1区北壁深掘地点のラグ堆積物からは植物珪酸体が産出するものの、含量密度が800個/g程度と極めて少ない。産出する植物珪酸体の保存状態は悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるものが多い。産出する分類群(種類)はタケ亜科、ヨシ属で、栽培種のイネ属は認められない(図35)。

分類群	1区北壁深掘 ラグ堆積物
イネ科葉部短細胞珪酸体	
タケ亜科	200
ヨシ属	<100
不明	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
タケ亜科	200
ヨシ属	<100
不明	200
合計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	400
植物珪酸体含量	800

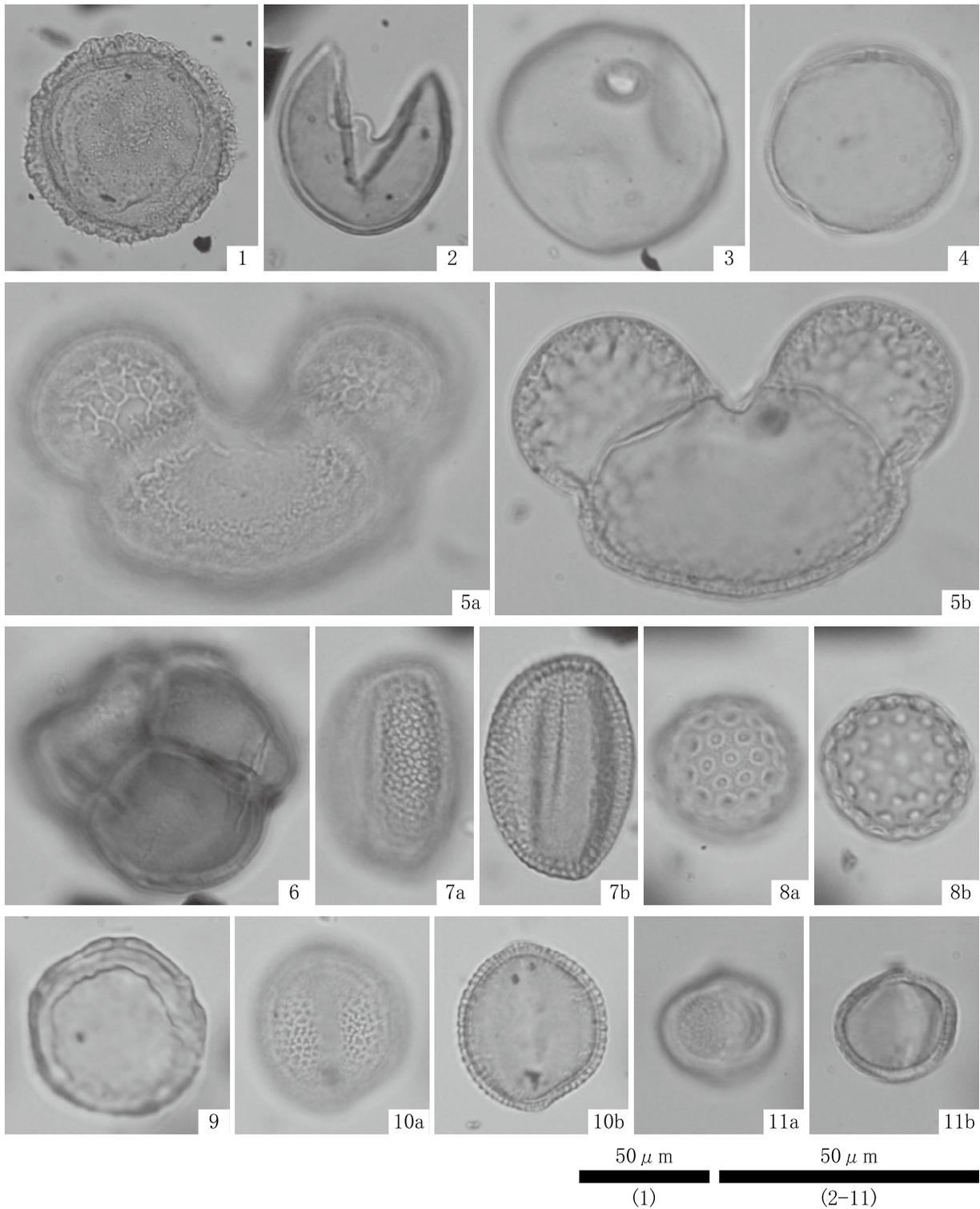
数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めている(100単位にする)。なお、<100は100個/g未満を示す。

(5) 考察

1) 1区北壁深掘地点のラグ堆積物

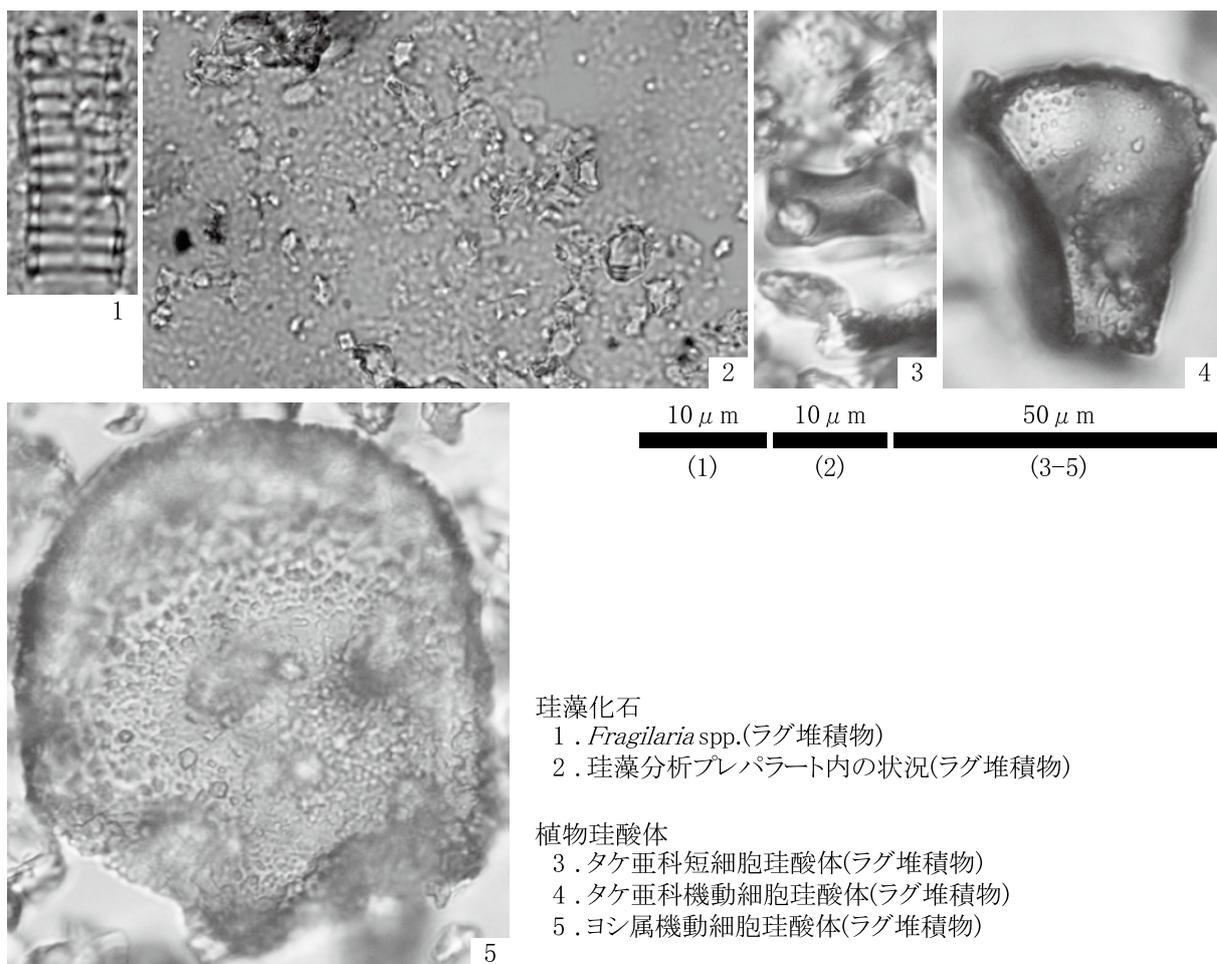
近世の遺構の基盤堆積物は、西から東に側方付加する流路充填堆積物からなり、発掘調査時の所見から古墳時代以降に形成されたと考えられている。流路充填堆積物基底で確認されたラグ堆積物の微化石分析では、植物珪酸体が認められたものの、その含量密度は少なく、珪藻化石、花粉化石もほとんど産出しなかった。また、僅かに産出した化石の保存状態はいずれも悪く、堆積後に風化作用の影響を受けていることが推定される。このような微化石の産状は、堆積後に好气的環境におかれた氾濫堆積物や、乾湿を繰り返すような堆積速度の速い後背湿地の堆積物における微化石の産状に類似する。ラグ堆積物の層相は、先述したように擾乱層準を挟在する成層する砂質泥～泥からなり、土壤生成層準を挟在していない。これらの化石の産状及び層相を踏まえると、ラグ堆積物は氾濫堆積物の再堆積物とみられる。

ラグ堆積物から産出した植物珪酸体はタケ亜科・ヨシ属である。タケ亜科は洪水や土壤流出によって裸地化した場所に先駆的に侵入して篠地を形成する種類、またヨシ属は湿潤な場所に生育す



- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1. ツガ属(集石393;試料2) | 2. スギ属(集石393;試料2) |
| 3. イネ属(集石393;試料2) | 4. 他のイネ科(集石393;試料2) |
| 5. マツ属(集石393;試料2) | 6. ツツジ科(集石393;試料2) |
| 7. ソバ属(集石393;試料2) | 8. アカザ科(集石393;試料2) |
| 9. ニレ属-ケヤキ属(集石393;試料2) | 10. アブラナ科(集石393;試料2) |
| 11. ヨモギ属(集石393;試料2) | |

図34 花粉化石



珪藻化石

1. *Fragilaria* spp.(ラグ堆積物)
2. 珪藻分析プレパレート内の状況(ラグ堆積物)

植物珪酸体

3. タケ亜科短細胞珪酸体(ラグ堆積物)
4. タケ亜科機動細胞珪酸体(ラグ堆積物)
5. ヨシ属機動細胞珪酸体(ラグ堆積物)

図35 珪藻化石・植物珪酸体

る種類を含むことから、上記のラグ堆積物が氾濫堆積物に由来することとも矛盾しない。また、栽培種のイネ属は確認されないことから、ラグ堆積物が氾濫堆積物を母材とする水田耕作土である可能性は低い。

2) 集石遺構埋土の花粉化石群集について

遺構埋土の花粉化石群集は、木本花粉が優占すること、その中でマツ属（複維管束亜属が主体）が優占することが特徴である。マツ属複維管束亜属は、極端な陽樹で痩せた裸地などにも生育する二次林を代表する種類であるほか、観賞用や用材などとして古くから植栽・植林されてきた種類である。

今回のような極小の堆積空間を充填する堆積物中の花粉化石群集は、堆積盆の大きさ、花粉化石群集、実際の植生等の対応関係に関する論理的なモデル研究（杉田,1999）に基づく、局所的な植生を強く反映していることが示唆される。すなわち、調査地点近辺にはマツ属花粉を供給したニョウマツ類が生育しており、草本花粉がほとんど産出しなかったこと、産出種の多くが人里植物であることから、草本植物がほとんど生育していなかったことが推定される。また、花粉化石群集が層位的にほとんど変化していないことから、堆積期間を通じて、周辺植生がほとんど変化していないことも窺える。

京都盆地の考古遺跡の花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社,2007・2008など）では、長岡京期～平安時代前期以降、それ以前に多産していたアカガシ亜属やスギ属などが減少傾向、マツ属が増加傾向を示すようになる。平安時代以降のマツ属花粉の増加パターンは、地点によって多少の差異があるが、急増するのは概ね12世紀以降である。近世の花粉分析結果は少なく、京都大学構内遺跡の花粉分析結果（富井ほか,2007）をみると、木本花粉ではマツ属が優占し、随伴種の構成が単調であることが特徴である。今回の結果も、京都大学構内遺跡の結果と同調的である。なお、マツ属は風媒花であり、花粉生産量が非常に多い植物である。このため、実際の植生の割合と比較して、花粉化石の割合が多くなる傾向にある。江戸時代の京都府内の絵図から古植生を解析した結果では（小椋,1990・1991など）、山地や庭園、寺社にマツが多いが、高木は少なく裸地化した山も多い。このことから、人為的な植生干渉によってマツの植林や二次林が増えたことは確かであろうが、伐採等により森林が失われたため、マツ属花粉が相対的に多くなったと考える方が妥当である。今回の結果も、このような周辺植生を反映している可能性もあるが、近辺のマツの植栽を反映している可能性もある。また草本花粉には栽培種のイネ属、ソバ属、ベニバナ属が産出しており、周辺での栽培、利用が推定される。

引用文献

- Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I) .Almqvist&Wiksell,539p.
- Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) ,147p.
- Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑,アクアコーラル企画,155p.
- 近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜,北海道大学出版会,387p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑,北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版) .大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 小椋純一,1990,「華洛一覽図」の考察を中心にみた文化年間における京都周辺山地の植生景観.造園雑誌 53,37-42.
- 小椋純一,1991,応挙図の考察からみた江戸中期における京都近郊山地の植生景観.造園雑誌 54,43-48.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2007,自然科学分析の成果.向日市埋蔵文化財調査報告書 長岡宮「翔鸞楼」修理式遺跡,財団法人向日市埋蔵文化財センター,183-215.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2008,自然科学分析.平安京右京六条一坊三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-7,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,39-62.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 杉田真哉,1999,人間と・環境系としての植生の復元と空間スケール-化石花粉はどこからとんできたのか- .ライブラリ 相関社会科学6 環境と歴史,新世社,89-110.
- 富井眞・吉江崇・伊東隆夫・外山秀一・上中央子,2007,京都大学北部構内BD28区の発掘調査.京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度,京都大学埋蔵文化財研究センター,201-262

付章2 出土した脊椎動物遺存体

丸山真史（東海大学海洋学部）

（1）概要

これまでの京都市内における近世遺構の調査では、様々な動物遺存体が出土しており、その大部分が公家屋敷、武家屋敷、町屋における食生活を示す食料残滓、骨角製品の製作にかかわるものである。

今回同定した動物依存体は、1区で14基、2区で2基の遺構から出土したもので、いずれも共伴する遺物から18世紀から19世紀にかけてのものと考えられる。出土量は破片数にして456点以上、それらのうち284点余りの種類や部位などを同定した¹⁾。その内訳は魚類239点、両生類15点、爬虫類6点以上、鳥類16点、哺乳類8点を数える（表7・8、図36）。土坑255と井戸270からの出土量が多く、特に土坑255では調査中に肉眼で確認したものを取り上げただけでなく、5mmメッシュ篩を用いて埋土を水洗選別し、100点を越える動物遺存体を採取した。

（2）種類別の特徴

a) 魚類 マダイ、キダイを含むタイ科が最も多く、マダイ88点、キダイ16点、種を特定できないタイ科17点を数える。次にサバ属が多く出土しており、20点を数える。ニシン科は15点出土しており、いずれもマイワシ、コノシロなどのイワシ類である。その他10点以下の出土量を示すものとしてトビウオ科9点、ハモ属とタラ科が8点ずつ、ボラ科、ブリ属、ヒラメが6点ずつ、コイ科、アジ科、アマダイ属が5点ずつ、カマス科とカレイ科が4点ずつ、フナ属が3点、サケ属、コチ科、スズキ属、ハタ科、フグ科が2点ずつ、ナマズ属、アユ、シイラ、マグロ属が1点ずつ出土している。

b) 両生類 いずれもカエル類であり、トノサマガエルより一回り大きな個体15点が出土している。

c) 爬虫類 スッポンが5点出土している。ヘビ類は椎骨が多数出土しており、1個体のものと考えられる。

d) 鳥類 カモ科とニワトリが8点ずつ出土している。カモ科はガン類とカモ類に相当する大きさのものが多く、ガン類相当の大きさの個体が多い。

e) 哺乳類 ネズミ科が7点出土しており、いずれも大型のクマネズミかドブネズミと推測される。また、ヒトが1点出土している。

（3）土坑255出土の動物遺存体

当遺跡で出土した動物遺存体の同定の結果、魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類の5分類群を同定した。いずれも食用になるが、カエル類、ヘビ類、ネズミ科が食用となったものであるかは定

表7 動物遺存体種名表

硬骨魚綱 Osteichthyes	アジ科の一種 Carangiae gen. et sp. indet.
ウナギ目 Anguilliformes	タイ科 Sparidae
ハモ科 Muraenesocidae	マダイ <i>Pagrus major</i>
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	キダイ <i>Dentex tumifrons</i>
ニシン目 Cluperiformes	タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet..
ニシン科 Clupeidae	カマス科 Sphyraenidae
ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.	カマス科の一種 Sphyraenidae gen. et sp. indet.
コイ目 Cyprinida	サバ科 Scombridae
コイ科 Cyprinidae	サバ属の一種 <i>Scomber</i> sp.
フナ属の一種 <i>Carussius</i> sp.	マグロ属の一種 <i>Thunnus</i> sp.
コイ科の一種 Cyprinidae gen. et sp. indet.	カレイ目 Pleuronectiformes
ナマズ目 Siluriformes	ヒラメ科 Bothidae
ナマズ科 Siluridae	ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>
ナマズ属の一種 <i>Silurus</i> sp.	カレイ科 Pleuronectidae
サケ目 Salmoniformes	カレイ科の一種 Pleuronectidae gen. et sp. Indet.
サケ科 Salmonidae	フグ目 Tetraodontiformes
サケ属の一種 <i>Oncorhynchus</i> sp.	フグ科 Tetraodontidae
アユ科 Plecoglossidae	フグ科の一種 Tetraodontidae, gen. et sp. indet.
アユ <i>Plecoglossus altivelis</i>	両生綱 Amphibia
タラ目 Gadiformes	無尾目 Anura
タラ科 Gadidae	無尾目の一種 Anura, fam., gen. et sp. indet.
タラ科の一種 Gadidae gen. et sp. indet.	爬虫綱 Reptilia
メダカ目 Cyprinodontiformes	へビ目 Serpentes
トビウオ科 Exocoetoidae	へビ目の一種 Serpentes, fam., gen. et sp. indet.
トビウオ科の一種 Exocoetoidae gen. et sp. indet.	カメ目 Chelonia
ボラ目 Mugiliformes	スッポン <i>Trionyx sinensis</i>
ボラ科 Mugilidae	鳥綱 Aves
ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.	カモ目 Anseriformes
カサゴ目 Scorpaeniformes	カモ科 Anatidae
コチ科 Platycephalidae	カモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet.
コチ科の一種 Platycephalidae gen. et sp. indet.	キジ目 Galliformes
スズキ目 Percidae	キジ科 Phasianidae
スズキ科 Percichthyidae	ニワトリ <i>Gullus domesticus</i>
スズキ属の一種 <i>Lateolabrax</i> sp.	哺乳綱 Mammalia
ハタ科 Serranidae	霊長目 Primates
ハタ科の一種 Serranidae gen. et sp. indet.	ヒト科 Hominidae
アマダイ科 Malacanthidae	ヒト <i>Homo sapience</i>
アマダイ属の一種 <i>Branchiostegus</i> sp.	齧歯目 Rodentia
シイラ科 Coryphaenidae	ネズミ科 Muridae
シイラ <i>Coyphaena hippurus</i>	ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet.
アジ科 Carangiae	
ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.	

表8 脊椎動物遺存体集計表

時期	遺構名	大分類	小分類	部位	左	右	-	計				
II b	土坑281	魚類	マダイ	椎骨			1	2				
				歯骨		1						
				キダイ	椎骨			1	1			
				タイ科	擬鎖骨	1			2			
II b	土坑960	哺乳類	クマネズミ属	寛骨		1		1				
				ヒト	大腿骨			1	1			
III a	土坑229	魚類	マダイ	主上顎骨		1		2				
III a	土坑255	魚類	ハモ属	前鰓蓋骨		1		2				
				椎骨			1					
				歯骨		1		2				
				ニシン科	椎骨			14	15			
				舌顎骨	1							
			フナ属	下鰓蓋骨			1	1				
			コイ科	尾部棒状骨			1	5				
				椎骨			4					
			アユ	椎骨			1	1				
			サケ属	椎骨			1	1				
				主上顎骨	1							
			トラ科	椎骨			3	5				
				歯骨	1							
			トビウオ科	椎骨			9	9				
			コチ科	前鰓蓋骨	1			1				
				椎骨			1					
			ボラ科	下鰓蓋骨		1		4				
				主鰓蓋骨		1						
				肩甲骨	1							
			ハタ科	椎骨			2	2				
			ブリ属	主鰓蓋骨		1		2				
				椎骨			1					
			アジ科	前上顎骨	1			5				
				擬鎖骨		2						
				椎骨			2					
			マダイ	上後頭骨			2					
				翼耳骨		1						
				椎骨			3					
				前上顎骨	1	4		24				
				歯骨		2						
				歯骨/前上顎骨		1						
				角骨	1	1						
				方骨		1						
				舌顎骨	1	1						
				前鰓蓋骨	1	1						
				主鰓蓋骨	1							
				擬鎖骨	1	1						
				キダイ	椎骨			12	12			
				タイ科	椎骨			9	10			
					歯			1				
カマス科	口蓋骨			1		3						
	椎骨			2								
サバ属	主上顎骨		1		15							
	主鰓蓋骨	1										
	前上顎骨		1									
	椎骨			8								
	歯骨	1	2									
	角骨		1									
カレイ科	椎骨			4	4							
ヒラメ	主上顎骨	1			4							
	椎骨			3								
フグ科	主鰓蓋骨	1			2							
	前鰓蓋骨		1									
爬虫類	スッポン	上腕骨	1			5						
		大腿骨	1									
鳥類	カモ科	椎骨			1							
		鳥口骨	1	1								
		上腕骨		1								
		下顎骨	1									
	尺骨	1			5							
	手根中手骨	1										
	橈骨	1										
III a	井戸294	魚類	マダイ	上後頭骨			1					
				主鰓蓋骨		1						
				前上顎骨		1						
				前鰓蓋骨	1	1		10				
				口蓋骨	1							
				方骨		1						
				椎骨			2					
				間鰓蓋骨	1							
				タイ科	副蝶形骨			1	2			
					第一神経間棘			1				
III a	井戸294	魚類	マダイ	椎骨			2	2				
III c	土坑301	魚類	ハモ属	舌顎骨		1		1				
				フナ属	主鰓蓋骨	1			1			
				マダイ	口蓋骨	1			1			
				キダイ	椎骨			2	2			
			アマダイ属	前鰓蓋骨		1			4			
				椎骨			1					
				舌顎骨	1							
				角骨	1							
				III c	石室300	魚類	タイ科	椎骨			1	1
				III c	壘606	爬虫類	ヘビ類	椎骨			1	1
III d	土坑88	魚類	マグロ属	椎骨			1	1				
III a	井戸294	鳥類	ニワトリ	大腿骨		1		2				
III a	土坑472	魚類	マダイ	鳥口骨		1		11				
				上後頭骨			2					
				主上顎骨	1	1						
				前上顎骨	1							
				前頭骨			3					
				口蓋骨	1							
				椎骨			2					
				ヒラメ	椎骨			1	1			
				III c	土坑237	魚類	ヒラメ	第1血管間棘			1	1
					ボラ科	主鰓蓋骨		1		1		
	マダイ	方骨	1			1						
III c	土坑240	魚類	カエル類	尾骨			1	1				
III c	土坑244	魚類	マダイ	前鰓蓋骨	1			1				
	タラ科	歯骨	1			1						
III c	井戸91	魚類	スズキ属	角骨		1		1				
III c	井戸270	魚類	ハモ属	前上顎骨		1		5				
				歯骨	2							
				角骨		1						
				フナ属	前鰓蓋骨		1		1			
				ナマズ	胸鰭棘	1			1			
				サケ属	椎骨			1	1			
				タラ科	椎骨			2	2			
				コチ科	舌顎骨		1		1			
				シラ	椎骨			1	1			
				ブリ属	主上顎骨		1			4		
					擬鎖骨		1					
					椎骨			1				
					舌顎骨	1						
				ボラ科	椎骨			1	1			
				スズキ属	前上顎骨		1		1			
				マダイ	上後頭骨		1			36		
			上擬鎖骨		1							
			主鰓蓋骨			1						
			前上顎骨			1						
			前頭骨				4					
			前鰓蓋骨		2	2						
			副蝶形骨				1					
			方骨		1							
			椎骨				17					
			歯骨			2						
			神経頭骨			2						
			角骨		1							
			キダイ	口蓋骨	1			1				
			タイ科	擬鎖骨	1			2				
			アマダイ属	椎骨			1	1				
			サバ属	角骨	1			1				
			両生類	カエル類	上腕骨	2			14			
					大腿骨		2					
					寛骨	2	1					
					尺骨	1						
					椎骨			2				
肩甲骨	1											
脛骨	1	2										
鳥類	カモ科	鳥口骨		1		3						
		肩甲骨		1								
		胸骨			1							
		胸骨			1							
ニワトリ	肩甲骨		1			6						
	上腕骨		1									
	仙骨			1								
	大腿骨		2									
哺乳類	ネズミ科	大腿骨	1			6						
		尺骨	1									
		寛骨	1									
		大腿骨	1	1								
	脛骨		1									
III c	土坑301	魚類	ハモ属	舌顎骨		1		1				
				フナ属	主鰓蓋骨	1			1			
				マダイ	口蓋骨	1			1			
				キダイ	椎骨			2	2			
III c	石室300	魚類	アマダイ属	前鰓蓋骨		1		4				
				椎骨			1					
				舌顎骨	1							
				角骨	1							

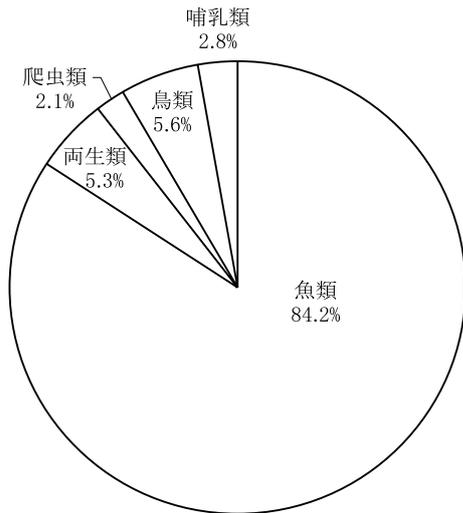


図36 脊椎動物遺存体の組成 (N=284)

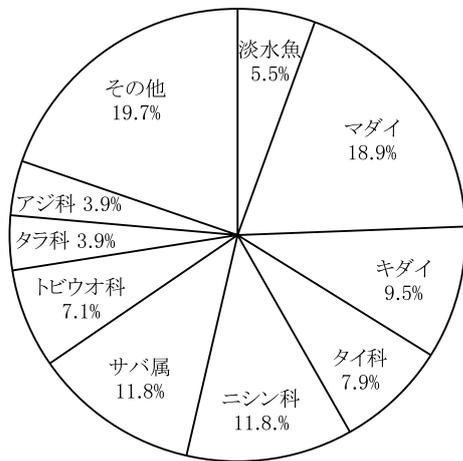
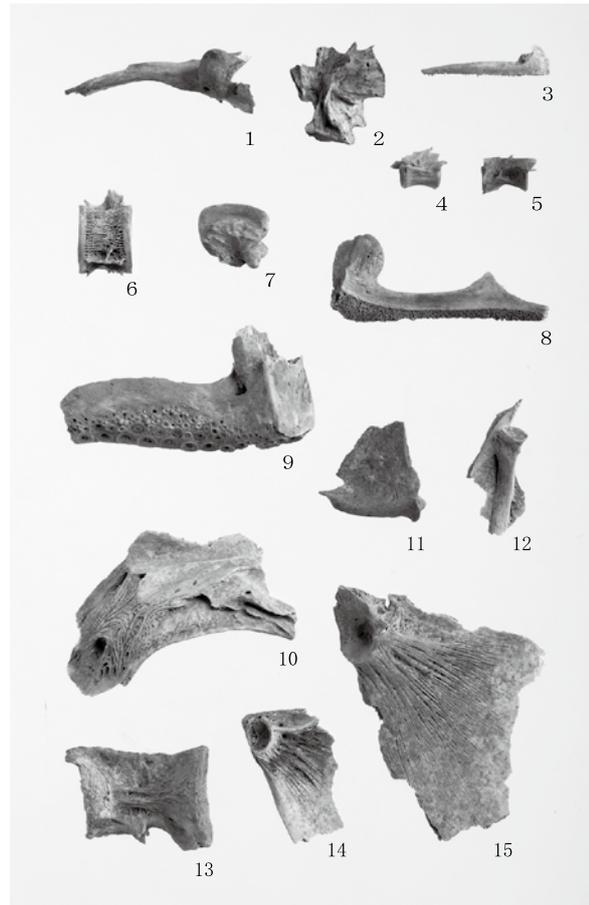


図37 土坑255出土の魚類組成 (N=127)



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 タラ科 主上顎骨(土坑255) | 9 マダイ 前上顎骨(土坑472) |
| 2 コチ科 舌顎骨(井戸270) | 10 マダイ 前頭骨(土坑472) |
| 3 サバ属 前上顎骨(井戸91) | 11 マダイ 方骨(土坑255) |
| 4 サバ属 椎骨(土坑255) | 12 フグ科 主鰓蓋骨(土坑255) |
| 5 サバ属 椎骨(土坑255) | 13 シイラ 椎骨(井戸270) |
| 6 サケ属 椎骨(井戸270) | 14 ボラ科 主鰓蓋骨(土坑255) |
| 7 ナマズ属 胸鰭棘(井戸270) | 15 ブリ属 主鰓蓋骨(土坑255) |
| 8 スズキ属 前上顎骨(井戸270) | |

図38 出土した動物遺存体

かではない。

高辻家屋敷の北西部に位置する土坑255から出土した脊椎動物遺存体は、屋敷が造営された1740年頃から1788年の天明の大火までの間に投棄されたものである。遺構埋土を水洗選別しており、微細片も採集している。魚類、爬虫類、鳥類が出土しており、いずれも食料残滓と考えられるものである。魚類が最も多く、20分類群を越える多様な魚種を利用している。それに対して爬虫類や鳥類はスッポンとカモ科の1種類ずつに留まり、出土量も多くない。比較的短期間に投棄された食料残滓としてみれば、魚類がよく利用されたと考えられる。一方で肉食が行われたことも注目されるが、イノシシやシカなどの獣肉食はみられない。

内陸に位置する京都であるが、淡水魚の出土は5.5%に留まり、海水魚の消費が盛んであることを指摘できる(図37)。マダイ、キダイなどのタイ科が最も多く、骨が大きく堅固であるため、イヌやネコなどによる食害をまぬがれ、土中における保存状態に恵まれたためと考えられる。近世遺構から出土するマダイは、しばしば前頭骨がみられるが、この土坑255からの出土はない。マダイの

大きさは小さくても体長20cm以上、大きな個体で60cm程度と推定され、30cmから50cmまでの個体が多く、見栄えするものが使用されたと言える。ニシン科（イワシ類）やサバ属がタイ科魚類に続いて多く、ハモ属やタラ科、カマス科など現代の京都でも馴染みのある魚種が消費されており、現代にも通じる食生活が営まれたことが想起される。一方、トビウオ科、ボラ科は現代の京都の食卓にのぼることは稀となっているが、近世遺構からの出土は珍しくない。寒海性のタラ科やサケ属（サケ・マス類）は、日本海側から持ち込まれたものと考えられる。

（4）小結

今回の調査では、魚類を中心に両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出土しており、大部分は食用と考えられる。井戸270から出土した外洋性のシイラは、武家屋敷跡と町屋跡から出土していたが、公家屋敷では初出である。公家屋敷で生じた生ゴミを投棄したと考えられる土坑255について注目すれば、100点を越える多様な海水魚の出土は、江戸時代中期の食生活が近現代にも通じる可能性は高く、海産物の保存加工や流通にかかわる交通、さらには市場経済の発達が推測される。

動物遺存体の分類・整理には東海大学文学部の宮本由子の協力を得た。末筆ではあるが、謝意を表す。

註

- 1) 甕606出土のヘビ類は椎骨が多数出土するが、1個体のものであり、他の動物種との量比が過大評価となるため、全数を計数の対象とせず、本文、図表では数量を1として表記する。

付章3 出土した貝類

池田 研（土佐市教育委員会）

ここでは寺町旧域調査で出土した貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑〔吉良哲明1954〕を利用しており、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻頂数の多数の方を原則として採用している。同定結果は表9・10の通りである。

今回同定した貝類は、近世から近代の初頭にかけての遺構から出土した13種1,234個体である。出土量の多い遺構としては、733個体が出土した土坑642を筆頭に、井戸270（120個体）、土坑472（105個体）などがある。出土した貝類はすべて食用種で、生息域別では汽水性種と鹹水性種から構成されている。種別ではヤマトシジミが961個体（77.9%）と最も多く、ハマグリが192個体（15.6%）、アカガイが33個体（2.7%）、サザエが15個体（1.2%）と続いており、アワビ類も各種を合計すると18個体（1.5%）が出土している。

次に個別の貝種について見ると、ヤマトシジミと同定したシジミ類には殻頂が発達したものが少量含まれており、それらはセタシジミの可能性がある。ハマグリは当地への水産物の供給元であった大坂の資料と比べると極小サイズのものが少なく、殻高計測値の平均はやや大きい〔池田2005・2010ほか〕。出土量が多いため井戸270資料の平均値が37.8mm（計測数38個体）、最小値が19.7mm、最大値が59.3mmで、分布は40～45mmにピークをもつ単峰形を示す。土坑244・301・354など他の遺構についても、平均値は井戸270資料とほぼ等しく、30mm台後半に収まっている。そのほか、サザエには遠隔地から搬入された可能性のある有棘型が含まれており、アカニシ・バイ・テングニシ・アカガイには抉りや孔など、調理痕とみられる人為的損傷〔池田2006〕が観察された。

続いて、既往の調査の成果と比較しながら、今回出土した資料の特徴について見てみると、当地域ではハマグリ・シジミ類が主要種となり、サザエ・アカガイ・アワビ類といった商品価値が高い種や、アカニシなど式正料理の食材として多用された種が高い比率を占めている資料が多いこと、テングニシなど日本海側から搬入されたと考えられる種が一定量含まれていること等が指摘されている〔丸山真史2013、池田・丸山2014〕。本資料の

表9 種名一覧

腹足綱 Gastropoda
メカイアワビ <i>Notohalotis sieboldi</i> (Reeve)
クロアワビ <i>Notohalotis discus</i> (Reeve)
アワビ属 <i>Haliotis</i> sp. Indet.
サザエ <i>Turbo (Batillus) cornutus</i> Solander
ボウシュウボラ <i>Charonia sauliae</i> (Reeve)
アカニシ <i>Rapana thomasiana</i> (Crosse)
バイ <i>Babyronia japonica</i> (Reeve)
テングニシ <i>Pugilina (Hemifusus) ternatana</i> (Gmelin)
二枚貝綱 Bivalvia
アカガイ <i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i> (Schrenck)
イタヤガイ <i>Pecten (Notovola) albicans</i> (Schroeter)
イタヤガイ科 Pectinidae gen. et sp. indet.
マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)
シオフキ <i>Mactra veneriformis</i> Reeve
ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i> Prime

表10 出土貝類一覧

遺構名	遺構面	時期	アカガイ	イタヤガイ	イタヤガイ科	マガキ	ハマグリ	シオフキ	ヤマトシジミ	カマイワビ	クロアワビ	アワビ類	サザエ	ホウシユウボラ	アカニシ	パイ	テングニシ	備考
土坑281	第3面	Ⅱb					1	1	1									寺院
池276	第2面	Ⅲa								1								公家屋敷
井戸294	第2面	Ⅲa	1				2		12									境界部
井戸754	第2面	Ⅲa							4									公家屋敷
土坑227	第2面	Ⅲa	1				2		2			1	1			●	1	公家屋敷
土坑229	第2面	Ⅲa	1				7		16				1(棘)					公家屋敷
土坑238	第2面	Ⅲa					1		5			●	殻1(棘)蓋1					公家屋敷
土坑255	第2面	Ⅲa					5		5			●					1	公家屋敷
土坑279	第2面	Ⅲa	2				1		1									公家屋敷
土坑351	第2面	Ⅲa	1			1	2				1							公家屋敷
土坑366	第2面	Ⅲa		●			6		1		1	1	殻3蓋1	1	1			公家屋敷
土坑402	第2面	Ⅲa	2						1				殻2蓋2					公家屋敷
土坑472	第2面	Ⅲa	1				2		101			●	●			1		公家屋敷
土坑266	第2面	Ⅲb	1				4		4			1	蓋1				1	公家屋敷
土坑749	第2面	Ⅲb					1					1						公家屋敷
石室300	第1面	Ⅲc	1				1		1						1			公家屋敷
埋甕606	第1面	Ⅲc	1									3						公家屋敷
井戸91	第1面	Ⅲc					1		3			1						町屋
井戸270	第1面	Ⅲc	3				55		56			4	1			1		公家屋敷
土坑237	第1面	Ⅲc	2		●		9		4			1	殻2蓋2		1	1		公家屋敷
土坑240	第1面	Ⅲc	2				5		5		1	●			1	1		公家屋敷
土坑244	第1面	Ⅲc	11				24		4	1		●	3(棘1)					公家屋敷
土坑301	第1面	Ⅲc					46		1								1	公家屋敷
土坑354	第1面	Ⅲc	2				17		3			●			●			公家屋敷
土坑642	第1面	Ⅲd	1				●		732									公家屋敷

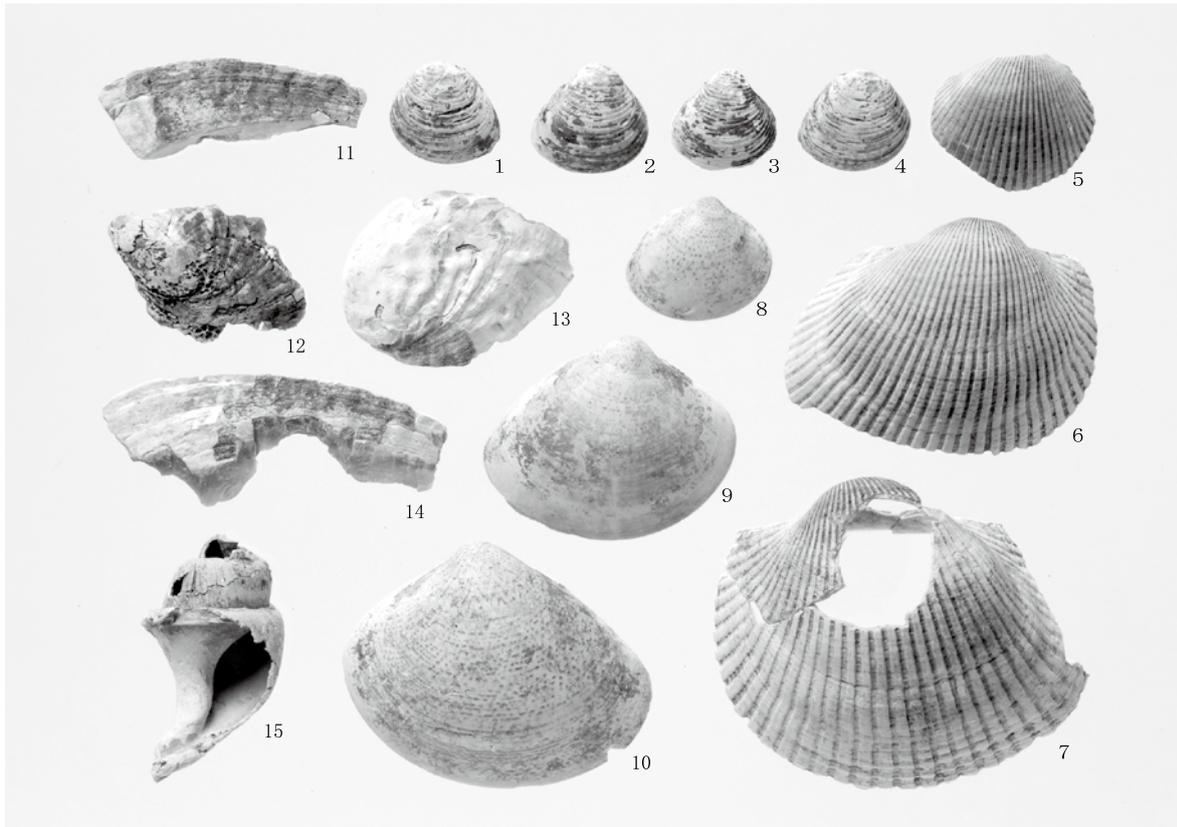
1) ●は殻頂・殻口部が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの。

2) (棘)は有棘型。

3) ヤマトシジミとしたものには殻頂が発達するものが少量あり、セタシジミが含まれている可能性がある。

構成はヤマトシジミを主体とし、ハマグリ・アカガイ・サザエ・アワビ類などが高い比率を占めており、当地域の近世に属する資料にみられるそうした傾向と、基本的に合致するものとして評価することができる。

一方、より微視的にシジミ類の占める比率の高さへ目を向けると、土坑642や472のように出土量が多く、シジミ類への偏りが顕著である遺構は、平安京左京六条三坊五町跡〔京都市埋蔵文化財研究所2005〕や、平安京土御門烏丸内裏跡〔古代学協会1983〕など、他の調査地でも検出例を見出すことができる。このようなシジミ類への指向を生んだ背景については、地域的あるいは時期的な人々の食文化的嗜好や、特定の階層の食材としての需要の存在〔丸山真史2013〕などが候補として挙げられる。さらに、大坂でもシジミ類など汽水・淡水性種の占める比率が18世紀以降に大き



1～4 ヤマトシジミ 5～7 アカガイ 8～10 ハマグリ 11～14 アワビ類 15 パイ

図39 井戸270から出土した貝類

く上昇していくことが知られており [池田2010]、供給元の動向に影響を受けた可能性もある。残念ながら現状では分析の対象となる資料母体数が少ないこともあり、明確な答えを得ることは難しいが、本資料は出土量が多だけでなく、出土地の居住者の階層が明らかであるという好条件を兼ね備えており、そうした課題を研究していく上での基礎資料として重要な意味をもつといえよう。

引用・参考文献

池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集 - 都出比呂志先生退任記念 -』、pp.859 - 886

2006、「大坂城跡 (03 - 1・OKS99) 出土の貝類」：大阪府文化財センター編『大坂城址Ⅲ』、pp.543 - 552

2010、「堂島蔵屋敷B地点 (DJ08 - 2次) 調査出土の貝類について」：大阪市文化財協会編『堂島蔵屋敷跡Ⅲ』、pp.78 - 86

池田研・丸山真史2014、「上方およびその周辺の水産資源」：『季刊考古学 第128号』雄山閣、pp.63 - 66

京都市埋蔵文化財研究所2005、『平安京左京六条三坊五町跡』

吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社

古代学協会1983、『平安京土御門烏丸内裏跡 - 左京一条三坊九町 -』

丸山真史2013、「近世、京都の魚食文化の特徴 - 近世三都の魚貝類の比較を通じて -」：動物考古学研究会編『動物考古学 第30号』、pp.121 - 135

付章4 出土した人骨の鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

今回の分析調査では、本発掘調査で出土した人骨について、埋葬者の性別や年齢等に関する情報を得ることを目的として骨同定を実施する。

(2) 試料

試料は、墓567、墓876、墓878、墓910A、墓910Bから出土した人骨である。人骨資料は堆積物ごとに取り上げられているものがほとんどで、墓567の整理番号1（取上本体）については、現地にて発泡ウレタンで固められ取り上げられている。各取上試料には、整理番号及び取上番号が付されているが、中にはこれら番号が付されていないものもある。詳細は結果と併せて表11に示す。

(3) 分析方法

発泡ウレタンで固め取り上げられた試料は、一般工作用接着剤をアセトンで溶かした溶剤で骨を補強した後、骨に付着した礫・砂・泥分を乾いた竹串、筆等を用いて可能な限り除去し、場合によっては一般工作用接着剤で接合する。なお、その他の試料でも礫・砂・泥分が付着する場合は同様な方法で除去する。堆積物除去後の骨試料を肉眼及び実体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種・部位を同定する。ただし、保存状態が極端にわるく、崩壊する恐れがある場合は、堆積物を除去しない状態で観察する。また、出土した歯牙については藤田（1949）に基づきデジタルノギスを用いて計測する。

今回の報告で使用している骨格各部の名称を図40に示す。また、文中に示す年齢については、幼児が1～5歳程度、小児が6～15歳程度、成人が16歳程度以上、成年が16～20歳程度、壮年が20～39歳程度、熟年が40～59歳程度、老年が60歳以上を表す。

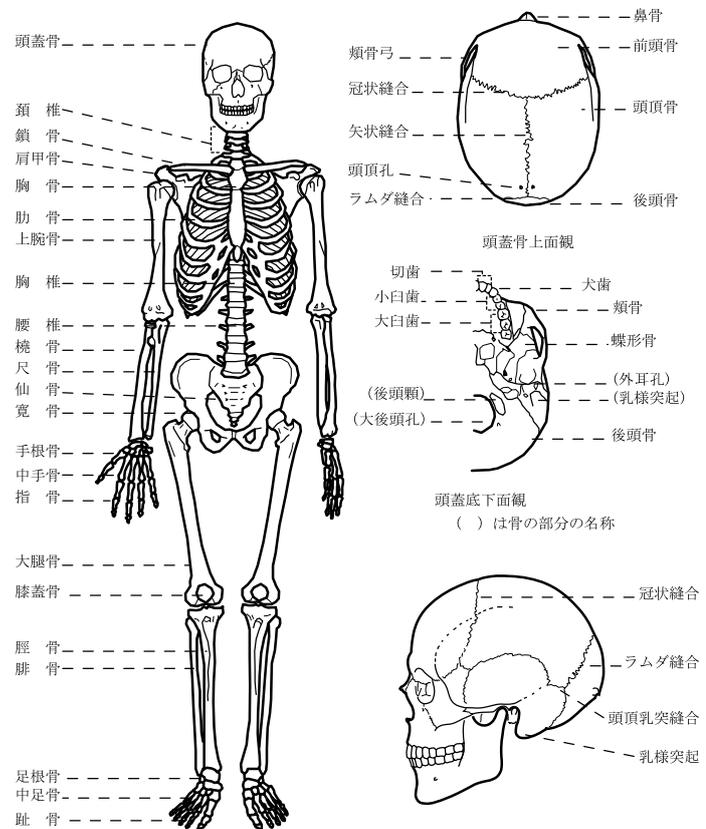


図40 人体骨格各部の名称

(4) 結果

各遺構出土試料の同定結果を表11に、歯牙計測結果を表12に示す。以下に遺構別に結果を記す。なお、表11の種類において、「ヒト?」としたものは、ヒトの可能性が高いものであるが、形態学的特徴が確認されていないものを示す。

1) 墓567

整理1(取上本体)では、頭蓋、右頬骨、左右上顎歯牙、右下顎骨、左右下顎歯牙、第1頸椎、第2頸椎、胸椎、右第1肋骨、肋骨、右肩甲骨、右鎖骨、左右上腕骨、右橈骨などが確認される。

整理2~4(取上1~3)は破片であるため、部位を特定できない。

整理5(取上4)では椎骨、踵骨、距骨、足根骨などが確認される。

整理6(取上5)では、椎骨、肋骨、左寛骨、右踵骨、右距骨、右中間楔状骨、四肢骨などが確認される。

整理7(取上6~9)では、取上6の試料で左上顎歯牙、左右下顎歯牙、上顎骨/下顎骨、取上9の試料で仙骨の可能性のある破片、四肢骨片や部位不明破片が確認される。

2) 墓876

整理8~12・14(取上1~5・6-2)の試料では、脳頭蓋、左右上顎歯牙、左右下顎歯牙、四肢骨片、部位不明破片などが検出される。

整理13(取上6-1)の遺構東半から出土した試料では、脳頭蓋、部位不明破片が確認される。

3) 墓878

整理15~19(取上1~5)の試料では、頭蓋、左右上顎歯牙、下顎骨、部位不明破片などが確認される。

整理20~32(取上6~14)の試料では、前頭骨、左右側頭骨、後頭骨、脳頭蓋、頭蓋、下顎骨の可能性のある破片、左右上顎歯牙、左右下顎歯牙、左上腕骨、大腿骨、四肢骨、部位不明破片などが検出される。

整理33~55(取上1~14)の試料では、脛骨の可能性のある破片、脳頭蓋、寛骨の可能性のある破片、左右大腿骨、左脛骨、脛骨、四肢骨、肋骨/四肢骨、部位不明破片などが検出される。

4) 墓910A

整理56~68(取上1~13)の試料では、左右頭頂骨、左右側頭骨、後頭骨、脳頭蓋、頭蓋、左右上顎歯牙、左右下顎歯牙、四肢骨、部位不明破片などが検出される。

整理68(取上14)の試料では、左右上顎歯牙、右下顎歯牙などが確認される。

整理68(取上15)では、脳頭蓋、頭蓋、左右上顎歯牙、左下顎歯牙、部位不明破片などが確認される。

5) 墓910B

整理69(取上14)の試料では、左右上顎歯牙、左右下顎歯牙などが検出される。

遺構名	整理番号	取上番号	種類	部位	左右位置	部分状態	数量	備考	写真番号	遺構名	整理番号	取上番号	種類	部位	左右位置	部分状態	数量	備考	写真番号		
墓878	45	8	ヒト	大腿骨	右	両端欠	1+		73	墓910A	67	12	ヒト	上顎第2小白歯	左	破片	1		129		
	46	9-1	ヒト	脛骨		破片	1+							上顎第1大白歯	左	破片	1		130		
	47	9-2	ヒト?	不明		破片	11+							上顎第2大白歯	左	破片	1		131		
	48	10-1	ヒト?	四肢骨		破片	2+	含土塊状						上顎第1切歯	右	破片	1		125		
	49	10-2	ヒト?	不明		破片	1+	含土塊状						上顎第2切歯	右	破片	1		124		
	50	10下	ヒト?	不明		破片	1+	土塊状						上顎第2小白歯	右	破片	1		122		
	不明				破片	1+	土塊状		上顎第1大白歯					右	破片	1		121			
	51	11-1	ヒト	大腿骨	左	両端欠	1+	土塊状						上顎第3大白歯	右	破片	1		120		
	52	11-2	ヒト?	四肢骨		破片	1+	土塊状						上顎小白歯		破片	2				
	53	12	ヒト	脛骨	左	両端欠	1+	土塊状						下顎犬歯	左	破片	1		140		
	四肢骨				破片	1+	土塊状		下顎第1大白歯					左	破片	1		143			
	54	13	ヒト?	不明		破片	1+	土塊状						下顎第2大白歯	左	破片	1		144		
	55	14	ヒト	寛骨?		破片	1+	土塊状						下顎第1小白歯	右	破片	1		134		
	墓910A	56	1	ヒト?	脳頭蓋		破片	3							下顎第2小白歯	右	破片	1		133	
四肢骨						破片	1+			下顎第2大白歯	右	破片	1		132						
不明						破片	18+			下顎大白歯		破片	1								
57		2	ヒト	頭頂骨	左	破片	1		74	切歯		破片	3								
					右	破片	49+		75	大白歯		破片	2								
58		3	ヒト	側頭骨	左	破片	1		76	歯牙		破片	21	エナメル質片							
					後頭骨		破片	1+		77											
					頭蓋		破片	61+													
59		4	ヒト	側頭骨	右	破片	1			上顎第2切歯	左	破片	1		127						
60		5	ヒト	上顎第1切歯	左	破片	1		82	上顎犬歯	右	破片	1								
					上顎第2切歯	左	破片	1		83	下顎第1切歯	左	破片	1		138					
					上顎犬歯	左	破片	1		84	下顎第2切歯	左	破片	1		139					
					上顎第1小白歯	左	破片	1		85	下顎第1小白歯	左	破片	1		141					
					上顎第2小白歯	左	破片	1		86	下顎第2小白歯	左	破片	1		142					
	上顎第1切歯				右	破片	1		81	下顎第1切歯	右	破片	1		137						
	上顎第2切歯				右	破片	1		80	下顎第2切歯	右	破片	1		136						
	上顎犬歯				右	破片	1		79	下顎犬歯	右	破片	1		135						
	上顎第1小白歯				右	破片	1		78	下顎大白歯		破片	1								
	下顎第2切歯				左	破片	1		93	歯牙		破片	14	エナメル質片							
	下顎犬歯				左	破片	1		94	上顎第2大白歯	左	破片	1		149						
	下顎第1小白歯				左	破片	1		95	上顎第2大白歯	右	破片	1		145						
	下顎第2小白歯				左	破片	1		96	下顎第1小白歯	右	破片	1		152						
	下顎第1大白歯				左	破片	1		97	下顎第1大白歯	右	破片	1		151						
下顎第1切歯	右	破片	1		92	下顎第2大白歯	右	破片	1		150										
下顎第2切歯	右	破片	1		91	下顎大白歯		破片	1												
下顎犬歯	右	破片	1		90	脳頭蓋		破片	3												
下顎第1小白歯	右	破片	1		89	頭蓋		破片	3												
下顎第2小白歯	右	破片	1		88	上顎第2小白歯	左	破片	1		147										
下顎第1大白歯	右	破片	1		87	上顎第1大白歯	左	破片	1		148										
									上顎第1大白歯	右	破片	1		146							
									下顎第2切歯	左	破片	1		153							
									下顎第2大白歯	左	破片	1		154							
61	6	ヒト?	不明		破片	1+	土塊状														
62	7	その他	土壌										ヒト?	不明		破片	44+				
63	8	ヒト	上顎第1切歯	左	破片	1		105	墓910B	69	14-1	ヒト	下顎第1大白歯	左	破片	1		177			
				上顎犬歯	左	破片	1							106	14-2	下顎第2大白歯	左	破片	1		178
				上顎第1小白歯	左	破片	1							107	14-3	上顎第2大白歯	右	破片	1		156
				上顎第2小白歯	左	破片	1							108	14-4	下顎第2小白歯	左	破片	1		176
				上顎第1大白歯	左	破片	1							109	14-5	上顎第1切歯	左	破片	1		162
				上顎第1切歯	右	破片	1							104	14-6	上顎第2小白歯	右	破片	1		158
				上顎第2切歯	右	破片	1							103	14-7	上顎第1大白歯	右	破片	1		157
				上顎犬歯	右	破片	1							102	14-8	下顎第1大白歯	右	破片	1		171
				上顎第1小白歯	右	破片	1							101	14-9	下顎第1小白歯	左	破片	1		175
				上顎第2小白歯	右	破片	1							100	14-10	下顎第2大白歯	右	破片	1		170
				上顎第1大白歯	右	破片	1							99	14-11	上顎第1小白歯	左	破片	1		159
				上顎第2大白歯	右	破片	1							98	14-12	上顎第2大白歯	左	破片	1		167
				下顎第2切歯	左	破片	1							115	14-13	上顎第1大白歯	左	破片	1		166
				下顎犬歯	左	破片	1							116	14-14	上顎第2小白歯	左	破片	1		165
				下顎第1小白歯	左	破片	1							117	14-15	上顎第1小白歯	左	破片	1		164
				下顎第2小白歯	左	破片	1							118	14-16	下顎犬歯	右	破片	1		173
				下顎第1大白歯	左	破片	1							119	14-17	下顎犬歯	左	破片	1		174
				下顎第2切歯	右	破片	1							114	14-18	下顎第2小白歯	右	破片	1		172
				下顎犬歯	右	破片	1							113	14-19	上顎第3大白歯	左	破片	1		155
				下顎第1小白歯	右	破片	1							112	14-20	上顎第3大白歯	右	破片	1		168
下顎第2小白歯	右	破片	1		111	14-21	下顎第3大白歯	右	破片	1		169									
下顎第1大白歯	右	破片	1		110	14-22	歯牙		破片	5	エナメル質片										
									上顎第2切歯	左	破片	1		163							
									上顎第1切歯	右	破片	1		161							
									上顎第2切歯	右	破片	1		160							
64	9	ヒト?	四肢骨		破片	52+															
65	10	ヒト?	四肢骨		破片	1+	土塊状														
66	11	ヒト?	四肢骨		破片	1+	土塊状														
67	12	ヒト	上顎第1切歯	左	破片	1		126													
				上顎犬歯	左	破片	1		128												

(5) 考察

今回の調査では、墓567、墓876、墓878、墓910A、墓910Bから出土した人骨について鑑定を行った。その結果、墓876・墓910Bを除く遺構では、同一部位が重複して検出されることから、複数個体が埋葬されていたと判断される。ただし、出土骨は全般に遺存状態が悪く、ここでは、骨よりも堅い歯牙について着目し、歯式を整理して、埋葬遺体数や性別・年齢等について検討する(表13)。以下、遺構別に記載する。

1) 墓567

少なくとも2体が埋葬されていると考えられる。整理7(取上6)の試料で検出された歯牙のうち、右下顎第1大臼歯は象牙質が咬頭部で点状に露出し、左右下顎第2大臼歯がエナメル質咬耗程度にとどまる形質を有する。このことから、この歯牙をもつ遺体は成年後半～壮年前半程度と考えられる。歯牙計測値からみると男性的である。

表13 出土人骨の歯式

遺構名	試料情報	部位	歯式																	
			右								左									
			M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
墓567	整理番号1 取上本体	上顎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
		下顎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
	整理番号7 取上6	上顎										○								
		下顎		○	○	○	○	○							○			○		
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
墓876	整理番号14 取上6-2	上顎							○		○			○	○	○	○			
		下顎			○		○	○							○	○	○	○		
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
	墓878	整理番号15 取上1	上顎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			下顎																	
			部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
整理番号22 取上6下		上顎											○	○						
		下顎			○					○			○	○	○	○				
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
墓910A	整理番号60 取上5	上顎																		
		下顎			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
	整理番号63 取上8	上顎		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○			
		下顎			○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
墓910B	整理番号67 取上12	上顎	○		○	○			○	○	○		○		○	○	○	○	○	
		下顎		○		○	○						○			○	○			
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
	整理番号68 取上13	上顎								○		○								
		下顎								○	○									
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		
整理番号68 取上14	上顎	○	○																	
	下顎		○	○		○											○			
	部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3			
墓910B	整理番号69 取上14	上顎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		下顎	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	
		部位	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3		

凡例 ◎:植立 ○:遊離

整理1（取上本体）でみられた人骨の歯牙は、右下顎第3大臼歯の萌出が不完全であるが、右上顎第3大臼歯が萌出しており、咬耗がほとんどみられない状態であった。また右上顎・下顎第1・2大臼歯の咬耗をみると象牙質が点状に露出する程度である。これらのことから整理1（取上本体）の遺体は成年後半～壮年前半程度と推定される。性別は、歯牙のサイズが男性的であり、乳様突起・眉上隆起が発達することから男性と判断される。

なお、本遺構から出土した骨には椎骨・四肢骨などがみられるが、遺存状態が悪く、上記のどちらの個体、あるいは別個体に由来するかは判断できない。

2) 墓876

1個体が確認される。出土した歯牙のうち、右下顎第1大臼歯の咬耗状況から壮年以上と判断され、左上顎第1小臼歯に咬耗にほとんどみられないことから壮年程度の可能性がある。歯牙計測値からみると男性的である。

3) 墓878

少なくとも2個体が確認される。整理15～19（取上1～5）の試料でみられた人骨は、右側を上にした状態で埋葬されていたとみられる。検出される歯牙をみると、左右上顎第3大臼歯はエナメル質が僅かに咬耗する程度で、右上顎第1大臼歯の象牙質が露出しないことから、成年後半～壮年前半程度と推定される。歯牙計測値をみると、男性的である。

整理22・32（取上6下・14）のでみられた歯牙は同一個体とみられる。左上顎第1大臼歯の象牙質が点状に露出する程度で、左上顎第2大臼歯に咬耗がほとんどみられないことから、成年後半～壮年前半程度の個体と考えられる。性別は、歯牙近辺で出土する整理21（取上6上）の側頭骨において、乳様突起がほとんど発達しないことから、女性と判断される。なお、右下顎第3大臼歯の萌出は不完全である。

整理33～55（取上1～14）の試料などで四肢骨などが検出されるが、遺存状態が悪く、上記個体のいずれか、あるいは別個体に由来するかは判断できない。

4) 墓910A

本遺構からは多数の歯牙が出土している。このうち、歯牙の形態的特徴をみると、整理67（取上12）と整理68（取上13）の試料の歯牙、及び整理68の取上14と整理15の歯牙が、各々同一個体に由来すると考えられる。したがって、墓910Aでは、これら2体のほか、整理60（取上5）の個体、整理63（取上8）の個体、の2個体が確認される。したがって、少なくとも4体の遺体が埋葬されているとみられる。

整理60（取上5）の個体は、第1・2小臼歯と第1大臼歯が萌出済みであることから、少なくとも12～15歳以降と考えられる。また、第1大臼歯に咬耗がほとんどみられないことから小児後半～成年程度とみられる。性別は不明である。

整理63（取上8）の個体は、左上顎第1大臼歯の歯冠部に火口状齲蝕がみられる。上顎第1・2大臼歯のエナメル質に咬耗がみられることから壮年以降と考えられる。なお、整理57（取上2）から検出されている左右頭頂骨は矢状縫合の内側が閉じかけていることから、壮年後半～熟年程度

に達していた個体と推定される。

この個体と整理63（取上8）の歯牙をもつ個体は同一個体の可能性もある。性別は歯牙計測値からみると女性的である。

整理67（取上12）と整理68（取上13）の歯牙をもつ個体は、第3大臼歯の歯冠が形成されているが未出歯牙の可能性があり、第1

大臼歯で象牙質が点状に露出、第2大臼歯がエナメル質咬耗にとどまることから、成年後半～壮年前半程度の可能性がある。性別は、歯牙計測値からみると、男性的である。

整理68（取上14・15）の個体は、第1・2大臼歯がエナメル質咬耗にとどまることから、小児後半～成年程度の可能性がある。性別は不明である。

5) 墓910B

整理69（取上14）の歯牙は重複するものは存在せず、1個体分と推定される。歯牙のうち、上顎第1～3大臼歯、下顎第1～3大臼歯とも象牙質が露出しておらず、第3大臼歯のエナメル質に僅かな咬耗が認められる程度である。このことから、本個体は成年後半～壮年前半程度と推定される。性別は、歯牙計測値からみると、女性的である。

(6) 小結

今回調査を行った5つの墓から出土した人骨の形態学的特徴からみた、埋葬遺体数、年齢、性別を一覧表として表14に示す。

墓567では、成年後半～壮年前半程度の男性と男性の可能性のある2個体が確認された。

墓876では、壮年程度で、男性の可能性ある1個体が確認された。

墓878では、成年後半～壮年前半程度の男性の可能性のある個体と女性の個体の2個体が確認された。

墓910Aでは、小児後半～成年程度で性別不明の個体、壮年以降（壮年後半～熟年？）の女性の可能性がある個体、成年後半～壮年前半程度で男性の可能性のある個体、小児後半～成年程度の可能性がある性別不明の個体の4個体が確認された。

墓910Bでは、成年後半～壮年前半程度の女性の可能性がある1個体が確認された。

以上、5つの墓うち、3つの墓で複数の遺体が埋葬されていることが確認された。埋葬者の年齢は、遺構によって多少異なるが、概して壮年以下の年齢の多い。

引用文献

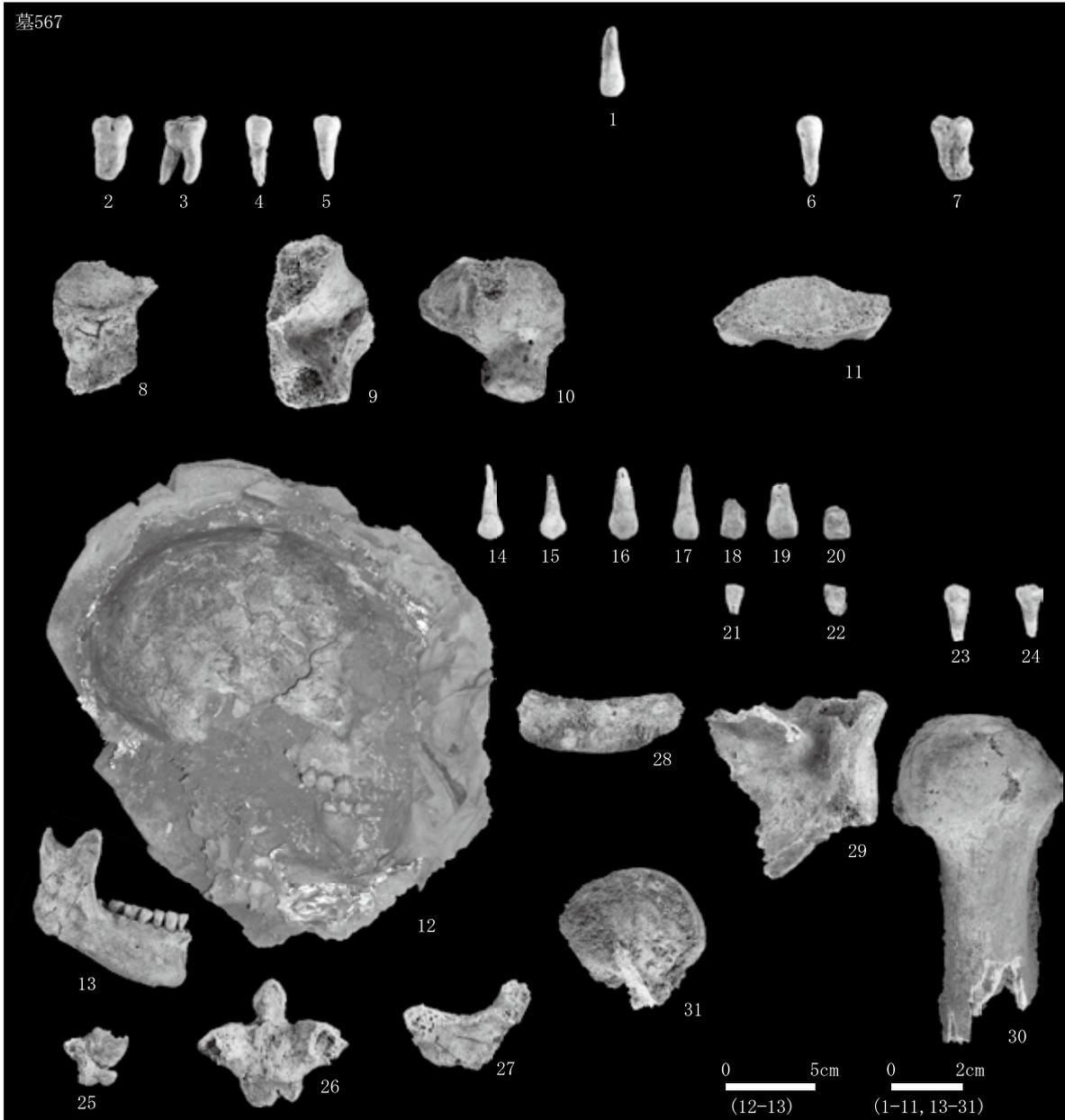
権田 和良,1959,歯の大きさの性差について.人類学雑誌,67,151-163.

藤田 恒太郎,1949,歯の計測基準について.人類学雑誌,61,27-32.

表14 出土人骨の年齢・性別

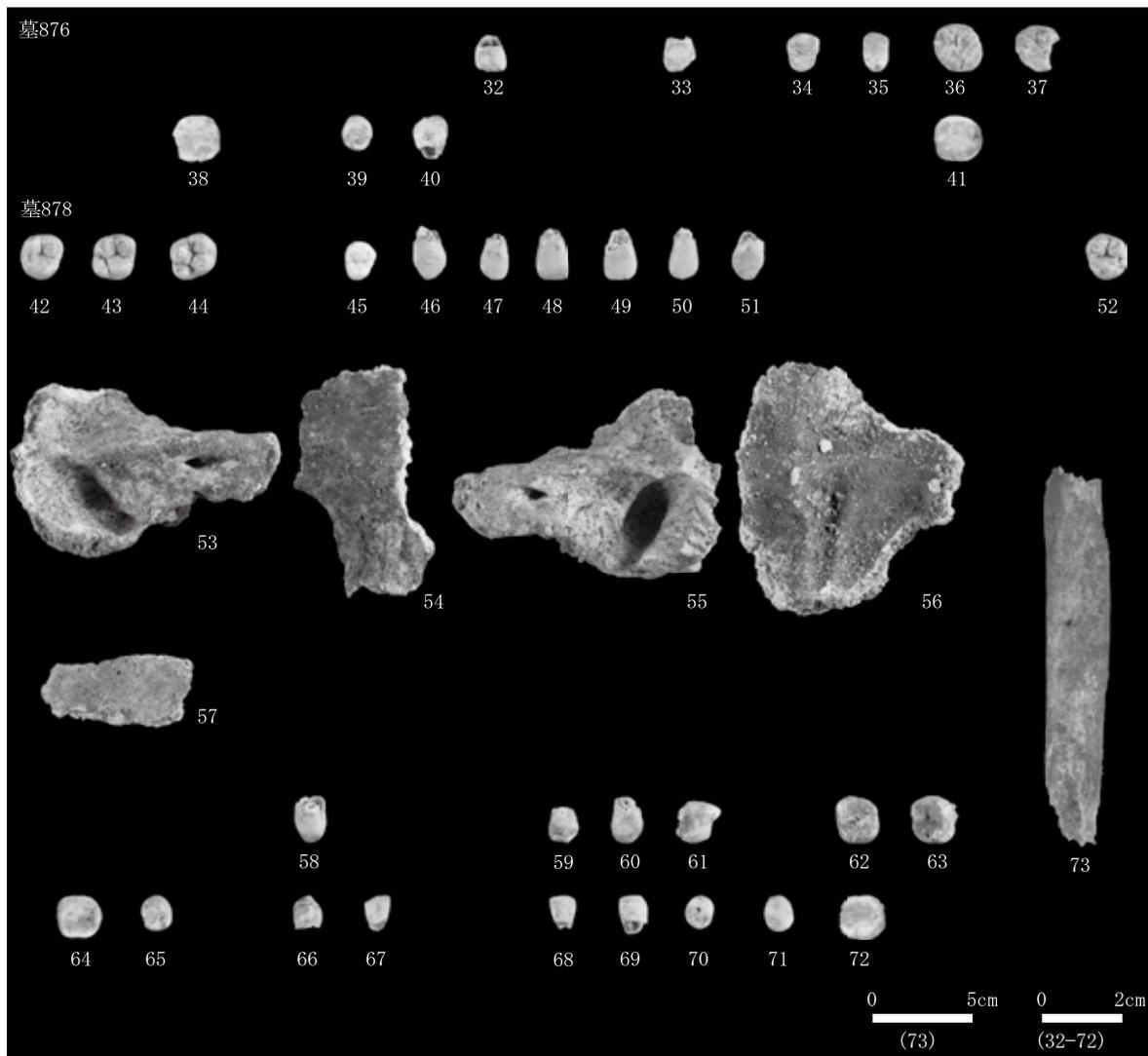
遺構名	整理番号	取上番号	年齢	性別
墓567	1	取上本体	成年後半～壮年前半程度	男性
	7	取上6	成年後半～壮年前半程度	男性?
墓876	14	取上6-2	壮年程度?	男性?
墓878	15	取上1	成年後半～壮年前半程度	男性?
	22・32	取上6下・取上14	成年後半～壮年前半程度	女性
墓910A	60	取上5	小児後半～成年程度	不明
	63	取上8	壮年以降(壮年後半～熟年?)	女性?
	67・68	取上12・取上13	成年後半～壮年前半程度?	男性?
	68	取上14・取上15	小児後半～成年程度?	不明
墓910B	69	取上14	成年後半～壮年前半程度	女性?

小児:6～15歳程度、成年:16～20歳程度、壮年:20～39歳程度、熟年:40～59歳程度



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1. ヒト左上顎第2切歯(墓567 整理7 取上6) | 17. ヒト右上顎第2切歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 2. ヒト右下顎第2大白歯(墓567 整理7 取上6) | 18. ヒト右上顎第1切歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 3. ヒト右下顎第1大白歯(墓567 整理7 取上6) | 19. ヒト左上顎第1切歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 4. ヒト右下顎第2小白歯(墓567 整理7 取上6) | 20. ヒト左上顎第2切歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 5. ヒト右下顎第1小白歯(墓567 整理7 取上6) | 21. ヒト右下顎第1切歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 6. ヒト左下顎第2小白歯(墓567 整理7 取上6) | 22. ヒト左下顎第2切歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 7. ヒト左下顎第2大白歯(墓567 整理7 取上6) | 23. ヒト左下顎第1小白歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 8. ヒト左寛骨(墓567 整理6 取上5) | 24. ヒト左下顎第2小白歯(墓567 整理1 取上本体) |
| 9. ヒト右踵骨(墓567 整理5 取上4) | 25. ヒト第1頸椎(墓567 整理1 取上本体) |
| 10. ヒト右距骨(墓567 整理5 取上4) | 26. ヒト第2頸椎(墓567 整理1 取上本体) |
| 11. ヒト仙骨?(墓567 整理7 取上9) | 27. ヒト胸椎(墓567 整理1 取上本体) |
| 12. ヒト頭蓋(墓567 整理1 取上本体) | 28. ヒト肋骨(墓567 整理1 取上本体) |
| 13. ヒト右下顎骨(墓567 整理1 取上本体) | 29. ヒト右肩甲骨(墓567 整理1 取上本体) |
| 14. ヒト右上顎第2小白歯(墓567 整理1 取上本体) | 30. ヒト左上腕骨(墓567 整理1 取上本体) |
| 15. ヒト右上顎第1小白歯(墓567 整理1 取上本体) | 31. ヒト右上腕骨(墓567 整理1 取上本体) |
| 16. ヒト右上顎犬歯(墓567 整理1 取上本体) | |

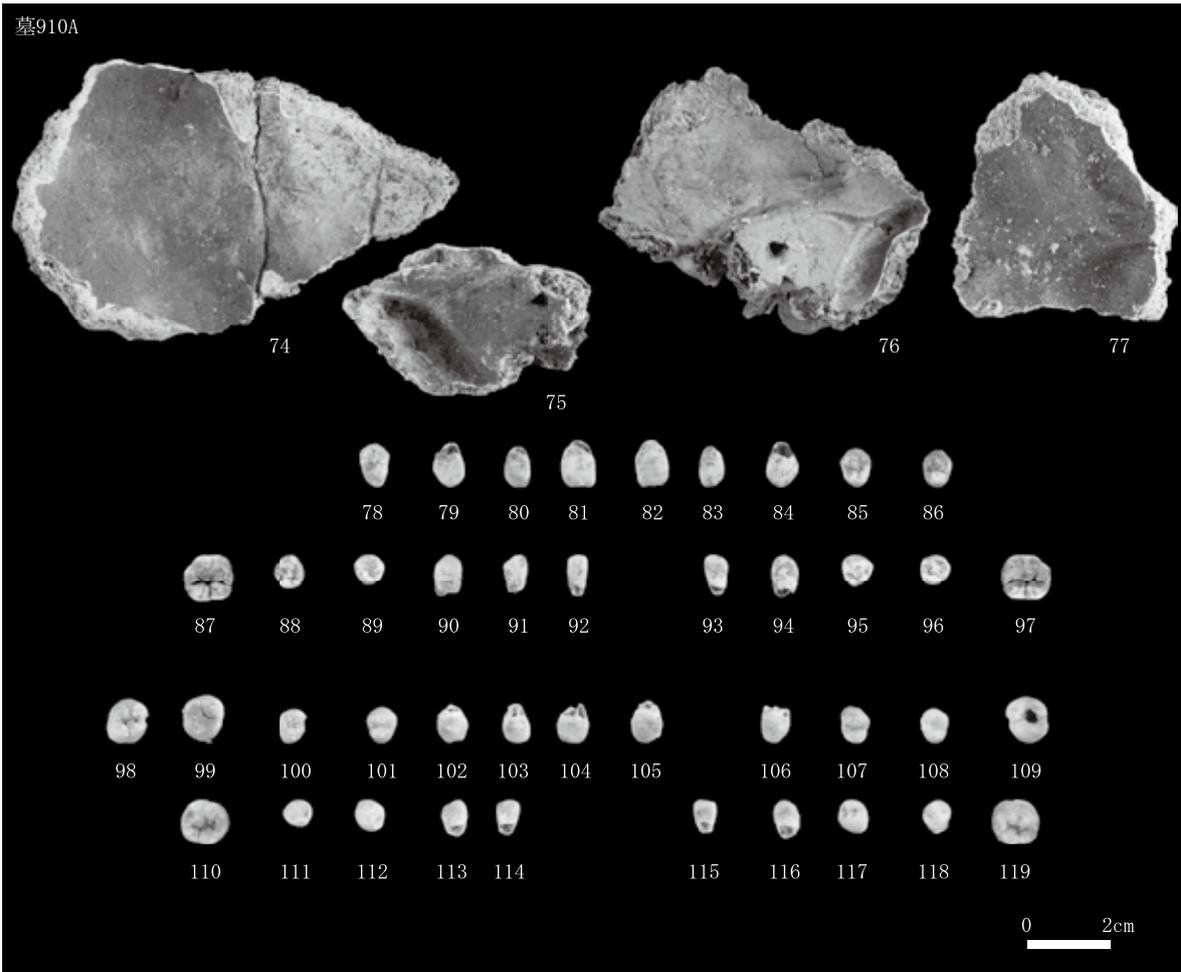
図41 墓567出土骨



- 32. ヒト右上顎第2切歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 33. ヒト左上顎第2切歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 34. ヒト左上顎第1小白歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 35. ヒト左上顎第2小白歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 36. ヒト左上顎第1大白歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 37. ヒト左上顎第1大白歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 38. ヒト右下顎第1大白歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 39. ヒト右下顎第1小白歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 40. ヒト右下顎犬歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 41. ヒト左下顎第1大白歯(墓876 整理14 取上6-2)
- 42. ヒト右上顎第3大白歯(墓878 整理15 取上1)
- 43. ヒト右上顎第2大白歯(墓878 整理15 取上1)
- 44. ヒト右上顎第1大白歯(墓878 整理15 取上1)
- 45. ヒト右上顎第1小白歯(墓878 整理15 取上1)
- 46. ヒト右上顎犬歯(墓878 整理15 取上1)
- 47. ヒト右上顎第2切歯(墓878 整理15 取上1)
- 48. ヒト右上顎第1切歯(墓878 整理15 取上1)
- 49. ヒト左上顎第1切歯(墓878 整理15 取上1)
- 50. ヒト左上顎第2切歯(墓878 整理18 取上4)
- 51. ヒト左上顎犬歯(墓878 整理15 取上1)
- 52. ヒト左上顎第3大白歯(墓878 整理15 取上1)

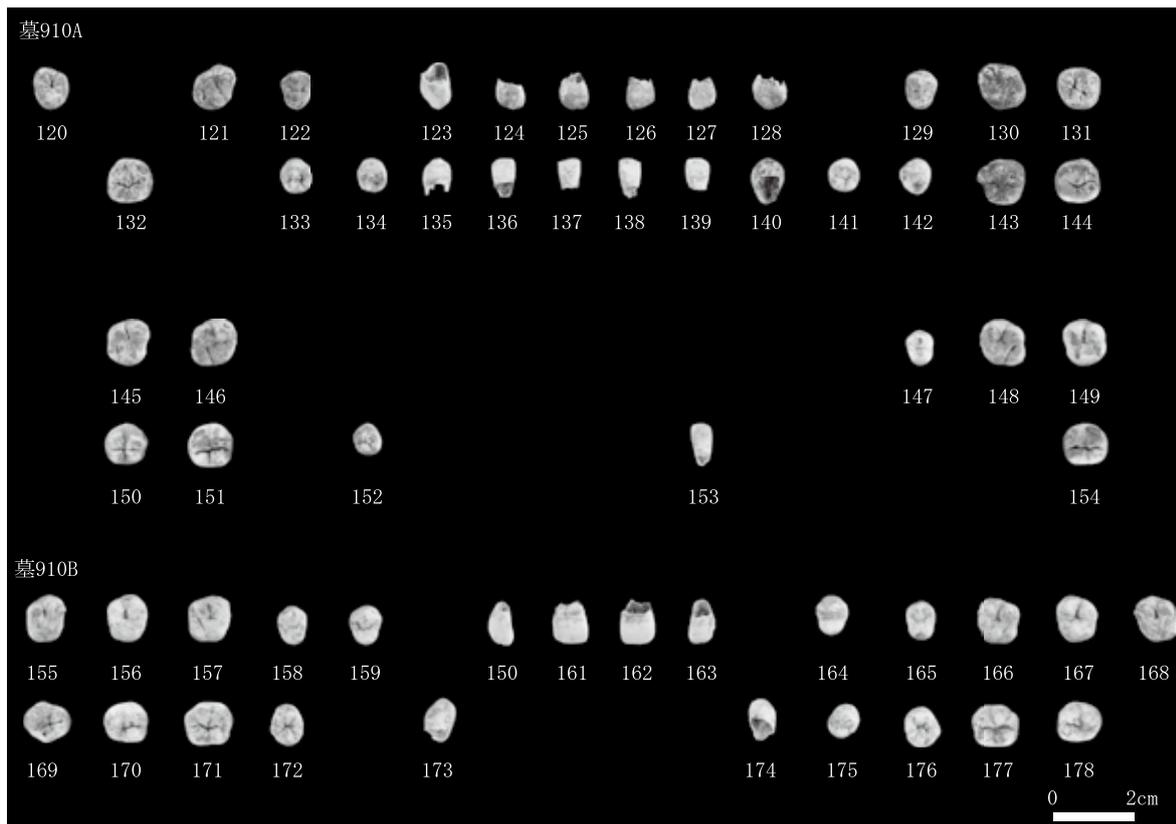
- 53. ヒト左側頭骨(墓878 整理21 取上6上)
- 54. ヒト前頭骨(墓878 整理23 取上6下-1)
- 55. ヒト右側頭骨(墓878 整理21 取上6上)
- 56. ヒト後頭骨(墓878 整理21 取上6上)
- 57. ヒト脳頭蓋(墓878 整理32 取上14)
- 58. ヒト右上顎犬歯(墓878 整理32 取上14)
- 59. ヒト左上顎第2切歯(墓878 整理32 取上14)
- 60. ヒト左上顎犬歯(墓878 整理22 取上6下)
- 61. ヒト左上顎第1小白歯(墓878 整理22 取上6下)
- 62. ヒト左上顎第1大白歯(墓878 整理32 取上14)
- 63. ヒト左上顎第2大白歯(墓878 整理32 取上14)
- 64. ヒト右下顎第1大白歯(墓878 整理22 取上6下)
- 65. ヒト右下顎第2小白歯(墓878 整理22 取上6下)
- 66. ヒト右下顎犬歯(墓878 整理32 取上14)
- 67. ヒト右下顎第2切歯(墓878 整理22 取上6下)
- 68. ヒト左下顎第2切歯(墓878 整理32 取上14)
- 69. ヒト左下顎犬歯(墓878 整理22 取上6下)
- 70. ヒト左下顎第1小白歯(墓878 整理22 取上6下)
- 71. ヒト左下顎第2小白歯(墓878 整理22 取上6下)
- 72. ヒト左下顎第1大白歯(墓878 整理22 取上6下)
- 73. ヒト右大腿骨(墓878 整理45 取上8)

図42 墓876・墓878出土骨



- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 74. ヒト左右頭頂骨(墓910A 整理57 取上2) | 97. ヒト左下顎第1大白歯(墓910A 整理60 取上5) |
| 75. ヒト頭頂骨(墓910A 整理57 取上2) | 98. ヒト右上顎第2大白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 76. ヒト左側頭骨(墓910A 整理58 取上3) | 99. ヒト右上顎第1大白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 77. ヒト後頭骨(墓910A 整理58 取上3) | 100. ヒト右上顎第2小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 78. ヒト右上顎第1小白歯(墓910A 整理60 取上5) | 101. ヒト右上顎第1小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 79. ヒト右上顎犬歯(墓910A 整理60 取上5) | 102. ヒト右上顎犬歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 80. ヒト右上顎第2切歯(墓910A 整理60 取上5) | 103. ヒト右上顎第2切歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 81. ヒト右上顎第1切歯(墓910A 整理60 取上5) | 104. ヒト右上顎第1切歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 82. ヒト左上顎第1切歯(墓910A 整理60 取上5) | 105. ヒト左上顎第1切歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 83. ヒト左上顎第2切歯(墓910A 整理60 取上5) | 106. ヒト左上顎犬歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 84. ヒト左上顎犬歯(墓910A 整理60 取上5) | 107. ヒト左上顎第1小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 85. ヒト左上顎第1小白歯(墓910A 整理60 取上5) | 108. ヒト左上顎第2小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 86. ヒト左上顎第2小白歯(墓910A 整理60 取上5) | 109. ヒト左上顎第1大白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 87. ヒト右下顎第1大白歯(墓910A 整理60 取上5) | 110. ヒト右下顎第1 大白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 88. ヒト右下顎第2小白歯(墓910A 整理60 取上5) | 111. ヒト右下顎第2小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 89. ヒト右下顎第1小白歯(墓910A 整理60 取上5) | 112. ヒト右下顎第1小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 90. ヒト右下顎犬歯(墓910A 整理60 取上5) | 113. ヒト右下顎犬歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 91. ヒト右下顎第2切歯(墓910A 整理60 取上5) | 114. ヒト右下顎第2切歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 92. ヒト右下顎第1切歯(墓910A 整理60 取上5) | 115. ヒト左下顎第2切歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 93. ヒト左下顎第2切歯(墓910A 整理60 取上5) | 116. ヒト左下顎犬歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 94. ヒト左下顎犬歯(墓910A 整理60 取上5) | 117. ヒト左下顎第1小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 95. ヒト左下顎第1小白歯(墓910A 整理60 取上5) | 118. ヒト左下顎第2小白歯(墓910A 整理63 取上8) |
| 96. ヒト左下顎第2小白歯(墓910A 整理60 取上5) | 119. ヒト左下顎第1大白歯(墓910A 整理63 取上8) |

図43 墓910A出土骨



- 120. ヒト右上顎第3大臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 121. ヒト右上顎第1大臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 122. ヒト右上顎第2小臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 123. ヒト右上顎犬歯(墓910A 整理67 整理68 取上13)
- 124. ヒト右上顎第2切歯(墓910A 整理67 取上12)
- 125. ヒト右上顎第1切歯(墓910A 整理67 取上12)
- 126. ヒト左上顎第1切歯(墓910A 整理67 取上12)
- 127. ヒト左上顎第2切歯(墓910A 整理68 取上13)
- 128. ヒト左上顎犬歯(墓910A 整理67 取上12)
- 129. ヒト左上顎第2小臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 130. ヒト左上顎第1大臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 131. ヒト左上顎第2大臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 132. ヒト右下顎第2大臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 133. ヒト右下顎第2小臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 134. ヒト右下顎第1小臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 135. ヒト右下顎犬歯(墓910A 整理68 取上13)
- 136. ヒト右下顎第2切歯(墓910A 整理68 取上13)
- 137. ヒト右下顎第1切歯(墓910A 整理68 取上13)
- 138. ヒト左下顎第1切歯(墓910A 整理68 取上13)
- 139. ヒト左下顎第2切歯(墓910A 整理68 取上13)
- 140. ヒト左下顎犬歯(墓910A 整理67 取上12)
- 141. ヒト左下顎第1小臼歯(墓910A 整理68 取上13)
- 142. ヒト左下顎第2小臼歯(墓910A 整理68 取上13)
- 143. ヒト左下顎第1大臼歯(墓910A 整理67 取上12)
- 144. ヒト左下顎第2大臼歯(墓910A 整理68 取上12)
- 145. ヒト右上顎第2大臼歯(墓910A 整理69 取上14)
- 146. ヒト右上顎第1大臼歯(墓910A 整理68 取上15)
- 147. ヒト左上顎第2小臼歯(墓910A 整理68 取上15)
- 148. ヒト左上顎第1大臼歯(墓910A 整理68 取上15)
- 149. ヒト左上顎第2大臼歯(墓910A 整理68 取上14)

- 150. ヒト右下顎第2大臼歯(墓910A 整理68 取上14)
- 151. ヒト右下顎第1大臼歯(墓910A 整理68 取上14)
- 152. ヒト右下顎第1小臼歯(墓910A 整理68 取上14)
- 153. ヒト左下顎第2切歯(墓910A 整理68 取上15)
- 154. ヒト左下顎第2大臼歯(墓910A 整理68 取上15)
- 155. ヒト右上顎第3大臼歯(墓910B 整理69 取上14-19)
- 156. ヒト右上顎第2大臼歯(墓910B 整理69 取上14-3)
- 157. ヒト右上顎第1大臼歯(墓910B 整理69 取上14-7)
- 158. ヒト右上顎第2小臼歯(墓910B 整理69 取上14-6)
- 159. ヒト右上顎第1小臼歯(墓910B 整理69 取上14-11)
- 160. ヒト右上顎第2切歯(墓910B 整理69 取上14-25)
- 161. ヒト右上顎第1切歯(墓910B 整理69 取上14-24)
- 162. ヒト左上顎第1切歯(墓910B 整理69 取上14-5)
- 163. ヒト左上顎第2切歯(墓910B 整理69 取上14-23)
- 164. ヒト左上顎第1小臼歯(墓910B 整理69 取上14-15)
- 165. ヒト左上顎第2小臼歯(墓910B 整理69 取上14-14)
- 166. ヒト左上顎第1大臼歯(墓910B 整理69 取上14-13)
- 167. ヒト左上顎第2大臼歯(墓910B 整理69 取上14-12)
- 168. ヒト左上顎第3大臼歯(墓910B 整理69 取上14-20)
- 169. ヒト右下顎第3大臼歯(墓910B 整理69 取上14-21)
- 170. ヒト右下顎第2大臼歯(墓910B 整理69 取上14-10)
- 171. ヒト右下顎第1大臼歯(墓910B 整理69 取上14-8)
- 172. ヒト右下顎第2小臼歯(墓910B 整理69 取上14-18)
- 173. ヒト右下顎犬歯(墓910B 整理69 取上14-16)
- 174. ヒト左下顎犬歯(墓910B 整理69 取上14-17)
- 175. ヒト左下顎第1小臼歯(墓910B 整理69 取上14-9)
- 176. ヒト左下顎第2小臼歯(墓910B 整理69 取上14-4)
- 177. ヒト左下顎第1大臼歯(墓910B 整理69 取上14-1)
- 178. ヒト左下顎第2大臼歯(墓910B 整理69 取上14-2)

図44 墓910A・910B出土骨

付章5 出土したガラス製品の分析

北野信彦（龍谷大学文学部）

（1）はじめに

今回の調査では、近世前期頃の寺院関連、その後の公家屋敷跡、さらには近代期の各時期の玉や簪、椀破片などのガラス製品が出土している。今回、これらに関する分析調査を実施したので分析結果を報告する。

（2）調査方法

① 表面の拡大観察

まずガラス表面状態を目視観察した後、細部の観察は（株）スカラ社製のDG-3型デジタル現場顕微鏡を使用して50倍から200倍の倍率で行った。

② 無機元素の材質分析

各試料の無機元素の定性分析は、（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管ターゲットはRh、X線管電圧は15kV及び50kV、電流は240 μ A及び20 μ A、検出強度は60.0～200.0cps、である。

③ 比重測定

各試料の比重測定は、大気重量と水中重量、体積を計測し、これらの比率を算定して割り出した。

（3）調査結果

① ガラス製品である本試料群には、小丸玉、ビーズ小玉、簪、ポッペン破片、椀破片、ガラス瓶容器、ガラス板片などである。表面の色調も、透明系、表面劣化の関係からかやや表面が白色を呈する透明系、同じく表面劣化で虹色を呈する淡褐色～透明系（図45）、透明感がある黄色系、同マリンプール系、同エメラルドグリーン系、同萌黄色系、乳白色系、水色（空色）系、紺色系、薄紅色系、薄紫色系など多種多様である。なかには濃青色の模様を焼付たり（図46）、乳白色の地ガラスに薄紅色系や緑色系の色ガラスで花模様を加飾している試料（図47・48）もあった。

② 各試料の無機元素の材質分析を行った結果、玉11以外の試料はいずれもシリカ（Si）のピークが強く検出された。さらに、鉛（Pb）が強く検出される試料群と鉛（Pb）が検出されない試料群に大別された（図49・50）。そして、後者に比較して前者は基本的に比重が大きい傾向が見られた。前者は鉛ガラス、後者はカリガラスであろう（表15）。また、カリウム（K）とカルシウム（Ca）のピークも両者強く検出される試料、カリウム（K）のみが強い、もしくは両者とも比較的微量な試料群も見られた。さらに特徴的な無機元素としては、砒素（As）のピークの検出の有無があげられる（図51）。

③ 透明ガラス以外の色ガラスの着色材料は、それぞれの色調を反映した無機元素が検出され

表15 ガラス分析結果

質量濃度(%)

種類	分析No.	Si	P	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Co	Ni	Cu	Zn	As	Pb	比重	備考
ガラス	1	47.7	9.3	0.0	1.0	3.1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.2	0.0	0.2	0.0	37.9	3.7	ガ3
ガラス	1-2	40.4	2.6	0.0	3.7	1.4	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	51.4		
ガラス	2	44.0	4.8	0.0	4.0	1.5	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	43.6	3.9	ガ4
ガラス	3	55.4	1.7	0.0	4.2	0.9	0.1	0.2	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	37.2	3.3	ガ2
ガラス	4	50.4	0.6	0.0	4.7	0.4	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	41.8	3.8	ガ7
ガラス	5	52.6	0.5	0.0	5.2	2.0	0.1	0.0	0.3	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	38.8	3.4	ガ9
ガラス	6-1	46.3	6.1	0.0	0.9	3.0	0.1	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	40.4	3.8	ガ10
ガラス	6-2	19.4	4.5	0.0	0.0	29.6	0.0	0.1	1.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.1	45.2		焼付箇所
ガラス	7	53.4	0.8	0.0	8.5	0.7	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	35.2	3.1	ガ1
ガラス	8	41.1	0.7	0.0	7.2	0.8	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	49.9	3.5	ガ8
ガラス	9	64.0	0.7	0.0	2.6	0.2	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	30.9	2.8	ガ5
ガラス	10-1	39.4	0.0	0.0	8.2	0.5	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	51.6	3.6	ガ12
ガラス	10-2	27.3	9.1	0.0	0.6	3.8	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	58.8		
ガラス	10-3	46.8	1.7	0.0	3.9	1.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	46.2		
ガラス	10-5	51.3	0.7	0.0	2.6	0.7	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	44.4		
ガラス	11	77.5	0.8	0.5	7.2	13.1	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	2.5	ガ11
ガラス	11-2	79.4	0.2	0.4	7.0	12.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0		
ガラス	12-1	66.0	0.7	0.1	19.1	13.6	0.1	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	ガ6
ガラス	12-2	61.1	1.1	0.0	20.8	13.7	0.2	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6		
ガラス	12-3	61.0	1.4	0.0	16.7	12.1	0.1	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.0		
ガラス	12-緑	31.9	3.0	0.8	22.4	15.8	0.4	0.1	9.9	0.0	0.0	7.6	3.4	0.0	4.7		
ガラス	13	18.8	12.2	0.0	1.1	7.5	0.1	0.0	2.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	58.0	3.9	
ガラス	14	61.2	1.6	0.0	1.4	1.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	33.9	3.8	
ガラス	15-1	55.7	0.2	0.0	3.5	0.5	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	39.1	3.6	
ガラス	15-2	53.0	4.2	0.0	1.1	1.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.1	3.9	
ガラス	15-3	37.5	0.1	0.0	5.8	0.5	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	55.8	3.8	
ガラス	16	9.3	11.3	0.0	0.3	7.6	0.1	0.2	1.4	0.0	0.0	1.3	0.0	0.1	68.5	3.7	
ガラス	17	41.0	0.6	0.0	1.0	0.3	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.1	0.8	0.1	55.8	3.7	
ガラス	18	72.2	0.8	0.0	1.0	0.3	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	24.8	3.9	
ガラス	19-1	65.0	0.2	0.0	0.9	0.3	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	1.1	0.3	0.0	31.9	2.9	
ガラス	19-2	63.3	0.2	0.0	1.1	0.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	1.2	0.3	0.0	33.2	2.9	
ガラス	19-3	66.7	0.3	0.0	1.1	0.1	0.0	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	31.2	3.4	
ガラス	19-4	60.5	1.5	0.0	1.4	1.2	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	35.1	3.4	
ガラス	19-5	50.9	2.6	0.0	2.0	1.8	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	42.3	4.0	
ガラス	19-6	13.4	4.6	0.0	0.8	3.3	0.1	0.1	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	74.7	3.4	
ガラス	20-1	54.0	0.2	0.0	4.7	1.4	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.5	3.4	
ガラス	20-2	21.8	8.0	0.0	0.6	8.1	0.1	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	60.8	3.8	
ガラス	20-3	58.0	2.6	0.0	1.5	1.2	0.0	0.3	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	36.1	3.4	
ガラス	20-4	41.8	1.1	0.0	4.1	0.9	0.1	0.0	0.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	51.5	3.7	
ガラス	21-1	40.2	0.3	0.0	6.9	1.6	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.3	0.1	50.4	3.4	栓
ガラス	21-2	41.7	0.6	0.0	7.4	1.6	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	48.2	3.4	口縁
ガラス	22-1	77.4	0.1	0.1	4.9	16.7	0.2	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	
ガラス	22-2	31.6	1.3	0.0	7.3	1.2	0.1	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.3	0.1	57.9	3.4	
ガラス	23	81.5	0.0	0.5	5.3	3.9	0.2	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0		ガ13
玉	1	31.3	0.9	0.0	0.9	1.1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	65.4	3.5	ガ14
玉	2	21.5	0.1	0.0	10.6	0.9	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	66.5	3.6	ガ17
玉	3	96.6	2.0	0.1	0.6	0.1	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7	石14 碧玉
玉	4	16.5	0.0	0.0	5.4	0.5	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	77.3	3.5	
玉	5	17.0	0.5	0.0	4.5	0.5	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	77.1	3.6	ガ15
玉	6	45.8	2.8	0.0	2.1	1.8	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	47.0	3.4	ガ16
玉	7	66.8	0.8	0.4	0.9	29.4	0.3	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7	
玉	8	79.9	0.2	0.3	1.2	18.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	
玉	9	79.2	0.2	0.3	1.2	18.5	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	2.5	
玉	10	58.2	1.2	0.0	5.8	29.5	0.3	2.5	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	2.5	
玉	11	1.0	0.0	0.1	0.0	98.9	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	真珠貝殻玉
玉	12	55.0	0.0	0.0	2.8	33.4	0.3	0.1	0.7	0.9	0.1	0.3	0.0	0.0	6.4	2.6	
玉	13	72.6	0.9	0.0	22.9	2.3	0.4	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	2.3	
玉	14	57.0	0.4	0.0	38.1	3.1	0.1	0.1	1.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	2.3	
玉	15	34.8	0.0	0.0	3.3	6.1	0.1	0.2	0.9	0.0	0.0	4.2	0.7	0.0	49.8	2.7	
玉	16	32.7	0.4	0.0	3.3	3.7	0.2	0.1	0.6	0.1	0.0	1.9	0.2	2.5	54.5	3.1	
玉	17	20.0	0.0	0.0	3.9	3.4	0.1	0.0	0.4	0.0	0.0	2.4	0.0	4.3	65.5	2.9	
玉	18	39.5	0.3	0.0	2.8	1.6	0.1	0.1	0.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	55.2	2.9	
玉	19	26.2	0.0	0.0	3.9	7.1	0.1	1.5	1.3	0.5	0.1	0.4	0.1	1.9	57.1	2.5	
玉	20	36.6	0.2	0.0	8.4	5.1	0.1	0.1	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	4.1	45.1	2.8	
玉	21	23.3	0.1	0.0	3.7	3.9	0.1	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	67.8	2.9	
玉	22	34.2	0.2	0.0	4.1	3.5	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	55.1	3.0	
玉	23	21.8	0.0	0.0	2.6	3.0	0.1	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	9.3	62.6	2.8	
玉	24	33.2	0.4	0.0	2.4	2.7	0.1	0.0	0.4	0.0	0.0	0.1	0.0	5.0	55.7	2.8	
玉	25	16.5	1.0	0.0	2.1	2.7	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	75.9	2.5	

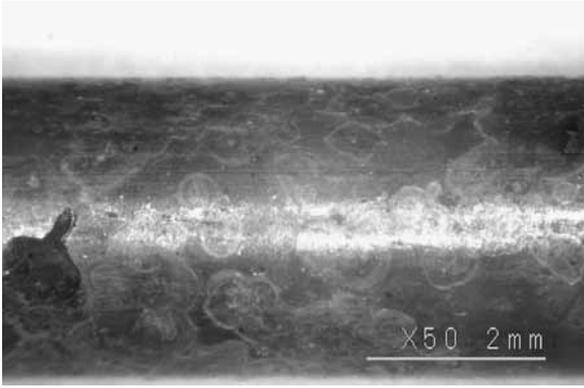


図45 虹色を呈する淡褐色～透明系ガラス（ガ10）

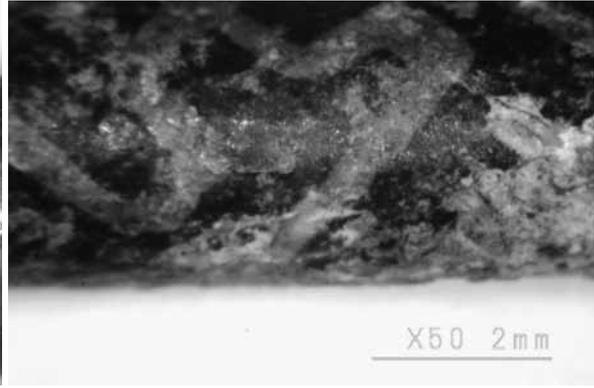


図46 濃青色ガラス焼付による模様（ガ10）

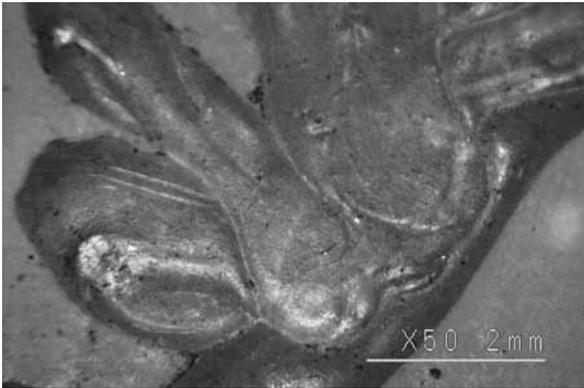


図47 薄紅色系ガラスの加飾（ガ6）

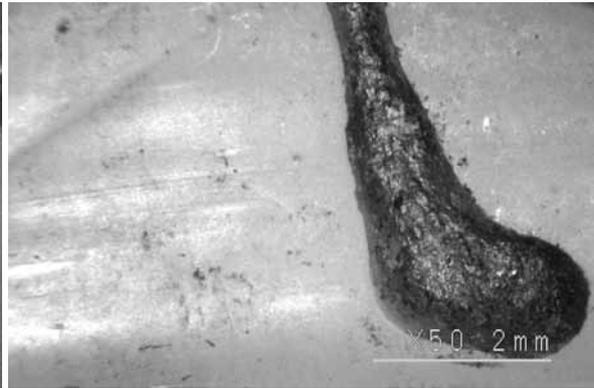


図48 緑色系ガラスの加飾（ガ6）

た。まず、緑色系ガラスや水色（空色）系ガラスでは銅（Cu）と亜鉛（Zn）、エメラルドグリーン色系やマリンプルー系ガラスでは銅（Cu）、黄色系ガラスでは鉄（Fe）が検出された（図52～54）。また、ネイビーブルー系ガラスではコバルト（Co）もしくはマンガン（Mn）、淡萌黄色ガラスではクロム（Cr）などが微量元素ではあるが検出され、これらが特徴的な無機元素といえる（図55・56）。

④ 表面劣化で虹色を呈する淡褐色～透明系の地ガラスに濃青色の模様を焼付た箇所からは、他では見られないスズ（Sn）のピークが顕著に検出された（図57）。また、乳白色の地ガラスの上に花模様を薄紅色系色ガラスで加飾してある箇所からは極めて微量ではあるが鉄（Fe）とバリウム（Ba）が検出された（図58）。

⑤ 玉3（石14）は透明感のある翡翠色を呈する丸玉であるが、強いシリカ（Si）と微量の鉄（Fe）のみが検出された。そのため、これはガラスではなく碧玉であると認識した（図59・60）。また玉11は強いカルシウム（Ca）のみが検出されたため真珠の貝殻玉と理解した（図61・62）。

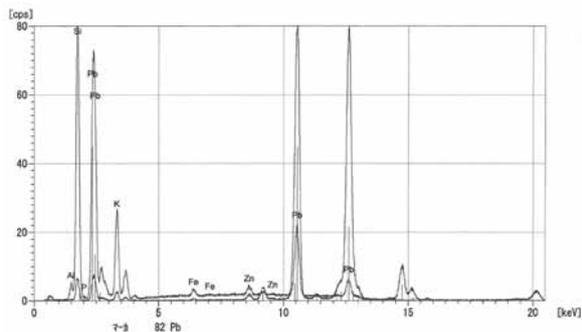


図49 鉛ガラスの蛍光X線分析結果

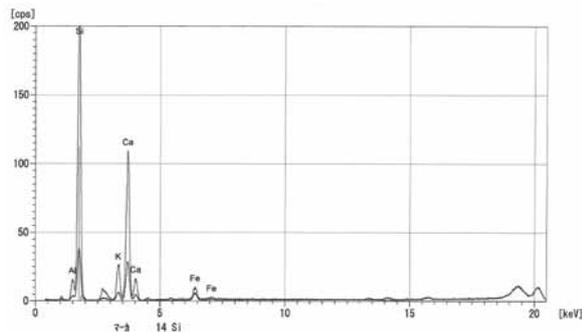


図50 カリガラスの蛍光X線分析結果

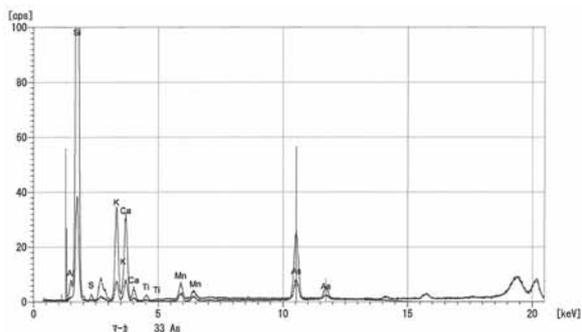


図51 砒素 (As) を含む試料の蛍光X線分析結果

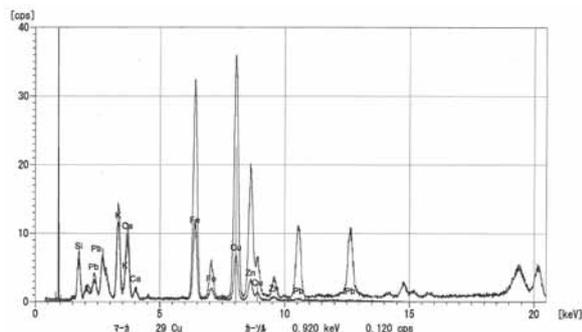


図52 緑色系ガラスの蛍光X線分析結果

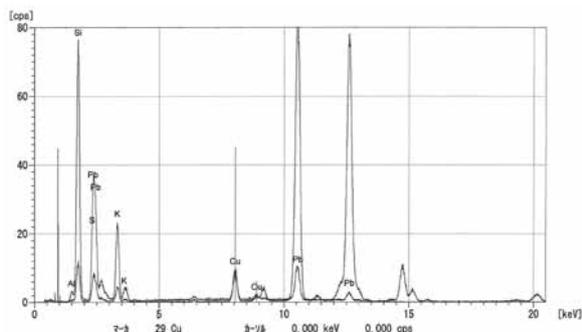


図53 エメラルドグリーン系ガラスの蛍光X線分析結果

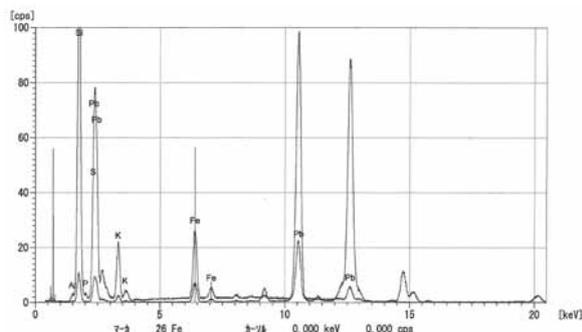


図54 黄色系ガラスの蛍光X線分析結果

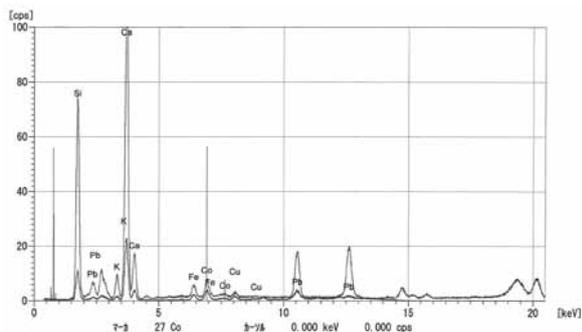


図55 コバルト (Co) を含む試料の蛍光X線分析結果

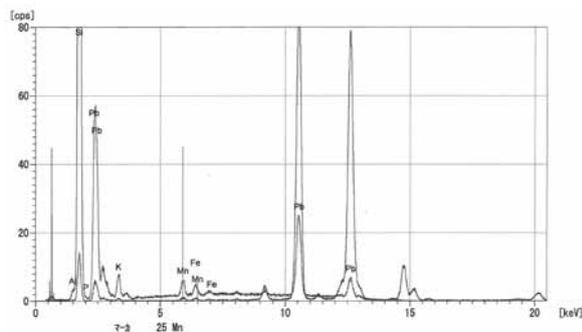


図56 マンガン (Mn) を含む試料の蛍光X線分析結果

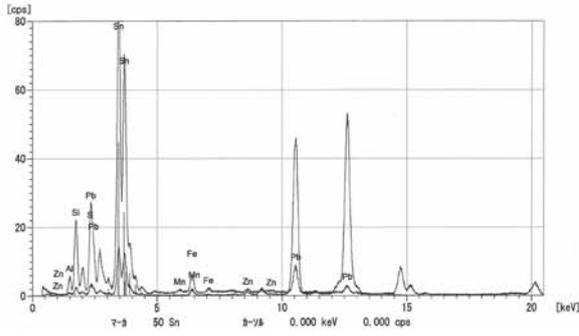


図57 濃青色の模様を焼き付けた箇所の蛍光X線分析結果 (ガ10)

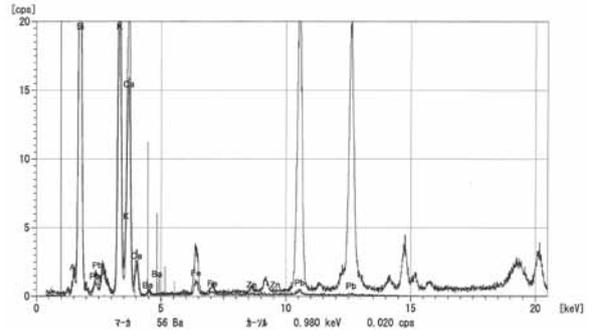


図58 薄紅色系色ガラスの蛍光X線分析結果 (ガ6)

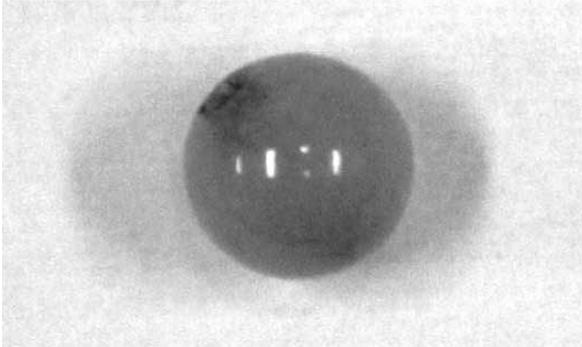


図59 玉3 (石14)

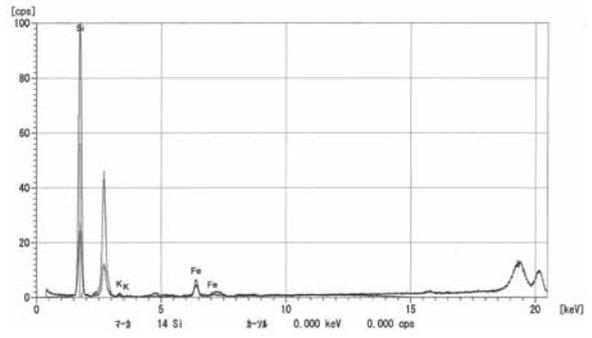


図60 玉3 (石14) の蛍光X線分析結果

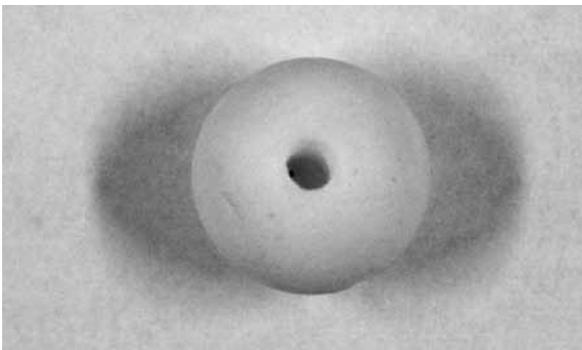


図61 玉11

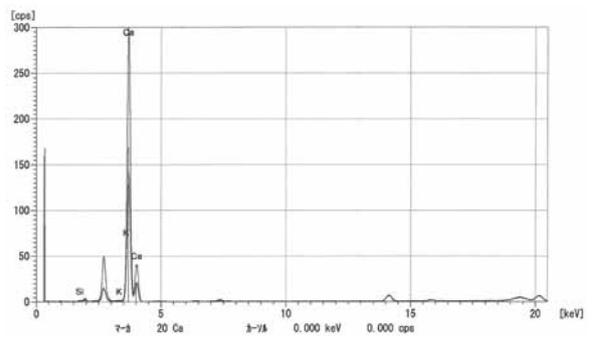


図62 玉11の蛍光X線分析結果

付表1 土器類観察表

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
1	土師器	皿	井戸540	5.1	1.1	-	100	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			図版 35
2	土師器	皿	井戸540	9.9	2.0	-	85	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
3	土師器	皿	井戸540	10.6	2.2	-	95	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)			
4	土師質 土器	焼塩壺蓋	井戸540	7.2	2.2	-	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
5	瓦質土器	香炉	井戸540	11.5	5.0	10.6	60	オリーブ黒色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
6	施釉陶器	皿	井戸540	10.5	2.3	4.2	50	胎土:浅黄色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃		
7	施釉陶器	椀	井戸540	10.2	5.6	4.1	85	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	美濃		
8	輸入磁器	椀	井戸540	10.5	5.4	4.7	60	白色 焼成:良 胎土:密	中国	青花	
9	土師器	皿	墓567	8.4	(1.5)	-	20	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
10	土師器	皿	墓428	5.5	1.3	-	50	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
11	土師器	皿	墓428	10.8	2.0	-	35	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
12	土師器	皿	墓428	10.2	2.3	-	75	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
13	土師器	皿	土坑802	10.0	(1.8)	-	15	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
14	磁器	仏飯器	墓827	3.6	(5.8)	-	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
15	土師器	皿	墓829	10.3	(1.8)	-	20	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
16	土師器	皿	墓878	10.8	(1.8)	-	15	橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
17	土師器	皿	墓880	10.2	2.3	-	50	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・チャート含む)			
18	土師器	皿	墓909	10.0	2.1	-	95	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
19	土師器	皿	墓910B	10.4	2.0	-	100	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
20	土師器	皿	墓928	10.3	2.2	-	25	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英含む)			
21	施釉陶器	皿	墓932	9.6	2.4	5.4	100	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃		
22	土師質 土器	羽釜	井戸141	21.0	(5.3)	-	口縁部 85	浅黄色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母含む)			
23	輸入磁器	皿	井戸141	12.8	3.2	7.6	35	灰白色 焼成:良 胎土:密	中国	青花	
24	輸入磁器	皿	井戸141	12.8	3.1	7.2	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	中国	青花	
25	瓦質陶器	甕	埋甕527	-	(50.7)	26.5	60	オリーブ灰色～灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)	大和		
26	輸入 焼締陶器	四耳壺	土坑960	17.2	(17.5)	-	口縁部 50	橙色 焼成:良 胎土:やや粗(φ3.0mm以下の長石・チャート含む)	タイ		
27	土師器	皿	土坑888	5.7	1.4	-	100	明黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			図版 36
28	土師器	皿	土坑888	10.4	2.1	-	100	にぶい橙色～橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)			
29	土師器	皿	土坑888	10.2	1.7	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英含む)			
30	施釉陶器	椀	土坑888	13.0	5.8	4.9	80	胎土:浅黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		
31	施釉陶器	小椀	土坑888	7.0	5.1	3.5	80	胎土:暗灰黄色 釉:暗オリーブ色 焼成:良 胎土:密	肥前		
32	施釉陶器	鉢	土坑888	23.1	17.9	11.5	80	胎土:灰褐色 釉:暗褐色～褐灰色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英含む)	肥前		
33	磁器	皿	土坑888	14.0	3.3	6.6	35	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
34	輸入磁器	皿	土坑888	13.7	2.9	7.6	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	中国	青花	

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
35	土師器	皿	井戸200	5.0	2.4	-	40	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			図版 36
36	土師器	皿	井戸200	9.8	1.9	-	100	黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
37	土師器	皿	井戸200	11.5	2.3	-	85	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英含む)			
38	土師質 土器	でんぼ	井戸200	10.3	(3.2)	-	30	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)		底部に煤 付着	
39	施釉陶器	椀	井戸200	9.4	5.8	3.1	95	胎土:浅黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京	色絵	
40	施釉陶器	椀	井戸200	9.2	4.7	2.9	95	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京	色絵	
41	施釉陶器	椀	井戸200	9.3	5.6	2.8	90	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京	色絵	
42	施釉陶器	椀	井戸200	7.3	6.5	5.6	95	胎土:淡黄色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
43	磁器	小椀	井戸200	7.2	3.7	2.9	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
44	磁器	椀	井戸200	7.9	4.6	3.5	90	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
45	磁器	椀	井戸200	10.0	4.8	4.0	50	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
46	磁器	椀	井戸200	9.9	5.2	3.9	90	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
47	磁器	皿	井戸200	9.9	2.3	5.7	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
48	磁器	蓋	井戸200	10.0	3.0	つまみ 径3.9	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
49	土師器	皿	井戸241	8.0	1.7	-	65	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
50	土師器	皿	井戸241	10.4	2.0	-	90	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
51	土師器	ひだ皿	井戸241	8.3	1.3	-	30	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
52	土師質 土器	でんぼ	井戸241	4.7	1.5	3.4	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英・雲母・チャート含む)			
53	土師質 土器	でんぼ	井戸241	13.1	4.0	9.0	90	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
54	土師質 土器	焜炉	井戸241	7.7	6.5	6.5	100	明褐色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)	京・ 深草?	小型	
55	土師質 土器	焼塩壺蓋	井戸241	7.1	1.8	-	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)	泉州		
56	土師質 土器	焼塩壺	井戸241	3.5	6.4	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)	京		
57	土師質 土器	焼塩壺	井戸241	5.5	7.8	5.6	40	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)	泉州		
58	施釉陶器	小椀	井戸241	6.7	3.7	2.4	95	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
59	施釉陶器	合子身	井戸241	4.3	2.4	2.2	100	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
60	施釉陶器	灰落とし	井戸241	-	(6.6)	4.2	底部 100	胎土:灰黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
61	施釉陶器	蓋	井戸241	5.6	1.3	-	40	胎土:淡黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
		合子		4.8	1.6	4.7	100	胎土:淡黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密			
62	施釉陶器	鬘壺	井戸241	11.6 ×3.0	3.6	11.6 ×3.2	100	胎土:灰色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
63	施釉陶器	壺	井戸241	6.2	8.9	5.6	100	胎土:灰白色 釉:灰褐色釉に灰オリーブ色釉を上掛け 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
64	磁器	皿	井戸241	9.8	2.7	3.8	85	胎土:灰白色 釉:明緑灰色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付	
65	磁器	筒椀	井戸241	7.0	5.9	3.7	100	胎土:白色 釉:明オリーブ灰色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付	
66	磁器	椀	井戸241	9.9	4.7	4.0	35	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
67	磁器	椀	井戸241	10.1	5.5	4.0	75	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
68	磁器	蓋	井戸241	6.4	2.4	つまみ 径1.9	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	図版 36
69	土師器	皿	井戸93	5.1	1.2	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下のチャート・雲母含む)		指頭圧痕 明瞭	図版 37
70	土師器	皿	井戸93	5.2	1.1	-	90	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・チャート・雲母含む)			
71	土師器	皿	井戸93	5.0	1.3	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下のチャート・雲母含む)		指頭圧痕 明瞭	
72	土師器	皿	井戸93	5.1	1.2	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート・雲母含む)		指頭圧痕 明瞭	
73	土師器	皿	井戸93	7.4	1.3	-	90	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英・雲母含む)			
74	土師器	皿	井戸93	7.9	1.3	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・チャート・雲母含む)			
75	土師器	皿	井戸93	7.9	1.5	-	100	灰黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
76	土師器	皿	井戸93	7.8	1.5	-	90	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.5mm以下の長石・チャート・雲母含む)			
77	土師器	皿	井戸93	7.7	1.3	-	80	にぶい黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・チャート含む)			
78	土師器	皿	井戸93	9.6	1.6	-	100	浅黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
79	土師器	皿	井戸93	9.6	2.0	-	100	にぶい黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
80	土師器	皿	井戸93	9.7	1.6	-	100	浅黄色 焼成:良 胎土:密(φ5.5mm以下の長石・チャート・雲母含む)			
81	土師器	皿	井戸93	9.8	1.6	-	100	浅黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ2.5mm以下の長石・チャート・雲母含む)			
82	土師器	皿	井戸93	11.3	1.8	-	95	浅黄色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下のチャート含む)			
83	土師質 土器	てんぼ	井戸93	5.0	2.1	3.5	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
84	土師質 土器	焼塩壺蓋	井戸93	5.7	1.8	-	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
85	土師質 土器	焼塩壺	井戸93	4.0	7.2	3.4	100	明赤褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
86	土師質 土器	焼塩壺	井戸93	4.4	7.6	3.5	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
87	土師質 土器	焜炉	井戸93	-	(13.4)	16.4	底部 100	浅黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)	京・ 深草?	底面穿孔	
88	施釉陶器	皿	井戸93	7.6	1.9	3.4	25	胎土:浅黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃	輪花	
89	施釉陶器	椀	井戸93	13.5	5.9	5.1	40	胎土:浅黄色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃		
90	施釉陶器	皿	井戸93	22.4	4.2	13.2	25	胎土:淡黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃		
91	焼締陶器	甕	井戸93	17.8	(15.0)	-	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	信楽		
92	軟質施釉 陶器	蓋	井戸93	6.5	2.0	つまみ 径1.1	95	胎土:にぶい橙色 釉:暗オリーブ色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	内部に 付着物	
93		汁次		6.4	(6.2)	-	80	胎土: 橙色 釉:橙色・暗オリーブ色 焼成:良 胎土:密			
94a	軟質施釉 陶器	蓋	井戸93	3.1	1.6	-	100	胎土:にぶい黄褐色 釉:オリーブ褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
b		灯火具 (タンコロ)		最大径 7.4	4.9	3.9	100	胎土:にぶい黄褐色 釉:黄褐色 焼成:良 胎土:密			
95	施釉陶器	椀	井戸93	10.8	5.9	4.1	60	胎土:灰白色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
96	施釉陶器	筒椀	井戸93	-	(4.2)	4.1	50	胎土:灰黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	高台内 墨書	
97	施釉陶器	筒椀	井戸93	7.3	6.2	5.2	80	胎土:灰黄色 釉:オリーブ黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	信楽 石塔窯か	
98	施釉陶器	椀	井戸93	12.9	8.2	6.1	100	胎土:灰白色 釉:明オリーブ灰色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	信楽 石塔窯か	
99	施釉陶器	蓋物身	井戸93	11.8	10.5	7.4	80	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
100	施釉陶器	蓋	井戸93	9.7	2.5	つまみ 径2.0	85	胎土:浅黄色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英含む)	京・ 信楽		

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
101	施釉陶器	灯火具 (タンコロ)	井戸93	6.0	(5.0)	-	80	胎土:灰白色 釉:褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		図版 37
102	施釉陶器	灯火具 (タンコロ)	井戸93	6.0	6.5	5.3	65	胎土:にぶい黄橙色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
103	施釉陶器	土瓶	井戸93	6.0	(10.7)	-	60	胎土:にぶい橙色 釉:灰黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
104	施釉陶器	土瓶	井戸93	6.0	8.9	6.6	60	胎土:灰白色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・チャート含む)	京・ 信楽		
105	施釉陶器	土瓶	井戸93	8.7	13.6	9.4	60	胎土:淡黄色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	底面刻印 「洛東」	
106	施釉陶器	鍋	井戸93	19.7	13.1	8.4	85	胎土:灰白色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
107	磁器	小椀	井戸93	7.3	3.7	3.1	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	図版 38
108	磁器	椀	井戸93	10.8	5.7	4.5	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
109	磁器	椀	井戸93	11.1	5.9	4.8	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
110	磁器	椀	井戸93	10.0	5.6	3.8	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
111	磁器	椀	井戸93	9.9	5.2	4.0	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
112	磁器	椀	井戸93	10.2	5.5	4.6	50	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
113	磁器	椀	井戸93	10.2	5.1	3.8	90	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
114	磁器	蕎麦猪口	井戸93	7.3	5.1	3.7	90	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
115	磁器	仏飯器	井戸93	6.1	5.5	3.7	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
116	磁器	皿	井戸93	10.1	2.6	6.7	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
117	磁器	皿	井戸93	10.2	2.8	5.3	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
118	磁器	鉢	井戸93	16.0	6.3	9.5	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
119	磁器	蓋	井戸93	10.2	2.7	つまみ 径4.4	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
120	磁器	蓋	井戸93	9.7	3.1	つまみ 径4.0	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
121	磁器	瓶	井戸93	1.6	11.1	4.7	80	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
122	磁器	椀	井戸93	11.7	6.5	4.8	80	胎土:灰白色 釉:明緑灰色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付	
123	磁器	筒椀	井戸93	8.2	6.3	4.4	90	胎土:白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付	
124	磁器	皿	井戸93	9.8	3.5	4.0	80	胎土:灰白色 釉:明オリブ灰色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付	
125	磁器	皿	井戸93	9.5	3.3	3.7	100	胎土:橙色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付	
126	土師器	皿	土坑472	5.0	1.1	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母・赤色粒子含む)			
127	土師器	皿	土坑472	5.1	1.1	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・赤色粒子含む)			
128	土師器	皿	土坑472	5.5	1.3	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母・赤色粒子含む)			
129	土師器	皿	土坑472	8.2	1.5	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)			
130	土師器	皿	土坑472	8.4	1.6	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母・チャート・赤色粒子含む)			
131	土師器	皿	土坑472	8.5	1.8	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母含む)			
132	土師器	皿	土坑472	10.2	1.8	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ4.0mm以下の長石・チャート・赤色粒子含む)			
133	土師器	皿	土坑472	10.2	1.8	-	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
134	土師器	皿	土坑472	10.2	1.9	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
135	土師器	皿	土坑472	10.6	1.9	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母・チャート・3mm礫含む)			図版 38
136	土師器	皿	土坑472	10.4	1.8	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母・チャート・赤色粒子含む)			
137	土師器	皿	土坑472	12.2	2.2	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・石英・雲母・チャート含む)			
138	土師器	皿	土坑472	12.0	1.9	-	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
139	土師器	皿	土坑472	11.9	1.9	-	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)			
140	土師器	皿	土坑472	12.4	2.2	-	80	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・チャート・赤色粒子含む)			
141	土師質 土器	でんぼ	土坑472	12.4	3.8	7.2	90	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)			
142	土師質 土器	でんぼ	土坑472	15.8	4.3	10.8	60	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
143	土師質 土器	でんぼ	土坑472	11.7	3.5	6.9	100	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・チャート・雲母含む)		底部4箇所穿孔	
144	土師質 土器	袍衣壺	土坑472	10.3	7.2	11.8	40	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
145	土師質 土器	火消し壺 蓋	土坑472	19.0	2.8	-	40	橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
146	土師質 土器	火消し壺 蓋	土坑472	26.5	2.8	-	40	橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含む)摘みの剥離痕あり			
147	土師質 土器	焙烙	土坑472	28.2	(5.6)	-	60	橙色 焼成:良 胎土:密(φ5.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
148	土師質 土器	焙烙	土坑472	27.8	6.1	-	90	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ5.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含む)		外型成形	
149	瓦質土器	焜炉	土坑472	22.2	21.4	-	70	暗灰色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・雲母・黒色粒子・7mm大の礫含む)			
150	施釉陶器	椀	土坑472	10.4	4.7	3.8	80	胎土:にぶい赤褐色 釉:暗赤褐色 焼成:良 胎土:密	肥前		
151	施釉陶器	椀	土坑472	10.8	7.3	4.5	60	胎土:にぶい黄褐色 釉:にぶい褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)	肥前		
152	施釉陶器	茶入れ	土坑472	-	(1.4)	2.4	底部 100	胎土:灰白色 釉:黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・含む)	信楽	底面墨書	
153	焼締陶器	甕	土坑472	25.1	19.2	-	20	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)	信楽		
154	施釉陶器	筒椀	土坑472	9.0	7.7	4.1	80	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	朱泥で 吉祥句	
155	施釉陶器	椀	土坑472	9.2	6.0	3.2	60	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
156	施釉陶器	椀	土坑472	9.2	5.1	3.8	90	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
157	施釉陶器	椀	土坑472	10.5	7.0	5.1	60	胎土:にぶい黄褐色 釉:明オリブ灰色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)	京・ 信楽		
158	施釉陶器	椀	土坑472	10.5	6.6	4.1	80	胎土:灰白色 釉:明オリブ灰色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
159	施釉陶器	蓋物身	土坑472	6.6	5.4	4.3	90	胎土:淡黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
160	施釉陶器	鍋	土坑472	14.2	7.9	6.2	100	胎土:灰白色 釉:にぶい赤褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
161	施釉陶器	不明	土坑472	長辺 (2.5)	短辺 (1.5)	-	破片	胎土:灰白色 釉:にぶい白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	「乾山」?	
162	施釉陶器	花入れ	土坑472	4.8	10.8	5.0	100	胎土:浅黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	底面線刻	
163	施釉陶器	花入れ	土坑472	5.2	10.7	5.0	100	胎土:浅黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
164	施釉陶器	蓋	土坑472	9.5	1.3	-	90	胎土:浅黄橙色 釉:にぶい橙色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
165	施釉陶器	蓋	土坑472	7.6	(2.3)	-	90	胎土:にぶい橙色 釉:赤褐色～橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石含む)	京・ 信楽		
166	施釉陶器	蓋	土坑472	8.6	2.5	-	100	胎土:浅黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
167	施釉陶器	蓋	土坑472	15.4	4.6	-	100	胎土:灰白色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
168	施釉陶器	鬚盥	土坑472	13.8 ×6.7	4.0	13.6 ×6.4	90	胎土:灰黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		図版 40

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
169	施釉陶器	蓋	土坑472	9.1	4.0	つまみ 径2.2	95	胎土:淡黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		図版 40
		土瓶		9.7	13.8	7.5	80				
170	焼締陶器	鉢	土坑472	14.0	12.5	14.2	85	褐灰色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)	備前	底部刻印	
171	磁器	椀	土坑472	10.7	6.1	4.6	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
172	磁器	蓋	土坑472	11.4	2.8	つまみ 径4.4	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
173	磁器	小皿	土坑472	長4.4 幅(5.9)	1.9	-	75	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
174	磁器	椀	土坑472	10.3	5.4	4.1	85	胎土:灰白色 釉:明緑灰色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付、 口紅	
175	磁器	小椀	土坑472	5.7	2.5	2.4	60	胎土:灰白色 釉:灰白色 上絵:黒色・赤褐色 焼成:良 胎土:密	肥前	色絵	
176	磁器	椀	土坑472	13.7	7.2	5.8	100	灰白色 焼成:良 胎土:良	肥前	染付	
177	磁器	小椀	土坑472	5.7	4.2	2.7	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
178	磁器	椀	土坑472	9.5	5.1	4.7	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
179	磁器	椀	土坑472	9.5	5.5	3.5	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
180	磁器	椀	土坑472	9.4	5.5	3.7	95	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
181	磁器	椀	土坑472	9.9	5.5	4.6	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
182	磁器	椀	土坑472	10.3	5.9	3.9	85	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
183	磁器	椀	土坑472	10.0	5.2	3.9	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
184	磁器	椀	土坑472	8.8	5.2	3.3	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
185	磁器	椀	土坑472	10.3	6.8	4.4	95	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
186	磁器	椀	土坑472	10.3	6.8	4.4	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
187	磁器	椀	土坑472	10.8	6.0	4.2	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
188	磁器	仏飯器	土坑472	8.9	5.2	3.9	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
189	磁器	仏飯器	土坑472	7.1	4.5	4.0	95	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
190	磁器	蓋	土坑472	9.4	(2.7)	-	95	灰白色 焼成:良 胎土:良	肥前	染付	
191	磁器	皿	土坑472	11.1	1.9	6.2	95	灰白色 焼成:良 胎土:良	肥前	染付	
192	磁器	皿	土坑472	13.6	2.9	8.9	85	灰白色 焼成:良 胎土:良	肥前	染付	
193	磁器	皿	土坑472	13.5	3.1	7.8	40	灰白色 焼成:良 胎土:良	肥前	染付	
194	磁器	鉢	土坑472	14.8	6.4	9.3	75	灰白色 焼成:良 胎土:良	肥前	染付	
195	土師器	皿	土坑279	5.0	1.1	-	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下のチャート・雲母含む)			図版 41
196	土師器	皿	土坑279	7.6	1.9	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)		口縁に 煤付着	
197	土師器	皿	土坑279	7.6	1.9	-	40	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.5mm以下のチャート含む)			
198	土師器	皿	土坑279	10.0	1.7	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)			
199	土師器	皿	土坑279	10.2	1.7	-	100	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.5mm以下の長石・チャート・雲母含む)		口縁に 煤付着	
200	土師質 土器	でんぼ	土坑279	11.0	3.5	7.9	60	淡黄色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
201	土師質 土器	でんぼ	土坑279	10.2	(4.5)	-	40	淡黄色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・チャート含む)			

掲載番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存率	色調・胎土など	生産地	備考	実測図版
				口径	器高	底径					
202	土師質土器	焙烙	土坑279	24.9	(4.2)	-	10	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・チャート・雲母含む)			図版41
203	土師質土器	焙烙	土坑279	25.2	(5.8)	-	20	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ6.5mm以下の赤色粒子・チャート・雲母含む)			
204	土師質土器	蓋	土坑279	10.1	2.5	-	50	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)		中央有孔	
205	土師質土器	羽釜	土坑279	14.4	(5.0)	-	80	橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
206	土師質土器	袍衣壺蓋	土坑279	17.3	2.0	-	40	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.5mm以下の長石・チャート含む)			
207	土師質土器	袍衣壺	土坑279	13.2	10.4	15.9	20	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ6.0mm以下の石英・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
208	土師質土器	火入れ	土坑279	17.6	10.4	14.4	20	橙色 焼成:良 胎土:密(φ8.0mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
209	土師質土器	灯火具(瓦灯)	土坑279	15.2	(4.5)	14.6	60	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ6.0mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
210	土師質土器	焼塩壺	土坑279	3.6	7.2	3.2	90	明赤褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)			
211	土師質土器	焼塩壺	土坑279	5.5	5.6	5.0	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)	泉州	刻印「漆伊織」	
212	土師質土器	瓜型用途不明品	土坑279	幅8.0	長8.8	-	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子含む)		上部有孔3面に窓	
213	軟質施釉陶器	灯明皿	土坑279	10.4	2.8	-	100	胎土:灰オリーブ色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	京・信楽		
214	軟質施釉陶器	香炉	土坑279	9.2	7.6	7.5	50	胎土:淡黄色 釉:黄色 焼成:良 胎土:密	京・信楽		
215	軟質施釉陶器	鬘皿	土坑279	12.2×4.5	4.1	12.4×4.6	80	胎土:浅黄褐色 釉:明黄褐色 焼成:良 胎土:密	京・信楽		
216	軟質施釉陶器	灯火具(タンコロ)	土坑279	3.8	2.0	-	90	胎土:浅黄褐色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)	京・信楽		
217	施釉陶器	椀	土坑279	10.6	6.9	5.1	50	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前		
218	施釉陶器	椀	土坑279	12.0	8.0	5.8	60	胎土:浅黄色 釉:にぶい黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		
219	施釉陶器	椀	土坑279	-	(6.9)	5.0	60	胎土:にぶい橙色 釉:にぶい黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		
220	施釉陶器	鉢	土坑279	17.6	6.4	5.8	80	胎土:灰白色 釉:にぶい黄褐色 焼成:良 胎土:密	肥前		
221	施釉陶器	椀	土坑279	11.5	5.9	4.0	100	胎土:灰色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	肥前		
222	施釉陶器	椀	土坑279	10.9	7.1	5.0	50	胎土:にぶい黄褐色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	肥前		
223	施釉陶器	片口鉢	土坑279	20.9	10.6	9.2	80	胎土:にぶい橙色 釉:暗オリーブ色・黒褐色 焼成:良 胎土:密	肥前		
224	施釉陶器	鉢	土坑279	18.4	9.3	9.6	50	胎土:赤褐色 釉:黒褐色・暗灰黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		
225	施釉陶器	鉢	土坑279	26.5	8.8	11.5	50	胎土:浅黄色 釉:黒褐色・灰黄褐色 焼成:良 胎土:密	肥前		
226	施釉陶器	椀	土坑279	12.0	3.6	4.3	40	胎土:灰白色 釉:内面灰オリーブ色、外面浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前	内野山系	図版42
227	施釉陶器	皿	土坑279	17.4	4.1	7.2	40	胎土:淡黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		
228	施釉陶器	鉢	土坑279	17.6	6.0	6.9	80	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前	刻印「次」	
229	施釉陶器	椀	土坑279	13.2	4.7	4.7	60	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前	刻印「新」	
230	施釉陶器	鉢	土坑279	19.3	6.5	8.0	70	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前	刻印「森」	
231	施釉陶器	椀	土坑279	10.0	5.9	3.6	60	胎土:淡黄色 釉:灰黄色 焼成:良 胎土:密	京・信楽		
232	施釉陶器	椀	土坑279	8.6	4.9	2.8	40	胎土:灰白色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密	京・信楽		
233	施釉陶器	鉢	土坑279	12.6	4.1	6.7	60	胎土:灰白色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	京・信楽		
234	施釉陶器	鬘皿	土坑279	12.6×3.1	3.8	13.2×3.5	85	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・信楽		
235	施釉陶器	双耳壺	土坑279	8.0	14.2	7.6	70	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・チャート含む)	京・信楽		

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
236	施釉陶器	香炉	土坑279	6.8	4.8	7.1	65	胎土:浅黄色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		図版 42
237	施釉陶器	筒椀	土坑279	9.5	5.8	4.8	20	胎土:浅黄色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
238	施釉陶器	香炉	土坑279	10.6	7.8	5.5	100	胎土:浅黄色 釉:オリーブ灰色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
239	施釉陶器	壺	土坑279	-	(10.2)	-	頸部 80	胎土:灰白色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
240	施釉陶器	片口鉢	土坑279	10.8	7.5	5.8	60	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃		
241	施釉陶器	半胴甕	土坑279	11.0	10.7	6.0	50	胎土:明黄褐色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃	刻印「長」	
242	焼締陶器	灯明受皿	土坑279	11.4	2.6	-	100	にぶい赤褐色 焼成:良 胎土:密	備前	口縁に 煤付着	
243	焼締陶器	播鉢	土坑279	25.6	9.5	11.0	50	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密	信楽		
244	焼締陶器	播鉢	土坑279	34.0	14.0	17.0	35	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密	信楽		
245	磁器	皿	土坑279	9.3	2.6	3.4	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
246	磁器	皿	土坑279	12.4	3.5	3.6	35	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
247	磁器	小椀	土坑279	8.5	5.4	4.2	65	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
248	磁器	蕎麦猪口	土坑279	7.3	5.9	4.6	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
249	磁器	蓋物身	土坑279	10.6	6.3	6.2	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
250	磁器	蓋	土坑279	4.0	(1.4)	-	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	色絵	
251	磁器	椀	土坑279	10.2	(5.3)	-	-	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	色絵	
252	磁器	小皿	土坑279	7.0	2.8	2.9	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
253	磁器	皿	土坑279	9.3	2.4	4.9	80	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、 輪花	
254	磁器	皿	土坑279	12.0	2.0	8.4	35	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
255	磁器	皿	土坑279	15.9	(2.7)	-	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
256	磁器	皿	土坑279	24.0	4.9	13.8	50	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
257	磁器	皿	土坑279	10.2	3.0	6.2	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
258	磁器	皿	土坑279	13.6	3.6	7.6	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
259	磁器	皿	土坑279	12.7	3.6	7.2	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
260	磁器	皿	土坑279	12.8	4.1	7.4	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
261	磁器	小椀	土坑279	7.1	4.3	3.4	90	明オリーブ灰色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
262	磁器	椀	土坑279	9.8	5.7	4.0	85	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
263	磁器	椀	土坑279	10.1	5.2	3.9	50	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
264	磁器	椀	土坑279	10.9	6.1	4.2	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
265	磁器	椀	土坑279	10.1	5.6	4.6	80	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
266	磁器	椀	土坑279	11.5	5.6	4.6	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
267	磁器	椀	土坑279	9.9	5.4	3.8	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
268	磁器	椀	土坑279	11.5	6.0	5.1	80	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
269	磁器	蕎麦猪口	土坑279	7.4	5.4	4.2	90	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
270	磁器	蕎麦猪口	土坑279	7.4	5.5	4.4	95	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	図版 43
271	磁器	蕎麦猪口	土坑279	7.3	5.6	4.6	85	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
272	磁器	仏飯器	土坑279	7.6	5.6	4.0	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
273	磁器	蓋	土坑279	4.6	1.6	つまみ 長2.6	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
274	磁器	蓋	土坑279	7.0	2.2	つまみ 長2.9	70	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
275	磁器	蓋物身	土坑279	10.2	7.5	6.4	90	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
276	輸入磁器	皿	土坑279	-	(2.2)	4.6	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	朝鮮	白磁 李朝	
277	輸入磁器	皿	土坑279	15.0	2.8	7.6	60	白色 焼成:良 胎土:密	中国	白磁	
278	輸入磁器	壺	土坑279	-	(5.4)	5.4	底部 65	胎土:白色 釉:暗赤褐色 焼成:良 胎土:密	中国	褐釉 清代	
279	輸入磁器	鉢	土坑279	21.8	9.9	7.5	50	胎土:灰白色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	中国龍 泉窯系	青磁	
280	輸入磁器	大皿	土坑279	-	(4.2)	19.6	20	白色 焼成:良 胎土:密	中国 景德鎮	青花 芙蓉手	
281	輸入磁器	大皿	土坑279	39.4	(4.5)	17.2	10	白色 焼成:良 胎土:密	中国漳 州窯系	呉須赤絵	
282	土師器	皿	土坑381	11.6	2.0	-	100	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・雲母含む)		口縁に 煤付着	
283	磁器	皿	土坑400	6.5 ×(4.1)	1.5	3.6 ×2.3	65	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
284	土師器	皿	水溜908	10.4	2.1	-	90	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密			
285	磁器	椀	水溜908	9.4	5.6	4.0	85	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	口紅、 彩色剥離	
286	磁器	椀	水溜908	8.6	5.0	3.8	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、 口紅	
287	磁器	椀	水溜908	11.0	5.9	4.8	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
288	磁器	皿	水溜908	10.3	2.6	3.7	75	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
289	土師器	皿	埋納 土坑741	8.9	1.4	-	100	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・φ5.0mm大の礫含む)			
290	土師器	皿	埋納 土坑741	8.8	1.5	-	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英含む)			
291	土師器	皿	埋納 土坑741	8.7	1.4	-	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)			
292	土師器	皿	埋納 土坑741	8.8	1.4	-	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英含む)			
293	土師質 土器	蓋	埋納 土坑741	8.4	1.2	-	80	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・赤色粒子含む)			
294	土師器	皿	土坑255	5.2	1.3	-	100	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・雲母含む)			
295	土師器	皿	土坑255	8.3	1.8	-	85	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英含む)			
296	土師器	皿	土坑255	10.2	2.0	-	75	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
297	土師器	皿	土坑255	10.1	1.9	-	85	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
298	土師質 土器	でんぼ	土坑255	5.8	2.2	3.8	100	淡黄色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英含む)			
299	土師質 土器	焙烙	土坑255	25.7	6.9	-	80	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む)			
300	土師質 土器	袍衣壺	土坑255	10.6	7.8	12.7	25	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の長石・石英・チャート含む)			
301	施釉陶器	椀	土坑255	11.8	4.5	4.3	90	胎土:淡黄色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		
302	施釉陶器	鉢	土坑255	14.2	7.1	7.7	35	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		
303	施釉陶器	片口鉢	土坑255	13.7	9.1	6.6	50	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	肥前		

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版	
				口径	器高	底径						
304	施釉陶器	椀	土坑255	11.3	7.7	4.4	80	胎土:灰白色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		図版 44	
305	施釉陶器	合子蓋	土坑255	2.8	0.7	-	100	胎土:灰白色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽			
306	施釉陶器	鍋	土坑255	20.1	(10.9)	-	75	胎土:灰黄褐色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽			
307	施釉陶器	土瓶	土坑255	11.9	12.1	6.8	80	胎土:灰白色 釉:明オリーブ灰色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽			
308	施釉陶器	土瓶	土坑255	6.6	8.3	5.0	95	胎土:明黄褐色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽			
309	磁器	蓋	土坑255	11.0	3.2	つまみ 径4.6	80	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付		
310	磁器	椀	土坑255	12.6	6.5	4.8	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付		
311	施釉陶器	皿	土坑266	9.9	2.0	5.8	90	胎土:浅黄褐色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽			図版 45
312	施釉陶器	水滴	土坑266	長10.0	幅5.6	厚2.5	70	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	木葉形		
313	磁器	方形皿	土坑266	13.9 ×10.5	2.7	8.3 ×5.2	80	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、 隅入		
314	軟質施釉 陶器	風炉	土坑266	-	(12.0)	-	底部 80	胎土:にぶい黄褐色 釉:明黄褐色 焼成:良 胎土:密 (φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)	京・ 信楽	底部刻印		
315	土師器	皿	土坑652	2.9	1.3	-	70	橙色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・チャート含 む)				
316	土師質 土器	皿	土坑652	14.1	2.4	-	60	にぶい黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石 英・チャート含む)		内ぐもりの 土器		
317	土師質 土器	焼塩壺	土坑652	6.1	9.2	5.7	75	明赤褐色 焼成:良 胎土:やや粗(φ5.0mm以下の長石・石 英・チャート・赤色粒子含む)	泉州	外面に 刻印		
318	施釉陶器	天目椀	土坑652	11.4	6.9	4.8	50	胎土:灰黄色 釉:黒色 焼成:良 胎土:密(φ1.5mm以下の 長石・チャート含む)	瀬戸・ 美濃			
319	磁器	椀	土坑652	10.2	6.3	4.4	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁		
320	磁器	皿	土坑652	5.4	1.8	2.4	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付		
321	磁器	皿	土坑652	9.5	1.9	5.1	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付		
322	磁器	椀	土坑652	11.2	6.4	4.1	35	胎土:灰白色 釉:明オリーブ灰色 焼成:良 胎土:密	肥前	青磁染付		
323	輸入 焼縮陶器	壺	土坑652	10.6	(6.7)	-	口縁部 35	明赤褐色 焼成:良 胎土:やや粗(φ8.0mm以下の長石・石 英・チャート含む)	ベトナム			
324	輸入 施釉陶器	壺	土坑652	7.6	(4.9)	-	口縁部 20	胎土:にぶい黄褐色 釉:暗赤灰色 焼成:良 胎土:密	中国	華南三彩		
325	輸入 施釉陶器	盤	土坑652	29.8	(5.4)	-	口縁部 15	胎土:黄灰色 釉:オリーブ灰色・オリーブ褐色 焼成:良 胎土:密	中国	華南三彩 破片融着		
326	輸入 焼縮陶器	耳付壺	土坑652	16.9	(10.5)	-	25	灰黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・石英・ チャート含む)	タイ			
327	輸入 焼縮陶器	耳付壺	土坑652	18.8	(33.2)	-	口縁～ 体部20	褐灰色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・チャート 含む)	タイ			
328	施釉陶器	筒椀	土坑749	7.7	(4.8)	-	20	胎土:灰黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		図版 46	
329	施釉陶器	蓋	土坑749	10.3	2.7	つまみ 径4.3	60	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽			
330	施釉陶器	椀	土坑749	11.7	6.8	5.0	50	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽			
331	磁器	鉢	土坑749	9.7	6.4	4.3	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁、 口紅		
332	磁器	椀	土坑749	10.8	(5.2)	-	20	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、禁 裏注文品		
333	磁器	鉢	土坑749	19.8	9.0	8.8	75	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、 焼継		
334	磁器	皿	土坑749	6.3	1.2	3.6	50	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、禁 裏注文品		
335	磁器	皿	土坑749	11.0	2.3	5.8	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、禁 裏注文品		
336	磁器	皿	土坑749	15.0	2.9	8.5	20	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、禁 裏注文品		
337	磁器	皿	土坑749	13.8	2.6	7.7	25	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、鍋 島模倣品?		

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
338	磁器	蓋	土坑749	9.0	(4.6)	-	35	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	図版 46
339		壺		10.0	(6.8)	-	口縁部 50				
340	磁器	鉢	土坑749	25.6	9.0	15.3	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付 上絵付	
341	磁器	蓋	土坑749	4.8	(3.4)	-	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付 上絵付	
342	磁器	壺	土坑749	12.9	11.3	7.6	60	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付 上絵付	
343	輸入磁器	小杯	土坑749	7.0	4.0	2.5	60	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	中国 景德鎮	十錦手	
344	輸入磁器	皿	土坑749	14.0	2.4	7.5	20	白色 焼成:良 胎土:密	中国	白磁	
345	輸入磁器	皿	土坑749	15.6	(2.0)	-	15	胎土:灰白色 釉:明オリブ灰色 焼成:良 胎土:密	中国	青磁 輪花	
346	輸入磁器	大皿	土坑749	38.7	9.5	19.1	20	灰白色 焼成:良 胎土:密	中国漳州窯系	青花 芙蓉手	
347	輸入磁器	大皿	土坑749	38.5	9.0	17.8	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	中国漳州窯系	青花 芙蓉手	図版 47
348	輸入磁器	大皿	土坑749	45.6	9.6	23.4	30	灰白色 焼成:良 胎土:密	中国漳州窯系	青花 芙蓉手	
349	輸入磁器	大皿	土坑749	37.6	7.0	19.0	15	灰白色 焼成:良 胎土:密	中国漳州窯系	青花 芙蓉手	図版 48
350	輸入磁器	大皿	土坑749	-	(5.5)	23.0	底部 30	灰黄褐色 焼成:良 胎土:密	中国漳州窯系	青花 芙蓉手	
351	輸入磁器	大皿	土坑749	49.2	10.1	25.8	30	白色 焼成:良 胎土:密	中国	青磁または 白磁	
352	土師器	皿	井戸270	11.4	1.9	-	95	淡黄色 焼成:良 胎土:密(φ4.0mm以下の長石・チャート含む)		口縁に 煤付着	図版 49
353	土師器	皿	井戸270	13.5	2.2	-	50	浅黄色 焼成:良 胎土:密(φ2.0mm以下の長石・チャート含む)			
354	土師質 土器	鉢	井戸270	17.7	4.9	12.0	20	にぶい黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ2.5mm以下の長石・雲母・チャート含む)			
355	土師質 土器	焙烙	井戸270	30.3	(3.8)	-	口縁部 20	にぶい黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・雲母・チャート含む)		内・外面とも 煤付着	
356	土師質 土器	焜炉	井戸270	13.0	15.0	15.5	70	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ5.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含む)		内面に 煤付着	
357	土師質 土器	火鉢	井戸270	12.8	21.5	13.1	80	にぶい黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ2.5mm以下の長石・雲母・チャート含む)	京・ 深草	2箇所に 刻印	
358	施釉陶器	片口鉢	井戸270	13.0	7.6	5.7	85	胎土:にぶい橙色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	肥前		
359	焼締陶器	鉢	井戸270	16.4	4.9	16.6	20	浅黄褐色 焼成:良 胎土:密	信楽	匣鉢か へら記号有	
360	施釉陶器	甕	井戸270	34.0	50.9	16.6	90	胎土:灰白色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	信楽		
361	施釉陶器	甕	井戸270	59.0	67.9	20.8	60	胎土:灰白色 釉:暗赤褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含む)	信楽		
362	焼締陶器	鉢	井戸270	25.3	(21.1)	19.8	35	にぶい黄褐色 焼成:良 胎土:密(φ3.0mm以下の長石・石英・チャート含む)	丹波		
363	施釉陶器	灯明受皿	井戸270	6.4	1.2	2.8	100	胎土:浅黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
364	施釉陶器	灯明皿	井戸270	11.5	2.5	4.3	85	胎土:灰黄色 釉:灰オリブ色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
365	施釉陶器	小杯	井戸270	7.8	3.0	2.6	80	胎土:灰白色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	内面に 漢詩?	
366	施釉陶器	壺	井戸270	-	(12.2)	5.9	40	胎土:褐灰色 釉:黄褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
367	施釉陶器	植木鉢	井戸270	13.3	9.4	7.2	95	胎土:にぶい黄褐色 釉:黒色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
368	施釉陶器	植木鉢	井戸270	18.2	11.0	12.2	50	胎土:にぶい黄色 釉:暗灰黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
369	施釉陶器	蓋	井戸270	2.9	1.3	つまみ 径1.0	90	胎土:浅黄色 釉:オリブ色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		図版 50
370		急須		7.3	7.4	8.0	80				
371	施釉陶器	土瓶	井戸270	12.8	14.0	10.6	85	胎土:浅黄色 釉:灰オリブ色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含む)	京・ 信楽		

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
372	施釉陶器	鉢	井戸270	11.8	7.8	6.6	85	胎土:浅黄色 釉:オリーブ灰色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	高台内に 墨書	図版 50
373	施釉陶器	蓋	井戸270	8.8	2.9	孔径 2.5	80	胎土:淡黄色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密	京	刻印 「帯山」	
374		香炉		10.0	9.2	8.2	80	胎土:淡黄色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密			
375	施釉陶器	蓋	井戸270	4.4	1.2	-	100	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
376	施釉陶器	蓋	井戸270	3.1	2.8	つまみ 径1.1	95	胎土:にぶい黄色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
377	施釉陶器	蓋	井戸270	6.6	1.8	つまみ 径1.3	100	胎土:にぶい黄褐色 釉:オリーブ黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
378	施釉陶器	蓋	井戸270	7.0	4.7	つまみ 径1.9	80	胎土:灰黄色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
379	施釉陶器	蓋	井戸270	7.0	2.5	つまみ 径2.3	90	胎土:にぶい黄色 釉:灰オリーブ色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
380	施釉陶器	汁次	井戸270	7.5	9.0	8.4	40	胎土:灰白色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
381	施釉陶器	蓋	井戸270	15.5	5.3	つまみ 径5.6	90	胎土:明黄褐色 釉:褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
382	施釉陶器	蓋	井戸270	13.5	(3.5)	-	90	胎土:灰黄色 釉:オリーブ褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
383	施釉陶器	片口鍋	井戸270	16.3	9.2	6.8	60	胎土:明黄褐色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
384	施釉陶器	片口鍋	井戸270	19.0	11.5	8.8	40	胎土:浅黄色 釉:内面オリーブ黄色、外面にぶい褐色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
385	焼締陶器	播鉢	井戸270	32.8	11.7	16.0	80	赤褐色 焼成:良 胎土:密	堺・ 明石		
386	施釉陶器	甕	井戸270	-	(13.2)	23.4	底部 100	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃	底部外面 に墨書	
387	施釉陶器	鉢	井戸270	14.0	5.2	6.8	60	胎土:灰黄色 釉:黒褐色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃		図版 51
388	施釉陶器	蓋	井戸270	9.2	1.5	-	100	胎土:灰白色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃		
389		蓋物身		10.3	5.9	6.7	80	胎土:灰白色 釉:灰白～淡黄色 焼成:良 胎土:密			
390	施釉陶器	皿	井戸270	10.8	1.5	-	100	胎土:白色 釉:黄色 焼成:良 胎土:密	淡路	珉平	
391	磁器	合子身	井戸270	4.2	1.7	4.2	100	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	白磁	
392	磁器	小杯	井戸270	4.2	5.3	3.4	60	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
393	磁器	蕎麦猪口	井戸270	7.7	6.5	5.8	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
394	磁器	油壺	井戸270	2.1	6.4	7.0	95	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
395	磁器	油壺	井戸270	-	(3.7)	7.0	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、 上絵付	
396	磁器	仏飯器	井戸270	5.8	4.8	2.2	95	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	赤絵	
397	磁器	椀	井戸270	10.2	5.7	5.9	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	関西系	染付	
398	磁器	鉢	井戸270	16.1	8.1	7.7	80	灰白色 焼成:良 胎土:密	関西系	染付、 焼継	
399	磁器	皿	井戸270	8.8	3.0	3.6	50	白色 焼成:良 胎土:密	関西系	染付	
400	磁器	蓋	井戸270	5.8	1.3	つまみ 径0.9	90	白色 焼成:良 胎土:密	関西系	染付	
401		急須		6.1	7.2	4.5	90	白色 焼成:良 胎土:密			
402	磁器	小杯	井戸270	6.0	2.9	2.6	50	白色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃	染付	
403	磁器	小杯	井戸270	5.9	2.6	2.2	85	白色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃	染付、 口紅	
404	磁器	椀	井戸270	9.9	5.2	3.6	50	白色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃	染付	
405	磁器	椀	井戸270	9.5	5.3	3.9	50	灰白色 焼成:良 胎土:密	瀬戸・ 美濃	上絵付	

掲載 番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			残存 率	色調・胎土など	生産地	備考	実測 図版
				口径	器高	底径					
406	輸入磁器	小椀	井戸270	7.8	3.6	3.0	100	白色 焼成:良 胎土:密	中国	白磁	図版 51
407	輸入磁器	杯	井戸270	7.9	6.0	3.1	60	白色 焼成:良 胎土:密	中国	青花	
408	輸入磁器	皿	井戸270	9.8	2.6	5.0	100	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の黒色粒子含む)	中国	青花	
409	輸入 施釉陶器	皿	井戸270	-	(1.8)	12.2	25	胎土:灰白色 釉:灰白色・青灰色 焼成:良 胎土:密	ヨーロ ッパ		
410	輸入 施釉陶器	鉢	井戸270	17.4	8.6	8.4	60	胎土:白色 釉:白色・青色 焼成:良 胎土:密	オラン ダ	ペトルス・ レグー窯	
411	土師器	皿	石室300	9.1	1.6	-	80	浅黄橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・ チャート含む)			図版 52
412	土師器	皿	石室300	9.7	1.9	-	100	橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャ ート含む)			
413	土師器	蓋	石室300	11.9	(1.8)	-	35	淡黄色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英含 む)			
414	土師器	蓋	石室300	11.1	(1.8)	-	80	にぶい橙色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英 ・チャート・赤色粒子含む)			
415	土師器	皿	石室300	12.2	1.8	-	80	淡黄色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャ ート含む)			
416	土師質 土器	鉢	石室300	9.7	5.3	-	60	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ0.5mm以下の長石・石英・チャ ート含む)		底部穿孔	
417	施釉陶器	椀	石室300	10.0	3.3	3.1	95	胎土:灰白色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	高台内 墨書	
418	磁器	小椀	石室300	5.1	2.3	1.4	100	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
419	磁器	小椀	石室300	6.9	3.5	2.4	40	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
420	磁器	小椀	石室300	7.4	3.1	2.4	95	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付 上絵付	
421	磁器	小椀	石室300	7.2	3.3	2.8	50	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付 上絵付	
422	磁器	小椀	石室300	8.9	4.2	3.6	90	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、 焼継	
423	磁器	椀	石室300	14.4	6.8	5.0	80	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、禁 裏注文品	
424	磁器	蓋	石室300	4.6	1.8	つまみ 径1.0	95	白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付	
425	軟質施釉 陶器	鉢	井戸7	26.6	(9.5)	-	10	胎土:にぶい橙色 釉:浅黄色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm 以下の長石・石英含む)	京・ 信楽		
426	施釉陶器	壺	井戸7	27.8	(18.9)	-	口縁部 80	胎土:灰白色 釉:暗褐色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下 の長石・石英・黒色粒子含む)	信楽		
427	磁器	小椀	井戸7	6.2	2.9	2.4	40	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、上 絵・金彩付	
428	焼締陶器	播鉢	土坑240	32.6	12.4	-	15	にぶい赤褐色 焼成:良 胎土:密(φ4.0mm以下の長石・石 英・チャート含む)	堺・ 明石		
429	土師器	蓋	土坑240	9.8	2.2	つまみ 径0.8	40	灰白色 焼成:良 胎土:密(φ1.0mm以下の長石・石英・チャ ート含む)			
430	施釉陶器	灰落とし	土坑240	3.5	7.0	5.2	95	胎土:浅黄橙色 釉:灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
431	磁器	皿	土坑240	9.5	3.0	3.5	95	灰白色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽	染付	
432	磁器	椀	土坑240	10.0	4.3	5.1	75	灰白色 焼成:良 胎土:密	肥前	染付、禁 裏注文品	
433	輸入 施釉陶器	小椀	土坑240	5.4	3.5	2.7	60	白色 釉:白色・青色 焼成:良 胎土:密	ヨーロ ッパ		
434	施釉陶器	鉢	池180	25.1	7.4	16.0	100	胎土:灰白色 釉:淡黄色 焼成:良 胎土:密	京・ 信楽		
435	施釉陶器	甕	池180	31.0	(29.1)	-	20	胎土:灰白色 釉:褐色 焼成:良 胎土:密	信楽		

付表2 瓦類観察表

掲載番号	種類	出土遺構	色調・焼成・胎土	文様及び手法の特徴	時期	遺構時期	実測図版
瓦1	軒丸瓦	清掃中	灰白色・良好・密	単弁六葉蓮華文。蓮弁の中央に稜線。圏線中房。外区に圏線、珠文は3個1単位。瓦当裏面丸瓦貼付け成形。丹波産。	平安時代	—	図版53
瓦2	軒丸瓦	土坑652	暗灰色～灰色・良好・密	複弁六葉蓮華文。圏線中房1+6。瓦当裏面丸瓦貼付け成形。山城産。	平安時代後期	IIIb	
瓦3	軒丸瓦	掘下げ	暗灰色～にぶい橙色・良好・緻密	単弁蓮華文。外区に圏線・珠文。瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。瓦当面や丸瓦凸面に緑釉付着。産地不明。	平安時代後期	—	
瓦4	軒平瓦	第5層	にぶい黄橙色・良好・密	段顎。半裁花文を上下交互に配し、花文間に3～5個の珠文。上下区に界線、脇区に珠文3個。瓦当面・裏面、平瓦凹面に緑釉付着。瓦当裏面に横縄叩き、平瓦凸面に縦縄叩き。完全折曲技法。丹波産。	平安時代後期	氾濫堆積層	
瓦5	軒平瓦	土坑678	灰白色・良好・密	段顎。半裁花文を上下交互に配し、花文間に3～5個の珠文を配置。瓦当裏面に横縄叩き、平瓦凸面に縦縄叩き。完全折曲技法。丹波産。	平安時代後期	IIIc	
瓦6	軒平瓦	墓932	暗灰色～灰白色・良好・密	段顎。完全折曲成形。瓦当裏面に縦縄叩き・瓦当下面に横縄叩き。丹波産。	平安時代後期	IIb	
瓦7	丸瓦	建物1	黄灰色・良好・密	玉縁部凸面に縦ケズリ後横ナデ、丸瓦部凸面に縦方向のケズリ。	平安時代	IIb	
瓦8	丸瓦	第5層	灰白色・不良・やや粗い	凸面に玉縁部と丸瓦部に連続して布目痕あり、凹面に縦方向のナデ。	平安時代	氾濫堆積層	
瓦9	平瓦	土坑652	灰白色・良好・密	凸面に縄叩き目、横方向の縄結び目あり。	平安時代	IIIb	図版54
瓦10	熨斗瓦	建物1	灰白色～浅黄橙色・不良・密	凸面に縄叩き目、側面から幅4cm位に緑釉付着。凹面に粗い布目痕。	平安時代	IIb	
瓦11	平瓦	井戸256	灰白色・やや不良・やや粗い	凸面に縄叩き目。	平安時代	IIIa	
瓦12	平瓦	墓412	暗灰色～灰色・良好・やや粗い	凸面に縄叩き目。	平安時代	IIb	
瓦13	平瓦	井戸491	灰色～浅黄色・良好・やや粗い	凸面に正格子叩き目。	平安時代末期～鎌倉時代	IIIa	
瓦14	丸瓦	土坑330	暗灰色・良好・密	凸面に細かい縄叩き目、釘孔1箇所。凹面に引っ掛けが設けられており、縦ナデ、吊り紐痕跡が残る。	室町時代	IIIc	図版55
瓦15	軒丸瓦	建物1	灰色・良好・緻密	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区に珠文5個以上。瓦当成形不明。	江戸時代	IIb	
瓦16	軒丸瓦	池180	灰色～灰白色・良好・密	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区に珠文14個。瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。	江戸時代	III d	
瓦17	軒丸瓦	土坑570	にぶい黄橙色・二次的被熱で変色・密	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区に珠文7個以上。周縁幅が広い。瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。	江戸時代	IIa	
瓦18	軒丸瓦	井戸540	暗灰色・良好・緻密	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区に珠文16個。瓦当成形不明。	江戸時代	IIa	
瓦19	軒丸瓦	掘下げ	暗灰色～灰色・良好・緻密	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区に珠文15個。瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。外区に釘穴1箇所。	江戸時代	—	
瓦20	軒丸瓦	土坑775	にぶい黄色～灰白色・二次的被熱で変色・密	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区に珠文15個。瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。	江戸時代	IIIa	
瓦21	棟丸瓦	土坑354	暗灰色・良好・緻密	菊花文、凸弁十二葉一重菊。ボタン状中房。さし部外面・裏面は横ナデ。	江戸時代	IIIc	
瓦22	棟丸瓦	土坑354	暗灰色・良好・緻密	菊花文、凸弁十六葉一重菊。ボタン状中房。瓦当外縁はケズリ、裏面は横ナデ。さし部外面・裏面は縦ケズリ+ナデ。	江戸時代	IIIc	
瓦23	棟丸瓦	土坑354	暗灰色・良好・緻密	菊花文、凸弁十六葉一重菊。粒状中房。瓦当外縁はケズリ、裏面は横ナデ。さし部外面・裏面は縦ケズリ+ナデ。	江戸時代	IIIc	
瓦24	棟丸瓦	土坑238	暗灰色・良好・緻密	菊花文、凸弁十六葉一重菊。粒状中房。瓦当裏面下半はナデ。	江戸時代	IIIa	
瓦25	棟丸瓦	検出中	灰色・良好・緻密	菊花文、凹弁八葉一重菊、弁の中央に稜線をもつ。粒状中房。瓦当外縁はケズリ、裏面は横ナデ+緑ナデ。	江戸時代	—	
瓦26	棟丸瓦	土坑652	にぶい黄橙色・二次的被熱で変色・密	菊花文、凹弁八葉一重菊。ボタン状中房。瓦当裏面下半はナデ。さし部外面は縦ケズリ、裏面はナデ。	江戸時代	IIIb	
瓦27	棟丸瓦	土坑354	暗灰色・良好・緻密	菊花文、凹弁十二葉一重菊。ボタン状中房。さし部外面はナデ、裏面は未調整。	江戸時代	IIIc	
瓦28	棟丸瓦	掘下げ	暗灰色・良好・緻密	菊花文、凹弁八葉一重菊。ボタン状中房。瓦当裏面下半はナデ。	江戸時代	—	
瓦29	軒棧瓦	土坑238	暗灰色・良好・緻密	菊花文、凸弁十六葉一重菊。星状中房内に五弁花文。軒平瓦部は欠損。	江戸時代	IIIa	

掲載番号	種類	出土遺構	色調・焼成・胎土	文様及び手法の特徴	時期	遺構時期	実測図版	
瓦30	軒平瓦	土坑279	灰色・良好・密	段額。中心飾りは右巻三巴文で、頭・尾は離れる。左右に均整唐草文。瓦当裏面・平瓦凸面に横ナデ、平瓦凹面に横ケズリ後ナデ。	江戸時代	Ⅲa	図版 56	
瓦31	軒平瓦	掘下げ	暗灰色～黄橙色・良好・やや粗い	段額。外行3転唐草文、中心文は鳥文。瓦当裏面・下面は横ナデ。平瓦凸面・凹面は横ナデ。	江戸時代	—		
瓦32	軒平瓦	土坑789	灰色・良好・密	段額。外行唐草文、中心文は5葉文、瓦当面にキラコ。瓦当裏面に横ナデ、下面に横ケズリ後ナデ。平瓦凹面にナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦33	軒平瓦	掘下げ	灰オリーブ色・良好・密	段額。外行2転唐草文、中心文は上向き3葉文。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。平瓦凹面にケズリ後ナデ。	江戸時代	—		
瓦34	軒平瓦	掘下げ	灰色～灰白色・やや不良・密	段額。外行2転唐草文、中心文は下向き3葉文。瓦当上縁に面取り。瓦当裏面・下面、平瓦凸面に横ナデ。	江戸時代	—		
瓦35	軒平瓦	土坑240	灰色・良好・緻密	段額。外行2転唐草文、複線で表現。中心文は5葉文の下に珠点。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面は横ナデ、平瓦凹凸面は横ケズリ後ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦36	軒平瓦	土坑565	灰色・良好・密	段額。外行3転唐草文、中心文は線描き宝珠文。瓦当裏面に横ナデ、瓦当上縁にケズリ。平瓦凹凸面にケズリ後ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦37	軒平瓦	井戸186	暗灰色・良好・緻密	段額。外行2転唐草文、中心文は5葉文の下に珠点。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ、平瓦凹凸面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲd		
瓦38	軒平瓦	井戸270	暗灰色～灰白色・良好・密	段額。外行3転唐草文、中心文は剣先型。瓦当面にキラコ。脇縁に面取り。瓦当裏面に横ナデ、平瓦凸面に横ケズリ後ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦39	軒平瓦	土坑715	浅黄色・二次的被熱で変色・緻密	段額。外行唐草文、中心文は上向き3葉文。瓦当裏面・下面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲb		
瓦40	軒平瓦	掘下げ	灰色～ にぶい黄橙色・二次的被熱で変色・密	段額。外行3転唐草文、両側3転目は複線で表現、中心文は珠点5個。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。瓦当裏面に爪圧痕。	江戸時代	—		
瓦41	軒平瓦	土坑715	暗灰色～灰色・良好・緻密	段額。外行宝相華文、中心文は4葉花文。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲb		
瓦42	軒平瓦	土坑240	暗灰色～灰色・良好・緻密	段額。外行3転唐草文、中心文は4葉文の下に珠点。瓦当裏面・下面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦43	軒平瓦	土坑240	暗灰色～灰白色・良好・密	段額。外行2転唐草文、複線で表現、中心文は珠点。瓦当面にキラコ。瓦当上縁はケズリ、瓦当裏面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦44	軒平瓦	井戸270	浅黄色・二次的被熱で変色・密	段額。外行3転唐草文、中心文は3葉文の先端に珠点。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦45	軒平瓦	土坑240	暗灰色～灰色・良好・密	段額。外行3転唐草文、両側2・3転目は複線で表現、中心文は3葉文の下に珠点。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。平瓦凹凸面にケズリ後横ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦46	軒棧瓦	井戸186	灰色・良好・密	軒平瓦部は外行3転唐草文、中心文は剣先形と珠点。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。軒丸瓦部破損。	江戸時代	Ⅲd		図版 57
瓦47	軒棧瓦	土坑271	暗灰色・良好・緻密	軒平瓦部は外行2転唐草文、中心文は花文。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。軒丸瓦部欠損。	江戸時代	Ⅲc		
瓦48	軒棧瓦	井戸186	灰色・良好・密	軒平瓦部は外行2転唐草文、中心文は下向きC字。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。軒丸瓦部破損。	江戸時代	Ⅲd		
瓦49	軒棧瓦	土坑240	暗灰色・良好・緻密	雀口のつく鎌軒棧瓦。軒平瓦部は外行2転唐草文、中心文は花文。瓦当面にキラコ。瓦当裏面・下面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦50	軒棧瓦	土坑626	暗灰色・良好・緻密	雀口のつく鎌軒棧瓦。軒平瓦部は外行2転雲形唐草文、中心文は宝珠文。瓦当面にキラコ。瓦当裏面は横ナデ、平瓦凸面にケズリ後ナデ。	江戸時代	Ⅲd		
瓦51	軒棧瓦	掘下げ	暗灰色～灰白色・良好・緻密	雀口のつく鎌軒棧瓦。軒平瓦部は外行2転雲形唐草文、中心文は変形宝珠文。瓦当裏面・下面・平瓦凹凸面は横ナデ。瓦当上縁は面取り。	江戸時代	—		
瓦52	滴水瓦	土坑240	暗灰色～灰白色・良好・緻密	敵水瓦の形態。立浪文様。瓦当裏面に横ナデ。燻瓦。	江戸時代	Ⅲc		
瓦53	軒棧瓦	土坑712	灰色・良好・密	軒丸瓦部は三巴、頭・尾は離れる。軒平瓦部は外行2転唐草文、中心文は3葉文。瓦当裏面は横ナデ。	江戸時代	Ⅲb		
瓦54	軒棧瓦	清掃中	灰色・良好・密	軒丸瓦部は三巴、頭・尾は離れる。軒平瓦部は外行唐草文。瓦当裏面は横ナデ、軒丸瓦部の凸面と軒平瓦部の凹面は縦ナデ。	江戸時代	—		
瓦55	丸付袖瓦	土坑27	暗灰色～灰白色・良好・緻密	軒丸瓦部は三巴、頭・尾は離れる。瓦当裏面に横ナデ。	江戸時代	Ⅲc		
瓦56	丸付袖瓦	土坑687	暗灰色～灰白色・良好・密	軒丸瓦部・軒平瓦部はともに無文、万十瓦。燻瓦。	江戸時代	Ⅲd		
瓦57	軒棧瓦	土坑17	暗灰色～灰白色・良好・密	軒丸瓦部は三巴、頭・尾は離れる。軒平瓦部は立浪文様。瓦当裏面に横ナデ。燻瓦。	幕末以降	Ⅲd		
瓦58	袖瓦	土坑240	暗灰色～灰白色・良好・緻密	見せ掛け袖瓦。軒丸瓦部は菊花文、凸弁一重菊。軒平瓦部は外行2転唐草文、中心文は橘文。軒平瓦部の上縁は面取り、釘孔1箇所。	江戸時代	Ⅲc	図版 58	

掲載番号	種類	出土遺構	色調・焼成・胎土	文様及び手法の特徴	時期	遺構時期	実測図版	
瓦59	軒棧瓦	土坑652	暗灰色～灰白色・良好・緻密	軒丸瓦部は菊花文、凸弁十六葉一重菊、中房に極小の珠文が多数付く。軒平瓦部は外行2転半唐草文、中心文は8葉文、凸面に線状のヘラ書き。	江戸時代	IIIb	図版58	
瓦60	軒棧瓦	土坑266	暗灰色～灰白色・良好・緻密	軒丸瓦部は右卷三巴文、頭・尾は離れる、外区に珠文13個。軒平瓦部は外行2転雲形唐草文、中心文は3葉文。軒丸瓦部の凸面に縦ケズリ、軒平瓦部の凸面にキラコ。	江戸時代	IIIb		
瓦61	軒棧瓦	土坑266	暗灰色～灰白色・良好・緻密	軒丸瓦部は右卷三巴文、頭・尾は離れる、外区に珠文10個以上。軒平瓦部は外行2転唐草文、中心文は5葉文に先端に二又に分離、左右対称に葉文様。軒丸瓦部凸面・軒平瓦部凹面に一部縦ケズリ後ナデ。	江戸時代	IIIb		
瓦62	軒棧瓦	土坑749	暗灰色～灰白色・良好・緻密	軒丸瓦部は右卷三巴文、頭・尾は離れる、外区に珠文12個。軒平瓦部は唐草文を複線で表現。軒丸瓦部凸面・軒平瓦部凹面に一部縦ケズリ後ナデ。	江戸時代	IIIb		
瓦63	丸瓦	土坑714	橙色～褐灰色・二次的被熱で変色・密	凸面に縦ケズリ、玉縁部凸面に横ナデ。凹面側縁・広端縁に幅広い面取り。凹面にコビキB、布目痕、縄目。	江戸時代	IIIb		図版59
瓦64	丸瓦	掘下げ	灰色・良好・密	凸面に縦ケズリ、玉縁部凸面に横ナデ。凹面側縁・広端縁に幅広い面取り。凹面にコビキB、吊り紐圧痕、布目痕、縄目。燻瓦。	江戸時代	—		
瓦65	丸瓦	土坑240	暗灰色～灰色・良好・緻密	凸面に縦ケズリ。凹面にコビキB、棒状工具による刺突痕、縄目、布目痕。燻瓦。円形の圏線内に「極」を表す記号印を凸面中央部に押す。	江戸時代	IIIc		
瓦66	丸瓦	土坑766	暗灰色・良好・密	凸面に縦ケズリ。凹面側縁・狭端縁に面取り。凹面にコビキB、吊り紐圧痕、布目痕。燻瓦。	江戸時代	IIIc		
瓦67	丸瓦	南壁清掃	黄灰色～浅黄色・二次的被熱で変色・密	凸面に縦ケズリ、釘穴1箇所、凹面にコビキB、布目痕、縄目。	江戸時代	—		
瓦68	丸瓦	土坑712	灰色～浅黄色・良好・密	凸面に縦ケズリ、釘穴2箇所、凹面にコビキB、棒状工具による刺突痕、布目痕。	江戸時代	IIIb		
瓦69	平瓦	井戸167	灰色・良好・密	凹凸面は縦ケズリ後ナデ。両側面は縦ケズリ。井戸瓦に転用。	江戸時代	IIc	図版60	
瓦70	棧瓦	井戸270	灰色・良好・密	谷部の凹凸面は縦ケズリ。頭・尻の切り込みあり。燻瓦。	江戸時代	IIIc		
瓦71	棧瓦	溝686	暗灰色～灰白色・良好・密	谷部の凹凸面は縦ケズリ後ナデ、凸面にハナレ砂付着。尻部に釘穴1箇所。頭・尻の切り込みあり。	江戸時代	III d		
瓦72	棧瓦	埋甕721	黒色～灰白色・良好・密	谷部の凹凸面にケズリ後横ナデ。頭・尻の切り込みあり。	江戸時代	III d		
瓦73	道具瓦	溝686	暗灰色～灰白色・良好・密	長辺から内側1.5cmに、長辺沿いに幅1cmの溝があり、短辺から内側1.5cmの所に貫通する孔が2箇所付く。隅木蓋瓦の一部？	江戸時代	III d		
瓦74	切隅瓦	土坑652	にぶい橙色～灰白色・二次的被熱で変色・密	各面を横ナデ調整。	江戸時代	IIIb		
瓦75	鳥衾	土坑652	黄橙色～黄灰色・二次的被熱で変色・密	右卷三巴文、尾は接する、外区に珠文12個。瓦当面に離れ砂付着、指頭痕。筒部の外面に縦ナデ+縦ケズリ、円形で未貫通の釘孔3箇所残る。燻瓦。	江戸時代	IIIb		図版61
瓦76	鳥衾	土坑652	にぶい黄橙色・二次的被熱で変色・密	右卷三巴文、頭・尾は離れる、外区に珠文15個。筒部の外面に縦ナデ、長方形で未貫通の釘孔3箇所残る。	江戸時代	IIIb		
瓦77	鳥衾	土坑749	暗灰色～灰白色・良好・密	右卷三巴文、頭・尾は離れる、外区に珠文12個。瓦当面に離れ砂付着。筒部の外面に横ナデ、内面に横ナデ+横ケズリ。	江戸時代	IIIb		
瓦78	板塀瓦	清掃中	暗灰色～灰白色・良好・密	陰刻唐草文。軒瓦部分が水平。文様面・裏面に横ナデ。	江戸時代	—		
瓦79	板塀瓦	土坑240	暗灰色・良好・密	外行3転唐草文、中心文は剣先形の下に珠点。瓦当面にキラコ、上縁に面取り。	江戸時代	IIIc		
瓦80	鬼瓦	土坑960	灰黄褐色・二次的被熱で変色・密	両側の目・耳・頬・髭・鼻・口部分が残る、両角は欠損。連珠は円筒状の器具で押捺し、全面にナデ。	江戸時代	IIb	図版62	
瓦81	鬼瓦	土坑652	灰色～灰黄色・良好・密	右角と鼻、耳、口部分が残る。連珠は円筒状の器具で押捺し、外面はナデ、側縁はケズリ+ナデ、裏面は粗いナデ。	江戸時代	IIIb		
瓦82	鬼瓦	井戸346	黄灰色～灰白色・良好・密	左髭と頬部分が残る。連珠は円筒状の器具で押捺。全面にナデ。	江戸時代	IIIa		
瓦83	鬼瓦	土坑652	黄灰色・二次的被熱で変色・密	右側の角・目・鼻が残る、全面にナデ。	江戸時代	IIIb		
瓦84	鬼瓦	土坑749	暗灰色～灰白色・良好・密	梅鉢文鬼瓦。貫通する釘孔2箇所残る。裏面は溝を設け、全面にナデ。燻瓦。	江戸時代	IIIb		
瓦85	鬼瓦	清掃中	暗灰色～灰白色・良好・密	雲型の左側。長方形の圏線内に「大佛瓦師 蒔田又右衛門」と記す人名印と「大佛御用御瓦師」のヘラ書きが側面にある。燻瓦。	江戸時代	—		
瓦86	鬼瓦	土坑778	暗灰色～灰白色・良好・密	左上がりの鱗。葉を彫刻しており、茎はヘラ描き沈線。側面に「・口品」と「大坂」のヘラ書きあり。側縁はケズリ+ナデ、裏面は粗いナデ。	江戸時代	IIIc		

掲載 番号	種類	出土遺構	色調・焼成・胎土	文様及び手法の特徴	時期	遺構 時期	実測 図版	
瓦87	鬼瓦	土坑749	黄橙色～暗灰色・二次的 被熱で変色・密	鬼瓦の足部分。地の部分にカキヤブリ、釘孔2箇所ある。付着した葉文様は一部剥離。	江戸時代	Ⅲb	図版 63	
瓦88	道具瓦	土坑17	黒～灰白・良好・密	鬼瓦の鬼台。上面に鬼瓦の接合面が残る。燻瓦。草葉を単純化した文様を刻む。	江戸時代	Ⅲc		
瓦89	道具瓦	土坑713	にぶい黄橙色～灰白色 ・二次的被熱で変色・密	棟の飾り系瓦。側面に「…□村」のヘラ書きあり。外面は丁寧にケズリ+ナデ、内面はナデ。	江戸時代	Ⅲb		
瓦90	獅子口	土坑351	暗灰色～灰白色・良好 ・密	獅子口系の棟端瓦。本体部分に2条の綾筋、経の巻や巴文は剥離、側面に釘孔3個残る。地の部分に漆喰塗布のためのカキヤブリを入れる。裏面はケズリ+粗いナデ。	江戸時代	Ⅲa		
瓦91	道具瓦	土坑316	にぶい黄橙色・二次的 被熱で変色・密	獅子口に付く。菊花文、凸弁十六葉一重菊。ボタン状中房。裏面には周縁に沿ってカキヤブリを入れる。	江戸時代	Ⅲb		
瓦92	輪違瓦	井戸270	暗灰色～灰白色・良好 ・密	凸面に横ナデ、狭・広端面側に横ケズリ、両側面に縦ケズリ、凹面に縄目。	江戸時代	Ⅲc		
瓦93	輪違瓦	土坑712	暗灰色～灰白色・良好 ・密	凸面にケズリ後横ナデ、狭・広端面側に横ケズリ、両側面に縦ケズリ。凹面の狭・広端面は横ケズリ。	江戸時代	Ⅲb		
瓦94	輪違瓦	土坑712	暗灰色～灰白色・良好 ・密	凸面に縦ケズリ後ナデ、両側面・凹面の狭広端面に縦ケズリ。	江戸時代	Ⅲb		
瓦95	軒丸瓦	土蔵1	灰色・良好・密	「大」「口」「殿」を表す文字印。各文字に円形の圏線が廻る。「大」字と下の文字の間に貫通していない孔が1箇所残る。	時期不明	Ⅲd		図版 64
瓦96	棟丸瓦	土坑238	暗灰色～灰白色・良好 ・密	長方形の圏線内に「大極上改」を表す文字印。瓦当裏面の下位に押す。	江戸時代	Ⅲa		
瓦97	軒平瓦	土坑712	灰色・良好・密	三角形の凹みを設け、その内側に円形の浮文を表す記号印。瓦当面周縁左に押す。	江戸時代	Ⅲb		
瓦98	軒平瓦	土坑240	灰色・良好・密	方形の圏線内に「□太」を表す文字印。瓦当面周縁右に押す。	江戸時代	Ⅲc		
瓦99	軒平瓦	掘下げ	灰色・良好・密	円形の圏線内に何らかの文字を表す文字印。瓦当面の右外縁に押す。横ナデ後、縦ナデ。	江戸時代	—		
瓦100	軒平瓦	土坑271	暗灰色～灰白色・良好 ・密	長方形の圏線内に「ふかくさ 九良右衛門」と記す人名印。瓦当面周縁右に押す。	江戸時代	Ⅲc		
瓦101	軒平瓦	土坑271	暗灰色・良好・緻密	長方形の圏線内に「ふかくさ 九良右衛門」と記す人名印。瓦当面周縁右に押す。	江戸時代	Ⅲc		
瓦102	軒平瓦	井戸102	暗灰色～黄灰色・二次的 被熱で変色・緻密	円形の圏線内に「十」字の記号印。瓦当面周縁右に押す。	江戸時代	Ⅲa		
瓦103	軒棧瓦	井戸346	暗灰色・良好・緻密	円形の圏線内に「十」字の記号印。瓦当面周縁左に押す。	江戸時代	Ⅲa		
瓦104	軒棧瓦	土坑712	灰色・良好・緻密	中心飾りの左右に三角形の記号あり。三角形の内側に3条の直線を配して、小三角形の組み合わせ状に表現。	江戸時代	Ⅲb		
瓦105	平瓦か 熨斗瓦	土坑715	にぶい黄橙色・二次的 被熱で変色・緻密	円形の圏線内に「十」字の記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	江戸時代	Ⅲb		
瓦106	平瓦か 熨斗瓦	土坑240	灰黄色・二次的被熱で 変色・やや粗い	円形の圏線内に「上」を表す文字印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	江戸時代	Ⅲc		
瓦107	平瓦か 熨斗瓦	土坑240	灰色・良好・緻密	円形の圏線内に「一」字の記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	江戸時代	Ⅲc		
瓦108	丸瓦か	土坑749	にぶい黄橙色・二次的 被熱で変色・密	円形の圏線内に「二」字の記号印。凸面に押す。	江戸時代	Ⅲb		

付表3 土製品観察表

掲載番号	種類	出土遺構	法量(cm)			色調	製作技法	形態	備考	遺構時期	実測図版	
			幅	高さ	奥行・厚さ							
土1	土人形 獅子舞	土坑306	2.2	4.6	1.6	灰白色	型あわせ	中実	表面に淡黄の釉、一部緑釉。	Ⅲa	図版 65	
土2	土人形 獅子舞	土坑251	2.6	5.3	2.1	灰白色	型あわせ	中空	表面に淡黄の釉、一部緑釉。	Ⅲc		
土3	土人形 獅子舞	井戸754	2.7	5.4	2.0	灰白色	型あわせ	中空	表面に淡黄の釉、一部緑釉。	Ⅲa		
土4	土人形 大黒天?	土坑279	2.9	(3.6)	1.9	浅黄橙色	型あわせ	中空	表面に淡黄の釉、一部緑釉と褐釉。	Ⅲa		
土5	土人形 朝鮮通信使	土坑279	(3.0)	(6.2)	(2.9)	灰白色	型あわせ	中実	表面に淡黄の釉、一部緑釉と褐釉。両手にチャバラ(シンバル)をもつ。	Ⅲa		
土6	土人形 男性座像	土坑279	2.8	4.1	2.0	灰白色	型あわせ	中実	表面に淡黄の釉。右手に瓢箪、左手に酒杯をもつ。	Ⅲa		
土7	土人形 西行?	土坑279	2.4	3.4	(2.2)	浅黄色	手捏ね	中空	表面に淡黄の釉、一部緑釉と褐釉。	Ⅲa		
土8	土人形 西行	井戸93	2.8	(3.0)	2.0	灰白色	型あわせ	中空	頭部のみ。一部に緑釉がかかる。	Ⅲa		
土9	土人形 月見西行	土坑366	2.4	4.7	1.5	灰白色	型あわせ	中空		Ⅲa		
土10	土人形 猿回し	埋甕282	5.1	5.4	3.6	浅黄橙色	型あわせ	中空	表面に淡黄の釉、一部緑釉。底部有孔、内部に土玉、土鈴。	Ⅲa		
土11	土人形 釣人	土坑366	3.6	5.9	2.9	橙色	型あわせ	中空	右の手先に穿孔、釣竿を挿込むため。表面に淡黄の釉、一部緑釉。	Ⅲa		
土12	土人形 釣人	土坑279	3.7	4.9	3.7	橙色	型あわせ	中空	右の手先に穿孔、釣竿を挿込むため。表面に淡黄の釉、一部緑釉。	Ⅲa		
土13	土人形 童子	井戸93	3.5	7.5	(1.9)	にぶい黄橙色	型あわせ	中空	一部に緑釉。背部欠損。	Ⅲa		
土14	土人形 虚無僧	攪乱	1.4	3.3	1.4	橙色	型あわせ	中実	二次焼成を受ける。	—		
土15	土人形 童子	掘下げ	(1.6)	(1.8)	(1.4)	にぶい黄橙色	型あわせ	中実	頭部のみ。	—		
土16	土人形 猿回し	土坑240	3.3	4.1	2.1	浅黄橙色	型あわせ	中空	猿のみ、朱で彩色。	Ⅲc		
土17	土人形 騎馬人物	土坑715	2.4	6.9	5.3	灰色	手捏ね	中実	二次焼成を受ける。	Ⅲb		
土18	土人形 大黒天	土坑717	(3.4)	(6.4)	2.4	にぶい橙色	手捏ね	中実	一部朱で彩色。	Ⅲc		
土19	土人形 男性立像	土坑472	(2.7)	(10.2)	3.0	にぶい橙色	手捏ね	中実	角頭巾を被る。朱で彩色。	Ⅲa		
土20	土人形 女性	井戸93	3.7	5.2	2.1	にぶい橙色	手捏ね	中実	差し首。	Ⅲa		
土21	土人形 女性立像	井戸93	4.9	(9.5)	3.1	にぶい橙色	手捏ね	中空		Ⅲa		
土22	土人形 男性座像	土坑472	5.4	(4.6)	7.6	灰白色	手捏ね	中空		Ⅲa		
土23	土人形 釣人	井戸93	5.4	(7.3)	4.6	浅黄色	手捏ね	中空	朱で彩色。	Ⅲa		
土24	土人形 仏像(吉祥天?)	井戸93	3.9	(4.3)	3.4	灰黄色	型あわせ	中空	底部有孔。	Ⅲa		
土25	土人形 天神	井戸447	4.6	6.0	2.0	灰白色	型あわせ	中空	一部彩色。	Ⅲa		
土26	土人形 牛乗り童子	土坑255	4.7	10.7	(9.6)	浅黄橙色	手捏ね・型あわせ	中実・中空	童子は手捏ね・中実、牛は型あわせ・中空。	Ⅲa		
土27	土人形 男性	土坑366	(6.1)	(6.3)	(3.5)	にぶい黄橙色	型あわせ	中空	頭部前面のみ。朱で彩色。	Ⅲa		図版 66
土28	土人形 男性座像	土坑279	(11.4)	10.1	7.7	にぶい黄橙色	型あわせ	中空	袴を着用。	Ⅲa		
土29	土人形 男性座像	土坑95	5.2	6.7	2.1	にぶい橙色	型あわせ	中空	背部欠損。	Ⅲc		
土30	土人形 男性	土坑279	(3.2)	(2.0)	(3.7)	浅黄橙色	型あわせ	中空	頭部前面のみ。	Ⅲa		
土31	土人形 男性座像	土坑279	4.3	6.0	3.7	灰白色	型あわせ	中空	底部有孔、内部に土玉、土鈴。	Ⅲa		
土32	土人形 饅頭喰い	井戸93	8.9	(14.4)	6.5	にぶい橙色	型あわせ	中空	キラコ付着。	Ⅲa		
土33	土人形 男性立像	土坑314	(7.8)	(7.8)	(5.0)	明黄褐色	型あわせ	中空	二次焼成を受ける。頭部2箇所有孔。	Ⅲa		

掲載 番号	種類	出土遺構	法量(cm)			色調	製作技法	形態	備考	遺構 時期	実測 図版
			幅	高さ	奥行・ 厚さ						
土34	土人形 男性立像	井戸93	6.8	14.0	5.3	にぶい 黄橙色	型あわせ	中空	身体部分は朱で彩色、着物の裾部は墨で彩色。	Ⅲa	図版 66
土35	土人形 富士見西行	土坑331	9.5	13.2	7.9	黄灰色	型あわせ	中空	瓦質。	Ⅲa	
土36	施釉陶器 水滴 男性座像	池276	2.7	2.4	2.0	浅黄色	型あわせ	中空	底部を除き、全体に淡黄の釉。	Ⅲa	
土37	土人形 女性立像(太夫)	井戸93	2.5	(3.9)	1.8	にぶい 黄橙色	型あわせ	中実	キラコ付着、底部有孔。	Ⅲa	
土38	施釉陶器 酒呑童子?	土坑279	3.2	(2.9)	3.0	灰白色	手捏ね	中実	額部、2箇所有孔。角の差込み穴か? 鉄釉と青色の釉で彩色。	Ⅲa	
土39	施釉陶器 水滴 男性立像	井戸93	3.0	(5.1)	2.7	灰黄色	型あわせ	中空	底部を除き、全体に灰黄の釉。	Ⅲa	
土40	施釉陶器 水滴 鯰を抱える唐子	土坑472	(6.9)	6.3	(7.5)	浅黄色	型あわせ	中空	鯰と童子の頭髪・目鼻を鉄釉で描写。後、底部を除き全体に淡黄の釉。	Ⅲa	
土41	土人形 獅子	掘下げ	2.7	3.7	1.2	灰白色	型あわせ	中空	底部有孔。	—	図版 67
土42	土人形 獅子	土坑255	3.3	4.2	2.1	灰白色	型あわせ	中実	表面に淡黄の釉、一部緑釉。「吽」形。	Ⅲa	
土43	土人形 犬	土坑749	4.4	7.2	3.0	にぶい 橙色	手捏ね	中実	尾部に穴。	Ⅲb	
土44	土人形 犬	井戸684	3.1	6.7	5.7	灰白色	型あわせ	中空	一部に淡黄の釉と緑釉、目を墨描、底部有孔、内部に土玉、土鈴。	Ⅲc	
土45	土人形 犬	井戸241	2.7	4.4	4.9	浅黄橙 色	型あわせ	中空	底部有孔、内部に土玉、土鈴。	Ⅲa	
土46	土人形 犬	井戸754	1.8	4.3	3.5	橙色	型あわせ	中空	マントと帽子を着用、底部有孔。	Ⅲa	
土47	土人形 犬	井戸93	4.8	9.6	9.0	浅黄色	型あわせ	中空	マントと帽子を着用。	Ⅲa	
土48	施釉陶器 水滴 獅子	土坑279	2.6	4.9	4.8	浅黄橙 色	型あわせ	中空	底部を除き、全体に淡黄の釉。	Ⅲa	
土49	土人形 烏帽子猿	土坑279	(2.2)	(4.7)	(4.5)	にぶい 黄橙色	手捏ね・ 型あわせ	中実	頭部のみ、烏帽子は手捏ね、顔は型合わせ。烏帽子は朱で彩色、頭髪は墨で彩色。	Ⅲa	
土50	土人形 桃抱き猿	土坑279	3.5	5.0	3.1	にぶい 橙色	型あわせ	中空	陣羽織を着用。	Ⅲa	
土51	土人形 桃抱き猿	土坑279	3.6	5.1	3.3	にぶい 橙色	型あわせ	中空	陣羽織を着用。	Ⅲa	
土52	土人形 馬	井戸241	(3.0)	(5.0)	(6.1)	橙色	型あわせ	中空	頭部のみ。	Ⅲa	
土53	土人形 飾馬	土坑332	3.3	(6.1)	(6.5)	淡黄橙 色	型あわせ	中空	鞍の中央に穿孔、人形差し込み口か?	Ⅲc	
土54	土人形 馬	土坑332	2.9	5.9	6.5	淡黄色	型あわせ	中空	胴部下端に穿孔。	Ⅲc	
土55	施釉陶器 虎	土坑738	2.4	(4.1)	(5.8)	灰白色	手捏ね	中実	鉄釉で文様を描写。後、白釉、胴部下端に穿孔。	Ⅲc	
土56	土人形 狐	土坑272	(1.0)	(1.9)	(1.1)	にぶい 黄橙色	型あわせ	中実	頭部のみ。	Ⅲd	
土57	土人形 狐	井戸241	(3.2)	(3.0)	(3.5)	浅黄橙 色	型あわせ	中実	頭部のみ、朱で彩色。	Ⅲa	
土58	土人形 狐	土坑960	2.9	7.1	5.3	にぶい 橙色	型あわせ	中実	キラコ付着。	Ⅱb	
土59	土人形 牛	井戸241	3.6	4.2	9.0	にぶい 橙色	型あわせ	中空	鼻部有孔。	Ⅲa	
土60	土人形 牛	土坑279	3.1	4.5	8.9	にぶい 橙色	型あわせ	中空	鼻部有孔。	Ⅲa	
土61	土人形 牛	掘下げ	2.8	3.8	7.9	にぶい 褐色	型あわせ	中空	鼻部有孔。	—	
土62	土人形 鳩	井戸91	2.4	3.7	(3.5)	灰白色	型あわせ	中実	鳩笛。底部を除き表面に淡黄の釉、一部緑釉。	Ⅲc	
土63	土人形 鼻	掘下げ	3.2	5.4	2.7	にぶい 黄橙色	型あわせ	中空	キラコ付着。	—	
土64	土人形 雀	井戸93	4.0	4.1	5.8	浅黄橙 色	型あわせ	中空	朱で彩色。底部有孔。	Ⅲa	
土65	土人形 雀	井戸241	(5.4)	6.5	(4.1)	灰白色	型あわせ	中空	一部、墨で彩色。底部有孔。	Ⅲa	
土66	土人形 鶏	土坑366	3.2	(7.1)	(4.0)	灰白色	型あわせ	中空	一部、朱で彩色。	Ⅲa	

掲載番号	種類	出土遺構	法量(cm)			色調	製作技法	形態	備考	遺構時期	実測図版
			幅	高さ	奥行・厚さ						
土67	青磁 箸置 魚	掘下げ	1.5	2.7	7.5	白色	型あわせ	中実	底部無釉。筆架の可能性もある。	—	図版67
土68	施釉陶器 蛙	井戸93	2.4	1.7	1.8	浅黄橙色	手捏ね		緑釉がかかる。	Ⅲa	
土69	施釉陶器 龍?	土坑960	(6.2)	(6.2)	(2.8)	橙色	手捏ね・型あわせ	中空	にぶい黄橙と黒灰の交胎。黒褐と灰白の釉で彩色。鉢の一部か。	Ⅱb	
土70	土人形 牛	井戸270	73.9	36.0	39.4	淡い橙色	型おこし	中空	背中に胡粉、耳と鼻に赤色、蹄に青色の顔料が残る。大型。	Ⅲc	図版68
土71	土人形 牛	井戸270	74.8	38.4	39.4	浅黄橙色	型おこし	中空	背中に胡粉、耳と鼻に赤色、蹄に青色の顔料が残る。大型。	Ⅲc	図版69
土72	土人形 牛	井戸270	46.7	20.2	20.4	浅黄橙色	型おこし	中空		Ⅲc	図版70
土73	土人形 狐	井戸270	19.2	36.5	15.5	にぶい黄橙色	型あわせ	中空	右向き、玉を啜える。キラコ付着。口内朱で彩色。尻尾の宝珠は復元。	Ⅲc	図版71
土74	土人形 狐	井戸270	22.0	36.5	15.1	にぶい黄橙色	型あわせ	中空	左向き、巻物を啜える。キラコ付着。尻尾の宝珠は復元。	Ⅲc	
土75	箱庭道具 農家	土坑751	3.9	3.7	2.8	灰白色	型あわせ	中空	表面に淡黄の釉、一部緑釉、破風の部分に穿孔。	Ⅲc	
土76	箱庭道具 社	土坑279	3.1	(2.5)	3.3	灰白色	手捏ね	中空	一部に褐色の彩色。	Ⅲa	
土77	箱庭道具 切株	土坑266	4.8	4.3	4.0	白色	手捏ね		施釉陶器。底部と内面の一部を除き鉄釉。	Ⅲb	
土78	箱庭道具 蓬莱山	井戸93	10.9	16.2~	6.9	灰黄色	型おこし		表面に淡黄の釉、一部緑釉と褐釉。	Ⅲa	
土79	ミニチュア 椀	井戸241	口径2.2	1.4	底径0.8	白色	手捏ね		肥前磁器染付。	Ⅲa	
土80	ミニチュア 椀	土坑279	口径3.8	1.6	底径1.7	白色	手捏ね		肥前磁器白磁、紅皿。	Ⅲa	
土81	ミニチュア 鉢	土坑472	口径4.0	2.7	-	にぶい黄橙色	手捏ね			Ⅲa	
土82	ミニチュア 鉢	井戸93	口径4.2	2.0	-	灰黄色	手捏ね			Ⅲa	
土83	ミニチュア 壺	井戸241	口径3.6	3.3	底径3.2	橙色	手捏ね		表面一部剥離。	Ⅲa	
土84	ミニチュア 壺	井戸93	口径3.1	4.1	底径3.0	にぶい黄橙色	轆轤			Ⅲa	
土85	ミニチュア 六角瓶	井戸93	-	(5.8)	底径2.3	灰白色	型あわせ		6箇所稜に緑釉。	Ⅲa	
土86	ミニチュア 播鉢	土坑95	口径5.2	3.2	底径2.1	橙色	型おこし		明赤褐の釉。	Ⅲc	
土87	ミニチュア 漏斗	井戸93	径5.1	3.6	-	にぶい黄橙色	型おこし		内面に淡黄の釉。	Ⅲa	
土88	不明土製品	井戸93	6.1	(2.1)	-	淡黄色	型おこし		朱で彩色。中央有孔。	Ⅲa	
土89	玩具 丁銀	土坑332	3.1	(5.8)	1.1	にぶい黄橙色	手捏ね	中実		Ⅲc	
土90	ミニチュア 石臼	土坑604	径3.6	2.2	-	灰白色	手捏ね	中実		Ⅲc	
土91	土鈴	墓831	1.6	1.6	1.5	灰黄色	型あわせ	中空	型あわせの後に鈴口を切り取る。	Ⅱb	
土92	土鈴	墓831	1.5	1.5	1.4	灰白色	型あわせ	中空	型あわせの後に鈴口を切り取る。	Ⅱb	
土93	土鈴	墓831	1.6	1.6	1.4	にぶい黄橙色	型あわせ	中空	型あわせの後に鈴口を切り取る。	Ⅱb	
土94	土鈴	土坑279	2.6	3.2	2.6	浅黄色	型あわせ	中空	型あわせの後に鈴口を切り取る、上端部有孔。一部に赤褐色の彩色。	Ⅲa	
土95	土鈴	土坑472	3.0	3.4	3.0	灰白色	型あわせ	中空	型あわせの後に鈴口を切り取る、上端部有孔。	Ⅲa	
土96	土鈴	土坑95	4.0	4.0	4.0	灰白色	型あわせ	中空	型あわせの後に鈴口を切り取る、上端部有孔。	Ⅲc	
土97	土鈴	土坑332	4.3	3.7	2.5	にぶい黄橙色	型あわせ	中空	型あわせの後に鈴口を切り取る、上端部有孔。	Ⅲc	
土98	金剛鈴	井戸93	5.4	(8.7)	-	灰白色	型あわせ		束の根本有孔。	Ⅲa	
土99	つぼつぼ	土坑279	口径2.0	2.4	底径2.0	白色	轆轤・手捏ね		粟田焼で焼成後の釉薬の発色を確認するためのもの。	Ⅲa	

掲載 番号	種類	出土遺構	法量(cm)			色調	製作技法	形態	備考	遺構 時期	実測 図版
			幅	高さ	奥行・ 厚さ						
土100	つぼつぼ	井戸93	口径 2.5	2.5	-	灰白色	手捏ね		口縁部、墨で彩色。	Ⅲa	図版 71
土101	つぼつぼ	土坑472	口径 2.4	2.3	-	灰白色	手捏ね		口縁の一部、墨で彩色。	Ⅲa	
土102	つぼつぼ	土坑240	口径 1.9	3.2	底径 2.2	にぶい 橙色	手捏ね・ 型おこし			Ⅲc	
土103	つぼつぼ	井戸93	口径 3.0	1.8	-	淡黄色	手捏ね			Ⅲa	
土104	つぼつぼ	土坑472	口径 2.4	2.5	-	浅黄色	手捏ね			Ⅲa	
土105	つぼつぼ	土坑279	口径 2.4	2.1	-	浅黄色	手捏ね			Ⅲa	
土106	つぼつぼ	土坑472	口径 2.9	2.3	-	灰白色	手捏ね		「吉」字など外面全面に墨描。	Ⅲa	
土107	泥面子 文字「め」	土坑748	径2.9	-	0.9	にぶい 橙色	型おこし		裏面ケズリ。	Ⅲc	
土108	泥面子 文字「寅」	土坑739	径3.0	-	0.8	にぶい 橙色	型おこし		裏面ケズリ。	Ⅲa	
土109	泥面子 文字「水」	掘下げ	径3.0	-	1.2	浅黄橙 色	型おこし		裏面ナデ。	-	
土110	泥面子 文字「桐」	土坑748	径3.7	-	1.0	にぶい 橙色	型おこし		裏面ナデ、指圧痕による窪み。	Ⅲc	
土111	泥面子 紋「持合吉文字亀甲」	土坑748	2.7	3.1	0.9	橙色	型おこし		裏面ナデ、指圧痕による窪み。	Ⅲc	
土112	泥面子 紋「五三桐」	土坑739	径3.2	-	0.8	にぶい 橙色	型おこし		裏面ナデ。	Ⅲa	
土113	泥面子 紋「丸に菊」	土坑748	径3.2	-	0.9	にぶい 橙色	型おこし		裏面ナデ、指圧痕による窪み。	Ⅲc	
土114	泥面子 紋「千鳥」	土坑240	径3.5	-	1.3	にぶい 橙色	型おこし		裏面ケズリ。	Ⅲc	
土115	泥面子 紋「三つ銀杏」	土坑240	径4.7	-	1.1	橙色	型おこし		裏面ケズリ。	Ⅲc	
土116	泥面子 紋「丸に三つ巴」	土坑240	径5.9	-	1.4	にぶい 橙色	型おこし		裏面ケズリ。	Ⅲc	
土117	泥面子 団扇	井戸346	2.2	2.4	0.5	橙色	型おこし			Ⅲa	
土118	泥面子 おかめ	土坑279	1.6	1.9	0.7	にぶい 橙色	型おこし		髪の毛を墨で着色。	Ⅲa	
土119	泥面子 猿	土坑739	3.3	3.1	1.6	浅黄橙 色	型おこし		顔のみ黒色で彩色、裏面無調整。	Ⅲa	
土120	不明土製品 木の葉抜型?	土坑604	3.3	(3.7)	0.9	にぶい 黄橙色	手捏ね・ 型おこし			Ⅲc	
土121	泥面子の抜型 紋	攪乱10	径3.0	1.4	-	浅黄橙 色	手捏ね・ 型おこし		外面に「忠」の刻印。	-	
土122	青磁 印章	土坑272	2.1	(1.2)	2.5	灰白色	型おこし	中実	印面を除き暗緑色の釉。	Ⅲd	図版 72
土123	栓	井戸93	径4.8	2.5	-	にぶい 黄橙色	轆轤			Ⅲa	
土124	円盤	井戸754	径4.9	-	1.2	灰色		中実	瓦質火鉢の破片を再利用。	Ⅲa	
土125	土錘	土坑749	径1.5	5.1	-	にぶい 黄橙色	手捏ね			Ⅲb	
土126	土錘	土坑266	径4.2	4.5	-	にぶい 黄橙色	型あわせ	中実	蓆などを編む時に使う錘。	Ⅲb	
土127	蠟燭立	土坑240	径5.2	1.6	-	にぶい 黄橙色		中実	中央に長さ約3cmの銅製針残存。	Ⅲc	
土128	硯	土坑652	7.9	2.2	(9.7)	にぶい 黄橙色		中実	土師質。	Ⅲb	

付表4 石製品観察表

掲載 番号	種類	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	材質	備考	遺構 時期	実測 図版
			高さ	幅	厚さ					
石1	合子(身)	土坑749	口径 5.6	底径 6.6	器高 2.1	12.7	赤色石灰岩	側面に花の線刻、中国産の石材か。	Ⅲb	図版 72
石2	文鎮	井戸241	(2.9)	0.9	2.5	14.5	頁岩	上面に花の線刻、中国産の石材か。	Ⅲa	
石3	文鎮	土坑749	17.4	4.4	4.4	248.5	頁岩	二次焼成を受けて大きく変形。	Ⅲb	
石4	硯	攪乱	15.2	2.9	6.3	580.0	黒色頁岩		—	
石5	硯	掘下げ	16.8	2.4	7.7	568.0	黒色頁岩	裏面に線刻。	—	
石6	硯	土坑749	径13.0	(9.4)	2.1	404.5	丹波帯珪質頁岩	円面。	Ⅲb	
石7	砥石	掘下げ	10.8	4.1	5.9	424.5	流紋岩		—	
石8	砥石	土坑240	14.7	6.9	9.6	891.0	丹波帯砂岩		Ⅲc	
石9	板状五輪塔	土坑265	(14.1)	2.9	10.8	765.0	丹波帯砂岩	五輪塔の破片の再利用。	Ⅲa	
石10	印章	土坑749	(1.8)	(1.6)	(1.3)	3.9	石英または珪岩	印面に「□□福□」と線刻、中国産の石材か。	Ⅲb	
石11	印章	掘下げ	3.5	(1.8)	1.9	9.1	石英または珪岩	印面に「文物多師古」と線刻、中国産の石材か。	—	
石12	印章	掘下げ	1.3	1.6	1.4	6.9	石英または珪岩	印面に壺形が陽刻、反対側に「上」と線刻、中国産の石材か。印面に朱残存。	Ⅲb	
石13	印章	土坑330	2.1	1.4	1.6	12.8	泥岩または石墨	印面に「緑竹猗々」と線刻、中国産の石材か。	Ⅲc	
石14	数珠玉	墓932	径0.6	—	孔径 0.12	0.284	碧玉	半透明の緑色を呈する。	Ⅱb	

付表5 墓石観察表

掲載 番号	種類	出土遺構	法量(cm)			重量(kg)	材質	備考	遺構 時期	実測 図版	
			高さ	幅	厚さ						
石15	一石五輪塔	井戸303	44.5	11.6	10.0	10.9	閃緑岩～斑禰岩	「慶長七年」(1602)の銘あり。	II c	図版 73	
石16	一石五輪塔	土坑802	37.4	11.8	10.2	9.5	閃緑岩～斑禰岩	「慶長九年」(1604)の銘あり。 空輪部を欠く。	II b		
石17	一石五輪塔	土坑802	(20.1)	11.5	10.5	5.5	閃緑岩～斑禰岩	「慶長九年」(1604)の銘あり。 地輪部のみ。	II b		
石18	一石五輪塔	土坑279	42.9	10.4	11.4	9.0	砂岩(和泉砂岩か)	「慶長十年」(1605)の銘あり。 地輪部の下方欠損。	III a		
石19	一石五輪塔	攪乱	52.5	14.4	13.0	17.5	砂岩(和泉砂岩か)	「慶長十七年」(1612)の銘あり。完形。	—		
石20	一石五輪塔	土坑802	40.9	10.6	8.2	5.8	閃緑岩～斑禰岩	「元和七年」(1621)の銘あり。 金箔書き文字。	II b		
石21	一石五輪塔	土坑802	48.6	14.1	11.9	13.0	砂岩(和泉砂岩)	「元和七年」(1621)の銘あり。	II b		
石22	一石五輪塔	重機 掘削中	(34.9)	12.6	11.3	9.0	砂岩(和泉砂岩か)	「寛永七年」(1630)の銘あり。 空輪部と風輪部を欠く。	—		
石23	一石五輪塔	土坑802	56.1	14.5	12.7	22.0	閃緑岩～斑禰岩	「寛永十九年」(1642)の銘あり。完形。	II b		
石24	一石五輪塔	土坑802	(35.0)	11.4	8.4	6.8	閃緑岩～斑禰岩	空輪部と風輪部を欠く。	II b		
石25	別石五輪塔 空輪と風輪部	井戸303	32.0	21.0	24.4	19.0	黒雲母花崗岩 (広島型)	四面に梵字。空輪部の上方が長く尖る。	II c		
石26	別石五輪塔 火輪部	土坑227	8.3	20.8	20.6	5.0	閃緑岩～斑禰岩	五輪塔火輪部。	III a		
石27	舟形墓標	墓824	43.2	19.5	7.5	10.0	閃緑岩～斑禰岩	「元和六年」(1620)の銘あり。	II b		図版 74
石28	舟形墓標	土坑227	(28.2)	(22.1)	(12.6)	10.5	黒雲母花崗岩 (広島型)	「寛永十三年」(1636)、「正保元年」(1644) の銘あり。	III a		
石29	舟形墓標	土坑802	50.4	29.8	12.2	24.5	閃緑岩～斑禰岩	「寛文十庚戌年」(1670)の銘あり。完形。	II b		
石30	舟形墓標	土坑802	(38.7)	21.5	15.1	19.0	黒雲母花崗岩 (広島型)	「延宝四丙辰天」(1676)の銘あり。	II b		
石31	舟形墓標	井戸820	61.2	31.0	(23.8)	45.0	黒雲母花崗岩 (広島型)	年号なし。	II c		
石32	板磚形墓標	攪乱	48.9	25.6	14.5	27.0	黒雲母花崗岩 (広島型)	「寛永二〇」の銘あり。	—		
石33	位牌形墓標	土坑802	45.0	21.4	14.2	28.0	黒雲母花崗岩 (広島型)	「癸丑」(延宝元年)(1673)の銘あり。	II b		図版 75
石34	位牌形供養塔	2区 第2面	79.4	38.9	20.0	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	「寛永九年」(1632)の銘あり。完形。 石39・40と組み合う。	III a		
石35	位牌形供養塔	土坑279	79.5	38.3	18.5	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	「寛永九年」(1632)、「寛永十年」(1633)、 「寛永十四年」(1637)の銘あり。	III a		
石36	位牌形供養塔	土坑279	84.3	43.6	37.2	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	「寛永十七」(1640)の銘あり。	III a		
石37	別石五輪塔 地輪部	墓824	30.9	37.5	37.0	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	「寛永二年」(1625)の銘あり。 五輪塔の地輪部のみ。	II b		
石38	石仏	土坑802	34.2	20.9	13.3	12.5	黒雲母花崗岩 (広島型)	磨滅激しい。	II b	図版 77	
石39	位牌形供養塔 笠部	2区 第2面	23.4	54.4	34.8	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	完形。石34の笠部。	III a		
石40	位牌形供養塔 台石(反花付)	2区 第2面	36.5	50.0	50.0	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	完形。石34の台石。	III a		
石41	台石	第2面	23.0	50.2	31.2	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	ほぼ完形。	III a		
石42	台石(反花付)	攪乱	28.0	46.3	41.0	未測定	黒雲母花崗岩 (広島型)	完形。	—		

付表6 金属製品観察表

掲載 番号	種類	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	材質	備考	遺構 時期	実測 図版
			長さ	幅	厚さ					
金1	吊手	掘下げ	7.9	10.3	1.1	11.44	銅		—	図版 78
金2	匙	礎石701	7.3	1.3	0.2	3.51	銅		III d	
金3	灯心押え	畑1	4.7	6.7	0.15	6.41	銅		II c	
金4	火箸	掘下げ	16.0	0.3	0.3	5.91	金銅		—	
金5	包丁	土坑689	(21.7)	4.0	0.6	121.60	鉄	鍛造	III d	
金6	蝶番	土坑749	4.1	3.8	0.6	8.12	銅		III b	
金7	蝶番	土坑740	9.3	3.9 (7.7)	0.6	45.86	銅		III d	
金8	釘隠し	畑1	2.2	2.8	0.1	2.49	銅		II c	
金9	釘隠し	土坑270	2.4	2.8	0.4	2.33	金銅		III c	
金10	釘隠し	掘下げ	5.3	5.4	0.3	47.48	銅		—	
金11	紐金具	土坑279	3.6	3.0	3.1	12.85	銅	鍛造	III a	
金12	引手	土坑749	(5.0)	(8.5)	0.7~1.2	25.05	鉄	鍛造	III b	
金13	引手	土坑270	6.8	6.2	4.3	78.62	鉄	鍛造	III c	
金14	煙管(雁首)	畑1	(10.7)	1.0	0.1	11.54	真鍮	火口欠損	II c	
金15	煙管(吸口)	畑1	10.9	0.9	0.1	8.93	真鍮		II c	
金16	煙管(雁首)	畑1	6.8	1.7	0.15	14.67	真鍮		II c	
金17	煙管(吸口)	畑1	7.1	0.9	0.15	6.28	真鍮		II c	
金18	鉄鏝	土坑689	(15.5)	2.2	1.5	52.60	鉄	鍛造	III d	
金19	鐔	掘下げ	6.3	5.8	0.6	59.90	銅	鍛造	—	
金20	鶏目金具	土坑749	1.9	0.9	0.6	1.24	金・銀合金		III b	
金21	髪飾り	土坑331	10.7	0.8	0.15	3.97	金銅		III a	
金22	髪飾り	土坑501	15.3	1.7	0.2	6.50	銅		III a	
金23	鉄釘	墓826	(4.1)	0.3	0.4	1.44	鉄		II b	
金24	鉄釘	墓826	(4.7)	0.3	0.4	2.46	鉄		II b	
金25	鉄釘	墓910 B	(4.1)	0.4	0.4	2.19	鉄	図版15	II b	
金26	鉄釘	墓932	(3.9)	0.3	0.4	1.29	鉄		II b	
金27	鉄釘	墓567	6.2	0.5	0.3	4.12	鉄		II a	

付表7 錢貨観察表

掲載 番号	種類	出土遺構	法量(cm)		重量(g)	初鑄年	備考	遺構 時期	図版 番号
			外径	穿孔径					
銭1	淳化元寶(真書)	墓595	約2.3	約0.6	不明	北宋、淳化元年(990)	6枚鑄着のうちの1番上、麻布に包まれ下にスギ材の薄板。	II a	図26
銭2	元符通寶(真書)		約2.4	約0.6	不明	北宋、元符元年(1098)	6枚鑄着のうちの2番目。		
銭3	元豐通寶(真書)		約2.4	約0.7	不明	北宋、元豐元年(1078)	6枚鑄着のうちの3番目。		
銭4	熙寧元寶(篆書)		約2.4	約0.7	不明	北宋、熙寧元年(1068)	6枚鑄着のうちの4番目。		
銭5	元祐通寶(篆書)		約2.4	約0.7	不明	北宋、元祐元年(1086)	6枚鑄着のうちの5番目。		
銭6	嘉泰通寶		約2.5	約0.7	不明	南宋、嘉泰元年(1201)	6枚鑄着のうちの6番目。		
銭7	古寛永通寶	墓910A	2.43	0.57	2.41	寛永13年(1636)	下にスギ材の薄板が敷かれていた。1枚単独。錆、顕著。	II b	図版 79
銭8	古寛永通寶	墓910A	2.47	0.55	3.78	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの1番上。	II b	
銭9	古寛永通寶		2.44	0.57	2.82	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの2番目。		
銭10	古寛永通寶		2.46	0.56	4.04	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの3番目。		
銭11	古寛永通寶		2.48	0.60	3.52	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの4番目。		
銭12	寛永文銭		2.55	0.60	3.58	寛文8年(1668)	6枚鑄着のうちの5番目。		
銭13	古寛永通寶		2.44	0.58	2.99	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの6番目。		
銭14	寛永文銭	墓910B	2.54	0.55	3.18	寛文8年(1668)	6枚が土師皿の上に分散。	II b	
銭15	寛永文銭		2.55	0.56	3.55	寛文8年(1668)			
銭16	古寛永通寶		2.53	0.59	3.52	寛永13年(1636)			
銭17	古寛永通寶		2.50	0.57	2.95	寛永13年(1636)			
銭18	古寛永通寶		2.43	0.53	3.72	寛永13年(1636)			
銭19	古寛永通寶		2.48	0.55	3.04	寛永13年(1636)			
銭20	寛永文銭	墓910B	2.55	0.59	2.87	寛文8年(1668)	6枚が土師皿の上に分散。	II b	
銭21	古寛永通寶		2.59	0.58	3.52	寛永13年(1636)			
銭22	寛永文銭		2.54	0.57	3.21	寛文8年(1668)			
銭23	古寛永通寶		2.41	0.58	2.40	寛永13年(1636)			
銭24	古寛永通寶		2.50	0.56	2.95	寛永13年(1636)			
銭25	熙寧元寶(真書)		2.38	0.68	3.10	北宋、熙寧元年(1068)			
銭26	寛永文銭	墓932	2.55	0.57	2.85	寛文8年(1668)	6枚鑄着のうちの1番上。	II b	
銭27	古寛永通寶		2.44	0.57	2.94	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの2番目。		
銭28	古寛永通寶		2.47	0.59	3.83	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの3番目。		
銭29	寛永文銭		2.55	0.57	3.70	寛文8年(1668)	6枚鑄着のうちの4番目。		
銭30	古寛永通寶		2.44	0.55	2.77	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの5番目。		
銭31	古寛永通寶		2.49	0.56	3.30	寛永13年(1636)	6枚鑄着のうちの6番目、下に漆膜が残存していた。		
銭32	寛永文銭	墓932	2.53	0.59	2.45	寛文8年(1668)	遺構の南肩。1枚単独。	II b	
銭33	古寛永通寶	墓932	2.40	0.58	2.99	寛永13年(1636)	遺構の南西肩。1枚単独。錆、顕著。	II b	
銭34	古寛永通寶	墓932	2.53	0.53	2.79	寛永13年(1636)	遺構の南西肩。1枚単独。	II b	

付表8 ガラス製品観察表

掲載番号	種類	出土遺構	法量(cm)			色	形態・手法の特徴	遺構時期	実測図版
			長さ	幅	厚さ				
ガ1	髪飾り	掘下げ	(7.2)	径0.5	—	青透明	断面円形の棒状ガラスを4本(2本対を二つあわせて)ねじって螺旋状にする。先端は太くし、軽く「く」の字に曲げる。表面風化。	—	図版 80
ガ2	髪飾り	石室300	(12.1)	径0.5	—	本体青透明・先端無色透明	断面円形の棒状ガラスをねじって螺旋状にする。先端をネギ坊主形の無色透明のガラスを取り付けて「く」の字にまげる。表面風化。	IIIc	
ガ3	髪飾り	石室300	(5.5)	径0.5	—	白透明	断面円形の棒状ガラスをねじって螺旋状にする。先端は下方向に円形に曲げる。表面風化。	IIIc	
ガ4	髪飾り	石室300	(10.1)	径0.6	—	黄透明	断面円形の棒状ガラスをねじって螺旋状にする。	IIIc	
ガ5	髪飾り	石室300	(10.2)	径0.4	—	青透明	断面円形の棒状ガラスをねじって螺旋状にする。先端は尖る。	IIIc	
ガ6	髪飾り	掘下げ	(2.6)	1.1	0.7	白	断面長方形の棒状で、頭部は内側に巻き込む。桃と緑のガラス融着させて花形の飾りとしている。	—	
ガ7	髪飾り	石室300	(4.5)	0.4	0.2	黄透明	断面長方形の棒状で、先端は尖る。	IIIc	
ガ8	髪飾り	井戸270	(10.1)	0.7	0.3	無色透明	断面長方形の棒状で、先端は尖る。表面風化。	IIIc	
ガ9	髪飾り	土坑279	(10.4)	径0.4	—	青透明	断面円形の棒状で、先端は尖る。頭部に透明の飾りをつける。表面風化。	IIIa	
ガ10	髪飾り	土坑279	(7.9)	径0.3	—	黄透明	断面円形の棒状で、先端は尖る。表面に金彩で模様が描かれたもの(紙?)が貼られている。表面風化。	IIIa	
ガ11	脚付小杯	攪乱11	(4.1)	径4.7	—	無色透明	断面算盤玉状の突起が二段につく。	—	
ガ12	瓶	井戸270	(6.4)	口径2.5	—	無色透明	細長い頸部を持ち、口縁部はラップ状に開く。首の片方に5本の細い突線が入る。表面風化。	IIIc	
ガ13	壺?	井戸270	体部径12.2	高さ(5.9)	0.2	白	中国製?	IIIc	
ガ14	数珠玉	墓878	径0.9	—	—	白	三方に穿孔、親玉。表面風化。	IIb	
ガ15	数珠玉	墓828	径0.9	—	—	無色透明	三方に穿孔、親玉。表面風化。	IIb	
ガ16	数珠玉	墓828	径0.6	—	—	乳白		IIb	
ガ17	数珠玉	墓878	0.5	0.5	0.3	無色透明		IIb	

付表9 骨・貝製品観察表

掲載番号	種類	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	材質	備考	遺構時期	実測図版
			高さ	幅	厚さ					
骨貝1	独楽	土坑717	2.7	2.7	2.6	未測定	バイ貝		IIIc	図版 80
骨貝2	独楽	土坑240	3.1	2.9	2.9	未測定	バイ貝		IIIc	
骨貝3	匙	井戸270	7.1	7.4	2.1	未測定	イタヤ貝		IIIc	
骨貝4	角筆	攪乱	9.0	0.5	0.5	2.3	獣骨		—	

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらまちきゅういき・おどいあと							
書名	寺町旧域・御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-16							
編著者名	モンペティ恭代・李 銀眞・木下保明・市川 創・松本啓子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらまちきゅういき 寺町旧域 おどいあと 御土居跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 まるたまちどおりかわらまち 丸太町通河原町 にしているたかしまちょう 西入高島町335 番地他	26100	170 149	35度 01分 05秒	135度 46分 06秒	2015年8月 3日～2016 年3月31日	1,880m ²	新校舎 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
寺町旧域 御土居跡	寺院跡 土墨跡	室町時代後期 ～安土桃山時代 (寺町以前) 安土桃山時代 ～江戸時代前期 (寺院跡) 江戸時代中期 ～明治時代初頭 (公家屋敷跡)	畑状遺構、井戸 墓、建物、かまど、 塀、土坑、井戸、 石列、建物、石室、 池、集石、溝、塀、 柵、埋甕、井戸、 土坑	土師器、瓦器 土師器、施釉陶器、瓦 質陶器、輸入陶磁器、 石製品、ガラス製品、 銭貨、人骨 土師器、土師質土器、 施釉陶器、磁器、輸入 陶磁器、瓦、土製品、 石製品、金属製品、ガ ラス製品、動物遺存体、 貝		寺町形成以前の様子、寺町成立期の寺院の境界・建物配置、大火による寺院焼亡、跡地に形成された町屋と公家屋敷の成立と変遷を明らかにした。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-16

寺町旧域・御土居跡

発行日 2016年11月30日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961